

平成29年度
重要生態系監視地域モニタリング推進事業
(森林・草原調査)
調査報告書

平成30(2018)年3月
環境省自然環境局 生物多様性センター

目 次

要約

Summary

I	調査の概要	1
1.	目的	3
2.	調査項目及び調査頻度	3
3.	調査サイトの配置状況	4
II	コアサイト・準コアサイト調査実施状況及び調査結果	5
1.	調査サイトの配置状況	7
2.	毎木調査	13
(1)	調査方法	13
(2)	平成 29 (2017) 年度調査結果	13
(3)	集計・解析	14
1)	集計・解析方法	14
2)	樹木の多様性	15
3)	森林の炭素蓄積量とその変化	19
4)	森林動態	21
3.	落葉落枝・落下種子調査	26
(1)	調査方法	26
(2)	平成 29 (2017) 年度調査結果	26
(3)	集計・解析	27
1)	集計・解析方法	27
2)	落葉落枝量	27
3)	落下種子量	28
4.	地表徘徊性甲虫調査	31
(1)	調査方法	31
(2)	平成 29 (2017) 年度調査結果	31
(3)	集計・解析	32
1)	集計・解析方法	32
2)	地表徘徊性甲虫相、個体数及びバイオマス	33
3)	林床環境の変化	34
5.	鳥類調査	47

(1) 調査方法	47
(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果	49
(3) 集計・解析	49
1) 集計・解析方法	49
2) 越冬期群集構成	50
3) 繁殖期群集構成	53
6. 植生概況調査	57
(1) 調査方法	57
(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果	57
(3) 集計・解析	58
III 一般サイト調査実施状況及び調査結果	61
1. 調査サイトの配置状況	63
2. 鳥類調査	65
(1) 調査方法	65
(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果	65
(3) 集計・解析	65
1) 集計・解析方法	65
2) 記録鳥類	74
3) 植生の階層構造と鳥類の種多様度の関係	79
4) 外来種	83
5) 分布域の高緯度への移動	86
3. 植生概況調査	87
(1) 調査方法	87
(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果	87
(3) 集計・解析	87
IV 資料	91
1. 調査マニュアル (平成 29 (2017) 年度調査版)	

要 約

1. 本コアサイト 19 か所において、原則として毎木調査（樹種、幹の胸高周囲長）、落葉落枝・落下種子調査（落葉等の落下量）、地表徘徊性甲虫調査（地表徘徊性甲虫の種と個体数）を実施した。準コアサイトでは、3 か所において毎木調査を、2 箇所において落葉落枝・落下種子調査と地表徘徊性甲虫調査を実施した。鳥類調査（繁殖期・越冬期で種と個体数）と植生概況調査は、コアサイト 20 箇所、準コアサイト 7 箇所で行った。
2. 一般サイトでは、鳥類調査及び植生概況調査を実施した。2017 年度繁殖期は森林 65 か所、草原 13 か所、計 78 か所で調査を実施し、2016 年度越冬期については、森林 49 か所、草原 14 か所、計 63 か所で調査を実施した。
3. 本コアサイト及び準コアサイトにおける毎木調査の結果、調査開始時から 2017 年度の間で、調査区内の出現種に-7~+4 種の増減があったが、その種数と調査区の年平均気温との間に有意な関係は確認されなかった。地上部現存量は、多くの調査区で調査開始から 2017 年度までの間に増加傾向が見られた。個別のサイトにおいては、愛知赤津では 2010 年度に発生したカシノナガキクイムシによってナラ枯れが生じ、2011 年度から 2014 年度まで地上部現存量は減少していたが、2015 年度には増加に転じ、2017 年度は引き続き増加傾向にあった。与那では 2012 年度の台風により地上部現存量が減少し、地上部現存量は攪乱後 4 年間の間緩やかに減少傾向にあった。森林動態について、2017 年度は全体として死亡率・加入率が例年の範囲内であった。
4. 本コアサイト及び一部の準コアサイトにおける落葉落枝・落下種子調査では、2017 年度までのデータを集計した結果、2017 年度の年間落葉量・年間落下リター量は例年の範囲内であった。また、種子生産について、複数のサイトで多数回収された主要 12 種のうち、アカシデが 2016 年度において顕著に豊作であった。
5. 本コアサイト及び一部の準コアサイトにおける地表徘徊性甲虫調査の結果、9,996 個体の甲虫成虫が捕獲された。主要な分類群（オサムシ科、シデムシ科、ハネカクシ科の大型地表性種、センチコガネ科）の種数は 99 種、オサムシ科の種数は 82 種であった。オサムシ科、シデムシ科、センチコガネ科、ハネカクシ科が総捕獲個体数のそれぞれ 50%、16%、15%、11%を占めていた。甲虫類の総捕獲数は、本州の調査区の多くで過年度の平均より有意に少なく、北海道の調査区の多くでは有意に多かった。主な分類群の中では、冷涼な気候を好む *Pterostichus* 属（ナガゴミムシ類）の捕獲数が北海道・本州で減少傾向を示す一方、温暖な気候を好む *Synuchus* 属（ツヤヒラタゴミムシ

類)は全国的に増加傾向を示した。オサムシ属(オサムシ類)は、北海道では増加傾向を、本州では減少傾向を示した。林床植生被度は、過年度と同様に温暖な地域を中心に減少傾向を示した。台風攪乱を受けた与那、苫小牧のカラマツ・トドマツ人工林では堆積落葉量の減少傾向が見られた。

6. 本コアサイト及び準コアサイトにおける鳥類調査では、2017年度の繁殖期には合計89種、2016年度の越冬期には65種の鳥類が記録された。越冬期の鳥類相は、繁殖期と比べて個体数の年変動が大きかった。その理由として、ツグミ類やアトリ類など群れで越冬する冬鳥の渡来数のばらつきといった年変動の影響が考えられる。全体としては、2016年は北のバイオマスが例年より少なめであり、カラス類など大型の鳥が少ないことがバイオマスの少なさに大きく影響していた。繁殖期調査における優占種や採食場所(ギルド)別の構成比は、過年度の結果とほぼ一致しており、生息状況の安定性が確認された。本年度あらたに有意な減少がエナガとホトトギスで、有意な増加がキビタキとヤマガラで確認されており、長期的な動向についてみていく必要がある。今後も、鳥類と植生両方のデータを蓄積していくことで、こうした変化とそれをもたらす原因を明らかにすることが期待できる。
7. 一般サイトにおける鳥類調査では、2017年度の繁殖期には合計140種、2016年度の越冬期には126種の鳥類が記録された。繁殖期では、出現率、優占度ともに過年度と同様の傾向を示した。森林サイトでは、植生の階層構造と鳥類の種多様度の関係について、2012年度や2013年度同様の有意な相関関係がみられた。外来種は5種が記録された。そのうち、特定外来生物であるガビチョウ、ソウシチョウは、調査サイトの入れ替えがあっても毎年各地で確認されている。今後の分布域拡大と個体数増加、生息環境が類似した在来種への影響が懸念される。

Summary

1. A tree census (species and girth of trunk at breast height), litter and seed trap survey (amount of litter and seed fall), ground-dwelling beetle census (species and abundance), and bird census with vegetation surveys were conducted at 19 core sites. As for sub-core sites, Tree censuses were also conducted at 3 sites, Litter and seed trap survey, and ground-dwelling beetle census were conducted at 2 sites. Bird censuses and vegetation surveys were conducted at 20 core sites and 7 sub-core sites.
2. In 2017 bird species and their respective populations were estimated at 78 satellite sites (65 forests and 13 grasslands) in the breeding season, and 63 sites (49 forests and 14 grasslands) in the wintering season.
3. In the tree census at the core and sub-core sites, the number of species in each plot has been slightly changed from the first census to 2017 (from seven species decrease to four species increase). The decreased or increased number of tree species did not show significant relationship with mean annual temperature across the sites. The aboveground biomass of trees increased from the start of survey at almost all sites. According to each site, in Aichi-akazu, aboveground biomass of forest increased in 2015 and continuously increased in 2017, although it had continued to decrease from 2011 to 2014 by the Japanese oak wilt disease in 2011. In Yona, severe typhoon disturbance in 2012 cause fall of above ground biomass in 2012 and progressive reduction even four years after. Regarding forest dynamics in 2017, the rates of recruitment and death of trees were within the normal range.
4. In the litter- and seed-fall trap survey conducted at the core and sub-core sites, the amount of annual leaf fall and that of annual litter fall in 2015 was within the normal range at almost all sites. This monitoring detected masting-seed-production event of some species; the masting of *Carpinus laxiflora* was observed in 2016 among 12 major species.
5. In the ground-dwelling beetle census at the core and sub-core sites, 9,996 adult beetles were captured, of which 99 species of major families (Carabidae, Silphidae, Geotrupidae, Staphylinidae), including 82 species of Carabidae, were identified. Carabidae, Silphidae, Geotrupidae and Staphylinidae accounted for 50%, 16%, 15%, and 11% of the total individuals, respectively. In most plots in Honshu island, the total catches of beetles in 2017 were significantly smaller than the averages among

previous years while those in Hokkaido island showed opposite trends. Among the major beetle taxa, the catch of *Synuchus*, which favors warm climate, keeps showing a nationwide increasing trend over the monitoring period whereas *Pterostichus*, which favors cool climate, showed decreasing trends in Hokkaido and Honshu. *Carabus* showed increasing and decreasing trends in Hokkaido and Honshu, respectively. As in previous years, forest floor vegetation cover has been decreasing mainly in warm sites. Litter accumulation showed decreasing trends in Yona, and larch and fir plantations in Tomakomai, where typhoons had severely disturbed the stands.

6. A total of 89 species in the 2017 breeding season and 65 species in the 2016-2017 wintering season were recorded in the bird censuses performed at the core and sub-core sites. The avifauna populations in wintering seasons, at the core and sub-core sites, had bigger fluctuations from year to year than during the breeding season, suggesting that the fluctuation may be due to variations in the number of winter visitors (e.g., Naumann's Thrush and Brambling). In 2016, the biological mass of the northern area was less than the average year because of a small number of large bird species (e.g., Crows). Bird surveys from the 2009 to 2017 breeding seasons showed that the dominant species and proportions of species comprising each guild were largely the same as the survey in 2017. The Long-tailed Tit (*Aegithalos caudatus*) and the Cuckoo (*Cuculus optatus*) were confirmed to be in significant decline, but the Narcissus Flycatcher (*Ficedula narcissina*) and the Varied tit (*Parus varius*) significantly increased for the first time. It is necessary to follow long-term trends. This suggests a stability in habitats. It is absolutely necessary to continue ongoing monitoring to clarify the relation of cause and effect between the avifauna and the vegetation.

7. A total of 140 species in the 2017 breeding season and 126 species in the 2016-2017 wintering season were recorded in the bird censuses performed at the satellite sites. The species diversity of breeding birds at forest sites correlated with foliage height diversity as it had in the previous period. For forest sites, a significant correlation between the hierarchic structure of the flora and the species diversity of birds was confirmed, as it was in the 2012 and 2013 surveys. In total, 5 alien species were recorded. Among them, Hwamei (*Garrulax canorus*) and Red-billed Leiothrix (*Leiothrix lutea*) are observed in various sites every year. The expansion in areas of distribution, increasing population of these species and influence on sympatric native species are of concern.

I 調査の概要

1. 目的

モニタリングサイト1000は、全国の様々なタイプの生態系について、合計約1000の調査サイトにおいて継続して調査を行い、生態系の指標となる生物種の個体数の変化等のデータを収集していく調査である。森林・草原生態系においては、樹木、昆虫（地表徘徊性甲虫）、鳥類を対象生物として、2004年度から調査を行っている。

なお、平成27年度より落葉落枝・落下種子の調査は「モニタリングサイト1000炭素循環動態調査」として、また、鳥類の調査は「モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査」として行っているが、森林・草原生態系の他の対象生物と密接に関わるものであるため、本調査報告書であわせてとりまとめている。

2. 調査項目及び調査頻度

モニタリングサイト1000の森林・草原生態系では、A. 毎木調査又は植生概況調査、B. 落葉落枝・落下種子調査（リター・シードトラップ調査）、C. 地表徘徊性甲虫調査（ピットフォールトラップ調査）、D. 鳥類調査を実施している。調査頻度は調査サイトによって異なり、調査項目及び調査頻度の違いにより、コアサイト、準コアサイト、一般サイトの3種類の調査サイトに区分している（表 I-2-1）。

表 I-2-1. モニタリングサイト1000の森林・草原生態系における調査項目及び調査頻度

	調査頻度	調査項目			
		毎木又は 植生概況	落葉落枝・ 落下種子	地表徘徊性 甲虫	鳥類
コアサイト	毎年	○	○	○	○
準コアサイト	おおむね 5年に1度	○			○
一般サイト	おおむね 5年に1度	○			○

なお、各調査項目の調査方法の概要は、「Ⅱ 2. ～ 5. の（1）調査方法」並びに「Ⅲ 2. 及び 3. の（1）調査方法」に、調査方法の詳細は、「Ⅳ 調査マニュアル（平成29（2017）年度調査版）」に示す。

3. 調査サイトの配置状況

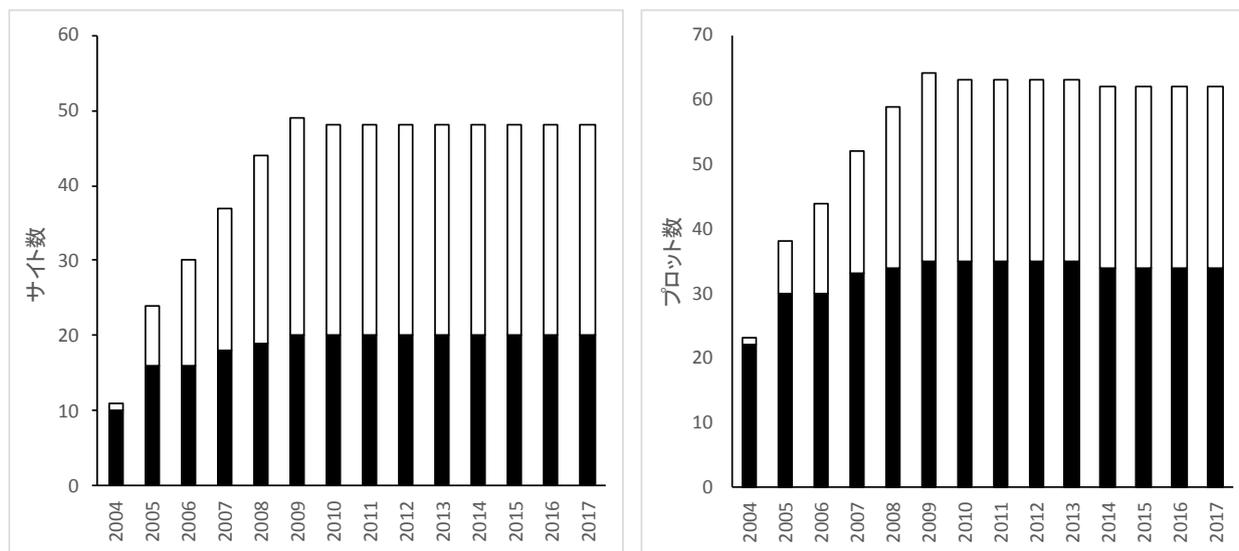
コアサイト及び準コアサイトの配置状況は、「Ⅱ 1. 調査サイトの配置状況」に、一般サイトの配置状況は、「Ⅲ 1. 調査サイトの配置状況」に示す。

II コアサイト・準コアサイト調査実施状況 及び調査結果

1. 調査サイトの配置状況

コアサイト・準コアサイトは、日本の代表的な森林タイプ（常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林、常緑広葉樹林等）¹や気候帯（亜高山帯・亜寒帯、冷温帯、暖温帯、亜熱帯）を網羅し、かつ生物多様性保全のための国土10区分のすべての区域に配置されている（48サイト、62調査区。表Ⅱ-1-1、表Ⅱ-1-2、図Ⅱ-1-1、図Ⅱ-1-2、図Ⅱ-1-3）。2017年度は、新たなサイトの配置はなく、すでに配置されているサイトで継続調査を行った。

2017年度に調査を実施した調査区は、毎木調査：22サイト26調査区、落葉落枝・落下種子調査：20サイト21調査区、地表徘徊性甲虫調査（ピットフォールトラップ調査）：21サイト27調査区、鳥類調査：27サイトである（表Ⅱ-1-1）。



図Ⅱ-1-1. 2004-2017年度のコアサイト・準コアサイト数及び調査区数の推移

図中縦棒の黒塗り部分がコアサイト数、白抜き部分が準コアサイト数をそれぞれ示す。

¹ 本報告書では、針葉樹林とは、針葉樹の胸高断面積が全樹種の胸高断面積の60%以上の森林を指す。針広混交林とは、針葉樹の胸高断面積が全樹種の胸高断面積の40%以上、60%未満の森林を指す。落葉広葉樹林とは、針葉樹の胸高断面積が全樹種の胸高断面積の40%未満、かつ、落葉広葉樹の胸高断面積が広葉樹の胸高断面積60%以上の森林を指す。常緑広葉樹林とは、針葉樹の胸高断面積が全樹種の胸高断面積の40%未満、かつ、常緑広葉樹の胸高断面積が広葉樹の胸高断面積40%より大きい森林を指す。

表Ⅱ-1-1. コアサイト・準コアサイト一覧

サイト プロット ID	サイト名	サイト タイプ	プロット名	プロット コード	森林 タイプ*	経度†	緯度†	標高 (m)	毎木調査 間隔	面積 (ha)	モニ 1000 開始年	2017 年度調査実施状況			
												毎木	リター トラップ	ピット フォール	鳥類
200101	苦小牧	コア	苦小牧成熟林	TM-DB1	DB	42.71	141.57	80	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
200102		コア	苦小牧二次林 404 林班	TM-DB2	DB	42.69	141.59	64	5年毎	1.20	2004	-	-	○	
200103		コア	苦小牧二次林 308 林班	TM-DB3	DB	42.67	141.63	33	5年毎	0.81	2004	-	-	○	
200104		コア	苦小牧二次林 208 林班	TM-DB4	DB	42.70	141.57	85	5年毎	0.45	2004	-	-	○	
200105		コア	苦小牧アカエゾ マツ人工林	TM-AT1	AT	42.68	141.61	43	5年毎	0.20	2004	○	-	○	
200106		コア	苦小牧カラマツ 人工林	TM-AT2	AT	42.67	141.59	36	5年毎	0.20	2004	-	-	○	
200107		コア	苦小牧トドマツ 人工林	TM-AT3	AT	42.71	141.58	50	5年毎	0.23	2004	○	-	○	
200201	カヌマ沢	コア	カヌマ沢溪畔林	KM-DB1	DB	39.11	140.86	435	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
200202		コア	カヌマ沢ブナ林	KM-DB2	DB	39.11	140.85	445	-	-	2004	-	-	-	
200301	大佐渡	コア	-	OS-EC1	EC	38.21	138.44	870	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
200401	小佐渡	コア	小佐渡豊岡	KS-DB1	DB	37.98	138.52	125	毎年	0.25	2004	○	-	-	○
200402		コア	小佐渡キセン城	KS-DB2	DB	38.01	138.48	350	5年毎	0.25	2004	-	-	-	
200501	小川	コア	-	OG-DB1	DB	36.94	140.59	635	毎年	1.20	2004	○	○	○	○
200601	秩父	コア	秩父ブナ・イヌブ ナ林	CC-DB1	DB	35.94	138.80	1200	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
200602		コア	秩父ウダイカン バ林	CC-DB2	DB	35.91	138.82	1090	5年毎	0.12	2004	-	-	-	
200603		コア	秩父 18 は 1 二 次林	CC-DB3	DB	35.91	138.82	1090	5年毎	0.10	2004	○	-	-	
200604		コア	秩父矢竹沢	CC-AT1	AT	35.94	138.82	900	5年毎	計 0.88	2004	-	-	-	
200701	富士	準コア	-	FJ-AT1	AT	35.41	138.87	1015	5年毎	0.25 が 2 個	2004	-	-	-	-
200801	愛知赤津	コア	-	AI-BC1	BC	35.22	137.17	335	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
200901	綾	コア	-	AY-EB1	EB	32.05	131.19	490	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
201001	田野	コア	田野二次林	TN-EB1	EB	31.86	131.30	175	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
201002		コア	田野海岸林	TN-EB2	EB	31.38	131.26	26	-	-	2004	-	-	-	
201101	与那	コア	-	YN-EB1	EB	26.74	128.23	250	毎年	1.00	2004	○	○	○	○
201201	雨龍	コア	-	UR-BC1	BC	44.37	142.28	335	毎年	1.05	2005	○	○	○	○
201301	足寄	コア	足寄拓北	AS-DB1	DB	43.32	143.51	360	毎年	1	2005	○	○	○	○
201302		コア	足寄美盛	AS-DB2	DB	43.26	143.51	340	5年毎	1	2005	○	○	-	
201303		コア	足寄花輪	AS-DB3	DB	43.29	143.50	380	5年毎	0.6	2005	○	○	-	
201401	カヤの平	コア	-	KY-DB1	DB	36.84	138.50	1495	毎年	1.00	2005	○	○	○	○
201501	おたの申す平	コア	-	OT-EC1	EC	36.70	138.50	1730	毎年	1.00	2005	○	○	○	○
201601	和歌山	コア	-	WK-EC1	EC	34.07	135.53	825	毎年	1.00	2005	○	○	○	○
201701	市ノ又	コア	-	IC-BC1	BC	33.15	132.92	560	毎年	0.95	2005	○	○	○	○
201801	野幌	準コア	-	NP-DB1	DB	43.06	141.53	42	5年毎	1.04	2005	-	-	-	○
201901	早池峰	準コア	-	HY-EC1	EC	39.54	141.50	1215	5年毎	1.00	2005	-	-	-	-
202001	金目川	準コア	-	KK-DB1	DB	38.15	139.84	543	5年毎	1.00	2005	-	-	-	-
202101	御岳濁河	準コア	-	NG-EC1	EC	35.93	137.46	1880	5年毎	1.00	2005	-	-	-	-
202201	函南	準コア	-	KN-EB1	EB	35.16	139.01	600	5年毎	1.00	2005	-	-	-	-
202301	奄美	準コア	-	AM-EB1	EB	28.33	129.45	330	5年毎	1.00	2005	-	○	○	○
202401	小笠原石門	準コア	-	OW-EB1	EB	26.68	142.16	290	5年毎	1.00	2005	-	-	-	-
202501	仁鮎水沢	準コア	-	NB-EC1	EC	40.08	140.25	190	-	1.00	2006	-	-	-	-
202601	青葉山	準コア	-	AO-BC1	BC	38.25	140.85	120	5年毎	1.00	2006	-	○	○	○
202701	大山文珠越	準コア	-	DI-DB1	DB	35.36	133.55	1110	5年毎	1.00	2006	-	-	-	-
202801	春日山	準コア	-	KA-EB1	EB	34.68	135.86	310	5年毎	1.00	2006	-	-	-	-
202901	糟屋	準コア	-	KJ-EB1	EB	33.65	130.55	450	5年毎	1.00	2006	-	-	-	-
203001	屋久島照葉 樹林	準コア	-	YK-EB1	EB	30.37	130.39	150	5年毎	1.00	2006	-	-	-	-
203101	芦生	コア	芦生柗上谷	AU-EC1	EC	35.35	135.74	750	毎年	1.00	2007	○	○	○	○
203102		コア	芦生モンドリ谷	AU-DB1	DB	35.35	135.74	720	5年毎	1.00	2007	-	-	-	-
203201	上賀茂	コア	-	KG-EC1	EC	35.07	135.77	140	毎年	0.64	2007	○	○	○	○

表Ⅱ-1-1. コアサイト・準コアサイト一覧（続き）

サイト プロット ID	サイト名	サイト タイプ	プロット名	プロット コード	森林 タイプ*	経度†	緯度†	標高 (m)	毎木 調査間隔	面積 (ha)	モニ 1000 開始年	2017 年度調査実施状況			
												毎木	リター トラップ	ビット フォール	鳥類
203301	半田山	準コア	-	HD-DB1	DB	34.70	133.92	110	5年毎	1.00	2007	-	-	-	-
203401	三之公	準コア	-	SN-EC1	EC	34.26	136.07	560	5年毎	1.00	2007	-	-	-	-
203501	対馬龍良山	準コア	-	TT-EB1	EB	34.15	129.22	160	5年毎	1.00	2007	○	-	-	○
203601	佐田山	準コア	-	SD-EB1	EB	32.74	133.00	320	5年毎	0.98	2007	○	-	○‡	○
203701	屋久島スギ林	準コア	-	YS-EC1	EC	30.31	130.57	1200	5年毎	1.00	2007	○	-	-	○
203801	大山沢	コア	-	OY-DB1	DB	35.96	138.76	1425	毎年	1.00	2008	○	○	○	○
203901	大雪山	準コア	-	TA-EC1	EC	43.66	143.10	975	5年毎	1.00	2008	-	-	-	-
204001	大滝沢	準コア	-	OZ-DB1	DB	39.64	140.89	460	5年毎	1.00	2008	-	-	-	-
204101	高原山	準コア	-	TK-DB1	DB	36.88	139.80	925	5年毎	1.00	2008	-	-	-	-
204201	木曾赤沢	準コア	-	KI-EC1	EC	35.72	137.63	1175	5年毎	1.00	2008	-	-	-	-
204301	西丹沢	準コア	-	TZ-DB1	DB	35.47	138.99	1150	5年毎	1.00	2008	-	-	-	-
204401	臥龍山	準コア	-	GR-DB1	DB	34.69	132.19	1150	5年毎	1.00	2008	-	-	-	○
204501	那須高原	コア	-	NS-DB1	DB	37.12	140.01	900	5年毎	0.30	2009	-	-	-	○
204601	筑波山	準コア	-	TB-DB1	DB	36.23	140.10	780	5年毎	1.00	2009	-	-	-	-
204701	宮島	準コア	-	MY-EB1	EB	34.30	132.33	100	5年毎	1.00	2009	-	-	-	-
204801	西表	準コア	-	IR-EB1(仮)	EB(仮)	24.35	123.90	140	4年毎	1.00	2009	-	-	-	-
204901	椎葉	準コア	-	SI-DB1	DB	32.38	131.10	1190	5年毎	1.00	2009	-	-	-	-

* DB: 落葉広葉樹林、EB: 常緑広葉樹林、BC: 針広混交林、EC: 常緑針葉樹林、AT: 人工林

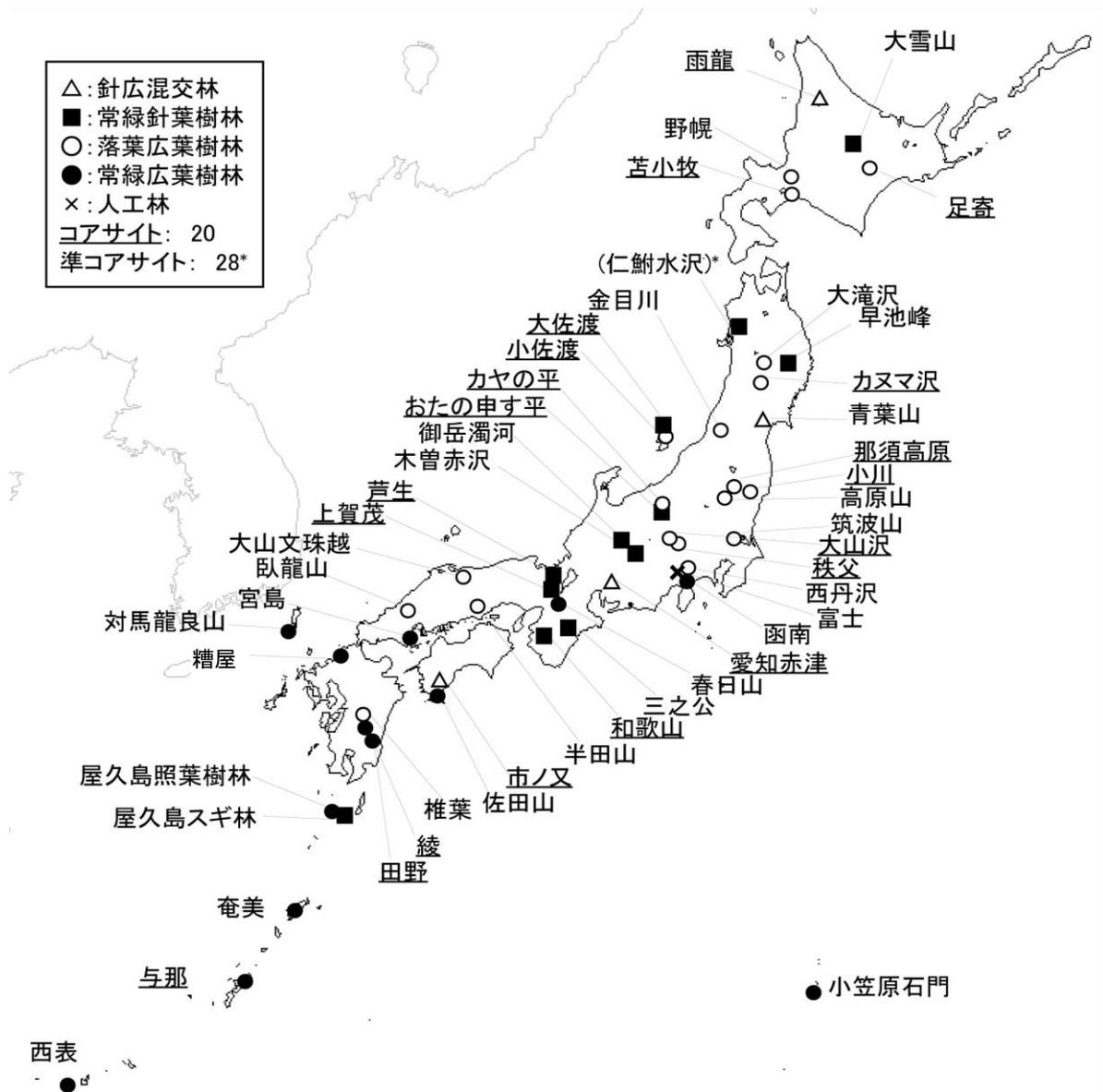
† 世界測地系(WGS84)。

‡ 仁鮎水沢は2010年度より調査を中止した。

§ 小佐渡サイトの豊岡プロットの落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、キセン城プロットの毎木調査（5年おきに実施）は2014年度より中止となった。

¶ サイトの自主的調査による。

西表の鳥類調査は繁殖期調査のみ。

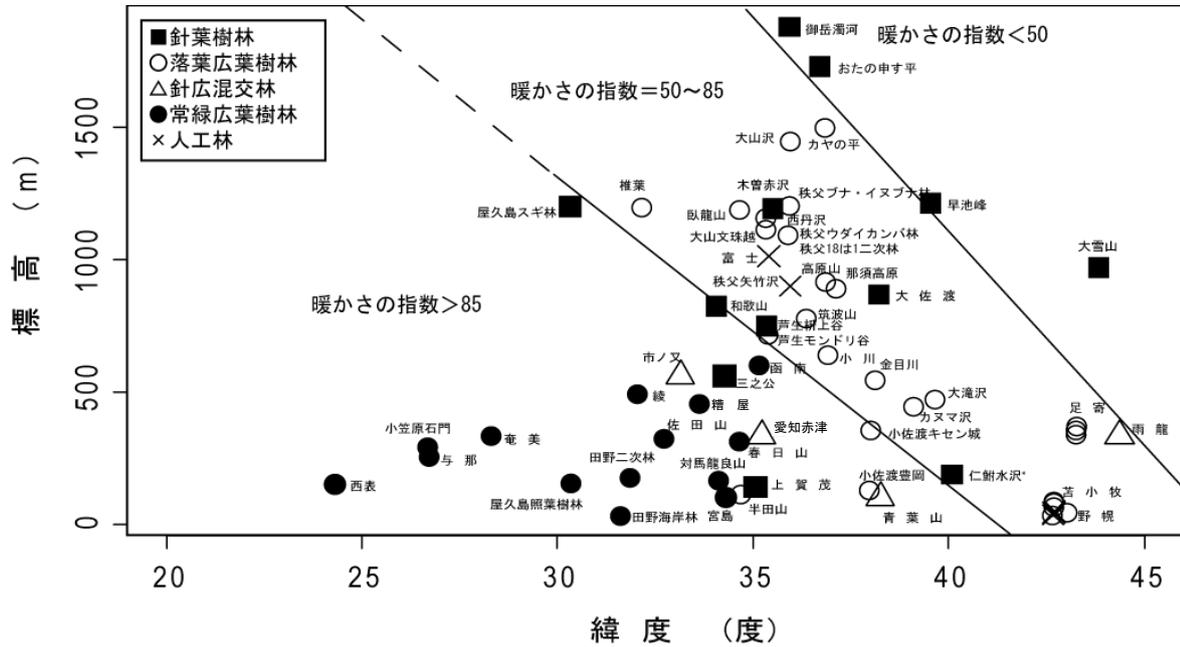


図II-1-2. 第2期におけるモニタリングサイト1000 森林・草原調査のコアサイト・準コアサイト
 △: 針広混交林、■: 常緑針葉樹林、○: 落葉広葉樹林、●: 常緑広葉樹林。黒色下線はコアサイト、灰色は準コアサイト。複数調査区がある場合は毎年調査している調査区の森林タイプを表示している。
 * 仁鮎水沢は2010年度で調査を終了した。

表Ⅱ-1-2. コアサイト・準コアサイトの生物多様性保全のための国土区分と気候帯別配置

生物多様性保全のための国土10区分	亜高山帯・亜寒帯	冷温帯	暖温帯	亜熱帯	二次林等*	人工林
(1)北海道東部区域	■大雪山	△雨龍 ○足寄	該当なし	該当なし	(○足寄)	
(2)北海道西部区域		○苫小牧 ○野幌	該当なし	該当なし	(○苫小牧)	(×苫小牧)
(3)本州中北部太平洋側区域	■御岳濁河	○小川 ○秩父 ○大山沢 ○高原山 ○那須高原 △青葉山 ■木曾赤沢		該当なし	(○秩父)	(×秩父) ×富士
(4)本州中北部日本海側区域	■おたの申す平 ■早池峰	○カヌマ沢 △大滝沢 ■仁鮎水沢** ○金目川 ○カヤの平	該当少ない	該当なし		
(5)北陸・山陰区域	該当少ない	■大佐渡 ○大山文殊越 ○臥龍山 ■芦生	■上賀茂	該当なし	○小佐渡	
(6)本州中部太平洋側区域		○西丹沢 ○筑波山	●函南 ●春日山	該当なし	△愛知赤津	
(7)瀬戸内海周辺区域	該当なし	該当少ない	●宮島	該当なし	○半田山	
(8)紀伊半島・四国・九州区域		○椎葉	■和歌山 △市ノ又 ■三之公 ●田野 ●綾 ●対馬龍良 ●佐田山 ●糟屋 ●屋久島照葉樹林 ■屋久島スギ林	該当なし		
(9)奄美・琉球諸島区域	該当なし	該当なし	該当少ない	●与那 ●奄美 ●西表		
(10)小笠原諸島区域	該当なし	該当なし	該当少ない	●小笠原石門		

表中の凡例は図Ⅱ-1-2と同じ。また、括弧書きはコアサイトの複数ある調査区のうち一部が該当する場合。
 表中の「該当なし」又は「該当少ない」は、日本において、そこに該当する森林が「ない」又は「少ない」ことを表す。
 * ここではコナラやカンバ類などの陽樹が優占するなど、種類組成が人為による影響を大きく受けた森林を指す。
 ** 仁鮎水沢は2010年度より調査を中止した。



図Ⅱ-1-3. コアサイト・準コアサイトの緯度、標高、森林タイプの関係

暖かさの指数 50°C・月は亜高山帯・亜寒帯常緑針葉樹林と冷温帯落葉広葉樹林の境界、85°C・月は冷温帯落葉広葉樹林と暖温帯・亜熱帯常緑広葉樹林の境界とされている。図中の凡例は図Ⅱ-1-2と同じ。

* 仁鮎水沢は 2010 年度より調査を中止した。

2. 毎木調査

(1) 調査方法

各サイトにおいて1 ha (100m×100m)の調査区（プロット）を設けた。計測対象は調査区内に生育している樹木のうち、幹の胸高（高さ1.3m）周囲長が15cm 以上のものとした。幹の直径5 cm（つまり周囲長15.7cm）以上ではなく、周囲長15cm以上を対象としているのは、直径が新たに5 cm以上となる新規加入幹を確実にとらえるためである。サイズの指標として胸高周囲長を計測し、樹種名を記録した。

長期にわたる調査のために、測定した幹には個体識別ができるようアルミタグ（樹木番号）を付した。一個体が複数の幹に分かれているものについては、各幹で計測を行った。

調査間隔は、コアサイトの一部の調査区では毎年、その他のコアサイトの調査区と準コアサイトの調査区ではおおむね5年ごととしている。

(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果

2017年度は、23 サイト 26 調査区で調査を行った（表Ⅱ-2-1）。雨龍と小川は春に、それ以外のサイトでは、秋から冬にかけて調査を行った。

表Ⅱ-2-1. 2016年度に毎木調査を実施したサイト及び調査区一覧

サイト名	サイトタイプ	プロット名	サイト名	サイトタイプ	プロット名
雨龍	コア	-	秩父	コア	秩父 18 は 1 二次林
苫小牧	コア	苫小牧成熟林	大山沢	コア	-
苫小牧	コア	苫小牧アカエゾ人工林	和歌山	コア	-
足寄	コア	足寄拓北	市ノ又	コア	-
足寄	コア	足寄美盛	芦生	コア	芦生 柘上谷
足寄	コア	足寄花輪	上賀茂	コア	-
カヌマ沢	コア	カヌマ沢溪畔林	愛知赤津	コア	-
大佐渡	コア	-	綾	コア	-
小佐渡	コア	小佐渡豊岡	田野	コア	田野 二次林
小川	コア	-	与那	コア	-
カヤの平	コア	-	対馬龍良山	準コア	-
おたの申す平	コア	-	佐田山	準コア	-
秩父	コア	秩父ブナ・イヌブナ林	屋久島スギ林	準コア	-

(3) 集計・解析

1) 集計・解析方法

毎木調査は、樹木の種多様性の変化や炭素蓄積・吸収などの森林機能の変化を捉えるために行っている。樹木は寿命が長いため、種多様性の変化は短期的には現れにくい。しかし樹木は移動できないため、その場所の環境や生物間相互作用の変化が、樹木の成長量、生死を変化させると予想される。このために変化する森林の動態は、炭素蓄積・吸収量を左右し、森林の更新、そして樹木の種多様性を変化させる。そこで、下記に着目し、胸高周囲長 15.7cm 以上（胸高直径 5 cm 以上）の幹を対象に解析した。なお、集計・解析対象としたデータは 2018 年 2 月 1 日までにサイトから提出されたデータとし、サイトにて再確認中の一部のデータは除外した。

① 樹木の多様性

調査区ごとの出現種数、調査開始時からの新たに加入した種及び調査区から消失した種の種数を求めた。

② 樹木の成長

樹木の成長による森林の炭素蓄積量を評価するため、樹木地上部の炭素現存量（以下、「地上部現存量」とする）を求めた。アロメトリー式（表 II-2-2）を用いて、幹の直径から推定した幹・枝・葉の乾燥重量の和に 0.5（乾燥重量中の炭素量の割合の概算値）を乗じたものを地上部現存量とした。そして、調査開始時からの地上部現存量の変化量を求めた。

③ 森林動態

各調査区の全幹における死亡率（前回の調査時から今回までに死亡した幹の割合）と、新規加入率（今回までに成長して調査対象木となった幹の割合）を以下の式で求めた。

$$\text{新規加入率 (\%・年}^{-1}\text{)} = \ln(Nf/Ns) \times 100 / t$$

$$\text{死亡率 (\%・年}^{-1}\text{)} = \ln(No/Ns) \times 100 / t$$

Ns : 今回調査時に生存していた幹数、 Nf : 今回調査時の幹数（生存した幹数と新しく胸高周囲長が 15.7cm 以上になった幹数の和）、 No : 前回の調査時の幹数、 t : 前回から今回までの経過年数。

また、死亡率と新規加入率の平均である回転率を求めた。

さらに、全幹と同様に、各調査区の種ごとの新規加入率、死亡率を求めた。

表 II-2-2. 現存量推定にもちいた相対生長式 ($\ln W = a + b \ln DBH$, W : 絶乾重(kg), DBH : 胸高直径(cm))。

サイト	出典	地域	森林	サンブル木		樹種			幹			枝			葉		
				n	胸高直径(cm)	最大	最小	最大	樹高(m)	a	b	R ²	a	b	R ²	a	b
常緑広葉樹林(亜熱帯、暖温帯)																	
地上部は、式1~3の平均。根は、ツガは式4c、モミとその他針葉樹は式6と式10aの平均。																	
ただし、函南、春日山、糶屋では、地上部は式1~4の平均。根は、ツガは式4c、モミとその他針葉樹は式4a、4b、広葉樹は式6と式10aの平均。																	
1	Kawanabe 1977	沖縄・与那	二次林	13	5.2	43.6	-	-	-	-2.111	2.215	-4.269	2.490	-4.688	2.000		
2	Kimura 1960	鹿児島	成熱林	10	-	-	-	-	-	-2.003	2.340***	幹枝		-3.638	1.890		
3	Kohyama 1989	鹿児島	二次林	16-19	-	-	-	-	-	-2.129	2.390†	地上部		-3.747	1.930	0.96	
針広混交林、針葉樹林(暖温帯や北海道以外の冷温帯、スギ林を除く)																	
地上部は、ツガは式4b、モミとその他針葉樹は式4a、4b、広葉樹は式4c、モミとその他針葉樹は式6と式10aの平均。																	
4a	Ando et al. 1977	高知	成熱林	3	10	30	-	-	-	-2.584	2.475	-4.729	2.531	-6.181	2.704		
4b				9	30	90	-	-	-	-0.119	1.807	-4.483	2.459	-2.726	1.708		
4c				7	4.5	50	-	-	-	-1.665	2.185	-6.587	3.090	-6.332	2.406		
4d				29	10	80	-	-	-	-2.825	2.586	-4.270	2.656	-3.853	1.743		
落葉広葉樹林(北海道以外の冷温帯)																	
根は、ツガは式4c、モミとその他針葉樹は式6と式10aの平均。																	
5	生島 1964	丹沢	成熱林	29	0.5	83.5	-	-	-	-2.104	2.380***	幹枝		-3.497	1.720		
6	Ogino 1977	京都	成熱林	8	0.5	≤ 70	-	-	-								
スギ林																	
地上部は、スギ・ヒバは式7、広葉樹は式5で求めた場合と、式4dで求めた場合の平均。根は、スギ・ヒバは式4a、4b、広葉樹は式6と式10aの平均。																	
7	斉藤 1981	新潟	成熱林	5	22	68	18.7	スギ	-1.324	1.858	0.92	-6.215	2.725	-2.339	1.674	0.76	
針葉樹林、落葉広葉樹林、針広混交林(亜高山帯、北海道の冷温帯)																	
地上部は、スギ・ヒバは式8a、8b、針葉樹は式8a、8cを使用。																	
ただし、苫小牧二次林404林班では、落葉樹は式9、針葉樹は式10で求めた場合と、式8で求めた場合の平均。																	
8a	小塚ほか 2006**	北海道・天塩	成熱林	29	6.5	55	21.4	ミズナラ、ダケカンバ、トドマツ	-2.493	2.338	0.99	-4.374	2.681	-4.350	1.973	0.96	
8b				14	6.5	55	20.8	ミズナラ、ダケカンバ						-3.487	2.147	0.99	
8c				5	10.5	50.2	21.4	トドマツ						-6.288	2.500	0.89	
9	Takahashi et al. 1999	北海道・苫小牧	二次林	23	3	25.8	16.7	落葉広葉樹	-2.505	2.424	0.99	-4.453	2.572	-6.288	2.500	0.89	
10	四大学合同調査班 1960	北海道	二次林	36	0.6	31.7	-	アカエゾマツ、エゾマツ、トドマツ	-3.068	2.550		-5.041	2.570	-4.642	2.356		

備考: Takyu et al. (2005) を元に作成。*表のデータより算出; **提供データを元に算出; ***幹・枝現存量; †地上部現存量; ‡標準高700mの相対成長式。

2) 樹木の多様性

調査開始時から 2017 年度までに記録された種は、総計で 73 科 173 属 394 種 (変種、途中で消失した種も含む) であった (表 II-2-3)。そのうち 2017 年度に記録された種は 48 科 92 属 182 種であった (表 II-2-4)。前年度までと同様に年平均気温が高い場所の森林は低い場所の森林に比べ種数が多い傾向が見られた (表 II-2-3)。また、調査開始時から最新調査年までに 0~4 種が新たに加入し、0~6 種が調査区から消失していた。

表 II-2-3. 調査区での種数及び調査開始時から新たに加入した種と消失した種。

調査区	年平均気温(°C) (注)	調査開始年	最新調査年	最新調査年での種数	加入種数	消失種数	加入した種	消失した種
大雪山	1.4	2008	2013	6	0	0		
御岳瀧河	3.3	2005	2015	10	0	0		
おたの申す平	3.5	2006	2017	8	0	0		
雨龍	3.9	2005	2017	14	1	0	ノリウツギ	
足寄花輪	4.1	2007	2017	19	1	0	ツルウメドキ	
早池峰	4.1	2005	2015	16	0	0		
足寄拓北	4.2	2006	2017	32	1	1	イヌエンジュ	ツルアジサイ
足寄美盛	4.4	2005	2017	17	0	1		チョウセンヤマナラシ
カヤの平	4.7	2005	2017	20	1	1	ヤマウルシ	タラノキ
大山沢	6.1	2008	2017	44	1	1	ホソエカエデ	サルナシ
苫小牧成熟林	6.9	2004	2017	35	2	2	エゾヤマザクラ、ツタウルシ	ウダイカンバ、ヤマブドウ
苫小牧二次林208林班	6.9	2005	2015	31	4	0	ナナカマド、イタヤカエデ、ツルウメドキ、ノリウツギ	
野幌	7.0	2005	2015	31	0	2		ミヤマザクラ、オオバボダイジュ
苫小牧二次林404林班	7.0	2006	2016	39	1	0	イタヤカエデ	
苫小牧アカエゾマツ人工林	7.1	2007	2017	20	1	0	チョウセンゴヨウ*	
苫小牧トドマツ人工林	7.1	2008	2015	7	0	0		
苫小牧二次林308林班	7.2	2009	2014	33	0	1		マユミ
臥龍山	7.2	2007	2013	27	0	0		
苫小牧カラマツ人工林	7.2	2008	2015	22	3	1	ケヤマハンノキ、パッコヤナギ、ノリウツギ	マユミ
大山文珠越	7.4	2006	2016	24	1	2	サワフタギ	ミズナラ、クロモジ
木曾赤沢	7.4	2008	2013	19	0	1		マンサク
秩父ブナ・イヌブナ林	7.6	2004	2017	52	1	3	ムラサキシキブ	ベニドウダン、サンショウ、アオダモ
大滝沢	7.6	2008	2013	24	1	0	リョウブ	
高原山	8.1	2008	2013	53	1	0	モミ	
那須高原	8.3	2009	2014	35	0	0		
秩父ウダイカンバ林	8.3	2004	2014	28	0	4		ツガ、キハダ、ナツツバキ、ハリギリ
秩父18は1二次林	8.3	2007	2017	36	0	0		
大佐渡	8.3	2004	2017	24	3	1	クロモジ、ハリギリ、ハウチワカエデ	エゾズリハ
西丹沢	8.3	2008	2013	57	3	0	ツリバナ、チョウセンゴミシ、イボタノキ	
金目川	8.4	2005	2015	28	4	0	ツノハシバミ、ヤブデマリ、ヤマブドウ、アオダモ	
カヌマ沢溪畔林	8.5	2004	2017	26	4	4	ツノハシバミ、オオヤマザクラ、コシアブラ、タニウツギ	ウワミズザクラ、テツカエデ、クロモジ、オオハツクロモジ
富士	8.7	2004	2009	35	0	3		シラビソ、ミヤマザクラ、ツタウルシ
小川	8.7	2004	2017	46	2	1	オオウラジロノキ、コシアブラ	クサギ
稚葉	8.9	2009	2014	41	0	1		イヌガヤ
秩父矢竹沢	9.3	2004	2014	1	0	0		
芦生棚上谷	9.5	2007	2017	29	0	3		ヤマウルシ、クロモジ、アズキナシ
芦生モンドリ谷	9.8	2008	2013	42	1	1	ヒメシャラ	クロモジ
和歌山	10.2	2005	2017	38	1	0	ウリカエデ	
青葉山	11.4	2005	2015	48	1	2	ナナカマド	リョウブ、イタヤカエデ
函南	11.9	2005	2015	39	0	2		シラカシ、ツクバネウツギ
市ノ又	12.0	2005	2017	47	3	1	シイモチ、シロダモ、イヌマキ	モチノキ
小佐渡豊岡	12.5	2005	2017	23	1	0	オオバクロモジ	
愛知赤津	12.6	2004	2017	37	0	0		
屋久島スギ林	12.8	2007	2017	27	3	2	イヌツゲ、クサギ、ヤブニッケイ	シラカシ、アオガシ
春日山	12.9	2006	2016	43	2	0	ヤブニッケイ、イチイガシ*	
糟屋	12.9	2006	2016	46	0	3		ツツラフジ、ヤマハゼ、アカメガシワ
綾	13.3	2004	2017	30	3	1	クロキ、テツカエデ、アカメガシワ	モチノキ
半田山	14.1	2007	2016	33	3	1	クロガネモチ、ヤマコウバシ、センダン	アカメガシワ
上賀茂	14.2	2007	2017	16	1	1	ヤブツバキ	アセビ
対馬龍良山	14.5	2007	2017	30	1	1	アオキ	ユズリハ
田野二次林	15.7	2004	2017	61	2	6	ミサオノキ、バリバリノキ	クマノミズキ、マテバシイ、イヌガシ、シキミ、ネムノキ、ミズキ
佐田山	15.9	2007	2017	41	0	0		
屋久島照葉樹林	18.7	2006	2013	44	0	1		シャヤンボ
奄美	19.2	2005	2017	55	1	3	シロダモ	ギーマ、ハマヒサカキ、テイカズラ
与那	20.6	2004	2017	62	3	1	ホソバムクイヌビワ、シマイズセンリョウ、カキバカンコノキ	ヤブニッケイ

* 2017 年に加入、もしくは消失した種

注) 年平均気温は、国土数値情報 平年値メッシュデータ (1971~2000 年) で当該サイトを含むメッシュの平年値を用いた。

表Ⅱ-2-4. 2016年度に集計した調査区の出現種ごとの幹本数*

種名	愛知赤津	足寄拓北	足寄美盛	足寄花輪	芦生柘上谷	秩父ブナ・イヌブナ林	市ノ又	上賀茂	カヌマ沢溪畔林	小佐渡豊岡	カヤの平	おたの申す平	大山沢	吉小牧アカエゾマツ人工林	吉小牧成熟林	対馬龍良山	和歌山	合計
イヌガヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ハイイヌガヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ヒノキ	589	0	0	0	0	0	39	813	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1441
スギ	0	0	0	0	644	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	644
ネズミサシ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
モミ	0	0	0	0	0	18	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	298	325
ウラジロモミ	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	10
オオシラビソ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	231	0	0	0	0	0	231
アカエゾマツ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	49	0	0	0	49
エゾマツ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	5	0	0	11
トウヒ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	0	0	13
アカマツ	21	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	15	37
コメツガ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	272	0	0	0	0	0	0	272
ツガ	0	0	0	0	0	35	42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	196	273
イヌマキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	0	24
カヤ	0	0	0	0	0	4	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	10
シキミ	2	0	0	0	0	63	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	57	125
ヤブニッケイ	0	0	0	0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34	3	53
カナクキノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
シロモジ	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7
オオバクロモジ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
バリバリノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	15
カゴノキ	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	17
アオガシ	0	0	0	0	0	55	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	60
タブノキ	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	16
イヌガシ	0	0	0	0	0	69	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	87
シロダモ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	7	0	9
ホオノキ	4	18	6	6	13	0	1	0	12	4	0	0	1	12	38	0	1	116
キタヨブシ	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0	26
タムシバ	107	0	0	0	44	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	151
オガタマノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ツゲ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
アワブキ	0	0	0	0	0	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
カンナ	0	17	0	0	0	0	0	76	0	0	0	28	2	18	0	0	0	141
ユズリハ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
エゾユズリハ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
イヌノキ	0	0	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	271	0	290
マルバマンサク	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
ヤマブドウ	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
キブシ	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
ゴンズイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ツルウメモドキ	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
ツルマサキ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ヒロハツリバナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	0	0	0	0	0	0	17
ツリバナ	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7
ネムノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
イヌエンジュ	0	2	18	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21
フジ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ケヤマハンノキ	0	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
ネコシデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ヤエガワカンバ	0	0	15	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
ダケカンバ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	63	0	0	0	0	0	0	68
ミズメ	0	0	0	0	12	2	4	0	0	0	0	0	4	0	0	0	3	25
ウダイカンバ	0	5	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	19
シラカンバ	0	0	3	82	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	85
オノオレカンバ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
サワシバ	0	1	0	0	0	157	0	0	0	0	0	24	3	64	0	0	0	249
クマシデ	0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	22
アカシデ	15	0	0	0	3	28	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	85	135
イヌシデ	0	0	0	0	0	12	0	0	0	116	0	0	0	0	0	3	4	135
ツノハシハミ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	20	0	0	0	0	0	0	0	21
アサダ	0	67	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	3	42	0	2	120	171
クリ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	6
ツブラジイ	0	0	0	0	0	0	19	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	71
スダジイ	0	0	0	0	0	0	96	0	0	0	0	0	0	0	0	45	0	141
ブナ	0	0	0	0	72	46	0	0	69	0	221	0	8	0	0	0	3	419
イヌブナ	0	0	0	0	0	362	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	370
アカガシ	17	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65	97
ミズナラ	0	1	279	689	19	3	0	0	13	9	0	0	20	16	0	1	1050	1499
カンウ	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
アラガシ	11	0	0	0	0	0	9	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
ウラジロガシ	8	0	0	0	0	0	79	0	0	0	0	0	0	0	0	3	20	110
コナラ	120	0	0	0	0	0	2	0	83	0	0	0	0	0	0	0	5	210
ツクバネガシ	14	0	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
サワグルミ	0	0	0	0	0	0	0	0	98	0	0	0	21	0	0	0	0	119

* 種名は、佐竹ほか（1999）に拠り、同種異名は標準和名に統一した（同種異名は括弧内に示す）。

表Ⅱ-2-4. 2017年度に集計した調査区の出現種ごとの幹本数* (続き)

種名	愛知赤津	足寄拓北	足寄美盛	足寄花輪	芦生桥上谷	秩父ブナ・イヌブナ林	市ノ又	上賀茂	カヌマ沢溪畔林	小佐渡豊岡	カヤの平	おたの申す平	大山沢	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧成熟林	対馬龍良山	和歌山	合計
アカメガシワ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
シラキ	2	0	0	0	0	0	17	0	0	11	0	0	0	0	0	0	1	31
イイギリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ハッコヤナギ	0	0	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
ヒメコウゾ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
イヌビワ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
ヤマグワ	0	8	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	1	25	0	0	46
オオウラジロノキ	9	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
カナメモチ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
カスミザクラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
イヌザクラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ウミスザクラ	0	0	0	0	2	5	0	0	0	9	21	0	3	0	0	0	0	40
ヤマザクラ	2	0	0	0	1	0	2	0	0	14	0	0	0	0	0	0	3	22
ミヤマザクラ	0	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	10
オオヤマザクラ	0	18	24	7	0	0	0	1	0	0	0	0	4	2	15	0	0	71
シケリザクラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	71	0	0	71
アズキナン	19	3	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	25	0	0	0	58
ナナカド	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	34	1	0	0	3	0	0	40
ウラジロノキ	6	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	11
ハルニレ	0	13	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	24
オヒョウ	0	3	0	0	0	0	0	41	0	0	0	1	0	0	0	0	0	45
ケヤキ	0	0	0	0	0	7	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	16
シナノキ	0	35	0	0	0	0	0	0	0	7	0	11	7	27	0	0	0	87
オオハボダイジュ	0	107	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34	0	0	0	144
ツタウルシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ヤマウルシ	1	7	0	6	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	20
キハダ	0	4	13	3	0	0	0	0	0	10	0	0	3	2	0	0	0	35
カラスザンショウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
オオモミジ	0	11	0	5	0	15	0	0	0	0	0	21	0	8	0	0	8	68
ヤマモミジ	0	0	0	0	0	0	0	51	134	0	0	0	17	10	0	0	0	212
アサノハカエデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	4
チドリノキ	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	121	0	0	0	0	0	130
ミツデカエデ	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ウリカエデ	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
ヒトツバカエデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	4
ハウチワカエデ	0	10	0	1	0	17	0	13	40	75	0	9	0	24	0	0	0	189
ヨミネカエデ	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	9
イタヤカエデ	0	0	0	0	0	0	0	41	2	0	0	0	13	249	0	0	7	312
オニタヤ	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7
ウラゲエンコウカエ	0	0	0	0	0	17	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	18
エノイタヤ	0	129	27	38	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	199
アカイタヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
イトマキイタヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45	0	0	0	0	0	45
メダスノキ	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	9
テツカエデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	180	0	4	0	0	0	0	0	184
イロハモミジ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ウリハダカエデ	0	0	0	0	0	3	0	0	4	11	0	19	0	0	0	0	0	37
オオイタヤメイゲツ	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	98	0	0	0	0	0	100
コハウチワカエデ	140	0	0	0	27	37	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	5	212
ヒナウチワカエデ	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
ミネカエデ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	3
オガラバナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
トチノキ	0	0	0	0	0	0	0	42	0	17	0	0	0	0	0	0	0	59
ニガキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ヤマボウシ	6	0	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
ミズキ	0	1	0	1	0	3	1	22	1	51	0	1	0	9	0	0	2	92
クマノミズキ	0	0	0	0	0	0	0	0	29	0	0	0	0	0	0	0	0	29
ノリウツギ	0	32	6	5	1	0	0	0	0	132	0	0	0	0	0	0	0	176
ツルアジサイ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	18	0	0	0	20
イワガラミ	0	0	0	0	3	4	0	0	0	0	0	1	0	9	0	0	0	17
サルナン	0	5	0	0	0	8	0	0	0	0	0	1	0	60	0	0	0	74
ミヤママタビ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
リョウブ	8	0	0	0	54	7	0	26	0	0	0	0	0	0	0	0	5	100
リュウキュウマメガ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ネジキ	48	0	0	0	17	0	3	17	0	0	0	0	0	0	0	0	6	91
アセビ	59	0	0	0	42	120	64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	263	548
ミツバツツジ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
オンツツジ	0	0	0	0	0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
シヤンパンボ	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
サカキ	368	0	0	0	0	0	405	17	0	0	0	0	0	0	189	48	1027	
ヒサカキ	214	0	0	0	2	0	140	10	0	30	0	0	0	0	25	94	515	
モッコク	0	0	0	0	0	0	18	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	25
オオバアサガラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	5
エゴノキ	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ハクウンボク	0	0	0	0	4	8	0	0	3	0	0	0	0	0	11	0	0	26
サワフタギ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	0	0	0	0	0	0	0	17

* 種名は、佐竹ほか（1999）に拠り、同種異名は標準和名に統一した（同種異名は括弧内に示す）。

表Ⅱ-2-4. 2017年度に集計した調査区の出現種ごとの幹本数*（続き）

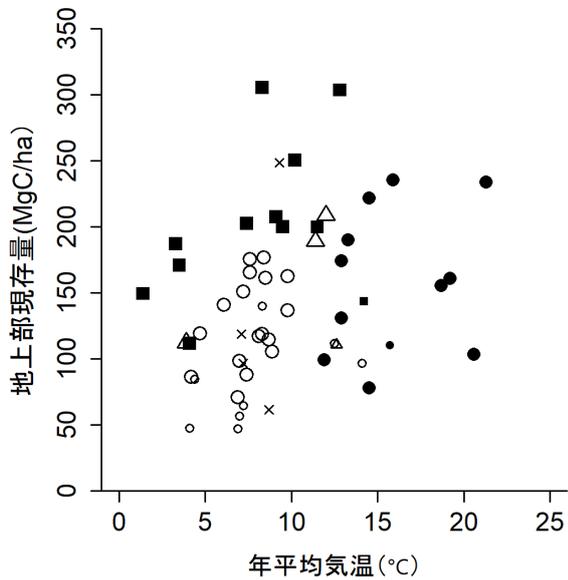
種名	愛知赤津	足寄拓北	足寄美盛	足寄花輪	芦生桥上谷	秩父ブナ・イヌブナ林	市ノ又	上賀茂	カヌマ沢溪畔林	小佐渡豊岡	カヤの平	おたの申す平	大山沢	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧成熟林	対馬龍良山	和歌山	合計	
タンナサワフタギ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
クロキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	0	31
ハイノキ	0	0	0	0	0	0	34	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
クロバイ	0	0	0	0	0	0	146	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	158
ヤブツバキ	81	0	0	0	0	0	127	1	0	0	0	0	0	0	0	178	0	0	387
ユキツバキ	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
ヒメジャラ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	68	0	69
ナツツバキ	0	0	0	0	0	16	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	19
クサギ	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
ハマクサギ	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ミヤマアオダモ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
ケアオダモ	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5
アオダモ	0	40	0	2	6	0	0	0	4	25	0	0	4	0	81	0	1	163	
ヤブダモ	0	10	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	28
シオジ	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	92	0	0	0	0	0	96
マルバアオダモ	23	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24
ネズミモチ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	2	27
ハシドイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	13
コシアブラ	0	0	0	0	17	3	0	1	1	3	22	0	11	0	9	0	0	1	58
カクレミノ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	0	28
タカノツメ	25	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
ハリギリ	0	15	16	12	0	3	0	0	1	0	0	0	1	2	2	0	0	0	52
シイモチ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
イズツゲ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ツゲモチ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
モチノキ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4
アオハダ	64	0	0	0	42	8	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	126
タマミズキ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ソヨゴ	56	0	0	0	17	0	1	35	0	79	0	0	0	0	0	0	37	0	225
クロソヨゴ	0	0	0	0	11	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
オオカメノキ	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	84	0	0	0	0	0	0	0	86

* 種名は、佐竹ほか（1999）に拠り、同種異名は標準和名に統一した（同種異名は括弧内に示す）。

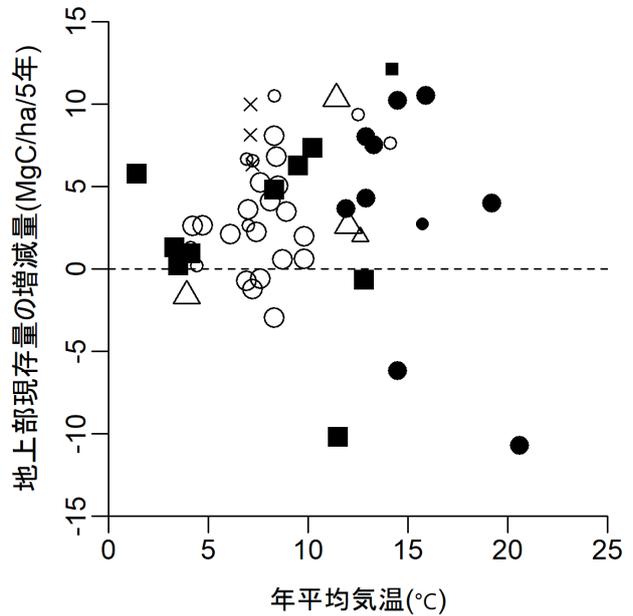
3) 森林の炭素蓄積量とその変化

全調査区の樹木の地上部現存量を図Ⅱ-2-1に、調査開始時からの炭素蓄積の変化量を図Ⅱ-2-2に示す。一部の調査区を除き、多くの調査区で炭素蓄積量は増加していた。また、過年度までと同様、常緑針葉樹林と落葉広葉樹林の地上部現存量の増加量は温かい場所の森林ほど大きく、日本全体の傾向としては年平均気温が15℃付近の森林で地上部現存量の増加のピークが見られた。

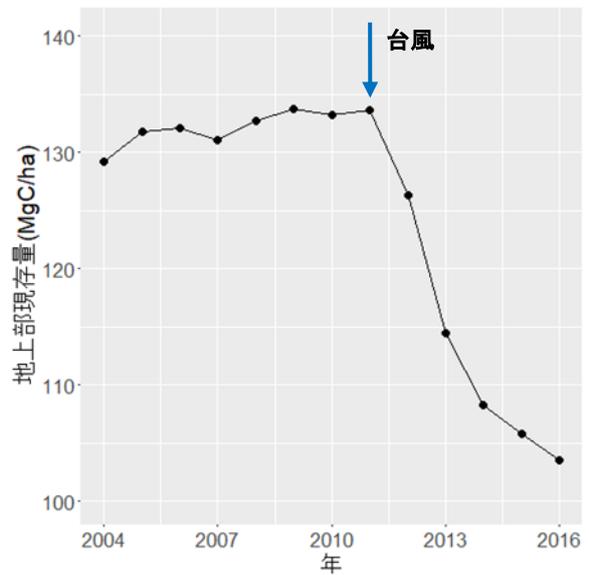
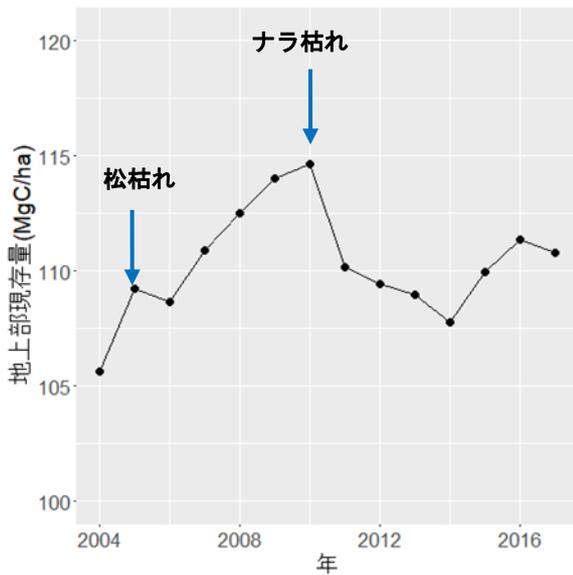
また、愛知赤津サイトでは2010年度に発生したカシノナガキクイムシによってナラ枯れが生じ、2011年度から2014年度まで地上部現存量は減少していたが2015年度に増加に転じて2016年度まで増加傾向にあり、2017年度は2016年度と同様の値であった（図Ⅱ-2-3左）。与那では2012年度の台風により地上部現存量が減少し、地上部現存量は攪乱後2年間で大幅に減少し、その後2年間は緩やかに減少傾向にあった（図Ⅱ-2-3右）。今後も調査を継続し、炭素蓄積の長期的な変動及び地理的な傾向を明らかにしていく必要がある。



図II-2-1. 樹木の地上部現存量と年平均気温の関係
 常緑針葉樹林 ■、針広混交林 △、落葉広葉樹林 ○、
 常緑広葉樹林 ●、人工林×。大きいシンボルは成熟林・
 老齢二次林、小さいシンボルは二次林・人工林。



図II-2-2. 調査開始時からの地上部現存量の増減
 量と年平均気温の関係
 増減量は5年あたりに換算した値。常緑針葉樹林
 ■、針広混交林 △、落葉広葉樹林 ○、常緑広葉樹
 林 ●、人工林×。大きいシンボルは成熟林・老
 齢二次林、小さいシンボルは二次林・人工林。

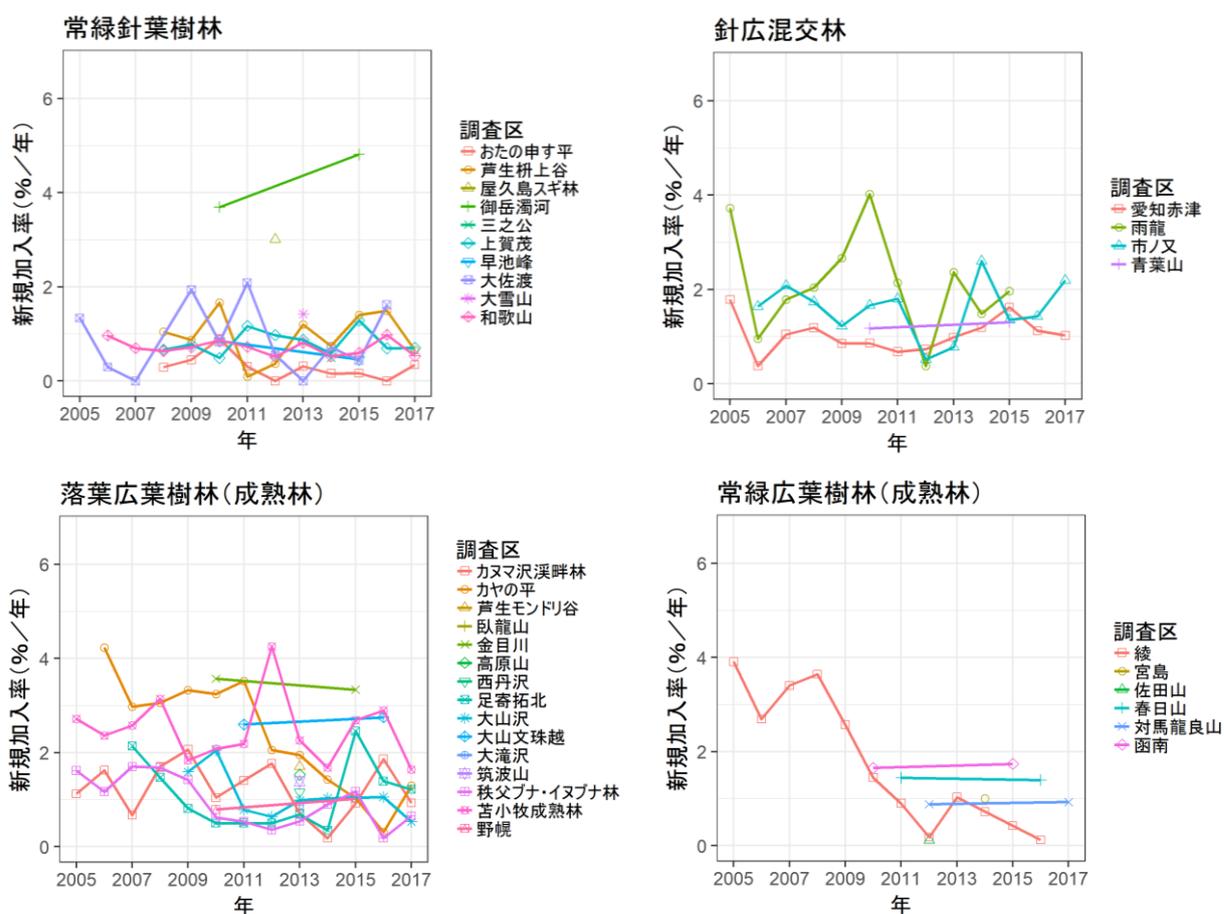


図II-2-3. 愛知赤津(左図)及び与那における地上部現存量(右図)の調査開始時からの変化。

4) 森林動態

森林動態のパラメータを解析したところ※、2017年度は、国内全体としては、新規加入率は0.3~2.1%・年⁻¹ (図Ⅱ-2-4)、死亡率は0.4~3.7%・年⁻¹ (図Ⅱ-2-5)、回転率は0.7~2.5%・年⁻¹ (図Ⅱ-2-6) であり、群集動態に大きな変動は確認されなかった。

2012年の台風で大きな被害があった与那では、その後2013年から2016年にかけての新規加入率が高い状態が続いていて、どのように森林が回復してくのか今後もモニタリングが必要である (与那の2017年度調査は2018年1月下旬に行われ、サイトにてデータ集計中のため2017年度のデータは解析に含まれていない)。



図Ⅱ-2-4. 2005~2017年度の新規加入率の変化

※ $t-1$ 年の調査から t 年の調査の間に、新規に調査対象となった幹の割合を t 年の新規加入率とし、またこの期間に死亡した幹の割合を t 年の死亡率として示している。ただし春先に調査を実施しているサイト(雨龍)では、 $t-1$ 年の春の調査から t 年の春の調査までの新規加入率及び死亡率は、 t 年よりも $t-1$ 年の影響を強く受けているので $t-1$ 年の値として表示している。雨龍の2005年、小佐渡豊岡の2006年、大佐渡の2007年、足寄花輪の2012年の値は過大・過少評価の可能性があるので、表示していない。

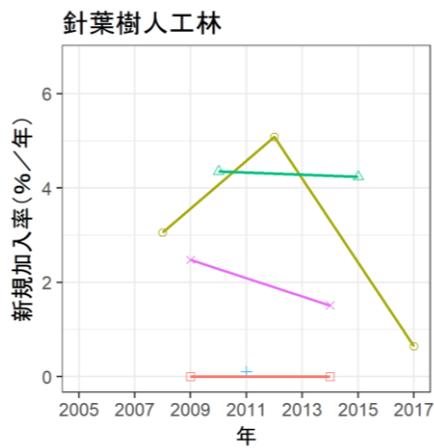
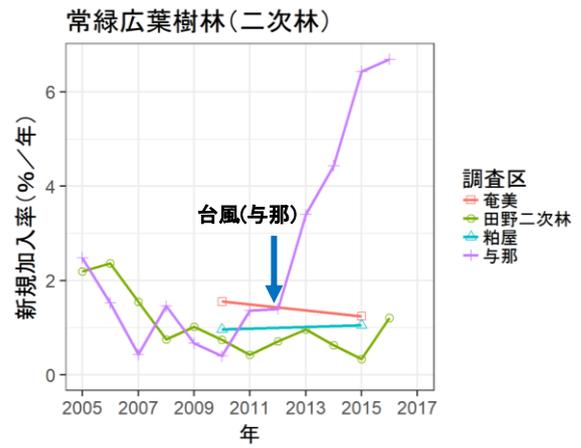
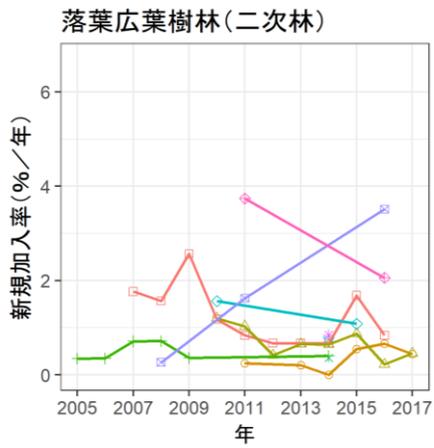


図 II-2-4. 2005~2017 年度の新規加入率の変化(続き)

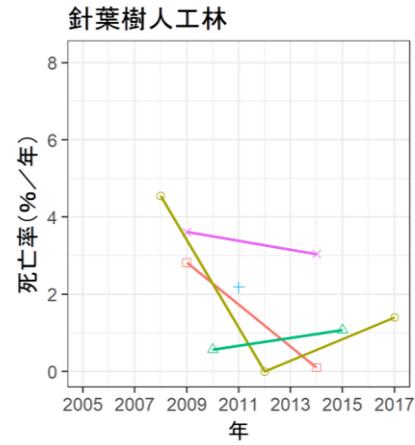
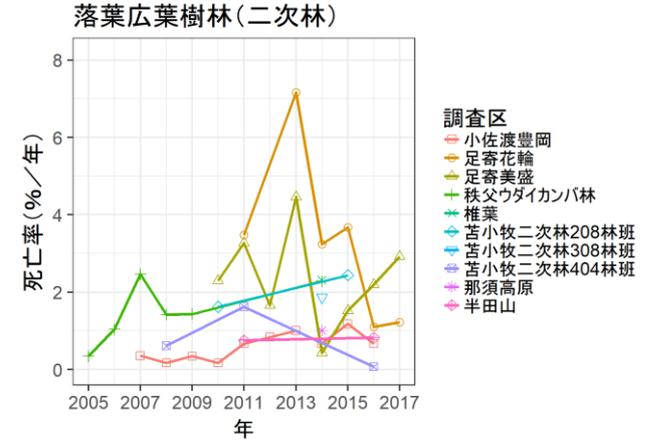
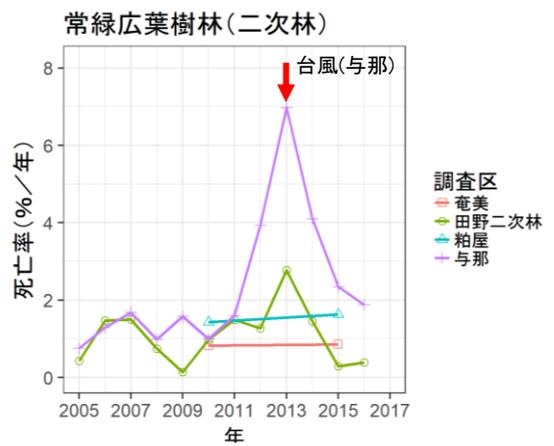
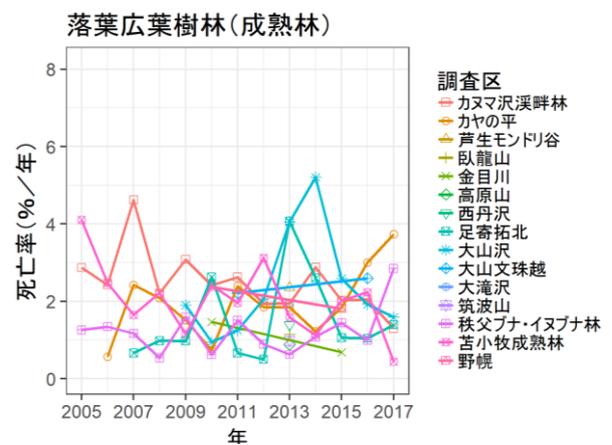
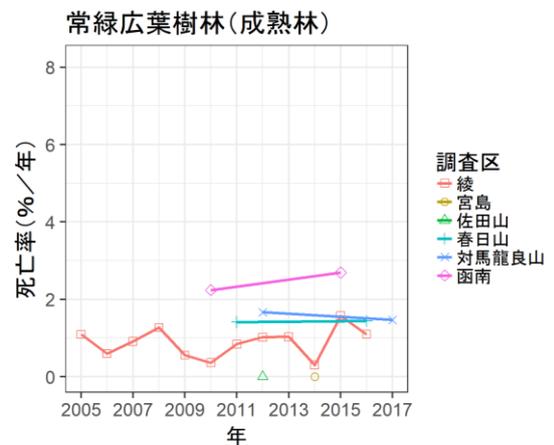
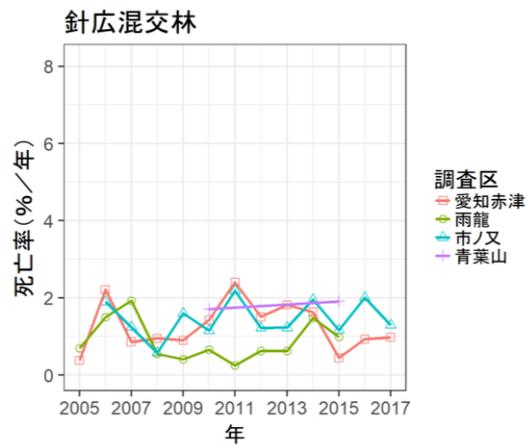
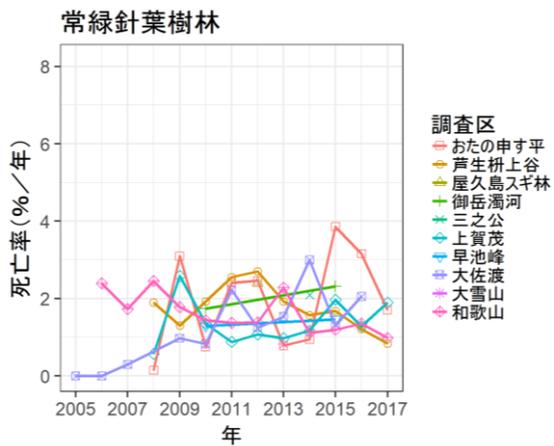
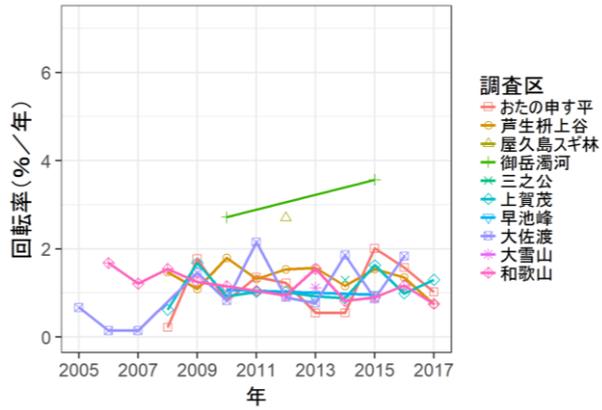
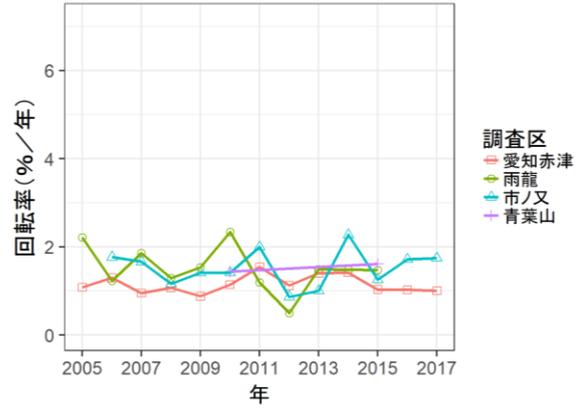


図 II-2-5. 2005~2017 年度の死亡率の変化

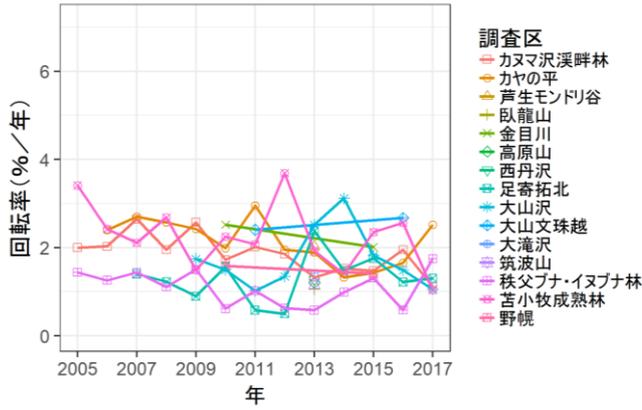
常緑針葉樹林



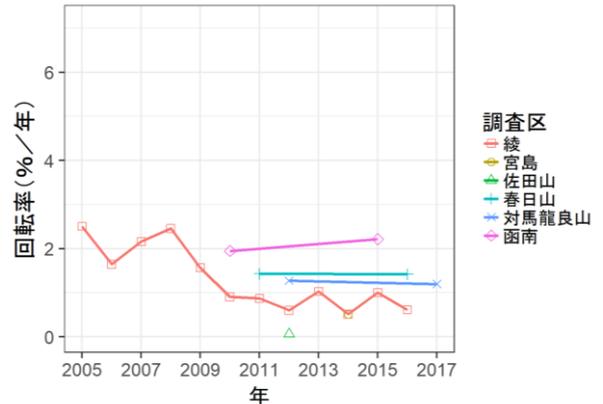
針広混交林



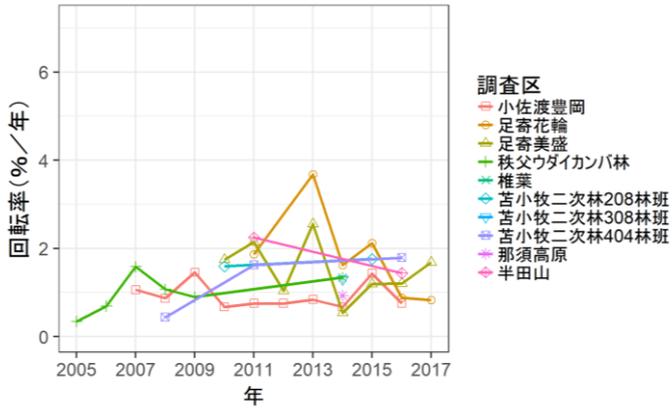
落葉広葉樹林(成熟林)



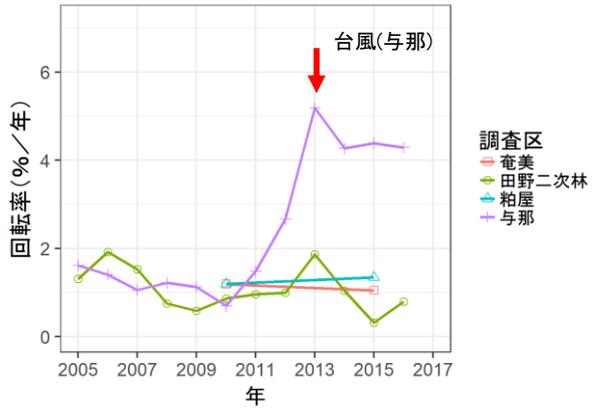
常緑広葉樹林(成熟林)



落葉広葉樹林(二次林)



常緑広葉樹林(二次林)



針葉樹人工林

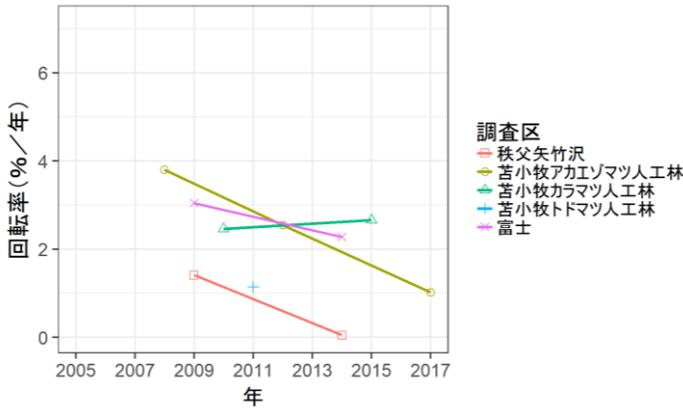
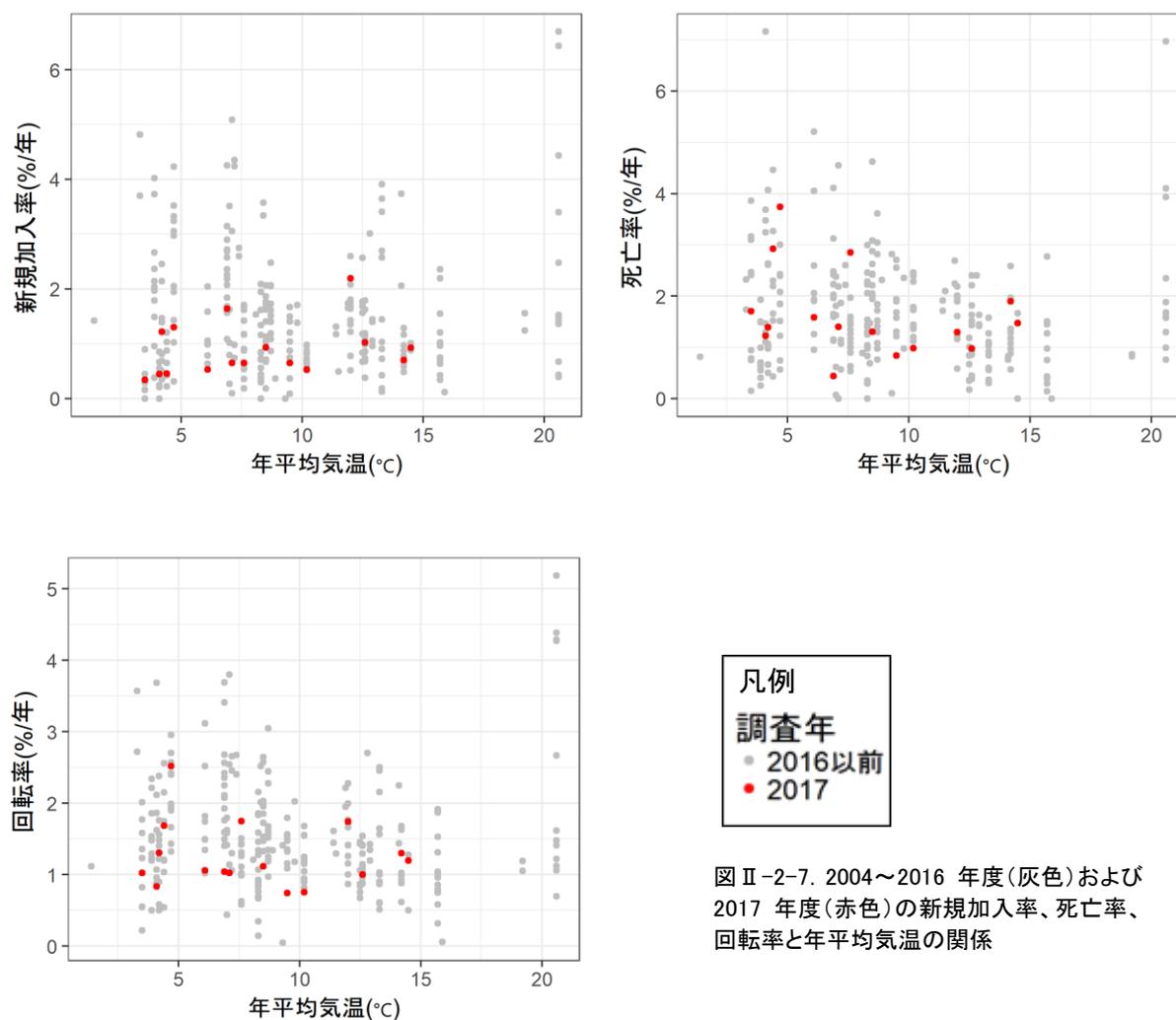


図 II-2-6. 2005~2017 年度の回転率の変化

一方、2017 年度までの各調査区の森林動態と年平均気温の関係を見てみると、新規加入率（図Ⅱ-2-7 上段左）、死亡率（図Ⅱ-2-7 上段右）、回転率（図Ⅱ-2-7 下段）はそれぞれ気温との間に有意な関係は確認されていないが、年によっては冷涼な北海道の森林や亜熱帯の与那において強風の影響で死亡率が大きい時がある（図Ⅱ-2-7 上段右）。強風攪乱による森林動態への影響が長期的にどのように現れるのか、今後も注視していく必要がある。



図Ⅱ-2-7. 2004～2016 年度(灰色)および2017 年度(赤色)の新規加入率、死亡率、回転率と年平均気温の関係

引用文献

Takyu, M., Kubota, Y., Aiba, S., Seino, T. and Nishimura, T. 2005. Pattern of changes in species diversity, structure and dynamics of forest ecosystems along latitudinal gradients in East Asia. *Ecological Research* 20:287-296.

佐竹 義輔・亙理 俊次・原 寛・富成 忠夫, 1999. 日本の野生植物 木本(1)～(2). 平凡社

3. 落葉落枝・落下種子調査

(1) 調査方法

コアサイト及び一部の準コアサイトにおいて、落葉落枝・落下種子調査（リター・シードトラップ調査）を実施した。

調査区内にリター・シードトラップを25個設置した。設置期間は、積雪量の少ない南方のサイトでは通年、積雪量の多いサイトでは晩秋もしくは初冬にリタートラップを撤去し、翌年の春先に設置した。

およそ1か月おきに、トラップに落下した葉、枝、繁殖器官など（リターフォール）を回収し、その乾燥重量を計測した。繁殖器官のうち種子は、任意の調査として樹種ごとに仕分け、種子数・健全種子数と種子重量・健全種子重量を計測した。

(2) 平成 29（2017）年度調査結果

2017年度は20サイト21調査区で調査を行った。9サイトで12か月間の落葉落枝・落下種子を回収した（表Ⅱ-3-1）。積雪の多い4サイト4調査区では原則として春先から晩秋までの落葉落枝・落下種子を回収し、7サイト8調査区では冬季の間トラップを林床に置き続けて冬季の落葉落枝・落下種子も回収した。回収した落葉落枝・落下種子は計量・計数した。

表Ⅱ-3-1. 2017年度の調査期間*

サイト名	調査区名	調査 間隔	2016年度														
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
雨籠	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
足寄	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
足寄	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
苫小牧	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
秩父	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
大山沢	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
大佐渡	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
カヤの平	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
おたの申す平	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
愛知赤津	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
上賀茂	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
芦生	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
和歌山	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
田野	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
与那	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
小川	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
カヌマ沢	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
市ノ又	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
綾	コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
青葉山	準コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
奄美	準コア	毎年	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

* 点線は冬季に林床にトラップを置き続けたことを示す

(3) 集計・解析

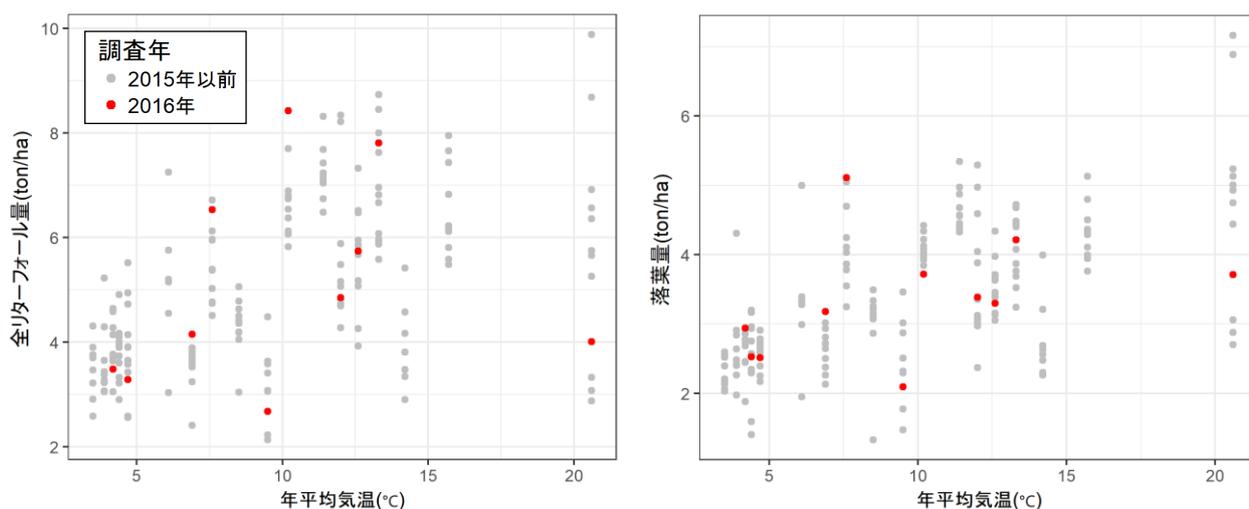
1) 集計・解析方法

集計・解析対象は、これまでに調査を行った調査区すべてについて、2018年2月1日までにサイトから提出された2016年度調査分までのデータとし、サイトにて再確認中の一部のデータは除外した。

各月の1日当たりのリターフォール量及び落葉量を求めた。これらの値をもとに4月から翌年3月末までの年間リターフォール量及び年間落葉量を求めた。また、各月の1日当たりの落下種子数・重量（果実を含む）を求め、4月から翌年3月末までに回収された種子数・重量を年間落下種子数・重量とした。

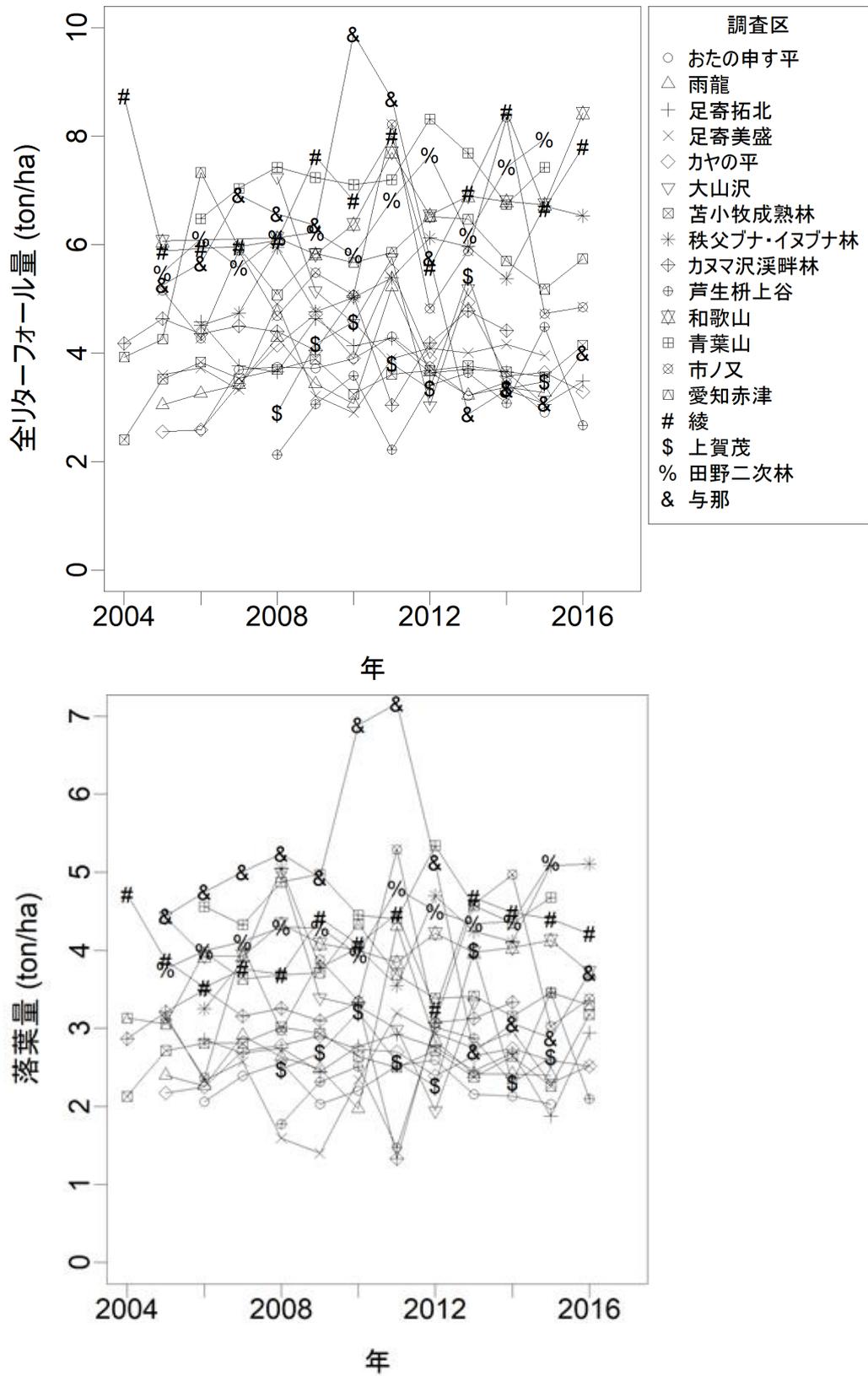
2) 落葉落枝量

2004年～2016年度の各調査区の年間リターフォール量(図Ⅱ-3-1左)及び年間落葉量(図Ⅱ-3-1右)は、ともに温かい場所の森林ほど大きく、2016年度も同様の傾向であった。また、2016年度の年間落葉量および年間リターフォール量は例年の範囲内の値であった。



図Ⅱ-3-1. 2004～2015年度(灰色)および2016年度(赤色)の年間落葉量およびリターフォール量と年平均気温の関係。

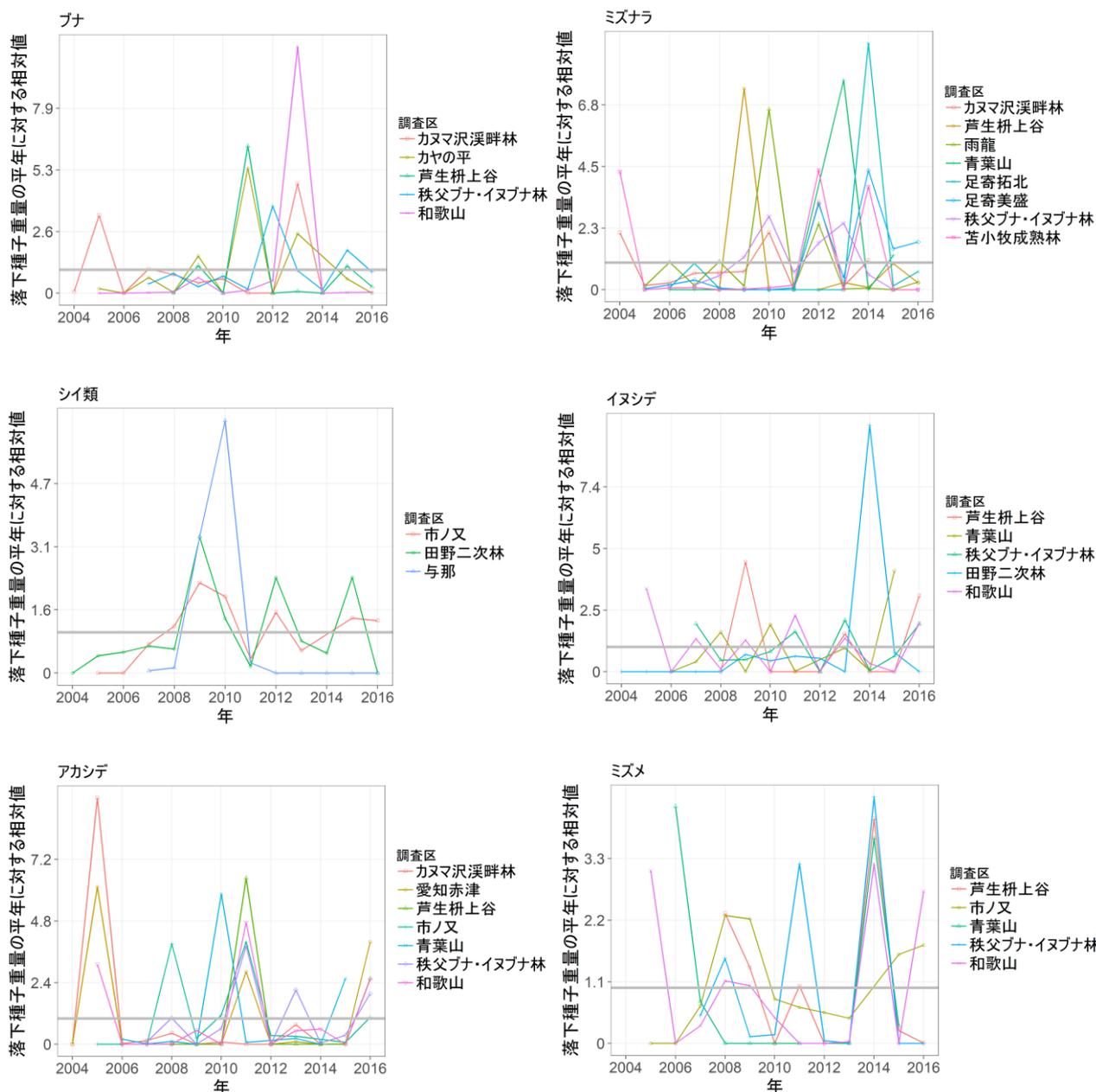
また、年間リターフォール量および年間落葉量の時系列変化を見てみると、2004年度から2016年度までの13年間では増加や減少といった一定の傾向は確認されず、台風攪乱による一時的な増加など各年の変動が大きい(図Ⅱ-3-2)。温暖化などの気候変動によって、それぞれの森林のタイプにおいてリターフォール量・落葉量がどのような影響を受けるかを把握するには、数年あるいは数十年に一度の台風攪乱などの影響も考慮する必要がある。つまり、リターフォール量・落葉量の変化は長期的なモニタリングがあつてはじめて捉えることができるので、今後の調査の継続が重要である。



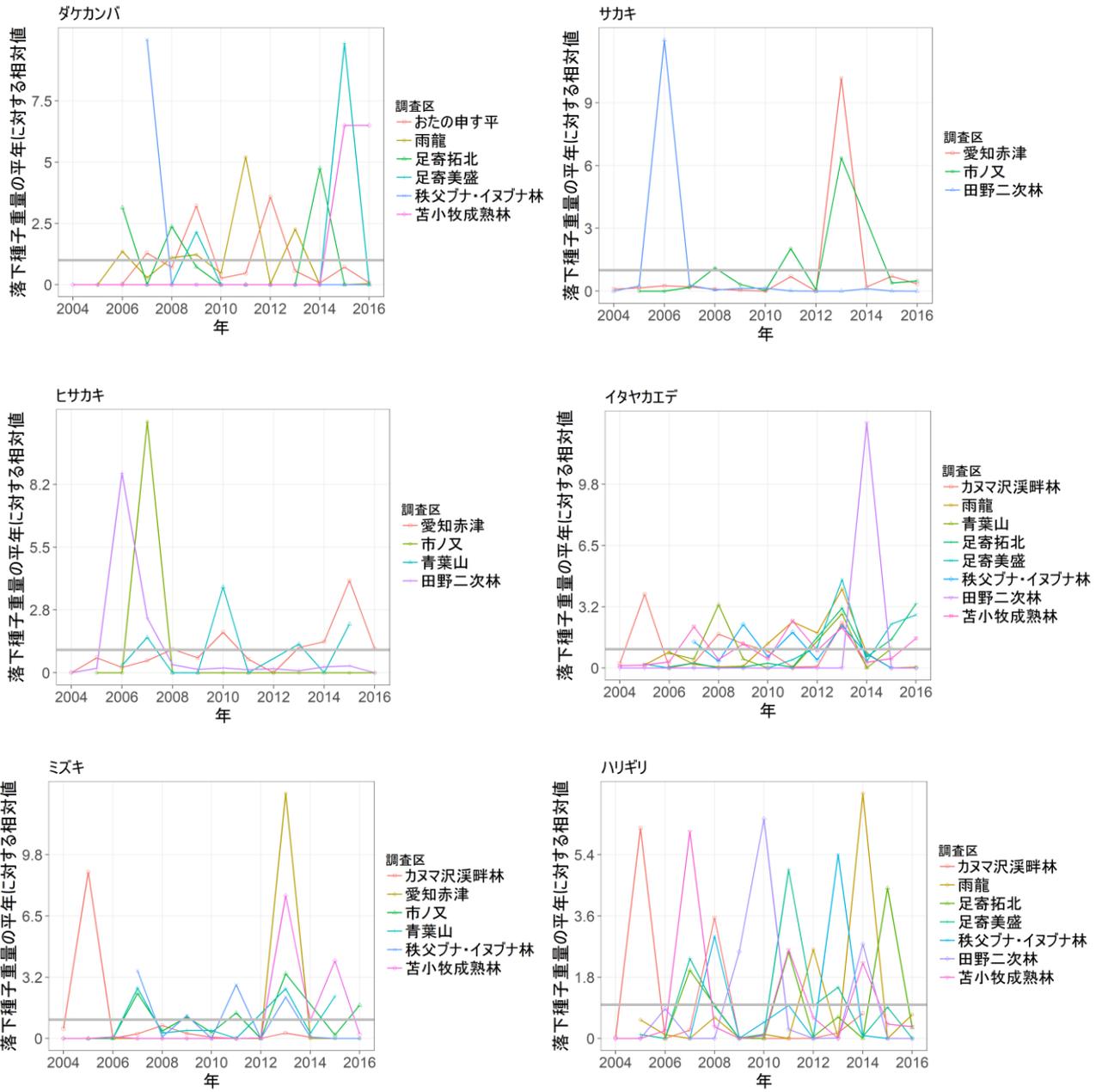
図Ⅱ-2-2. 年間リターフオール量(上)と年間落葉量(下)の年変動。

3) 落下種子量

複数のサイトで種子が多数回収された12種の落下種子乾重量の年次変動を図II-3-3に示す。調査開始年から2016年度までに、ブナ、ミズナラ、シイ類などのブナ科を始めとして、アカシデやイヌシデなどのクマシデ属、サカキ、ヒサカキ、イタヤカエデにおいて、その種子生産量の豊凶に調査区間での同調性が確認されている。2016年度はアカシデが複数の調査区で豊作の傾向であった。ミズナラについては、北海道や小川では2014年度は豊作であったが、2015年、2016年度は平年並みあるいは凶作であった。豊凶と気象因子の関係について知るために今後も継続的な調査が必要である。



図II-3-3. 主要樹種の2004~2016年の各年の落下種子重量。
落下種子重量は調査を行った全ての年の平均に対する相対値として示した。破線は年の平均値、つまり1を示す。スダジイとツブラジイは、両者を区別できないものを含むため、シイ類としてまとめた。



図II-3-3. 主要樹種の2004～2015年(一部2016年を含む)の各年の落下種子重量(続き)。

4. 地表徘徊性甲虫調査

(1) 調査方法

林床を徘徊し、飛翔能力を持たない又は乏しい甲虫類（昆虫綱甲虫目（鞘翅目））の生息状況を調査するために、ピットフォールトラップ法を用いた。ピットフォールトラップ法とは、地面に落とし穴状のトラップを設置し、そこに落ちた動物を採取する方法である。各サイトで定めた調査区内の5か所のサブプロットに、落とし穴状のトラップとして開口部直径90mm、深さ120mmの容器を4個ずつ（1調査区あたり20個）設置した。

季節ごとの地表徘徊性甲虫類の群集構造を把握するため、4月下旬から11月中旬までの期間中に、およそ1か月～2か月の間隔で年4回の調査を実施した。毎回落とし穴状のトラップ容器の蓋を開放し、72時間後に、トラップ内に落下していた甲虫類を回収した。このとき、サブプロットごとに全4トラップ分の甲虫類をひとまとめにして回収した。調査は雨天をなるべく避け、トラップ開放期間中の天候、最高・最低気温、降水量及びサブプロットごとの調査実施時の林床植生の被度を記録した。

採取した甲虫類の全個体について、分類群の同定及び乾燥重量（バイオマス）の測定を行った。地表徘徊性甲虫類の主要分類群であるオサムシ科、シデムシ科、センチコガネ科と、ハネカクシ科の地表性大型種の成虫については、形態によって種まで同定した（以下、これらの分類群を総称して「地表徘徊性甲虫類」という。）。その他の科の成虫については、科まで（可能な場合は種まで）同定を行った。

甲虫類の生息環境を評価するために、上記と同じ5か所のサブプロットにおいて、堆積落葉層の量と化学組成を測定した。6～8月に林床の堆積落葉層を25cm四方の範囲から採取し、乾燥重量を測定した後、全炭素及び全窒素含有率を全窒素全炭素測定装置（SUMIGRAPH NC-900、住化分析センター）により測定した。

(2) 平成29（2017）年度調査結果

前年度よりも1サイト1調査区（佐田山）多い20サイト（コアサイト18、準コアサイト3）の27調査区において、ピットフォールトラップ法による地表徘徊性甲虫類の採取、及び堆積落葉層の採取を実施した（表II-4-1）。さらに、得られた試料の同定・測定を行った。

おたの申す平では、6月に残雪があり調査が困難であったため、1回目のピットフォールトラップ調査が欠測となった。

表 II-4-1. 各調査区におけるピットフォールトラップ調査及び関連する調査の実施日

調査区名	プロットID	サイト プロット コード	ピットフォールトラップ調査				堆積落葉層・土壌	
			1回目	2回目	3回目	4回目	採取	
北海道	雨龍	UR-BC1	201201	6/8	7/6	9/7	10/5	7/6
	足寄拓北	AS-DB1	201301	6/5	7/6	9/11	10/5	7/3
	苫小牧成熟林	TM-DB1	200101	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
	苫小牧二次林404林班	TM-DB2	200102	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
	苫小牧二次林308林班	TM-DB3	200103	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
	苫小牧二次林208林班	TM-DB4	200104	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
	苫小牧アカエゾマツ人工林	TM-AT1	200105	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
	苫小牧カラマツ人工林	TM-AT2	200106	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
	苫小牧トドマツ人工林	TM-AT3	200107	6/8	7/10	9/11	10/5	7/7
佐渡	大佐渡	OS-EC1	200301	5/29	7/3	9/29	11/1	8/25
本州	カヌマ沢溪畔林	KM-DB1	200201	6/3	7/4	8/30	10/3	7/4
	青葉山	AO-BC1	202601	5/25	6/26	9/11	10/20	6/23
	小川	OG-DB1	200501	5/26	6/23	9/15	10/13	6/23
	秩父ブナ・イヌブナ林	CC-DB1	200601	6/2	6/29	9/15	10/20	6/26
	大山沢	OY-DB1	203801	5/7	6/24	10/2	10/28	6/24
	カヤの平	KY-DB1	201401	6/9	7/10	8/23	9/22	8/20
	おたの申す平	OT-EC1	201501	欠測*	7/10	8/23	9/22	8/20
	愛知赤津	AI-BC1	200801	5/26	6/23	9/15	10/20	6/20
	芦生枡上谷	AU-EC1	203101	5/22	6/19	9/28	10/20	8/22
	上賀茂	KG-EC1	203201	5/25	6/26	9/11	10/13	7/28
四国	和歌山	WK-EC1	201601	5/22	6/22	9/14	10/13	6/22
	市ノ又	IC-BC1	201701	5/14	6/12	10/5	11/10	6/9
	佐田山	SD-EB1	203601	5/14	6/12	10/5	11/10	6/9
九州	綾	AY-EB1	200901	5/24	7/2	10/13	11/9	7/2
	田野二次林	TN-EB1	201001	5/18	6/16	10/27	11/27	6/16
南西 諸島	奄美	AM-EB1	202301	5/21	7/3	10/14	11/19	6/30
	与那	YN-EB1	201101	4/24	6/26	10/2	11/9	6/26

* 積雪により調査不能

(3) 集計・解析

1) 集計・解析方法

甲虫類については、サブプロット・分類群ごとに年捕獲個体数・バイオマス（4採集回の合計）を求めた。林床植生被度については、サブプロットごとに年平均値（4季節の平均）を求めた。

サブプロットごとに得られた各測定値（甲虫類の各分類群の個体数・バイオマス、林床植生被度、堆積落葉層の重量・炭素含有率・窒素含有率・炭素窒素比）について、調査区ごとの平均値と標準誤差を求めた。さらに、地表徘徊性甲虫類及びオサムシ科について、捕獲個体数が5個体以上の場合、調査区ごとに種数と多様度指数（Shannon-Wienerの多様度指数（ H' ）、Simpsonの多様度指数（ $1/D$ 、 $1-D$ ）、Fisherの多様度指数（ α ）、Pielouの均等度指数（ J' ））を求めた。

上述の各測定値について、調査区ごとの経年変化の傾向を一般化線形混合モデル（GLMM）

と尤度比検定を用いて解析した。まず、2017年度の値が過去の年度の平均値と比べて有意に異なるかを検証するために、年度・サブプロットごとの測定値を応答変数、2017年度か他の年度かを表すダミー変数を説明変数、サブプロット名をランダム変数とするGLMMへの当てはめを行い、尤度比検定によって説明変数の有意性を検定した。次に、各測定値が全年度を通じて有意な増加・減少傾向にあるかを検証するために、上記の説明変数を年度（連続変数）に変えて、同様の解析を行った。ただし、種数と多様度指数は、サブプロットごとではなく調査区ごとに求めているため、これらを応答変数として解析する際は、上述のモデルからランダム変数（サブプロット名）を除いたモデルを用いた。また、甲虫類のバイオマスと堆積落葉層の重量は対数値に、林床植生被度は逆正弦値に変換してから解析を行った。甲虫類の個体数はポアソン分布に、その他の応答変数は正規分布に従うと仮定した。堆積落葉層の各測定値の経年変化傾向を解析する際は、採取日が各サイトの平年の採取日と20日以上異なる年度を除外した。

さらに各測定値について、変化傾向の地域的・全国的な傾向を把握するために、調査区ごとの全年度を通じた増減傾向（上述のGLMMにおける年度（連続変数）の係数）と調査区の年平均気温との関係を分析した。各調査区の年平均気温として、最寄りの気象庁観測所における平年値（1970～2000年の平均）を、遞減率を $0.6^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ として標高補正した値を用いた。

なお、集計・解析対象としたデータは2018年2月20日までにサイトから提出されたデータとした。

2) 地表徘徊性甲虫相、個体数及びバイオマス

2017年度の甲虫類の総捕獲個体数は過去最大の10,185個体、成虫は9,996個体であった（表II-4-2）。オサムシ科成虫の個体数は4,985個体で、成虫全体の50%を占めていた。オサムシ科に次いで多い順にシテムシ科が1,563個体、センチコガネ科が1,476個体、ハネカクシ科が1,132個体であり、それぞれ成虫全体の16%、15%、11%を占めていた。上記の4科以外に100個体以上が捕獲された科はエンマムシ科（351個体）、コガネムシ科（294個体）であった。すべての調査区を通じた地表徘徊性甲虫類の種数は99種であり、その内でオサムシ科の種数は82種であった（表II-4-3）²。

地表徘徊性甲虫類全体及び主要な分類群の捕獲個体数の年変化の傾向を、表II-4-4、図II-4-1に示す。2017年度は、本州の調査区の大半で甲虫類の捕獲数が少なかった。とくに、オサムシ属（オサムシ類）、*Pterostichus*属（ナガゴミムシ類）の捕獲数が少ない調査区が多かった。一方、北海道では例年より捕獲数の多い調査区が多かった。とくに甲虫類の総捕獲数の約8割を占める苦小牧では、国内分布の中心が北海道の種（北方系種）の漸減と、国内分布の中心が本州の種（南方系種）の急増とが続いた結果、2017年度には総捕獲数が

² 「*Synuchus*属の一種」と「オサムシ科の一種」は、体の一部が欠損し同定できず、既出種の可能性も高いため、種数の集計には含めていない。

調査開始当初の約2倍にまで増大した。2017年度に全サイトを通じた甲虫類の総捕獲数が過去最大となったのは、主として、苫小牧において南方系のオオクロツヤヒラタゴミムシ（オサムシ科）、オオヒラタシデムシ（シデムシ科）、センチコガネ（センチコガネ科）が多数捕獲されたことによる。苫小牧以外では、カヌマ沢、小川で引き続き増加傾向が見られた一方、本州の高標高地（おたの申す平・カヤの平・秩父・大山沢）や和歌山、田野等では長期的な減少傾向が続いていた。

地表徘徊性甲虫類全体及び表Ⅱ-4-4に挙げた代表的な分類群について、捕獲数の増減傾向と調査区の年平均気温との関係を検討した結果、高温のサイトほど減少・低温のサイトほど増加という傾向を示すものは見つからなかった（図Ⅱ-4-2 A, D-F）。しかし、ほとんどのサイトで優占するオサムシ属、*Pterostichus*属（冷涼な森林で優占度が高い）、*Synuchus*属（ツヤヒラタゴミムシ類。温暖な森林で優占度が高い）の3属に関しては、オサムシ属は北海道で増加・本州で減少傾向、*Pterostichus*属は北海道・本州ともに減少傾向、*Synuchus*属は本州の一部を除き全国的な増加傾向を示すことが確認された（図Ⅱ-4-2 D-F）。

地表徘徊性甲虫類の捕獲バイオマスは、雨龍・苫小牧・カヌマ沢・小川で増加傾向を、本州の高標高地（おたの申す平・秩父・大山沢）と上賀茂で減少傾向を示したが、明確な地理的傾向は認められなかった（表Ⅱ-4-5、図Ⅱ-4-2 B）。

地表徘徊性甲虫類の種多様性は、過年度と同様に多くの調査区で有意な年変化傾向が見られず、明確な地理的傾向も認められなかった（表Ⅱ-4-6、図Ⅱ-4-2 C）。雨龍・苫小牧・青葉山で多様性の上昇傾向が、芦生・和歌山で多様性の低下傾向が認められた。

表Ⅱ-4-2. 各調査区で捕獲された甲虫類の科ごとの個体数（4季節・5サブプロットの合計）

科名	北海道										佐渡		本州										九州		九州		南西諸島		合計	
	雨龍	足寄拓北	苫小牧成熱林	苫小牧二次林404林班	苫小牧二次林308林班	苫小牧二次林208林班	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧カラマツ人工林	苫小牧トドマツ人工林	大佐渡	カヌマ沢溪畔林	青葉山	小川	秩父フナ・イヌフナ林	大山沢	カヤの平	おたの申す平	愛知赤津	芦生拵上谷	上賀茂	和歌山	市ノ又	佐田山	綾	田野二次林	奄美	与那			
オサムシ科	114	291	818	689	629	710	188	354	161	30	429	114	64	41	128	31	20	10	6	2	15	16	8	93	24					4985
ガムシ科			1	1	2	1					4																			9
エンマムシ科			103	17	96	58	36	33	8																					351
ムクゲキノコムシ科			1									2																	1	4
ツヤシテムシ科										1	5																			6
タマキノコムシ科	4	2	3		1		3	3	1		22	3																	6	48
コケムシ科											2																		9	11
シテムシ科	1	22	324	395	281	300	42	88	58	16	10	23	1	2																1563
ハネカクシ科	29	22	205	301	140	99	61	72	32	9	24	12	4	4	4	6				1	1			10	76	3	17		1132	
クワガタムシ科							1							1	2															4
センチコガネ科	9	79	109	309	225	292	170	143	51	26		51	3	3					1		2		1		2				1476	
コガネムシ科			4	16	31	42	3	5	2		85	45	3	1					1		3		1	7	41	3	1		294	
コメツキムシ科			3	1		4	1	2	2															3						16
ジョウカイボン科				1								1	1		1															4
ホタル科		1																												1
ケシキスイ科																1												2		3
キシムシ科																												1		1
オオキノコムシ科				1																										1
ミジンムシ科	2										2																1	2		7
ナガクチキムシ科													1								1									2
ゴミムシダマシ科			6	1	1	3		4	2				1	2											3					23
ツチハンミョウ科							1																							1
ハムシ科			1		2	1																								4
オサゾウムシ科									1																					1
ゾウムシ科			1	2		2	4		1	2	2		1	1	1					1	6				1	1	8		34	
キクイムシ科																										5	1			6
不明			2		2	1	2						1							1										9
オサムシ科		14	1	2	1	1	1	1	1		1	2	8			1										2				36
シテムシ科		26	19	36	23	34	3	40	7				2	3	1															194
不明	2	2	6	4	2	1			1		4	2	4	1	1	1			1		2			2	22		1		59	
合計	161	459	1607	1776	1436	1549	516	745	328	84	591	249	99	41	146	40	30	10	9	5	30	16	10	115	189	9	35		10285	

表Ⅱ-4-3. 各調査区で捕獲された地表徘徊性甲虫類の種ごとの個体数（4季節・5サブプロットの合計）

属名	種名	北海道							佐渡				本州							四国	九州	南西諸島		合計						
		雨龍	足寄拓北	苫小牧成熟林	苫小牧二次林404林班	苫小牧二次林308林班	苫小牧二次林208林班	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧トドマツ人工林	苫小牧カラマツ人工林	大佐渡	カヌマ沢溪畔林	青葉山	小川	秩父ナ・イヌブナ林	大山沢	カヤの平	おたの申す平	愛知赤津	芦生枡上谷	上賀茂	和歌山		市ノ又	佐田山	田野二次林	奄美	与那	
オサムシ科 Carabidae																														
<i>Leistus</i>	フトキノカワゴミムシ																											1		
	キノカワゴミムシ		4	4	3				1		1																		13	
<i>Cylindera</i>	マガタマハンミョウ										5		26																31	
<i>Cychrus</i>	セダカオサムシ	1	2	18			3		3	7																			34	
<i>Calosoma</i>	アカカタヒロオサムシ				1																								1	
<i>Carabus</i>	アカガネオサムシ					6		1	4																				11	
	コブスジアカガネオサムシ	8	21			3	1	1	15																				49	
	ホソアカガネオサムシ										7	3		2															12	
	ヤマトオサムシ																		4										4	
	クロオサムシ		369	1	75	30	5	5	11	12	38	40	18	13	25														642	
	ヒメオサムシ																							1	3	39	7		50	
	アキオサムシ																				3								3	
	オオオサムシ																			1		1							2	
	イワキオサムシ																						2							2
	ミカワオサムシ																			2										2
	マヤサンオサムシ																				1									1
	クロナガオサムシ													6	21	13														41
	オオクロナガオサムシ																							5						5
	キュシュウクロナガオサムシ																										1			1
キタクロナガオサムシ		15	9	12	18	8	8	7	10		26	8	13		14	2	10												160	
ホソヒメクロオサムシ															8														8	
ヒメクロオサムシ	40	187	85	4	17	58	12	3	11																				417	
マイマイカブリ	20		2	3		2	3	3	9		2		1													2			47	
オオリリオサムシ		5																									2		5	
<i>Brachinus</i>	オオホソクビゴミムシ																									34	9		43	
	コホソクビゴミムシ														1															
<i>Trechus</i>	オンタケチビゴミムシ																	1											1	
<i>Chlaenius</i>	スジアオゴミムシ												1									1					5		7	
	アトボシアオゴミムシ													6															6	
	ムナビロアトボシアオゴミムシ																									4	2		6	
<i>Galerita</i>	クビゴミムシ																									1			1	
<i>Anisodactylus</i>	ヒメゴミムシ		2	1		20			2																				25	
<i>Harpalus</i>	アイヌゴモクムシ	1																											1	
<i>Nipponoharpalus</i>	ハコダテゴモクムシ				3			1	2				1																17	
<i>Oxycentrus</i>	クビナゴモクムシ													1															1	
<i>Trichotichnus</i>	シガツヤゴモクムシ																		1										1	
<i>Diplocheila</i>	オオスナハラゴミムシ																									1				
<i>Badister</i>	チビカタキハゴミムシ		1																										1	
<i>Pentagonica</i>	クロツブゴミムシ												1																1	
<i>Negreum</i>	ベントンモリヒラタゴミムシ															2													2	
<i>Platynus</i>	ヤマトクロヒラタゴミムシ																2												2	
<i>Xestagonum</i>	ツヤモリヒラタゴミムシ															3		1											4	
<i>Myas</i>	アカガネオオゴミムシ										20		1	1	6		2												30	
<i>Poecilus</i>	オオキンナゴミムシ			1			3		2																				6	
<i>Pterostichus</i>	マルガタナゴミムシ		24	32	27	58	29	69	4		1	3	4																251	
	エマルガタナゴミムシ		19	4	11	3	18	19																						74
	アトマルナゴミムシ	5	3	2	2	3	3	6																					24	
	ヤノナゴミムシ																		5										5	
	ツンベルグナゴミムシ	34	26	96	197	137	139	46	142	29																			846	
	ヤツオオナゴミムシ																	1											1	
	ヨリモナゴミムシ										3	9	3	7	9	1					1								33	
	ベーツナゴミムシ											9									1								10	
	カダシナナゴミムシ																							1					1	
	ミトウナゴミムシ																								4				4	
	オクタマナゴミムシ																													1
	ミヤマナゴミムシ																													4
	トケジナゴミムシ														1	9														10
	クロオオナゴミムシ			1																										1
	クロホソナゴミムシ																													10
	コガシラナゴミムシ			2			2	10	21																					35
	ニッコウヒメナゴミムシ												2			1														3
	ムナビロヒメナゴミムシ																									1	4	2		3
	タカヒメナゴミムシ											2		2	1															2
	Rhagadus亜属の一種														3				3				5							4
	Nialoe亜属の一種																													3
Pterostichus属の一種												1																	10	
<i>Stomis</i>	キバナゴミムシ									1						1													10	
<i>Trigonotoma</i>	ルイスオオゴミムシ																									2	2		10	
<i>Pristosia</i>	ホノヒラタゴミムシ																1												10	
<i>Parabroscus</i>	フトクチヒゲヒラタゴミムシ										8																		10	

表Ⅱ-4-3. 各調査区で捕獲された地表徘徊性甲虫類の種ごとの個体数（4季節・5サブプロットの合計）（続き）

属名	種名	北海道										佐渡										本州										九州		九州		南西諸島		合計
		雨龍	足寄拓北	苫小牧成熟林	苫小牧二次林404林班	苫小牧二次林308林班	苫小牧二次林208林班	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧カラマツ人工林	苫小牧トドマツ人工林	大佐渡	カヌマ沢溪畔林	青葉山	小川	秩父ブナ・イヌブナ林	大山沢	カヤの平	おたの申す平	愛知赤津	芦生拵上谷	上賀茂	和歌山	綾	田野二次林	綾	田野二次林	奄美	与那										
Synuchus	ニッポンツヤヒラタゴミムシ														5																5							
	マルガタツヤヒラタゴミムシ									1	9	2	1									1									14							
	ヒメクロツヤヒラタゴミムシ						1			1																				2								
	シラハタクロツヤヒラタゴミムシ		1								12		1																	14								
	クロツヤヒラタゴミムシ		2	3	7	2	16	10		3	27	8	2	2								2	6			1				91								
	ヒメツヤヒラタゴミムシ											2																		2								
	コクロツヤヒラタゴミムシ		5		15		5				174	3	6	7	14	1														231								
	オオクロツヤヒラタゴミムシ		4	196	404	320	357	37	55	70	72	2		2	1										4					1524								
	タケウチツヤヒラタゴミムシ										4						1														5							
	タンザワツヤヒラタゴミムシ															1															1							
	ヤスマツツヤヒラタゴミムシ																						8			1					9							
Synuchus属の一種						1	1				5						1													8								
Trephionus	Trephionus属の一種													1																1								
不明	オサムシ科の一種	1		4	3	6	1	5	1		5																			26								
シテムシ科 Silphidae																																						
Dendroxena	ヨツボシヒラタシテムシ			1			1	1																						3								
Eusilpha	オオヒラタシテムシ		300	378	259	260	34	41	50			23																		1345								
Silpha	ホソヒラタシテムシ									16					1															17								
	ヒラタシテムシ	1	22	22	17	22	39	7	45	8																				183								
Microphorus	ヒメモンシテムシ														1															1								
	ヨツボシモンシテムシ			1							10	1																		14								
ハネカクシ科 Staphylinidae (大型地表性種)																																						
Anisolinus	ツヤケンブチゲハネカクシ		3	1	1			1																		1				7								
Amichrotus	ズマルハネカクシ									1	1																			1								
Agelosus	オオアカハネカクシ	2	5							1	1	2																		11								
Platydracus	オオクロハネハネカクシ																								3					3								
	アカハネカクシ		98	43	47	29	7	7		1	1																			233								
Protocypus	カラカネハネカクシ		13	27	50	35	24	10																						159								
	Protocypus属の一種														3															3								
Staphylinus	ダイミョウハネカクシ					8		4																						12								
Algon	ムネビロハネカクシ	3	30	16	3	6	1	1																						60								
センテコガネ科 Geotrupidae																																						
Phelotrupes	オオセンテコガネ		3																			2								5								
	センテコガネ	9	76	109	309	225	292	170	143	51	26		51	3	3					1				1		2				1471								
合計		126	403	1393	1480	1243	1372	408	621	282	75	439	191	68	41	136	31	20	10	7	2	17	16	9	97	26	0	0	8533									

表Ⅱ-4-4. 各調査区における地表徘徊性甲虫類の捕獲個体数の年変化の傾向

分類群名	北海道										本州										四国		九州		南西諸島		
	雨龍	足寄拓北	苫小牧成熟林	苫小牧二次林404林班	苫小牧二次林308林班	苫小牧二次林208林班	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧カラマツ人工林	苫小牧トドマツ人工林	佐渡	カヌマ沢溪畔林	青葉山	小川	秩父ブナ・イヌブナ林	大山沢	カヤの平	おたの申す平	愛知赤津	芦生柗上谷	上賀茂	和歌山	市ノ又	佐田山	綾	田野二次林	奄美	与那
全種	▲	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▲	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▲	ns	ns	▼	-	-
オサムシ科	▲	ns	▲	▲	▲	▲	▼	▼	ns	▼	▲	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▲	ns	ns	▼	-	-
オサムシ属	▲	▲	▼	▼	▼	▼	▼	▼	ns	▼	▲	▼	ns	▼	▼	ns	▼	▼	▼	▼	▼	ns	ns	▲	▼	-	-
オサムシ亜属	▲	▲	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	ns	▼	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオオサムシ亜属	-	-	▲	▼	▼	▲	▼	▼	▲	ns	▲	▼	ns	ns	ns	-	-	▼	ns	▼	▼	ns	ns	▲	▼	-	-
クロオサムシ	-	-	▲	▼	▼	▲	▼	▼	▲	ns	▲	▼	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒメオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▲	▼	-	-
クロナガオサムシ亜属	-	ns	ns	▲	▲	ns	▲	ns	-	▲	ns	ns	▼	ns	ns	-	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-
クロナガオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▼	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キタクロナガオサムシ	-	ns	ns	▲	▲	ns	▲	ns	-	▲	ns	ns	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	ns	ns	-	-
Chlaenius属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	ns	ns	-	-
Myas属	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	▲	-	-	-	ns	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカガネオオゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	▲	-	-	-	ns	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pterostichus属	ns	▼	▼	▲	▼	ns	▼	▼	▼	▲	▼	ns	ns	ns	▼	ns	-	ns	▼	-	▼	-	ns	ns	ns	-	-
ヨリトモナゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	ns	ns	ns	▲	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Bothriopterus亜属	-	▼	ns	ns	▼	ns	ns	ns	ns	-	-	-	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhagadus亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	-	ns	ns	-	-	-	ns	-	-	▼	-	ns	ns	ns	-	-
Synuchus属	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▲	-	▼	ns	-	-
マルガタツヤヒラタゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	▼	-	-	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロツヤヒラタゴミムシ	-	-	ns	ns	▼	ns	▼	▼	-	ns	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼	▲	-	▼	-	-	-
コクロツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▼	ns	▼	▼	▼	▼	-	▼	▼	ns	ns	ns	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオクロツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	-	▲	ns	-	-	-	-	-	▼	-	▼	ns	-	-	ns	-	-	-
シテムシ科	ns	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▼	▲	▼	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nicrophorus属	-	-	-	▼	-	-	ns	-	▼	▲	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Silpha属	ns	▲	▲	ns	▼	▲	▼	▼	▲	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハネカクシ科(大型地表性種)	-	▲	▲	ns	▲	ns	▼	▲	ns	-	ns	▼	-	ns	-	-	-	-	-	-	▼	-	-	ns	-	-	-
センチコガネ科	ns	▼	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▼	-	▲	▼	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	-
Phelotrupes属	ns	▼	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▼	-	▲	-	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	-
センチコガネ	ns	▼	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▼	-	▲	▼	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	-
全種	ns	▼	▲	▲	▲	▲	ns	ns	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	▼	▼	ns	ns	▼	▼	ns	▲	▼	▼	-	-
オサムシ科	ns	ns	▲	▲	▲	▲	ns	ns	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	▼	▼	ns	ns	▼	▼	ns	▲	▼	▼	-	-
オサムシ属	▲	▲	▼	ns	▲	▼	▲	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	▼	▼	▼	ns	ns	▼	▼	ns	▲	▲	▼	-	-
オサムシ亜属	▲	▲	ns	ns	▼	▼	ns	-	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオオサムシ亜属	-	-	▲	▼	ns	▼	▼	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	-	-	▼	ns	ns	▼	▼	▲	▲	▼	-	-	
クロオサムシ	-	-	▲	▼	ns	▲	▼	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒメオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	▲	▲	▼
クロナガオサムシ亜属	-	▼	▲	▲	▲	▲	▲	▲	-	ns	ns	▲	▼	▼	▼	▼	▼	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-
クロナガオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	▼	▼	ns	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キタクロナガオサムシ	-	▼	▲	▲	▲	▲	▲	▲	-	ns	ns	▲	▼	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Chlaenius属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▼	ns	-	-
Myas属	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	-	-	-	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカガネオオゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	-	-	-	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pterostichus属	▼	▼	▼	ns	▼	ns	ns	▼	ns	ns	ns	▼	▼	▼	▲	ns	▲	ns	-	▼	-	▲	▲	ns	-	-	-
ヨリトモナゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	▼	ns	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Bothriopterus亜属	-	▼	▲	ns	▲	▼	ns	▲	▲	-	-	-	ns	-	▲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rhagadus亜属	-	-	-	-	-	▼	▲	▲	-	▼	ns	ns	ns	-	-	-	-	▲	-	-	▼	-	▲	▲	ns	-	-
Synuchus属	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▼	▲	▼	▼	▼	ns	▲	▲	▼	ns	▲	-	▲	▲	▲	-	-
マルガタツヤヒラタゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	ns	-	-	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロツヤヒラタゴミムシ	-	-	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	-	▲	▼	▲	▼	-	-	-	▲	-	▼	ns	▲	-	▲	-	-	-
コクロツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▲	▲	ns	ns	ns	-	ns	▲	▼	▲	ns	▼	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオクロツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	-	▲	▲	-	-	-	-	-	▲	-	▲	ns	-	-	ns	-	-	-
シテムシ科	▲	▼	▲	▲	▲	ns	ns	▲	▼	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nicrophorus属	-	-	-	▼	-	-	ns	-	ns	▲	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Silpha属	ns	▼	▲	▼	▲	▲	▼	▼	▲	▼	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハネカクシ科(大型地表性種)	-	▼	▲	ns	▼	▲	▼	ns	▲	ns	-	ns	▲	-	▼	-	-	-	-	-	ns	-	▼	-	-	-	-
センチコガネ科	▲	▼	▲	▲	ns	▲	▲	▲	▲	ns	-	▲	-	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	▼	-	-
Phelotrupes属	▲	▼	▲	▲	ns	▲	▲	▲	▲	ns	-	▲	-	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	▼	-	-
センチコガネ	▲	▼	▲	▲	ns	▲	▲	▲	▲	ns	-	▲	-	-	▼	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	▼	-	-

地表徘徊性甲虫類全体の傾向、及び20個体以上採取されているサイトが4サイト以上ある科・属・亜属・種の傾向を示す。
 * 2017年度か否かを説明変数とする一般化線形混合モデルによる解析の結果。
 ▲: 2017年度 > 2005~2016年度の値 ($P < 0.05$)、▼: 2017年度 < 2005~2016年度の値 ($P < 0.05$)、ns: 有意差なし ($P > 0.05$)。
 ** 年を説明変数とする一般化線形混合モデルによる解析の結果。
 ▲: 増加傾向 ($P < 0.05$)、▼: 減少傾向 ($P < 0.05$)、ns: 傾向なし ($P > 0.05$)。
 - 20個体未満。

個体数 (ノ4トラップノ12日)

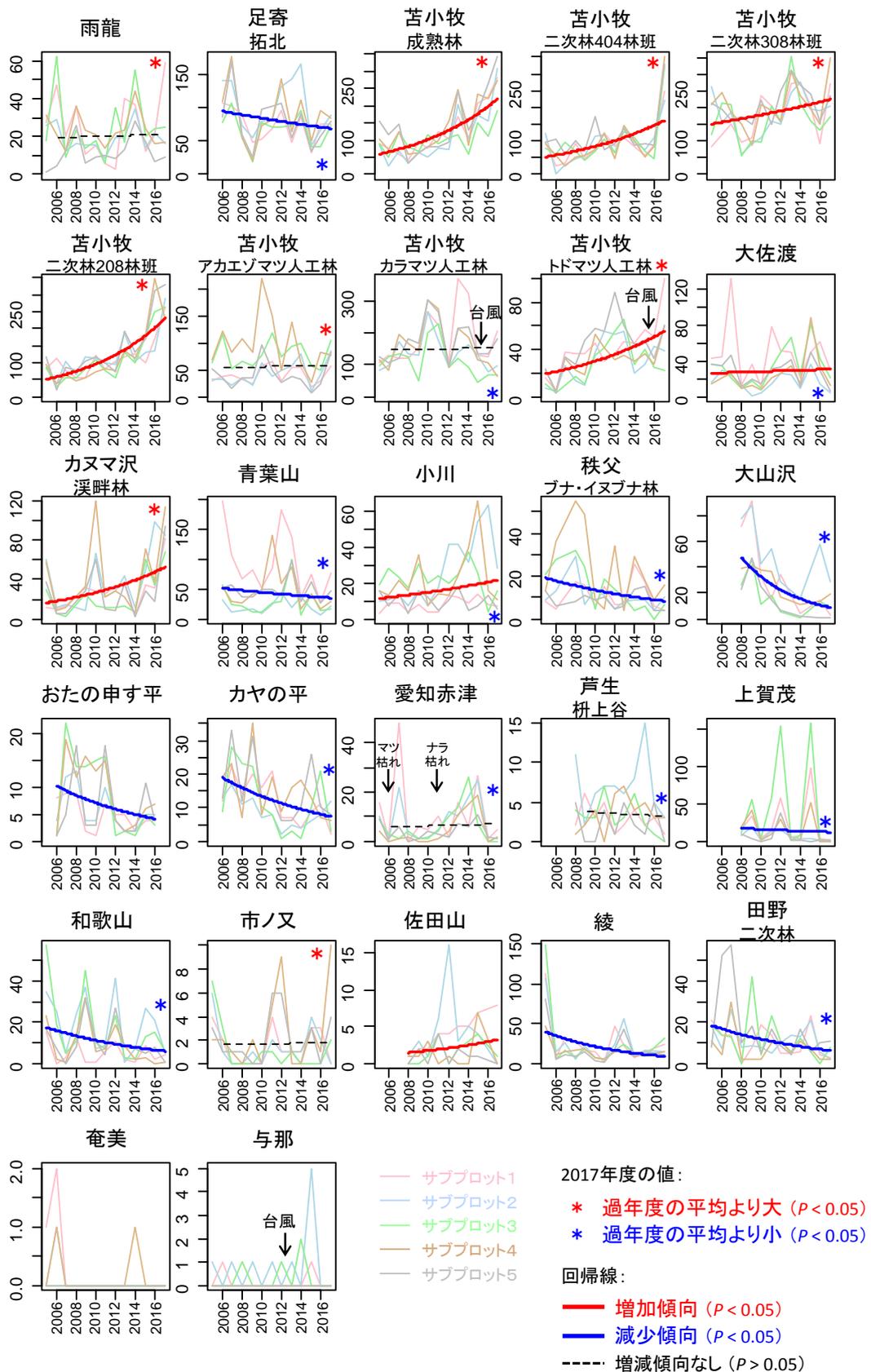


図 II-4-1. 各調査区における地表徘徊性甲虫類の年総捕獲個体数の年変動

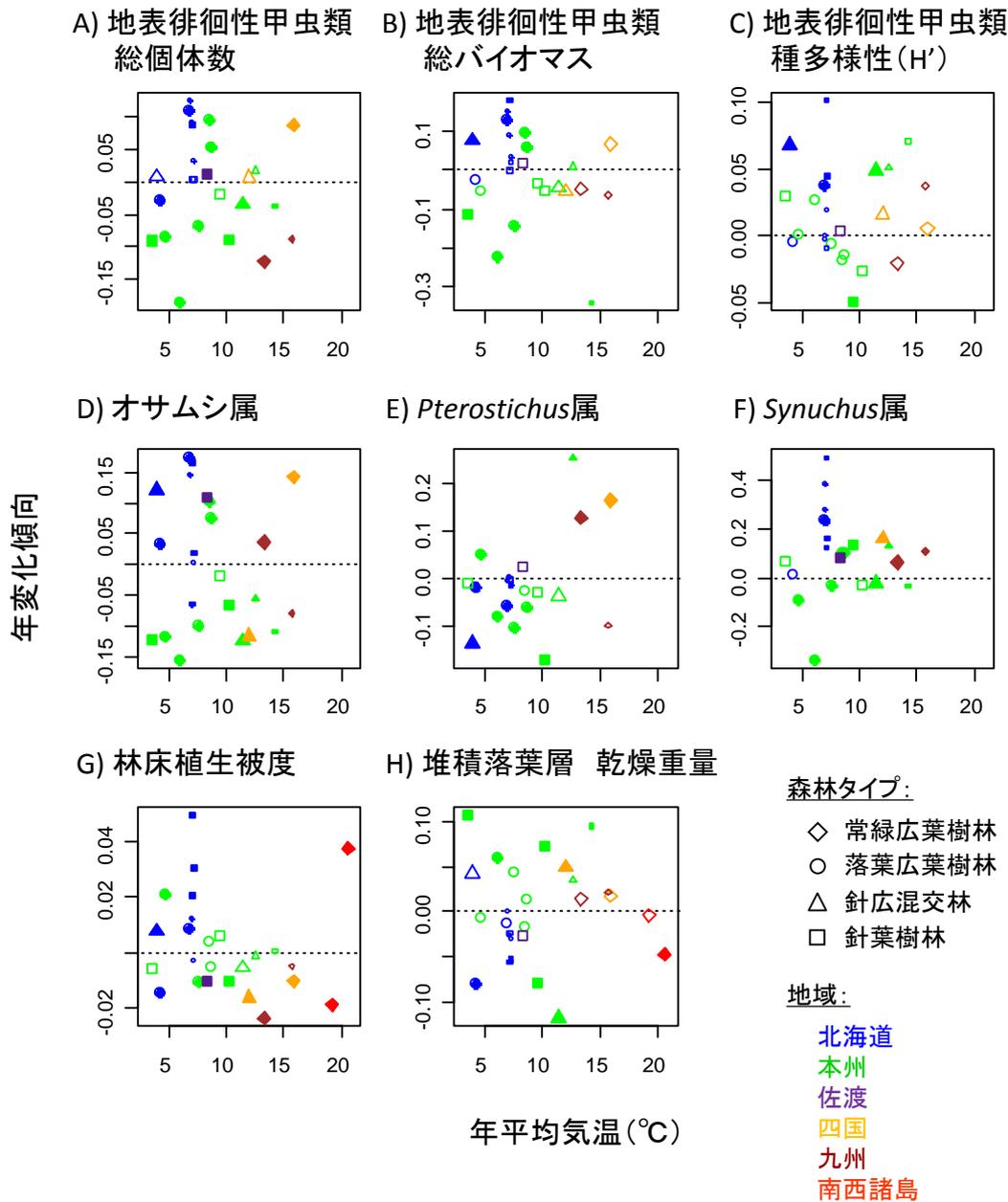


図 II-4-2. 各調査区における主要な測定値の年変化傾向と、調査区の年平均気温の関係

A) 地表徘徊性甲虫類の総捕獲個体数・B) バイオマス、C) Shannon-Wiener の多様度指数、D) オサムシ属・E) *Pterostichus*属・F) *Synuchus*属の捕獲個体数、G) 林床植生被度、H) 堆積落葉層の乾燥重量。縦軸の値は年の回帰係数。白抜きのはしらは有意な増減傾向を示さない調査区 ($P > 0.05$)。大きいシンボルは成熟林・老齢二次林、小さいシンボルは二次林・人工林の調査区。

表 II-4-5. 各調査区における地表徘徊性甲虫類の捕獲バイオマスの年変化の傾向

分類群名	北海道										佐渡		本州										四国		九州		南西諸島	
	雨龍	足寄拓北	苫小牧成熟林	苫小牧二次林404林班	苫小牧二次林308林班	苫小牧二次林208林班	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧カラマツ人工林	苫小牧トドマツ人工林	大佐渡	カヌマ沢溪畔林	青葉山	小川	秩父ブナ・イヌブナ林	大山沢	カヤの平	おたの申す平	愛知赤津	芦生拵上谷	上賀茂	和歌山	市ノ又	佐田山	綾	田野二次林	奄美	与那	
全種	ns	ns	▲	▲	ns	▲	▲	ns	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	▽	▽	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	
オサムシ科	ns	ns	▲	▲	ns	▲	ns	▽	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	▽	▽	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	
オサムシ属	ns	ns	▲	ns	ns	▲	ns	▽	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	
オサムシ亜属	ns	▲	▽	▽	ns	▽	ns	▽	-	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オオオサムシ亜属	-	-	▲	▽	ns	▲	ns	ns	▲	ns	▲	ns	ns	ns	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	
クロオサムシ	-	-	▲	▽	ns	▲	ns	ns	▲	ns	▲	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒメオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クロナガオサムシ亜属	-	ns	ns	▲	ns	ns	▲	▲	-	▲	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	
クロナガオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キタクロナガオサムシ	-	ns	ns	▲	ns	ns	▲	▲	-	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Chlaenius属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	-	
Myas属	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▲	-	-	-	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカガネオオゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▲	-	-	-	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Pterostichus属	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▽	▽	ns	▲	▽	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	-	ns	-	ns	ns	ns	ns	-	
ヨリトモナゴゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	
Bothriopterus属	-	ns	ns	ns	▽	ns	ns	ns	ns	-	-	-	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Rhagadus属	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	-	ns	▽	ns	ns	-	-	-	ns	-	-	-	ns	-	ns	ns	ns	ns	-	
Synuchus属	-	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	ns	▲	▽	ns	ns	▽	ns	-	ns	ns	ns	▽	ns	▲	-	ns	ns	ns	-	
マルガタツヤヒラタゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	ns	-	-	-	ns	-	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	
クロツヤヒラタゴミムシ	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	ns	ns	▽	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
ココツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▽	▲	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	ns	ns	▲	▽	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オオクロツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	ns	▲	ns	-	-	-	-	-	ns	-	ns	ns	ns	-	-	ns	-	-	-	
シテムシ科	ns	ns	▲	▲	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Nicrophorus属	-	-	-	-	ns	-	-	ns	-	ns	▲	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Silpha属	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▽	▲	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハネカクシ科(大型地表性種)	-	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	ns	-	-	ns	-	-	-	
センチコガネ科	ns	ns	ns	▲	▲	▲	▲	ns	▲	ns	-	▲	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	
Phelotrupes属	ns	ns	ns	▲	▲	▲	▲	ns	-	▲	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	-	
センチコガネ	ns	ns	ns	▲	▲	▲	▲	ns	-	▲	-	-	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	
全種	▲	ns	▲	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
オサムシ科	ns	ns	▲	ns	ns	▲	ns	ns	▲	ns	▲	▽	▲	▽	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
オサムシ属	▲	ns	▲	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
オサムシ亜属	ns	ns	▽	ns	ns	▽	ns	-	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オオオサムシ亜属	-	-	▲	▽	ns	ns	▽	ns	▲	ns	▲	▽	▲	ns	▽	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
クロオサムシ	-	-	▲	▽	ns	ns	▽	ns	▲	ns	▲	▽	▲	ns	▽	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒメオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クロナガオサムシ亜属	-	ns	ns	▲	ns	▲	▲	▲	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
クロナガオサムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キタクロナガオサムシ	-	ns	ns	▲	ns	▲	▲	▲	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
Chlaenius属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▽	ns	-	
Myas属	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	-	-	-	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカガネオオゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	-	-	-	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Pterostichus属	▽	ns	▽	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
ヨリトモナゴゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
Bothriopterus属	-	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Rhagadus属	-	-	-	-	-	▽	ns	ns	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
Synuchus属	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
マルガタツヤヒラタゴミムシ	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	▲	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クロツヤヒラタゴミムシ	-	-	▲	ns	ns	▲	ns	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
ココツヤヒラタゴミムシ	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	
オオクロツヤヒラタゴミムシ	-	ns	▲	▲	▲	▲	▲	▲	ns	▲	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シテムシ科	ns	▽	▲	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Nicrophorus属	-	-	-	▽	-	-	ns	-	ns	▲	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
Silpha属	ns	ns	▲	ns	ns	▲	ns	ns	▲	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハネカクシ科(大型地表性種)	-	▽	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	-	ns	ns	-	ns	-	-	-	-	-	ns	-	-	ns	-	-	-	
センチコガネ科	▲	▽	ns	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	-	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	
Phelotrupes属	▲	▽	ns	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	-	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	
センチコガネ	▲	▽	ns	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	-	ns	-	ns	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	-	ns	-	

地表徘徊性甲虫類全体の傾向、及び20個体以上採取されているサイトが4サイト以上ある科・属・亜属・種の傾向を示す。

* 2017年度か否かを説明変数とする一般化線形混合モデルによる解析の結果。

▲: 2017年度 > 2005~2016年度の値 ($P < 0.05$)、▽: 2017年度 < 2005~2016年度の値 ($P < 0.05$)、ns: 有意差なし ($P > 0.05$)。

** 年を説明変数とする一般化線形混合モデルによる解析の結果。

▲: 増加傾向 ($P < 0.05$)、▽: 減少傾向 ($P < 0.05$)、ns: 傾向なし ($P > 0.05$)。

— 20個体未満。

表II-4-6. 各調査区における地表徘徊性甲虫類の種多様性、及び年変化の傾向

種多様性の指標	北海道										佐渡		本州										四国		九州		南西諸島		
	雨龍	足寄拓北	苫小牧成熟林	苫小牧二次林404林班	苫小牧二次林308林班	苫小牧二次林208林班	苫小牧アカエゾマツ人工林	苫小牧カラマツ人工林	苫小牧トドマツ人工林	大佐渡	カヌマ沢溪畔林	青葉山	小川	秩父ブナ・イヌブナ林	大山沢	カヤの平	おたの申す平	愛知赤津	芦生柗上谷	上賀茂	和歌山	市ノ又	佐田山	綾	田野二次林	奄美	与那		
2017年度	地表徘徊性甲虫類	種数	9	13	23	20	22	19	15	22	13	14	15	14	17	6	23	9	5	1	5	5	9	13	8	13	8	0	0
		H'	1.67	1.55	1.92	2.01	2.28	1.88	1.99	2.33	2.07	2.14	1.78	2.36	2.12	1.57	2.62	1.74	1.31	-	1.40	-	1.48	0.92	1.64	0.92	1.64	-	-
		1-D	0.74	0.69	0.77	0.82	0.84	0.79	0.81	0.86	0.85	0.85	0.74	0.88	0.83	0.76	0.89	0.78	0.69	-	0.73	-	0.65	0.37	0.73	0.37	0.73	-	-
		1/D	3.85	3.24	4.35	5.69	6.19	4.76	5.15	7.10	6.55	6.55	3.88	8.05	5.76	4.23	9.47	4.44	3.25	-	3.66	-	2.89	1.60	3.72	1.60	3.72	-	-
		α	2.49	2.69	4.22	4.39	4.28	3.20	3.60	4.66	3.22	3.53	3.69	4.60	5.75	2.64	9.35	3.01	1.97	-	2.39	-	3.34	2.48	4.52	2.48	4.52	-	-
J'	0.76	0.61	0.61	0.67	0.74	0.64	0.74	0.75	0.81	0.81	0.66	0.89	0.75	0.88	0.84	0.79	0.81	-	0.87	-	0.67	0.36	0.79	0.36	0.79	-	-		
2017年度	オサムシ科	種数	6	7	16	14	13	13	12	15	8	10	13	12	14	6	20	9	5	1	5	3	7	10	7	10	7	0	0
		H'	1.27	1.14	1.61	1.40	1.95	1.35	1.78	1.76	1.59	1.73	1.57	2.19	1.97	1.57	2.49	1.74	1.31	-	1.40	-	1.32	0.69	1.53	0.69	1.53	-	-
		1-D	0.60	0.53	0.67	0.65	0.80	0.61	0.76	0.75	0.75	0.77	0.68	0.85	0.81	0.76	0.88	0.78	0.69	-	0.73	-	0.62	0.29	0.71	0.29	0.71	-	-
		1/D	2.50	2.12	3.00	2.83	4.91	2.58	4.23	4.00	3.99	4.35	3.14	6.76	5.25	4.23	8.51	4.44	3.25	-	3.66	-	2.65	1.41	3.42	1.41	3.42	-	-
		α	1.61	1.34	3.27	3.33	2.78	2.39	2.79	3.17	1.97	2.48	3.19	3.87	4.43	2.64	7.78	3.01	1.97	-	2.39	-	2.35	1.82	3.68	1.82	3.68	-	-
J'	0.71	0.59	0.58	0.53	0.76	0.53	0.72	0.65	0.76	0.75	0.61	0.88	0.75	0.88	0.83	0.79	0.81	-	0.87	-	0.68	0.30	0.78	0.30	0.78	-	-		
2017年度と過年度の比較*	地表徘徊性甲虫類	種数	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		H'	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1-D	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1/D	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		α	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
J'	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	
2017年度と過年度の比較*	オサムシ科	種数	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		H'	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1-D	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1/D	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		α	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
J'	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	
全年度を通じた変化傾向**	地表徘徊性甲虫類	種数	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		H'	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1-D	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1/D	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		α	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
J'	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	
全年度を通じた変化傾向**	オサムシ科	種数	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		H'	ns	▲	▽	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1-D	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		1/D	▲	ns	▲	ns	ns	ns	ns	▲	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
		α	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	▲	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
J'	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	

* 2017年度か否かを説明変数とする一般化線形モデルによる解析の結果。

▲: 2017年度の値>2005~2016年度の値(P<0.05)

▽: 2017年度の値<2005~2016年度の値(P<0.05)

ns: 有意差なし(P>0.05)。

** 年を説明変数とする一般化線形モデルによる解析の結果。

▲: 増加傾向(P<0.05)

▽: 減少傾向(P<0.05)

ns: 傾向なし(P>0.05)。

— 5個体未満。

3) 林床環境の変化

① 林床植生被度 (表Ⅱ-4-7、図Ⅱ-4-3、図Ⅱ-4-2 G)

林床植生被度の年平均値は、4サイト9調査区で有意な増加傾向を、8サイト8調査区で有意な減少傾向を示した。過年度と同様に温暖なサイト(市ノ又、佐田山、綾、奄美)やシカが高密度に生息しているサイト(足寄、秩父、綾)で減少傾向が認められた。秩父では5か所中4か所のサブプロットで、綾では5か所中3か所のサブプロットで、林床植生がほとんど見られない状態が続いている(図Ⅱ-4-3)。与那では、2012年秋の台風攪乱以降林床植生被度が急激に増大したが、2015、2016年で頭打ちとなり、2017年から減少に転じたと考えられる(図Ⅱ-4-3)。

② 堆積落葉層 (表Ⅱ-4-8、図Ⅱ-4-4、図Ⅱ-4-2 H)

堆積落葉量は、5サイト5調査区で有意な増加傾向を、5サイト6調査区で有意な減少傾向を示した。堆積落葉量の増減傾向に明確な地理的傾向は認められなかった(図Ⅱ-4-2 H)。近年台風攪乱を受けた与那、苫小牧のカラマツ・トドマツ人工林では堆積落葉量の減少傾向が見られている(図Ⅱ-4-4)。

表Ⅱ-4-7. 各調査区における林床植生被度の測定値（5サブプロットの平均±標準誤差）及び年変化の傾向

調査区名	2017年度				2017年度と過年度の比較*		全年度を通じた変化傾向**
	1回目 (%)	2回目 (%)	3回目 (%)	4回目 (%)	年平均 (%)	年平均	
北海道	両龍	56±2	56±2	56±2	56±2	ns	▲
	足香拓北	61±4	73±5	58±4	52±3	ns	▽
	苫小牧成熟林	30±3	39±6	39±6	39±6	▲	▲
	苫小牧二次林404林班	42±5	54±2	47±4	27±5	▲	▲
	苫小牧二次林308林班	28±8	36±9	32±7	19±6	ns	ns
	苫小牧二次林208林班	18±3	22±5	23±5	21±4	ns	▲
	苫小牧アカエゾマツ人工林	23±7	29±9	33±10	26±9	▲	▲
	苫小牧カラマツ人工林	35±7	48±6	51±4	46±4	▲	▲
	苫小牧トドマツ人工林	48±6	64±6	68±6	43±6	▲	▲
	大佐渡	17±1	38±10	42±10	15±4	▽	▽
本州	カヌマ沢溪畔林	66±7	68±6	66±6	66±6	ns	ns
	青葉山	24±14	25±15	21±12	20±12	ns	ns
	小川	18±5	19±5	18±6	16±5	ns	ns
	秩父ブナ・イヌブナ林	1±1	1±1	2±2	1±1	ns	▽
	大山沢	12±6	18±5	-	-	-	-
	カヤの平	36±2	62±2	62±2	58±2	ns	▲
	おたの申す平	-	34±7	34±7	34±7	-	ns
	愛知赤津	4±1	4±1	4±1	4±1	ns	ns
	声生柗上谷	5±0	17±4	17±4	15±3	▲	ns
	上賀茂	33±13	31±11	41±19	40±13	ns	ns
四国	和歌山	10±2	10±2	10±2	5±0	ns	▽
	市ノ又	8±3	8±3	8±3	8±3	ns	▽
	佐田山	13±2	13±2	13±2	13±2	ns	▽
九州	綾	4±2	4±2	4±2	4±2	▽	▽
	奄美	19±2	20±2	21±2	21±2	ns	▽
諸島	43±9	40±9	37±7	35±6	39±8	▲	▲

* 2017年度か否かを説明変数とする線形混合モデルによる解析の結果。▲: 2017年度の値>2005~2016年度の値(P<0.05)、▽: 2017年度の値<2005~2016年度の値(P<0.05)、ns: 有意差なし(P>0.05)。

** 年を説明変数とする線形混合モデルによる解析の結果。▲: 増加傾向(P<0.05)、▽: 減少傾向(P<0.05)、ns: 傾向なし(P>0.05)。

林床植生被度 (%)

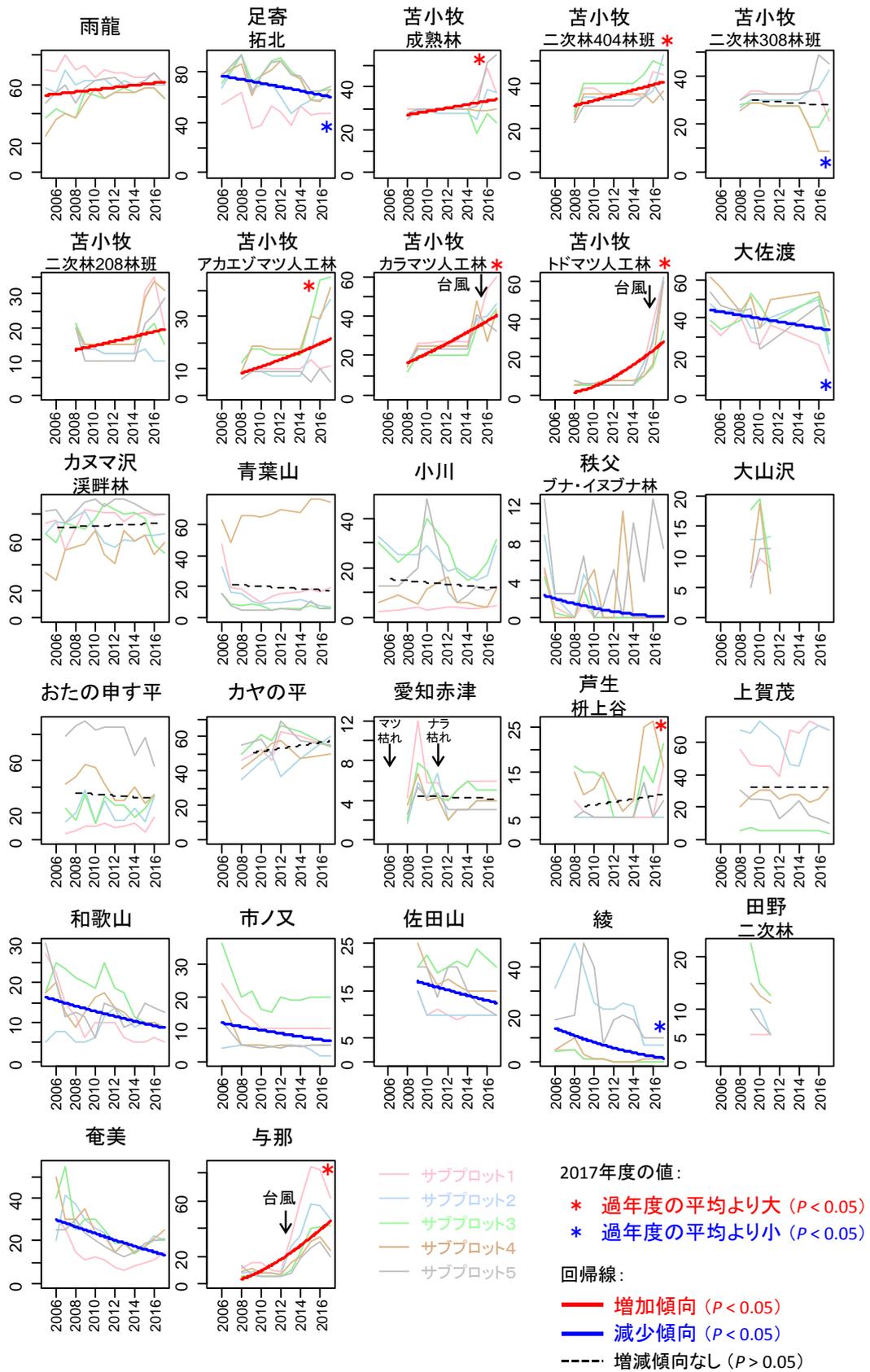


図 II-4-3. 各調査区における林床植生被度 (4 季節の平均) の年変動

堆積落葉層乾燥重量 (ton/ha)

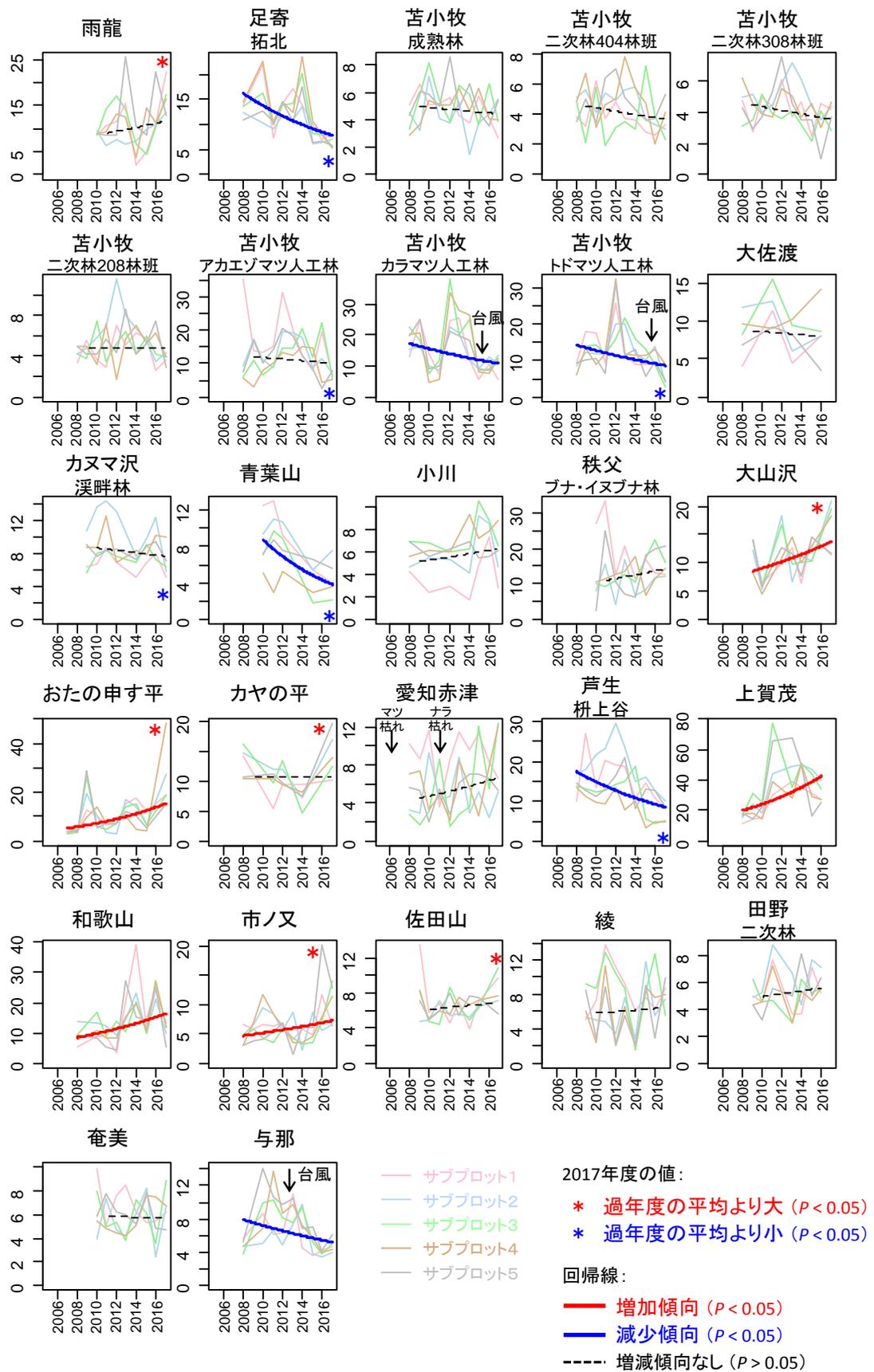


図 II-4-4. 各調査区における落葉堆積量の年変動

5. 鳥類調査

(1) 調査方法

本調査では、調査区内またはその周辺に5か所の定点を設置し、目視観察により鳥類の種及び種別個体数の記録を行った。また、定点周囲の植生状況の簡単な記録を行った。

鳥類の調査方法は、定点とその周辺にいる鳥をすべて記録していくスポットセンサス法（以下、「スポットセンサス」という）を採用した。この調査方法は、従来のラインセンサス法よりも鳥類を記録できる率が高く、環境との対比や調査地点間の比較がしやすい利点がある。以下に、調査方法の概略を示す。

調査方法の概要（スポットセンサス）s	
調査間隔	コアサイト：毎年 準コアサイト：毎年もしくは5年に一度
調査頻度	繁殖期と越冬期に、5か所の定点で各4回（定点1か所につき原則1日に2回。各期2日間実施）、10分間の定点調査を実施した。ただし、多雪地域での越冬期調査は行わないこととした。
調査時期	繁殖期：繁殖期の前半に1日と繁殖期の最盛期に1日の合計2日間 越冬期：12月から2月の間で2週間以上の間隔をあけた2日間
調査時間	繁殖期は早朝から9:00まで、越冬期は8:00～11:00の間に設定している。雨天と強風の時には、調査を行わなかった。
調査定点	定点は、調査区内またはその周辺に200m程度の間隔をあけた上で極力、調査区と類似した（同一の）環境にA～Eの5つの定点を設置した。調査順はA→B→C→D→E→E→D→C→B→Aのように、折り返すようにして調査した。往路の調査終了後、復路の調査開始までには15分以上の間隔をあけた。
調査範囲	各定点において、半径50mの範囲。
記録内容	調査中に目視あるいは鳴き声を確認した鳥類の種名、個体数、行動等を記録した。対象地域付近の生息種をより多く記録するために、調査範囲外も同様に記録した。記録は各定点につき10分間の調査を2分ごとの5回に分けて行なった。
調査地点の写真	周辺環境の記録、調査地点の再現性の確保を目的に、各定点で写真を撮影した。

(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果

本年度は、コアサイト 20 か所、準コアサイト 7 か所で調査を計画し、実施した。また、越冬期の調査は積雪のために調査地へのアクセスが困難な場所や、狩猟のために調査者の安全が確保できない場所では調査を行わなかった。その結果、調査サイト数は繁殖期にコアサイト 20 か所、準コアサイト 7 か所、越冬期にコアサイト 14 か所、準コアサイト 6 か所となった (表Ⅱ-5-1)。

表Ⅱ-5-1. 平成 29(2017)年度に調査を実施したコアサイト・準コアサイト

ID	サイト名	サイトタイプ	調査間隔	調査を実施した時期	
				繁殖期*	越冬期
1	苫小牧	コア	毎年	○	○
2	カヌマ沢	コア	毎年	○	
3	大佐渡	コア	毎年	○	
4	小佐渡	コア	毎年	○	○
5	小川	コア	毎年	○	○
6	秩父	コア	毎年	○	○
8	愛知赤津	コア	毎年	○	○
9	綾	コア	毎年	○	○
10	田野	コア	毎年	○	○
11	与那	コア	毎年	○	○
12	雨龍	コア	毎年	○	○
13	足寄	コア	毎年	○	
14	カヤの平	コア	毎年	○	
15	おたの申す平	コア	毎年	○	
16	和歌山	コア	毎年	○	△
17	市ノ又	コア	毎年	○	○
31	芦生	コア	毎年	○	
32	上賀茂	コア	毎年	○	○
38	大山沢	コア	毎年	○	○
45	那須高原	コア	毎年	○	○
23	奄美	準コア	毎年	○	○
18	野幌	準コア	毎年	○	○
26	青葉山	準コア	毎年	○	○
35	対馬龍良山	準コア	5年に一度	○	○
36	佐田山	準コア	5年に一度	○	○
37	屋久島スギ林	準コア	5年に一度	○	○
44	臥龍山	準コア	5年に一度	○	

△:和歌山は積雪が多いために、1回目の調査しか実施できなかった。

*:植生概況調査を伴う。

(3) 集計・解析

1) 集計・解析方法

鳥類調査については、各調査サイトで確認された種数及び個体数を繁殖期、越冬期別に集計し、それを基に出現率、優占度、バイオマスを計算した。

種数は、調査範囲外を含めた全種数とした。大型キツツキ類、大型ツグミ類のように種まで同定できなかった記録については、例えば同じサイトでそれとは別にアカゲラやアオゲラ等の大型キツツキ類が記録されている場合は、「大型キツツキ類」の記録があっても種数に含めなかったが、記録されていない場合は1種として数えた。

個体数は、調査範囲内で記録されたものを対象とした。A～Eまでの各定点で行った4回の調査のうち、各定点における種ごとの最大個体数を求め、それをA～Eの5地点分合計した値を各サイトにおける個体数とした。

出現率は、ある種の記録されたサイト数の総サイト数に対する割合とした。優占度は、各サイトで記録された全種の個体数に対するその種の個体数の割合(%)を算出し、それを全サイトで平均した値をその種の優占度とした。

バイオマスは各種鳥類の個体数にその種の平均体重を掛けて算出した。これらの値について、食物別、採食場所(ギルド)別に集計を行い、サイト間での比較を行った。解析には、繁殖期については2009年度から2017年度調査までのデータ、越冬期については2009年度から2016年度調査までのデータを用いた。

2) 越冬期群集構成

a) 種数及びバイオマス

2016年度の越冬期は、21か所で調査を行った。

2009-2016年度の越冬期調査における鳥類の種数及びバイオマスをみると、年による変動が大きいのがわかる(表Ⅱ-5-2)。繁殖期の鳥類相が比較的安定しているのと比べ、越冬期はカラ類なども群れで活動しているため、こうした群れが記録できるかどうかという確率的なばらつきとともに、群れで越冬するツグミ類、アトリ類などの渡来数の多少といった年変動による影響が大きいと考えられる。和歌山の2016年のバイオマスが例年と比べて極端に多かったのは、アトリの大きな群れが記録されたためである。全体を見ると、2016年は特に北のバイオマスが例年より少なめであり、カラス類など大型の鳥が少ないことがバイオマスの少なさに大きく影響していた。カラス類など大型の鳥は、行動圏が広く、記録できるかどうかは小型の鳥よりも偶然に左右される。今回の結果はそうした偶然に左右されたものなのか、それとも気象等の影響なのかを判断するためには、今後も情報を蓄積していく必要がある。

表Ⅱ-5-2. 2009-2016年度越冬期の鳥類の記録状況

サイト名	越冬期種数								越冬期バイオマス(kg/10ha)							
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
雨籠	8	12	8	8	19	8	8	11	2.83	6.66	0.63	1.02	5.42	2.38	0.27	1.17
野幌		20				22	16	15		21.44				29.51	24.32	15.98
吉小牧	15	16	14	12	16	17	17	19	5.98	25.83	22.38	22.97	22.98	27.66	17.42	15.52
青葉山		28				28	26	20		79.10				35.52	29.17	19.22
小佐渡	24	21	22	20	25	18	27	25	11.97	14.09	18.88	10.47	38.07	8.88	23.20	10.93
那須高原	22	18	19	19	23	18	21	21	5.14	2.31	12.70	3.58	4.78	2.65	7.02	3.84
小川	25	27	15	23	24	19	20	20	10.57	22.68	10.84	7.41	24.16	12.46	23.71	16.92
高原山	14				19					5.01				4.12		
筑波山	23				27					11.12				28.19		
大山沢	14	16	15	12	11	12	15	16	3.78	2.37	4.36	3.24	1.23	2.27	1.98	2.07
秩父	19	17	18	20	18	18	16	23	3.55	3.26	10.39	5.84	8.16	18.25	9.18	4.53
西丹沢	15				15				6.43				4.68			
富士			22								15.88					
函南		21					26			8.35					13.56	
愛知赤津	14	12	11	12	12	13	16	12	9.02	10.85	12.53	7.24	8.24	9.06	10.43	3.87
上賀茂	19	22	16	21	20	19	19	15	23.79	15.61	33.13	23.41	24.68	30.16	22.83	21.06
春日山			23					21			32.26					19.86
和歌山	17	9	14	13	17	12	12	15	7.52	1.05	6.05	1.84	8.63	3.04	5.27	84.46
半田山			14								1.74					
宮島	18					22			115.42					39.52		
市ノ又	12	14	13	15	10	13	15	20	3.16	5.42	4.64	2.73	2.81	8.92	6.26	11.01
佐田山				18								13.41				
対馬龍良山				14								6.31				
粕屋			17					12			15.43					6.21
椎葉	21					19			7.46					12.43		
綾		20	18	13	15	16	19	10		4.99	3.92	4.32	6.99	6.22	7.33	6.38
田野	18	21	16	19	21	17	17	16	12.63	13.55	5.61	9.71	8.37	15.83	8.05	9.36
屋久島照葉樹林		13						16		22.51						20.26
屋久島スギ林				11								2.73				
奄美	16	20	15	13	15	14	15	15	30.62	35.48	10.21	14.27	14.31	23.35	23.80	21.43
与那	17	17	13	18	17	16	18	17	38.98	30.44	23.33	20.04	21.93	22.49	29.25	22.64
西表	15						13		18.13						21.84	
小笠原石門			5					6			3.35					6.53

b) 優占種

出現率と優占度の上位種について、2009年度からの結果を示した(表Ⅱ-5-3)。出現率は、ヒヨドリ、ヤマガラ、コゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラスが上位を占めるのは例年と変わらなかった。優占度は、マヒワが2013年以来、久々に上位10種に入ったが、それ以外は例年とほぼ同じ種だった。

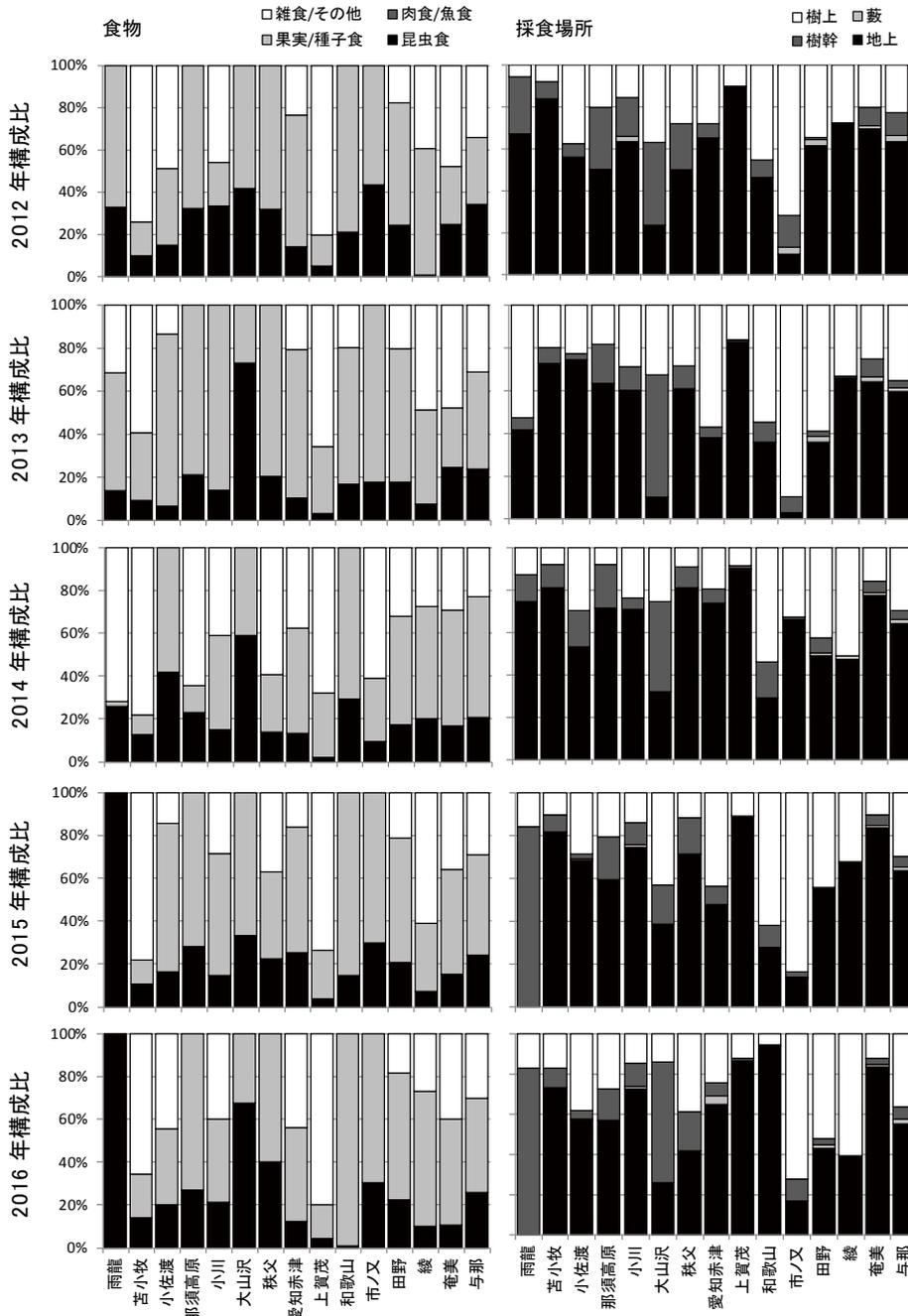
表Ⅱ-5-3. 2009-2016年度越冬期の鳥類の出現率および優占度の上位10種*

	2016年度		2015年度		2014年度		2013年度
出現率							
1 コゲラ	81.0	コゲラ	94.7	シジュウカラ	90.0	ヤマガラ	94.4
2 ヒヨドリ	76.2	ヤマガラ	94.7	ヒヨドリ	80.0	コゲラ	88.9
3 ヤマガラ	76.2	ハシブトガラス	94.7	ヤマガラ	80.0	ヒヨドリ	83.3
4 シジュウカラ	71.4	シジュウカラ	89.5	コゲラ	70.0	シジュウカラ	83.3
5 ハシブトガラス	61.9	ヒヨドリ	84.2	エナガ	70.0	メジロ	61.1
6 シロハラ	57.1	エナガ	73.7	ハシブトガラス	65.0	エナガ	61.1
7 メジロ	57.1	メジロ	63.2	メジロ	55.0	ハシブトガラス	61.1
8 エナガ	47.6	シロハラ	57.9	シロハラ	50.0	ヒガラ	55.6
9 ヒガラ	42.9	カケス	57.9	ヒガラ	50.0	アトリ	44.4
10 ゴジュウカラ	42.9	ヒガラ	52.6	ゴジュウカラ	50.0	ツグミ	44.4
優占度							
1 ヒヨドリ	10.0±8.7	ヒヨドリ	11.6±8.6	ヒヨドリ	9.4±7.3	ヒヨドリ	12.1±11.2
2 メジロ	8.3±9.7	メジロ	8.7±10.0	エナガ	9.0±10.6	マヒワ	9.8±19.5
3 アトリ	8.0±21.5	エナガ	7.5±9.1	シジュウカラ	7.5±4.5	アトリ	8.9±7.2
4 エナガ	7.5±10.5	ヤマガラ	6.8±5.5	メジロ	6.3±8.4	メジロ	7.2±9.8
5 ヤマガラ	6.0±5.1	アトリ	6.7±17.0	ヤマガラ	5.3±4.7	ヤマガラ	6.1±4.9
6 コゲラ	4.8±5.1	ヒガラ	6.0±10.5	コゲラ	5.1±5.4	シジュウカラ	4.8±4.0
7 シジュウカラ	3.9±3.6	シジュウカラ	5.5±3.7	ヒガラ	5.1±8.6	コゲラ	4.6±4.2
8 マヒワ	3.5±7.1	コゲラ	4.4±4.1	アトリ	5.0±14.7	エナガ	4.5±6.6
9 ハシブトガラス	3.4±4.9	ハシブトガラス	4.1±5.8	ハシブトガラス	4.8±5.4	ヒガラ	4.1±6.1
10 シロハラ	3.1±4.3	ゴジュウカラ	3.9±5.8	ゴジュウカラ	4.0±7.3	ツグミ	4.1±8.4
2012年度							
ヒヨドリ	94.4	ヤマガラ	90.0	コゲラ	94.7	ヤマガラ	90.0
ヤマガラ	88.9	コゲラ	85.0	ヒヨドリ	94.7	コゲラ	85.0
コゲラ	83.3	ヒヨドリ	85.0	ヤマガラ	94.7	ヒヨドリ	85.0
カケス	72.2	シジュウカラ	85.0	ハシブトガラス	94.7	エナガ	65.0
シジュウカラ	72.2	ハシブトガラス	80.0	シジュウカラ	84.2	ハシブトガラス	65.0
メジロ	72.2	メジロ	70.0	エナガ	73.7	シジュウカラ	60.0
エナガ	61.1	キジバト	55.0	ゴジュウカラ	63.2	メジロ	55.0
シロハラ	61.1	アオゲラ	55.0	メジロ	63.2	シロハラ	55.0
ハシブトガラス	55.6	シロハラ	55.0	シロハラ	57.9	ミソサザイ	50.0
ゴジュウカラ	44.4	ヒガラ	55.0	カケス	57.9	カケス	45.0
2011年度							
ヒヨドリ	9.9±6.8	エナガ	8.3±15.7	エナガ	8.8±8.4	ヒヨドリ	11.8±8.7
メジロ	9.8±9.5	ヒヨドリ	8.3±8.7	アトリ	7.0±21.2	エナガ	8.5±9.5
ヤマガラ	9.3±9.0	ヒガラ	6.9±13.6	ヤマガラ	6.7±5.8	メジロ	7.5±8.1
エナガ	7.4±8.9	アトリ	6.1±15.6	ヒヨドリ	6.2±5.7	ヤマガラ	7.5±7.7
コゲラ	5.4±4.5	ヤマガラ	5.9±6.6	シジュウカラ	5.7±5.3	コゲラ	5.2±4.2
シジュウカラ	5.2±5.5	メジロ	5.6±7.3	ヒガラ	5.4±10.8	ヒガラ	4.2±6.5
カケス	5.0±7.1	ハシブトガラス	4.5±8.3	メジロ	5.3±5.9	ハシブトガラス	4.2±7.0
コガラ	3.6±7.5	シジュウカラ	4.2±5.3	コゲラ	4.4±4.4	ハシブトガラ	4.2±13.5
クイタダキ	3.4±8.7	コゲラ	3.9±4.6	マヒワ	3.7±8.1	シジュウカラ	4.0±4.7
ゴジュウカラ	3.3±4.9	ツグミ	2.8±8.4	ゴジュウカラ	2.8±4.1	ゴジュウカラ	4.0±5.4

* 順位は2016年度による。

c) 食物別及び採食場所（ギルド）別の生息状況

2016 年度まで5年間調査が行われたサイトの食物別、採食場所別のバイオマスの割合を示した（図Ⅱ-5-1）。これまで、多少の変動はあるものの各調査地のギルドの構成比はおおむね一致していた。2015 年度は雨龍の昆虫食の鳥の割合が高い点で例年と違ったが、2016 年度も引き続き同じ傾向が見られた。



図Ⅱ-5-1. 2012-2016 年度越冬期に記録された鳥類の食物別、採食場所別のバイオマス割合

3) 繁殖期群集構成

a) 種数及びバイオマス

2009-2017 年度の繁殖期調査における鳥類の種数及びバイオマスを示した (表Ⅱ-5-4)。種数は年による変動はあるものの比較的安定しており、バイオマスはやや変動が大きかったが、越冬期ほどではなかった。これは、繁殖期の鳥類はなわばりをもつ鳥が多く、それらの鳥が一定の密度で生息するのに対して、越冬期の鳥類は群れで移動する鳥が多く、食物の多寡によって分布が大きく変化することに由来しているものと考えられる。

表Ⅱ-5-4. 2009-2017 年度繁殖期の鳥類の記録状況

サイト名	種数									バイオマス(kg/10ha)								
	2009	10	11	12	13	14	15	16	17	2009	10	11	12	13	14	15	16	17
足寄	27	33	30	30	34	28	28	28	31	5.3	5.7	5.5	7.7	7.9	13.7	6.4	10.6	6.0
雨籠	33	27	36	32	29	25	29	31	26	10.8	6.3	10.0	3.4	5.0	4.9	13.3	5.6	3.7
苦小牧	26	28	24	25	29	24	23	29	28	26.4	21.7	25.9	15.2	23.6	11.6	17.2	19.7	11.3
カヌマ沢	20	21	24	19	22	24	23	23	21	6.2	5.8	4.8	7.7	2.1	5.2	7.1	8.2	12.5
大佐渡	25	32	27	31	27	32	25	28	29	8.2	10.1	11.8	13.4	13.5	12.5	8.3	11.8	9.8
小佐渡	30	33	28	27	32	29	29	31	35	9.9	17.2	17.0	10.5	15.9	6.7	12.2	9.8	10.7
小川	22	24	25	26	33	30	28	28	21	14.7	13.9	15.5	13.4	25.3	11.6	14.7	13.7	13.5
那須高原	30	36	32	32	28	31	27	32	32	6.4	11.7	7.9	11.1	7.6	10.3	6.1	9.0	9.0
大山沢	27	36	29	27	30	29	30	29	25	4.7	9.3	5.6	4.4	4.0	7.8	3.7	7.6	7.1
秩父	33	38	28	29	31	31	28	31	29	8.4	8.5	5.8	3.2	4.0	6.9	3.5	3.0	2.7
カヤの平	22	23	25	29	27	27	30	20	26	4.2	4.5	5.2	6.9	7.9	7.8	9.0	5.2	4.7
おたの申す平	19	20	14	17	22	23	20	17	23	3.0	2.8	1.3	1.9	1.5	1.0	1.7	1.5	3.2
愛知赤津	23	19	22	18	22	22	19	26	23	8.8	8.1	13.6	9.7	8.9	7.9	8.3	6.5	12.1
芦生	25	25	20	22	17	25	17	23	23	15.7	25.8	8.4	24.4	6.0	11.1	8.6	7.1	4.7
上賀茂	23	22	16	21	21	23	26	19	17	25.8	26.9	27.9	23.3	25.0	27.2	24.9	17.7	25.5
和歌山	24	19	19	23	21	20	20		21	7.4	5.9	5.2	14.0	8.5	11.5	10.1		5.4
市ノ又	20	21	18	22	23	19	18	22	22	5.6	7.7	5.8	7.8	8.4	5.2	5.0	8.7	9.9
綾	22		24	23	25	25	18	20	21	3.9		5.4	4.0	6.5	8.1	1.6	4.2	7.8
田野	22		25	20	24	22	24	22	22	7.6		18.3	5.5	5.6	5.6	11.6	9.6	7.6
与那	16	17	16	17	17	16	20	16	16	17.5	22.1	19.8	19.6	14.9	18.7	21.4	19.0	19.7
奄美		19	18	16	17	16	18	17	17		24.1	22.5	21.5	14.2	20.6	19.1	22.7	22.7
大雪山					32									1.8				
野幌		31				31	23	27	28		27.4				3.3	20.7	27.8	28.3
大滝沢	23				24					8.1				6.0				
早池峰		22					25				5.1					2.6		
青葉山		26				24	24	25	27		20.0				33.4	41.3	35.7	21.1
金目川		35					31				15.7					24.9		
高原山	27				34					5.7				4.8				
筑波山	28				28					8.7				11.0				
西丹沢	24				32					5.6				4.1				
富士			30									12.5						
函南		27					27				12.6					10.9		
御岳濁河		22					23				3.8					3.3		
木曾赤沢	20				16					1.4				1.0				
三之公						24									6.0			
春日山			25					24					16.4					23.3
大山文珠越			23					31					10.8					12.5
半田山				15				21					2.8					15.3
臥龍山			23						26				16.1					8.8
宮島	21					23				27.4					23.6			
佐田山				16				18					13.0					26.7
対馬龍良山				14				21					6.6					6.3
粕屋			20					23				8.3						12.7
椎葉		26				22					11.4				7.9			
屋久島スギ林				15				13					7.2					10.4
屋久島照葉樹林		14						18			11.6							12.5
西表	15							14		21.7								24.6
小笠原石門			4					6				3.1						3.7

b) 優占種

出現率と優占度の上位種について、2010年度からの結果を示した(表Ⅱ-5-5)。出現率はキビタキ、ウグイス、ヒガラ、シジュウカラ、コゲラが上位を占めることが多く、優占度はヒヨドリ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラが上位を占めることが多かった。2017年はハシブトガラスが全サイトで見られたのが特徴的だった。ほぼ同じサイトを調査している2012年もハシブトガラスの出現率は高く、準コアサイトでの調査結果が影響している可能性がある。優占度は調査年による順位の入替わりはあるものの、上位種は安定していた。この安定性は越冬期よりも高く、繁殖期の鳥類相が安定していることがうかがえる。

ただし、近年はキビタキが増加するという変化が見られている。2014年以降はキビタキが出現率1位になることが続いており、2017年も2位だった。反対にヒガラの優占度が2011年までは1位か2位だったのがそれ以降は中位と低くなっている。2017年は3位となったが、今後の変化に注意が必要である。

表Ⅱ-5-5. 2010-2017年度の繁殖期の出現率および優占度の上位10種*

	2017年	2016年	2015年	2014年			
出現率							
1 ハシブトガラス	100	キビタキ	93.1	キビタキ	92.6	キビタキ	100
2 キビタキ	92.6	シジュウカラ	89.7	ウグイス	88.9	シジュウカラ	96.3
3 シジュウカラ	88.9	ハシブトガラス	86.2	ヒガラ	88.9	ウグイス	85.2
4 ヤマガラ	85.2	ヒヨドリ	82.8	シジュウカラ	85.2	コゲラ	81.5
5 ウグイス	81.5	ウグイス	82.8	ヤマガラ	81.5	アオバト	77.8
6 コゲラ	74.1	コゲラ	79.3	コゲラ	77.8	ヒヨドリ	77.8
ヒヨドリ	74.1	ヤマガラ	79.3	ヒヨドリ	77.8	ヤマガラ	77.8
ヒガラ	74.1	メジロ	75.9	オオルリ	77.8	キジバト	74.1
9 ツツドリ	70.4	ヒガラ	72.4	ハシブトガラス	77.8	ハシブトガラス	74.1
カケス	70.4	キジバト	69.0	ツツドリ	74.1	ヒガラ他3種	70.4
優占度							
1 ヒヨドリ	8.5±7.4	ヒヨドリ	8.3±7.8	ヒヨドリ	7.9±5.9	ヒヨドリ	7.5±7.2
2 ヤマガラ	7.8±5.7	シジュウカラ	6.1±4.5	キビタキ	7.0±3.9	シジュウカラ	6.0±3.6
3 ヒガラ	6.6±6.8	キビタキ	6.1±5.1	ヤマガラ	6.6±5.7	ヤマガラ	5.9±5.5
シジュウカラ	6.6±4.1	ヤマガラ	6.1±5.6	ヒガラ	6.6±6.0	キビタキ	5.7±4.3
5 キビタキ	6.0±3.8	メジロ	6.1±7.8	シジュウカラ	6.0±4.2	ヒガラ	5.5±7.3
6 メジロ	5.1±5.6	ヒガラ	5.8±7.2	ウグイス	4.1±3.8	エナガ	3.9±6.8
7 コゲラ	4.1±3.3	コゲラ	3.4±3.4	コゲラ	3.3±2.9	メジロ	3.6±4.6
8 カケス	3.4±5.5	ウグイス	2.7±3.3	メジロ	3.3±5.4	ウグイス	3.3±3.3
ウグイス	3.4±3.0	エナガ	2.4±4.7	オオルリ	2.6±2.8	コゲラ	3.0±2.8
10 ミソサザイ	2.4±3.8	ハシブトガラス	2.1±3.2	ミソサザイ	2.6±4.5	センダイムシクイ	3.0±5.1
				エナガ	2.6±4.5		
	2013年	2012年	2011年	2010年			
シジュウカラ	88.9	ウグイス	92.0	ウグイス	96.4	ウグイス	92.6
キビタキ	85.2	シジュウカラ	92.0	キビタキ	89.3	シジュウカラ	88.9
ヤマガラ	77.8	ハシブトガラス	88.0	シジュウカラ	89.3	キビタキ	85.2
ヒガラ	74.1	コゲラ	84.0	ハシブトガラス	82.1	コゲラ	81.5
カケス	74.1	キビタキ	84.0	ヒガラ	78.6	ハシブトガラス	81.5
コゲラ	70.4	ヤマガラ	84.0	ヒヨドリ	75.0	ヒヨドリ	77.8
ヒヨドリ	66.7	ヒヨドリ	72.0	ヤマガラ	75.0	ヒガラ	77.8
ウグイス	63.0	ヒガラ	72.0	コゲラ	71.4	ヤマガラ	77.8
メジロ	55.6	キジバト	64.0	カケス	71.4	カケス	74.1
エナガ	51.9	ツツドリ	64.0	エナガ	64.3	ツツドリ	70.4
ヤマガラ	7.6±6.3	ヒヨドリ	9.0±7.1	ヒガラ	6.2±7.5	ヒヨドリ	8.6±8.1
ヒガラ	6.7±6.3	ヤマガラ	7.5±6.6	ヤマガラ	5.2±5.3	ヒガラ	7.2±6.0
ヒヨドリ	6.6±6.6	シジュウカラ	7.0±4.4	ヒヨドリ	5.1±6.1	シジュウカラ	5.6±3.6
シジュウカラ	6.4±3.3	エナガ	6.2±9.9	シジュウカラ	4.8±4.1	ヤマガラ	5.4±4.5
キビタキ	5.8±4.7	ヒガラ	5.3±5.9	キビタキ	4.4±4.5	ウグイス	5.1±4.0
エナガ	3.5±6.1	キビタキ	5.3±4.0	ウグイス	3.7±3.9	キビタキ	4.9±3.4
ウグイス	3.4±3.9	メジロ	5.0±6.1	エナガ	3.0±5.2	メジロ	4.4±5.7
カケス	3.3±3.7	ウグイス	4.5±4.3	メジロ	3.0±4.3	コゲラ	3.4±3.0
コゲラ	3.2±2.7	コゲラ	4.5±3.2	ミソサザイ	2.8±4.4	エナガ	3.0±3.8
メジロ	3.1±4.4	ミソサザイ	2.5±4.6	カケス	2.7±3.0	ミソサザイ	2.9±3.9

c) 食物別及び採食場所（ギルド）別の生息状況

2013 年度から 2017 年度までの食物別、採食場所別のバイオマスの割合を示した（図 II-5-2）。ギルド構成の地理的な傾向は明確でなかった。しかし、特定の調査地のギルド構成の年による変化は小さく、ギルドの構成の年変動は小さいものと考えられた。

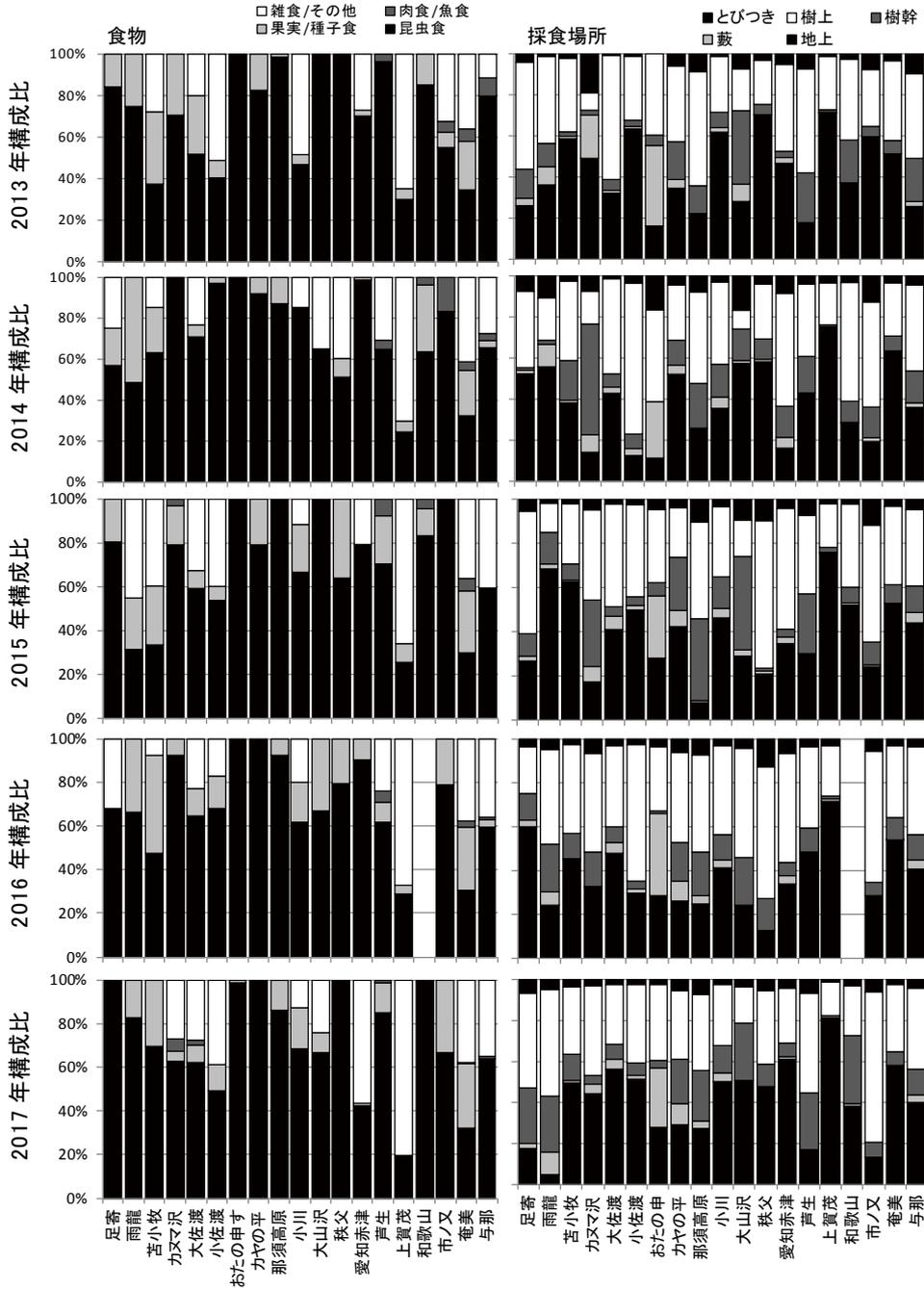
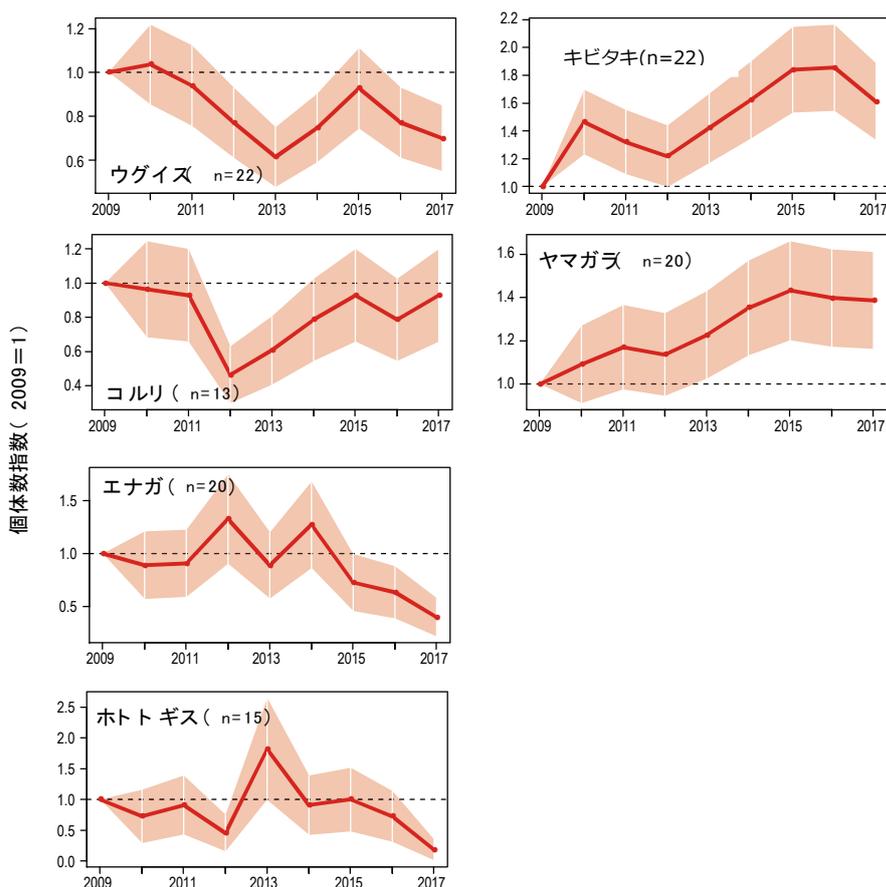


図 II-5-2. 2013-2017 年度繁殖期に記録された鳥類の食物別、採食場所別のバイオマス割合
（左ほど寒冷的な調査地となる）

d) 繁殖期鳥類の過去からの変化

第2期の解析では、ウグイスやコルリなどの藪を利用する鳥の減少が示され、シカの採食の影響が示唆された。第3期の結果も加えた2017年までの変化ではウグイスは第2期と同様、有意に減少していたが、コルリは有意な傾向が見られなくなった(図II-5-3)。ただし、大山沢や苦小牧といったシカの影響が顕著な場所だけで見ると、減少傾向は変わりなかった。なお、全国鳥類繁殖分布調査の結果では、夏鳥が全般に増加傾向にあることが明らかになっている(植田 2016)。こうした全体的な増加傾向と、シカの影響が合わさって、コルリで有意な減少が見られなくなったのかもしれない。

また、あらたに有意な減少が認められた種にはエナガとホトトギス、増加が認められた種にはキビタキとヤマガラがあった。エナガとホトトギスについては、近年減少している種であり、長期的な動向について見ていく必要がある。キビタキとヤマガラは一貫した増加傾向が見られており、増加していると考えられる。キビタキは全国鳥類繁殖分布調査でも増加傾向が認められており、南の地域、標高の低い場所ほど増加していた(植田 2016)。



図II-5-3. TRIMによる解析で有意な減少および増加が見られた種とその変動。

6. 植生概況調査

(1) 調査方法

植生と鳥類の関係では、面積が大きな森ほど(村井・樋口 1988)、また、林内の植生の階層構造が発達した林ほど(Hino 1985 など)鳥類の多様性は高くなることが知られている。樹冠部の状況は、衛星写真や空中写真などで把握することができるが、階層構造まで把握することは困難である。そこで、簡便であり、植物に詳しい調査者でなくとも実施可能な方法により、繁殖期に植生概況調査を実施した(調査方法の詳細は、「IV 資料 1. 調査マニュアル(平成 29(2017)年度調査版)」を参照のこと。)

森林サイトの植生階層構造の調査では、鳥類のスポットセンサス(詳細は、「II 5. 鳥類調査(1) 調査方法」を参照のこと。)を行った各定点で約 25m 四方の調査区を設定し、階層別に植物の被度を記録した。階層は、林床(へそ高以下)、低木層(身長1.5倍程度まで)、亜高木層(10m 程度まで)、高木層(林冠)、高高木層(突出木)の5層に分けた。各層の植物の被度は、6階級(0=植生なし、1=1~10%、2=10~25%、3=25~50%、4=50~75%、5=75%以上)に分けて記録した。

草原サイトの植生概況調査では、鳥類のスポットセンサスを行った各定点で約 50m 四方の調査区を設定し、水平方向の環境構造の把握を目的として、草本は丈によって、ひざ下の草、へそ下の草、背丈程度、背丈以上の4区分、また他の要素については耕作地、樹木、裸地、水域の4区分(合計8区分)に分けた。各環境の植物の被度は、6階級(0=植生なし、1=1~10%、2=10~25%、3=25~50%、4=50~75%、5=75%以上)に分けて記録した。

森林サイトにおいては、植生タイプについても調査した。各層の植生をササ、草、落葉広葉樹、常緑広葉樹、常緑針葉樹、落葉針葉樹、タケの7タイプに分け、優占度が高いものから1~7位の順位をつけた。

(2) 平成 29 (2017) 年度調査結果

本年度は、コアサイト 20 か所、準コアサイト 7 か所にて植物が展葉している繁殖期に植生概況調査を実施した(表 II-5-1)。

(3) 集計・解析

大台ヶ原では、ニホンジカの採食により下層植生がなくなり、下層植生を利用するウグイス、コルリ、コマドリ等の種が減少し、逆に開けた場所を好むアカハラやビンズイ等が増加したことが報告されている (Hino 2000、日野 2004)。2010年度の集計では、モニタリングサイト 1000 の結果からも低木層の被度と藪性の鳥のバイオマスには弱い正の相関が、地上性の鳥のバイオマスとは弱い負の相関があることが示された。本年度の集計では、9年間の植生データが蓄積されたので、各地の林床や低木層の被度に変化が起きているかを検討した。

コアサイトの9年間の植生概況調査の結果を示した (表II-6-1)。本調査では、植生被度を簡易的な6階級に分けて記録している。目測で記録しているため、たとえ実際の植生に年変動がなかったにしても、調査員の植生評価の年によるばらつきが出てしまうことが懸念された。しかし、実際には5地点の平均値は年によるばらつきが小さかったため、この手法で経年的な植生の変化をとらえられることが期待できる。

経年的な被度の変化が捉えられている例としてはカヌマ沢がある。林床、低木層ともに減少し、最近は回復傾向にあることがわかる。また、雨龍の低木層もやや増加傾向にあり、今後の変化と、それに伴う鳥類相の変化に注意する必要がある。

表II-6-1. コアサイトにおける9年間の植生概況調査の林床と低木層の結果

数値は被度の階級の5地点の平均を示す(階級は、0=植生なし、1=1~10%、2=10~25%、3=25~50%、4=50~75%、5=75%以上)。

調査地名	林床										低木層								
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	
足寄	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	1.6	2.2	2.2	2.0	2.6	2.2	1.8	2.4	1.8	
雨龍	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	5.0	5.0	1.6	1.6	1.6	2.0	1.8	1.8	2.8	2.6	2.6	
苫小牧	4.0	3.0	3.4	3.2	4.2	5.0	4.8	4.6	5.0	3.0	2.2	2.0	2.0	2.0	2.2	2.6	2.4	2.8	
カヌマ沢	3.4	2.4	2.8	3.0	4.6	4.4	5.0	4.4	5.0	4.6	4.4	2.4	2.4	2.6	1.4	2.4	3.6	3.2	
大佐渡	5.0	4.4	4.4	4.0	4.8	4.6	4.6	4.6	4.4	3.6	4.0	4.6	4.0	4.2	4.2	4.2	4.4	3.8	
小佐渡	3.4	2.8	3.6	3.4	4.2	3.8	3.8	3.8	3.6	3.4	2.8	3.2	3.0	4.0	3.6	3.6	3.2	3.0	
おたの申す平	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	4.2	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.0	
カヤの平	5.0	5.0	5.0	4.6	4.8	4.8	5.0	4.8	5.0	1.8	2.4	2.6	2.2	2.0	2.6	1.8	2.4	1.4	
那須	5.0	4.8	4.6	5.0	4.6	4.8	5.0	5.0	5.0	2.4	2.4	2.4	2.6	2.2	2.2	3.2	2.2	2.6	
小川	2.4	2.6	2.6	3.4	3.4	3.6	4.0	4.2	3.8	2.8	2.6	2.6	2.8	3.2	3.8	3.6	3.2	3.8	
大山沢	2.0	2.2	2.2	2.4	2.4	2.2	2.2	2.4	2.6	2.6	1.8	1.8	2.6	2.6	2.4	2.4	2.4	2.6	
秩父	0.6	1.0	1.0	1.4	1.2	1.6	1.6	1.6	1.4	1.8	2.2	2.2	1.8	2.6	2.6	2.6	2.8	2.6	
愛知赤津	2.5	2.4	2.6	2.4	2.6	2.8	2.8	3.0	3.0	3.8	3.0	3.0	2.6	2.8	2.6	2.6	2.6	1.8	
芦生	1.6	1.6	1.6	1.0	1.6			1.6	2.0	1.2	1.2	1.4	0.8	1.4			1.4	1.4	
上賀茂	3.0	3.0	3.0	2.4	2.8			2.8		2.4	2.4	2.4	2.2	2.2			2.4		
和歌山	1.0	1.0	1.0	1.0	1.2	1.4	1.4		1.4	2.0	2.0	2.2	1.6	2.2	2.2	2.4		2.2	
市ノ又	1.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.2	1.0	2.6	2.6	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.0	1.8	
田野	2.6		2.6	2.6	2.6	2.8	2.4	2.4	2.4	3.4		3.4	3.4	3.4	3.0	2.8	2.8	2.8	
綾	1.3		1.6	1.6	1.6	1.8	1.8	1.8	1.8	3.0		3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	
奄美	3.6		1.8	2.2	2.4	2.2	2.4	1.4	2.4	3.6		2.6	2.4	3.2	3.2	3.4	2.0	2.8	
与那	3.2	3.2	2.8	3.2	3.0	4.2	4.2	4.0	4.0	3.6	3.6	3.2	2.8	2.2	3.2	3.4	3.0	4.0	

引用文献

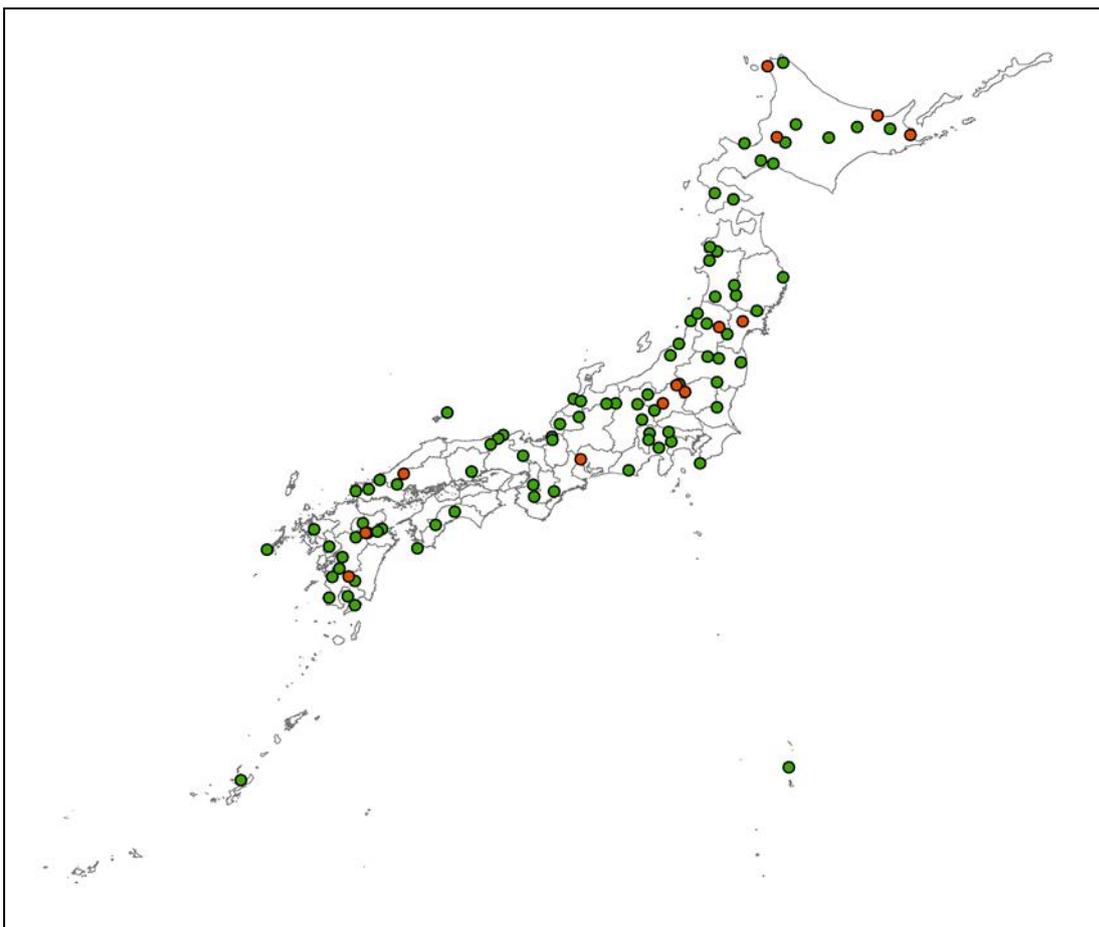
- Hino, T. (1985) Relationships between bird community and habitat structure in shelterbelts of Hokkaido, Japan. *Oecologia* 65: 442-448.
- Hino, T. (2000) Bird community and vegetation structure in a forest with a high density of Sika Deer. *Japanese Journal of Ornithology* 48: 197-204.
- 日野輝明 (2004) シカが鳥のすみかを左右する. 森の野鳥を楽しむ 101 のヒント. pp. 164-165. 日本林業技術協会、東京.
- 村井英紀・樋口広芳 (1988) 森林性鳥類の多様性に影響する諸要因. *Strix* 7: 83-100.
- 植田睦之 (2016) 繁殖分布調査のデータが集まり始めました. 全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター (6): 1-2.

Ⅲ 一般サイト調査実施状況及び調査結果

1. 調査サイトの配置状況

全国約 1000 か所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは 419 か所を占める。これらサイトでは、おおむね 5 年に 1 回の頻度で陸生鳥類調査（繁殖期及び越冬期）及び植生概況調査（繁殖期のみ）を実施している。

2017年度繁殖期は、森林サイト77か所、草原サイト13か所、計90か所に調査を依頼した（図Ⅲ-1-1）。2017年度の調査依頼サイトは、過年度とほぼ同じ水準で、生物多様性保全のための国土10区分と標高帯を網羅できている（表Ⅲ-1-1）。繁殖期に調査を依頼したサイトのうち、34か所では積雪などの理由により越冬期調査が不可能であったため、越冬期の調査サイト数は繁殖期より少ない。今年度は全国各地で記録的な積雪に見舞われ、通常ならば調査可能なサイトにおいても実施が困難となったサイトが複数確認された。



図Ⅲ-1-1. 平成29(2017)年度に調査を実施した一般サイト ●:森林サイト、●:草原サイト

表Ⅲ-1-1. 調査依頼サイト(国土10区分別*、標高帯別)

国土10区分		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
環境 タイプ	森林	4	7	11	17	14	4	3	21	1	1	83
	草原	3	1	2	3	1	1		2			13
計		7	8	13	20	15	5	3	23	1	1	96

標高帯		250	500	750	1000	1250	1500	1750	2250	計
環境 タイプ	森林	32	17	9	11	5	5	3	1	83
	草原	7		1	1	1	2	1		13
計		39	17	10	12	6	7	4	1	96

* 生物多様性保全のための国土10区分

1:北海道東部区域 2:北海道西部区域 3:本州中北部太平洋側区域

4:本州中北部日本海側区域 5:北陸・山陰区域 6:本州中部太平洋側区域

7:瀬戸内海周辺区域 8:紀伊半島・四国・九州区域 9:奄美・琉球諸島区域

10:小笠原諸島区域

2. 鳥類調査

(1) 調査方法

一般サイトにおける鳥類調査はおおむね5年に一度行い、調査方法は、コアサイト・準コアサイトに準ずる（詳細は、「Ⅱ コアサイト・準コアサイト調査実施状況及び調査結果」5. 鳥類調査（1）調査方法、を参照のこと。）。

(2) 平成29（2017）年度調査結果

繁殖期については、調査を依頼しているサイトのうち、森林65か所、草原13か所、計78か所で調査を実施し、越冬期については、森林56か所、草原9か所、計65か所に調査を依頼している（表Ⅲ-2-1）。

(3) 集計・解析

1) 集計・解析方法

本報告書では、2017年度繁殖期と2016年度越冬期の調査結果を集計・解析した。ここでは、2017年12月31日までにチェックを終え、解析に使用できると判断されたデータのみ用いた。繁殖期に解析可能な鳥類データの得られたサイトは、森林60か所、草原12か所、計72か所（表Ⅲ-2-1）であり、越冬期は、森林49か所、草原14か所、計63か所であった（表Ⅲ-2-2）。期限までにデータ報告がなかったサイト、悪天候等により調査回数の不足があったサイトは解析対象から除外した。また、調査時期（調査日）や調査時間帯等の間違いがあったとしても、その程度が軽微であった場合は、すべてのデータを解析に用いた（詳細は、表Ⅲ-2-1及び表Ⅲ-2-2の備考欄を参照のこと。）。調査時間帯については、過去のモニタリングサイト1000 森林・草原調査における解析と同様に、午前中に行われた調査は正しい方法で行われたこととした。越冬期において、アクセスが困難な地域では、調査時間の一部が13時台以後となったサイトが5か所あった。これら[100316 箱根町（湖尻）樹木園]、[100081 麻綿原]、[100265 十八号沢川]、[100416 正善寺ダム奥]、[100573 京都東北部]は、規定時間外であった調査が一部であったことから、解析に含めた。繁殖期については、調査時間の一部が13時台以後となったサイトが5か所あった。これら[100268 烏帽子岳ブナ立尾根]、[100541 母島]、[100456 霧ヶ峰池のくるみ遊歩道]、[100511 黒河林道～三国山方面]、[100299 蓋井島]についても越冬期と同様に、規定時間外であった調査が一部であったことから解析に含めた。

出現種の集計は、解析目的によって、定点から半径50m以上の範囲で記録された種も全て含める場合と、50m以内で記録された種のみを含める場合に分けた。個体数のデータには、定点から半径50m以内の範囲で記録されたもののみ解析に使用した。サイトで観察された個体数は、サイトの定点ごとに観察された種の最大個体数を、5 定点分合計した個体数で用いた。各定点における調査回ごとの個体数は、10分の調査時間を5分割したうちの

最大個体数を採用した。つまり、その各調査回の各定点の個体数のうち最大数を、A～Eの5定点分合計したものが各サイトの個体数となる。

表Ⅲ-2-1. 平成29(2017)年度調査実施状況一覧

サイトコード	調査サイト名	都道府県	生態系タイプ	10区分	標高帯	経度	緯度	繁殖期			越冬期			
								調査依頼	調査実施	解析可否	備考	調査依頼	調査実施	備考
100003	桂沢湖	北海道	森林	2	500	142.03	43.24	○	○	○		○	○	
100011	夕来	北海道	草原	1	250	141.58	45.22	○	○	○		○	○	
100031	高野	岩手県	森林	3	250	141.30	38.88	○	○	×	1地点調査漏れあり 繁殖期採用せず。	○	○	
100051	温海	山形県	森林	4	250	139.60	38.61	—	—	—	越冬期のみ実施予定	○	○	
100107	林道水晶線	長野県	森林	3	1000	138.23	36.45	○	○	×	調査方法ミス 越冬期採用せず	—	—	越冬期不可サイト
100114	志賀高原 自然観察路	長野県	森林	4	1750	138.49	36.70	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100206	鑛市ダム	兵庫県	森林	7	500	135.28	35.12	○	○	○		○	○	
100209	城崎	兵庫県	森林	5	250	134.77	35.65	○	○	○		○	○	
100245	猿ヶ城溪谷	鹿児島県	森林	8	250	130.77	31.48	○	×	×	土砂崩れあり 繁殖期データなし	×	×	土砂崩れのため アクセス不可
100253	佐白城趾	茨城県	森林	6	250	140.27	36.38	○	○	○		○	○	
100256	三川山	兵庫県	森林	5	500	134.64	35.56	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100264	小清水原生花園	北海道	草原	1	250	144.41	43.94	○	○	○		○	○	
100267	チミケツブ	北海道	森林	1	500	143.88	43.64	○	○	○		○	○	
100268	烏帽子岳ブナ立尾根	長野県	森林	4	1500	137.67	36.48	○	○	×	調査実施時間に問題あり 繁殖期採用せず	—	—	越冬期不可サイト
100274	護摩壇山	和歌山県	森林	8	1250	135.57	34.06	○	○	×	返送待ち	—	—	越冬期不可サイト
100277	雨紛	北海道	森林	2	250	142.31	43.71	—	—	—	越冬期のみ実施予定	○	○	
100283	龍ノ口山	岡山県	森林	7	250	133.96	34.71	○	○	○		○	○	
100286	菊池溪谷	熊本県	森林	8	1000	130.98	33.00	○	○	○		○	○	
100289	八代市民野鳥の森	熊本県	森林	8	250	130.64	32.49	○	○	×	回数不足	○	○	
100292	大関山	熊本県	森林	8	1000	130.55	32.20	○	○	○		○	○	
100294	熊田溜池	山口県	森林	5	500	131.59	34.49	○	○	○		○	○	
100295	宇佐郷	山口県	森林	5	500	132.04	34.38	○	○	○		○	○	
100299	蓋井島	山口県	森林	8	250	131.31	34.25	○	○	○		○	実施中	
100300	小串	山口県	森林	5	500	130.98	34.21	○	○	○		○	実施中	
100304	館山野鳥の森	千葉県	森林	6	250	139.84	34.92	○	○	○		○	○	
100310	大台ヶ原	奈良県	森林	8	1500	136.08	34.19	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100322	荒谷	宮城県	草原	3	250	140.94	38.60	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100333	細野野鳥の森	福島県	森林	4	1000	140.04	37.69	○	○	○		○	○	
100349	二口林道	宮城県	森林	4	500	140.54	38.27	○	○	○		○	実施中	
100356	木曾岬干拓地	三重県	草原	6	250	136.77	35.03	○	○	○		○	○	
100361	三里山	福井県	森林	5	250	136.23	35.94	○	○	○		○	○	

[凡例] 調査依頼(○:依頼した、×:依頼していない、—:越冬期不可サイト)

調査実施(○:実施済み、×:実施できず、実施中:調査途中のサイト)

データの解析可否(○:解析可、△:一部データは解析不可、×:解析に用いず)

備考:解析可否判断根拠

表Ⅲ-2-1. 平成 29(2017)年度調査実施状況一覧(続き)

サイト コード	調査サイト名	都道府 県	生態系 タイプ	10 区分	標高帯	経度	緯度	繁殖期			備考	越冬期		
								調査 依頼	調査 実施	解析 可否		調査 依頼	調査 実施	備考
100363	野坂いこいの森	福井県	森林	5	500	136.03	35.61	○	○	○		○	○	
100371	陸中川尻・湯川	岩手県	森林	4	500	140.77	39.27	○	○	○		○	○	
100380	桧枝岐	福島県	森林	4	1750	139.30	36.98	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100381	八風平	長野県	森林	3	1250	138.66	36.30	○	○	○		○	○	
100383	岩湧山	大阪府	森林	7	750	135.55	34.37	○	○	○		○	○	
100391	老人福祉エリア散策路 (小友沼東エリア)	秋田県	森林	4	250	140.08	40.18	○	×	×	繁殖分布調査と混同	—	—	越冬期不可サイト
100395	八塩山	秋田県	森林	4	750	140.23	39.24	○	×	×	クマ出没が多発し、危 険なため調査実施を見 送り	—	—	越冬期不可サイト
100396	大神成	秋田県	森林	4	750	140.72	39.54	○	×	×	道路工事 繁殖期データなし	—	—	越冬期不可サイト
100397	岳岱自然観察教育林	秋田県	森林	4	750	140.27	40.42	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100401	金石	石川県	森林	5	250	136.59	36.59	—	—	—	越冬期のみ実施予定	○	○	
100402	白山チブ尾根	石川県	森林	4	1500	136.72	36.12	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100405	田老	岩手県	森林	3	250	141.98	39.74	○	○	○		○	○	
100410	稲荷岡	新潟県	森林	5	250	139.29	38.02	○	×	×	調査員都合つかず	○	未実施	積雪でサイトへのアクセ スが困難
100414	矢代田	新潟県	森林	5	250	139.07	37.72	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100422	戦場ヶ原赤沼～三本松	栃木県	草原	4	1500	139.45	36.77	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100430	武田の社内健康の森	山梨県	森林	3	500	138.54	35.70	○	○	○		○	○	
100431	四尾連湖	山梨県	森林	3	1000	138.52	35.53	○	○	○		○	○	
100434	曲瀬	北海道	森林	1	250	141.98	45.31	○	○	×	回数不足	○	○	
100438	土橋自然観察教育林	北海道	森林	2	250	140.22	41.92	○	○	○		×	×	
100439	函館山	北海道	森林	2	250	140.70	41.76	○	○	○		○	○	
100448	雲仙あざみ谷コース	長崎県	森林	8	1250	130.29	32.76	○	○	○		○	○	
100451	七ツ岳(五島列島)	長崎県	森林	8	250	128.69	32.69	○	○	○		○	未実施	寒波等の影響でサイトへ のアクセスが困難
100456	霧ヶ峰池のくるみ遊歩道	長野県	草原	3	1750	138.88	36.48	○	○	○		○	○	
100457	蓼科	長野県	森林	3	2250	138.35	36.06	○	○	○		—	—	
100459	磐城金山	福島県	森林	3	750	140.28	37.02	○	×	×	調査員と連絡取れず	○	未実施	調査員に実施状況確認中
100467	湯川登山道	福島県	森林	4	1000	140.32	37.64	○	○	○		○	未実施	積雪等でサイトへのアクセ ス困難
100468	屋曽根-小畑林道	福島県	森林	3	500	140.89	37.54	○	○	○		○	○	
100471	有峰湖	富山県	森林	4	1250	137.43	36.47	○	○	○		—	—	
100475	小笠山	静岡県	森林	6	250	138.00	34.74	○	○	○		○	○	
100476	医王山	石川県	森林	5	500	136.77	36.53	○	○	○		○	未実施	積雪等でサイトへのアクセ ス困難
100477	古宇利島	沖縄県	森林	9	250	128.02	26.71	○	○	○		○	○	
100484	晩生内	北海道	草原	2	250	141.82	43.38	○	○	○		○	○	

[凡例] 調査依頼(○:依頼した、×:依頼していない、—:越冬期不可サイト)

調査実施(○:実施済み、×:実施できず、実施中:調査途中のサイト)

データの解析可否(○:解析可、△:一部データは解析不可、×:解析に用いず)

備考:解析可否判断根拠

表Ⅲ-2-1. 平成 29(2017)年度調査実施状況一覧(続き)

サイト コード	調査サイト名	都道府 県	生態系 タイプ	10 区分	標高帯	経度	緯度	繁殖期			備考	越冬期		
								調査 依頼	調査 実施	解析 可否		調査 依頼	調査 実施	備考
100486	三頭山	東京都	森林	3	1250	139.03	35.74	—	—	—		—	—	
100489	扇ノ山 沢川	鳥取県	森林	5	1000	134.45	35.42	○	○	○		—	—	
100491	御池野鳥の森	宮崎県	森林	8	750	130.95	31.88	○	○	○		○	○	
100494	陸上自衛隊霧島演習場	宮崎県	草原	8	750	130.79	31.99	○	×	×	自衛隊実習中で立入禁止、繁殖期データなし	×	×	自衛隊実習中で立入禁止
100498	支笏湖野鳥の森	北海道	森林	2	500	141.40	42.77	○	×	×	林道立入禁止 繁殖期データなし	—	—	
100502	有田	佐賀県	森林	8	500	129.90	33.21	○	○	○		○	○	
100506	床丹	北海道	草原	1	250	145.25	43.43	○	○	○		○	○	
100507	湯野浜	山形県	森林	4	250	139.77	38.81	—	—	—	越冬期のみ実施予定	○	○	
100511	黒河林道～三国山方面	福井県	森林	5	750	136.04	35.53	○	○	○		×	×	
100512	養老牛温泉	北海道	森林	1	250	144.73	43.59	○	○	○		○	○	
100514	小樽西部	北海道	森林	2	250	140.98	43.21	○	○	○		○	○	
100517	黒岳	大分県	森林	8	1000	131.29	33.12	○	○	○		○	○	
100518	九重町長者原	大分県	草原	8	1250	131.23	33.12	○	○	○		○	○	
100521	高尾山自然公園	大分県	森林	8	250	131.65	33.22	○	○	○		○	○	
100522	野津原 県民の森	大分県	森林	8	250	131.54	33.15	○	○	○		○	○	
100529	工石山	高知県	森林	8	1000	133.52	33.67	○	○	○		○	○	
100530	春分峠	高知県	森林	8	750	133.03	33.32	○	○	○		○	○	
100532	月山	山形県	森林	4	1750	140.01	38.54	○	○	○		—	—	越冬期不可サイト
100534	旧叢上川	山形県	草原	4	250	140.33	38.45	○	○	○		○	○	
100535	紫尾山	鹿児島	森林	8	1000	130.37	31.98	○	○	○		○	○	
100537	二股トンネル北	鹿児島	森林	8	500	130.95	31.25	○	×	×	調査員都合つかず	○	○	
100539	唐仁原	鹿児島	森林	8	250	130.29	31.44	○	×	×	調査伝達不足	○	実施中	
100540	深耶馬溪	大分県	森林	8	500	131.16	33.37	○	×	×	橋崩壊でアクセスできず 繁殖期データなし	×	×	調査地へアクセスできず。
100541	母島	高知県	森林	8	250	132.57	32.72	○	○	○		○	○	
100550	西郷	島根県	森林	5	250	133.33	36.24	○	○	○		○	×	悪天候でアクセスできず。
100557	糠平	北海道	森林	1	1000	143.15	43.36	○	×	×	道崩れでアクセスできず 繁殖期データなし	×	×	道崩れでアクセスできず。
100571	印野	静岡県	森林	3	1500	138.78	35.32	○	○	○		○	○	
100578	白神山地天狗岳	青森県	森林	4	750	140.09	40.53	○	○	×		×	×	入山不可のため実施できず
100587	深入山	広島県	草原	5	1000	132.21	34.65	○	○	×	回数不足、データ採用せず	○	○	
100591	尾瀬	群馬県	草原	4	1500	139.24	36.94	○	○	○		—	—	
100593	父島東平	東京都	森林	10	250	142.13	27.04	○	○	○		○	○	
100594	ウトナイ湖南東部湿原	北海道	草原	2	250	141.72	42.69	○	○	○		○	○	

[凡例] 調査依頼(○: 依頼した、×: 依頼していない、—: 越冬期不可サイト)

調査実施(○: 実施済み、×: 実施できず、実施中: 調査途中のサイト)

データの解析可否(○: 解析可、△: 一部データは解析不可、×: 解析に用いず)

備考: 解析可否判断根拠

表Ⅲ-2-2. 平成 28(2016)年度越冬期調査実施状況一覧

サイト コード	調査サイト名	都道府県	生態系 タイプ	10 区分	標高帯	経度	緯度	越冬期			備考
								調査 依頼	調査 実施	解析 可否	
100005	白老町森野	北海道	森林	2	250	141.27	42.62	○	○	○	
100011	夕来	北海道	草原	1	250	141.58	45.22	×	×	×	次年度へ繰越し
100012	上猿払	北海道	森林	1	250	142.10	45.13	○	○	○	
100016	岩尾別台地	北海道	森林	1	250	145.07	44.10	○	○	○	
100050	上ノ畑	山形県	森林	4	500	140.54	38.56	—	—	—	越冬期不可サイト
100051	温海	山形県	森林	4	250	139.60	38.61	○	×	×	次年度へ繰越し
100071	黒保根町水沼	群馬県	森林	3	500	139.28	36.51	○	○	○	
100081	麻綿原	千葉県	森林	6	500	140.17	35.19	○	○	○	
100114	志賀高原 自然観察路	長野県	森林	4	1750	138.49	36.70	○	×	×	越冬期不可サイトへ
100134	大山寺	鳥取県	森林	5	1000	133.53	35.39	○	×	×	次年度へ繰越し
100145	毛無山	岡山県	森林	5	1000	133.52	35.23	—	—	—	越冬期不可サイト
100147	七塚原	広島県	草原	7	500	132.98	34.82	○	○	○	
100177	辺戸～奥	沖縄県	森林	9	250	128.26	26.85	○	○	○	
100178	於茂登岳登山道	沖縄県	森林	9	250	124.19	24.42	○	○	○	
100224	古処山	福岡県	森林	8	750	130.72	33.48	○	○	○	
100245	猿ヶ城溪谷	鹿児島	森林	8	250	130.77	31.48	×	×	×	次年度へ繰越し
100249	剣山	徳島県	森林	8	1750	134.09	33.86	—	—	—	越冬期不可サイト
100252	伊島	徳島県	森林	8	250	134.82	33.85	○	○	○	
100257	六甲山周辺	兵庫県	森林	7	1000	135.24	34.77	○	○	○	
100260	峰山高原	兵庫県	森林	7	1000	134.67	35.14	—	—	—	越冬期不可サイト
100263	佐呂間別川	北海道	草原	1	250	143.93	44.07	—	—	—	越冬期不可サイト
100265	十八号沢川	北海道	森林	1	500	143.47	43.77	○	○	○	
100266	斜里岳	北海道	森林	1	1000	144.69	43.77	—	—	—	越冬期不可サイト
100268	烏帽子岳ブナ立尾根	長野県	森林	4	1500	137.67	36.48	—	—	—	越冬期不可サイト
100271	笹川	千葉県	草原	6	250	140.68	35.85	○	○	○	
100275	姿見の池	北海道	森林	1	1750	142.83	43.66	—	—	—	越冬期不可サイト
100277	雨紛	北海道	森林	2	250	142.31	43.71	○	×	×	次年度へ繰越し

[凡例]調査依頼(○:依頼した、×:依頼していない、—:越冬期不可サイト)

調査実施(○:実施済み、×:実施できず、—:越冬期不可サイト)

データの解析可否(○:解析可、×:解析に用いず)

備考:解析可否判断根拠

表Ⅲ-2-2. 平成 28(2016)年度越冬期調査実施状況一覧(続き)

サイト コード	調査サイト名	都道府県	生態系 タイプ	10 区分	標高帯	経度	緯度	越冬期			備考
								調査 依頼	調査 実施	解析 可否	
100279	布部	北海道	森林	1	500	142.48	43.31	—	—	—	越冬期不可サイト
100280	春光台	北海道	森林	2	250	142.36	43.81	○	○	○	
100282	備前市屏風岩(仮)	岡山県	森林	7	250	134.14	34.75	○	○	○	
100285	岡山南部	岡山県	森林	7	250	133.96	34.66	○	○	○	
100287	一の宮(阿蘇)	熊本県	草原	8	1000	131.15	33.01	○	○	○	
100289	八代市民野鳥の森	熊本県	森林	8	250	130.64	32.49	×	×	×	次年度へ繰越し
100291	市房山	熊本県	森林	8	1000	131.08	32.32	○	○	○	
100295	宇佐郷	山口県	森林	5	500	132.04	34.38	×	×	×	次年度へ繰越し
100298	秋吉台	山口県	草原	5	500	131.30	34.25	○	○	○	
100302	泉自然公園	千葉県	森林	6	250	140.23	35.58	○	○	○	
100309	曾爾高原	奈良県	草原	8	750	136.22	34.62	○	○	○	
100313	神戸里山	三重県	森林	6	250	136.47	34.71	○	○	○	
100314	松阪ちとせの森	三重県	森林	8	250	136.51	34.52	○	○	○	
100316	箱根町(湖尻)樹木園	神奈川	森林	6	1000	139.00	35.23	○	○	○	
100317	桧洞丸稜線部	神奈川	森林	6	1500	139.10	35.48	—	—	—	越冬期不可サイトへ
100319	丹沢札掛	神奈川	森林	6	750	139.21	35.46	○	○	○	
100320	山元町牛橋開拓地	宮城県	草原	3	250	140.91	37.98	○	○	○	
100321	旧北上川下流	宮城県	草原	3	250	141.26	38.49	○	○	○	
100328	愛媛県総合運動公園	愛媛県	森林	7	250	132.80	33.77	○	○	○	
100329	諏訪崎自然休養林	愛媛県	森林	8	250	132.40	33.44	○	○	○	
100334	猪苗代湖北岸	福島県	草原	4	750	140.14	37.51	○	○	○	
100336	見沼代用水東縁斜面林	埼玉県	森林	6	250	139.70	35.89	○	○	○	
100337	埼玉県越生	埼玉県	森林	3	250	139.28	35.98	○	○	○	
100338	大滝・栃本広場	埼玉県	森林	3	1000	138.87	35.95	○	○	○	
100340	平尾台	福岡県	草原	8	500	130.90	33.76	○	○	○	
100341	道原	福岡県	森林	8	250	130.82	33.78	○	○	○	

[凡例]調査依頼(○:依頼した、×:依頼していない、—:越冬期不可サイト)

調査実施(○:実施済み、×:実施できず、—:越冬期不可サイト)

データの解析可否(○:解析可、×:解析に用いず)

備考:解析可否判断根拠

表Ⅲ-2-2. 平成 28(2016)年度越冬期調査実施状況一覧(続き)

サイト コード	調査サイト名	都道府県	生態系 タイプ	10 区分	標高帯	経度	緯度	越冬期			備考
								調査 依頼	調査 実施	解析 可否	
100342	灰ヶ峰 栢原線	広島県	森林	7	500	132.60	34.28	○	○	○	
100343	赤城山	群馬県	森林	3	1000	139.14	36.52	○	○	○	
100345	高山市城山公園	岐阜県	森林	4	750	137.26	36.14	○	○	○	
100347	金華山	岐阜県	森林	6	250	136.78	35.43	○	○	○	
100350	陶史の森	岐阜県	森林	6	500	137.21	35.33	○	○	○	
100362	永平寺大仏線	福井県	森林	5	500	136.34	36.05	○	○	○	
100370	尿前溪谷つづ沼コース	岩手県	森林	4	500	140.89	39.12	—	—	—	越冬期不可サイト
100385	箕面鳥獣保護区	大阪府	森林	7	500	135.48	34.86	○	○	○	
100387	和泉葛城山ブナ林	大阪府	森林	7	750	135.43	34.35	○	○	○	
100393	冬師湿原	秋田県	草原	4	500	140.03	39.20	—	—	—	越冬期不可サイト
100396	大神成	秋田県	森林	4	750	140.72	39.54	×	×	×	次年度へ繰越し
100399	大滝山自然公園	秋田県	森林	4	250	140.16	39.78	—	—	—	越冬期不可サイト
100401	金石	石川県	森林	5	250	136.59	36.59	○	○	×	調査実施時間に 問題あり
100402	白山チブリ尾根	石川県	森林	4	1500	136.72	36.12	—	—	—	越冬期不可サイト
100406	閉伊崎	岩手県	森林	3	250	142.02	39.64	○	○	○	
100408	害鷹森	岩手県	森林	4	1000	141.58	39.72	—	—	—	越冬期不可サイト
100416	正善寺ダム奥	新潟県	森林	5	250	138.18	37.12	○	○	○	
100418	沢根五十里	新潟県	森林	5	250	138.28	38.02	○	○	○	
100420	板室	栃木県	森林	3	750	139.95	37.06	○	○	○	
100423	井頭公園	栃木県	森林	3	250	140.00	36.50	○	○	○	
100425	渡良瀬遊水地第1調節池	栃木県	草原	3	250	139.66	36.24	○	○	○	
100433	沓形・神居林道	北海道	森林	2	250	141.15	45.18	○	○	○	
100442	大沼公園	北海道	森林	2	250	140.66	42.00	○	○	○	
100443	白神岬	北海道	草原	2	250	140.19	41.40	○	○	×	調査実施時間に 問題あり
100444	岩木川下流右岸	青森県	草原	4	250	140.40	40.98	○	○	○	
100446	十二湖	青森県	森林	4	500	139.97	40.56	—	—	—	越冬期不可サイト
100449	国見山	長崎県	森林	8	750	129.81	33.24	○	○	○	

[凡例]調査依頼(○:依頼した、×:依頼していない、—:越冬期不可サイト)

調査実施(○:実施済み、×:実施できず、—:越冬期不可サイト)

データの解析可否(○:解析可、×:解析に用いず)

備考:解析可否判断根拠

表Ⅲ-2-2. 平成 28(2016)年度越冬期調査実施状況一覧(続き)

サイト コード	調査サイト名	都道府県	生態系 タイプ	10 区分	標高帯	経度	緯度	越冬期			備考
								調査 依頼	調査 実施	解析 可否	
100450	島原	長崎県	森林	8	250	130.32	32.80	○	○	○	
100454	1000m 林道	長野県	森林	3	1250	138.50	36.35	○	○	×	次年度繰越し
100463	陸奥横浜(泊林道)	青森県	森林	4	250	141.37	41.07	—	—	—	越冬期不可サイト
100464	田代平	青森県	草原	4	750	140.94	40.68	—	—	—	越冬期不可サイト
100470	縄ヶ池	富山県	森林	4	1000	136.93	36.48	—	—	—	越冬期不可サイト
100472	頼成の森	富山県	森林	5	250	137.04	36.63	○	○	○	
100473	片地の池	富山県	森林	4	250	137.40	36.70	○	×	×	次年度へ繰越し
100486	三頭山	東京都	森林	3	1250	139.03	35.74	○	×	×	調査員と連絡取れず
100487	狭山丘陵	東京都	森林	3	250	139.38	35.78	○	○	○	
100488	多摩川高月町	東京都	草原	6	250	139.33	35.71	○	○	○	
100498	支笏湖野鳥の森	北海道	森林	2	500	141.40	42.77	—	—	—	越冬期不可サイト
100505	野付崎	北海道	草原	1	250	145.34	43.56	—	—	—	越冬期不可サイト
100507	湯野浜	山形県	森林	4	250	139.77	38.81	○	×	×	次年度へ繰越し
100509	比良山	滋賀県	森林	5	250	135.89	35.22	—	—	—	越冬期不可サイト
100510	美東	滋賀県	森林	6	1250	136.41	35.42	—	—	—	越冬期不可サイト
100528	横倉山	高知県	森林	8	750	133.20	33.53	○	○	○	
100532	月山	山形県	森林	4	1750	140.01	38.54	—	—	—	越冬期不可サイト
100542	福岡西南部	福岡県	森林	8	500	130.35	33.52	○	○	○	
100556	スビナイ川上流	北海道	森林	1	500	143.09	42.45	×	—	—	越冬期不可サイトへ
100560	武佐岳	北海道	森林	1	500	144.88	43.65	○	○	○	
100573	京都東北部	京都府	森林	5	750	135.83	35.07	○	○	○	
100578	白神山地天狗岳	青森県	森林	4	750	140.09	40.53	×	×	×	次年度へ繰越し
100582	嘉瀬川	佐賀県	草原	8	250	130.25	33.22	○	○	○	
100583	サロベツ原野	北海道	草原	2	250	141.69	45.11	○	○	×	解析に間に合わず
100589	雁俣山	熊本県	森林	8	1250	130.91	32.58	○	○	×	返送待ち
100590	信太山	大阪府	草原	7	250	135.45	34.50	○	○	○	
100591	尾瀬	群馬県	草原	4	1500	139.24	36.94	—	—	—	越冬期不可サイト

[凡例]調査依頼(○:依頼した、×:依頼していない、—:越冬期不可サイト)

調査実施(○:実施済み、×:実施できず、—:越冬期不可サイト)

データの解析可否(○:解析可、×:解析に用いず)

備考:解析可否判断根拠

a) 記録鳥類

出現率は全調査サイト数に対してその種が出現したサイトの割合 (%) とした。優占度は各サイトで記録された全種の個体数に対するその種の個体数の割合 (%) を算出し、それを全サイトで平均した値とした。これらの上位 10 位までの種を、モニタリングサイト 1000 第 1 期 (2003~2007 年度、本調査は 2004 年度の越冬期から開始) を踏まえて第 2 期 (2008~2012 年度) の傾向と比較した。

b) 森林サイトにおける植生の階層構造と鳥類の種多様度の関係

鳥類データと植生データの両方が得られた森林サイトは 56 か所であり、これらについて解析を行った。森林サイトにおいて、植生概況調査の結果から求めた群葉高多様度 (FHD) が高くなるに従って、繁殖期の鳥類の種多様度 (BSD) が高くなる傾向があるかを Spearman の順位相関係数と単回帰分析で解析した。ただし、この分析では、極端に低い多様度を示した 1 サイト (山形県 [100532 月山]) を除き、55 か所を対象とした。鳥類の種多様度は、50m 以内に出現した種とその個体数のデータを用いて計算した。鳥類の種多様度も群葉高多様度と同様に Shannon-Weaver 関数であり、ある種の出現個体数と、全種の出現個体数から求めた (計算式の詳細は、「Ⅲ 3. 植生概況調査 (3) 1) 集計・解析方法」を参照のこと)。

c) 草原サイトにおける環境の構造と鳥類の種多様度の関係

本年度は、草原サイトが繁殖期 13 か所、越冬期 14 か所のみだった。これは、昨年度より少ないが例年並のサイト数である。過年度同様に統計解析を行なうにはサンプル数が不十分であると判断したため、単年度での解析を見送った。これは、草原サイトは 5 年 1 期単位での解析を前提としたサイト数設計を検討して開始されたことによるものである。

d) 外来種

在来生態系への悪影響が懸念される外来種について、繁殖期における記録地点、生息状況を記載した。なお、解析にあたっては調査回数の不足等で個体数等を用いた解析には不可としたサイトについても、在不在情報では使用可能として、解析に用いた。また、記録地点を前年度または第 6 回自然環境保全基礎調査の分布域 (環境省自然環境局生物多様性センター 2004) と比較した。

2) 記録鳥類

a) 2017 年度繁殖期

2017 年度繁殖期には、データ解析が可能な 72 サイトで合計 140 種の鳥類が確認された。これは 2016 年度：164 種（84 サイト）、2015 年度：143 種（84 サイト）、2014 年度：155 種（84 サイト）、2013 年度：132 種（63 サイト）と比較すると、過去 5 年間でサイト数と種数の両方で下から 2 番目の値となった。

過年度の本報告書では、調査サイト数の増減が出現種数の増減の一因であると考えられており、今年度の結果は同様の結論を導けるといえよう。なお、昨年度は、調査サイト数が一昨年度、二昨年度と同数であるにもかかわらず、出現種数は一昨年度より 21 種多く、過去 5 年間で突出して種数が多かった。これは、出現した種構成の比較より、昨年度の考察では、湖畔や草原環境を含む森林サイトの存在によって、水辺に生息する種や草原性の種が森林サイトで出現する状況を生み出し、平年より突出した種数増加につながったと推察していた。この昨年度の考察は、本年度の出現種や二昨年度以前の確認された種に、草原性の種や水鳥がほとんど含まれなかったことから支持されたといえよう。

次に、森林及び草原サイトにおける出現率、優占度の上位種をそれぞれ示した（表Ⅲ-2-3～Ⅲ-2-4）。森林サイトにおける第 1 期（2004～2007 年度）及び第 2 期（2008～2012 年度）の出現率の上位 10 種は、年により種や順位の多少の入れ替わりがあるがほぼ一致していた。第 1 期～2016 年度までの各年の出現率の上位 10 種に含まれた種は、アオバト、イカル、ウグイス、オオルリ、キジバト、キビタキ、コゲラ、シジュウカラ、ツツドリ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、ホトトギス、メジロ、ヤマガラ（五十音順）であった。今年度の傾向は過年度と同様であった。昨年度は、2013 年度以来の新しいランクイン種としてアオバトがあったが、今年度は上位 10 種構成の更新はなかった。

過年度では長年、出現率の 1 位はウグイスで安定しており、今年度も同様であった。なお、昨年度、ウグイスは上位種ではあったものの、ハシブトガラスが初めて 1 位となり、ウグイスが 2 位に後退していたが、その傾向は継続しなかった（図Ⅲ-2-1）。今年度、ハシブトガラスは出現率 5 位であるが（図Ⅲ-2-1）、これは過年度の多くの年と同様の順位の位置である。また、ほとんどの年で出現率 2 位であったシジュウカラは、今年度も 2 位となっていた。本種についても昨年度は例外的に出現率 7 位と大きく順位を落としたが、今年度は再び順位を戻していた。昨年度のみに見られた上位種の順位変化は、ハシブトガラスの出現率の微増と、その他の上位種（ウグイス、シジュウカラ）の出現率の低下が同時に起こったことによる結果であると推察されていた。今年度のウグイス、シジュウカラの出現率は過去の多くの年と同様の値であることから、昨年度の考察を支持する結果といえるだろう。昨年度に見られた過去にない種の相対関係の変化が、数年に一度起こる偶発的な事象なのか、調査地の入れ替わりによる一時的なものなのか、それとも今後も継続する新たな変動の起点となるのかは、昨年度の時点では判断できず、後年の結果による考察が必要となっていたが、今年度の結果からは、昨年度の結果が少なくとも継続的な結果ではな

い可能性があると考えられる。ただし、今年度1年のみの結果からは早急に結論を出すことは出来ない為、引き続き、今後の長期モニタリングを通じて、こうした優占種の変動に注意する必要がある。

草原サイトの出現傾向は、今年度についても過去と同様の傾向で畑地・里山の鳥種が上位を占めた。草原サイトでは、森林サイトよりも種の入替わり及び上位10種間の順位の入替わりが激しい傾向にあることが、これまでの解析から明らかになっている。この変動は、もともと草原サイトの調査地点数が森林サイトに比べて少ないことと、草原サイトの環境は多様で生息する種の相異も大きく、その中から単年度では限られたサイトのみ調査していることに起因すると考えられる。これは、過年度の植生データの解析で、年度間の草原サイトの環境のばらつき度が森林サイトより大きいという結果に裏付けられている。調べたサイトの環境が年度毎に異なれば、出現する鳥類種も変化するのは自明である。草原サイトの出現種については、単年度ではなく、1期（5年間）のデータの取得を待って期間単位で比較・解析することが妥当である。

b) 2016年度越冬期

2016年度越冬期には、合計126種が確認された。これは2015年度の123種、2014年度の118種、2013年度の104種、2012年度の107種と比較すると、過去5年間の中では変動の範囲内に納まらず、もっとも多い値を示したが、昨年度からの増分はわずかであった（5種）。今年度の調査サイト63か所（森林49、草原14）について、昨年度の60か所（森林48、草原12）、一昨年度の59か所（森林48、草原11）、と森林サイトのみを比較すると、今年度は94種、昨年度は94種、一昨年度は97種と、サイト数・出現種数ともに同等に推移していた。草原サイトは、調査サイト入れ替えに伴う出現種の構成が変化しやすく、年度間比較には向かない。森林サイトのみに着目して比較した結果から、大きな経年変化はないと結論づけられる。これらより今年度の総種数の増加は、草原サイトにおける種数変化が主要因であり、今年度の越冬期の種数は平年並であったと推察される。

次に、越冬期の森林における出現率、優占度の上位10種をそれぞれ示した（表Ⅲ-2-5）。なお、草原サイトは調査地点数が少ないため、昨年度と同様に算出を見送った。第1期～2015年度の各年度における森林サイトの出現率の上位10種に含まれた種は、アオジ、ウグイス、ウソ、エナガ、カケス、カワラヒワ、キジバト、コゲラ、シジュウカラ、シロハラ、ツグミ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ、ルリビタキ（五十音順）であり、年度により順位に多少入れ替わりはあるものの、種構成と順位の傾向は毎年おおむね一致していた。2016年度については、種構成に変化はなく一昨年以前に多く見られた傾向と同様であった（図Ⅲ-2-2）。なお、昨年度は一部順位の入替わりが認められていた。過去5年間の最上位種はヒヨドリかハシブトガラスであったが、昨年度はコゲラが2010年度以来出現率1位となった。また、昨年度の本種の出現率は90%を超えており、過年度と比べても高い値となっていた。しかし、今年度は出現率4位（81.6%）であり、これは過

去年度並の値と順位である。

近年、出現率の順位変動が見られた種がいくつか存在し、その動向に着目した。シジュウカラはこれまで中程度の順位に留まっていたが、二昨年度前に上昇し出現率3位、一昨年度は過年度と同じ4位に後退後、昨年度は再び3位となり、今年度も3位であったため、上位3-4位に定着したと考えられる。また、2013年度に出現率2位まで上昇したヤマガラは、二昨年度前に5位まで後退した後、昨年度は再び3位まで順位を上昇し、今年度は再び5位へと順位を落としている。これらカラ類の出現率は、一昨年度前の70%台から今年度の90%近くまで上昇しており、以前は一時的かどうか確定できなかった両種の増加傾向について、幾分の示唆が出てきたといえるかもしれない。ゆるやかな増加傾向後に、そのまま安定して現在に至っている可能性を否定できない。前述したコゲラの順位上昇などと合わせて、種構成の変動が起こっている可能性がある。経年変化を把握可能である本調査において、繁殖期同様に越冬期についても、今後の長期モニタリングを通じて優占種の変動を注視する必要がある、引き続き将来の結果を踏まえた判断が必要である。

表Ⅲ-2-3. 2017年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n=60)			b) 草原 (n=12)		
順位	種名	出現率(%)	順位	種名	出現率(%)
1	ウグイス	97.7	1	ウグイス	91.7
2	シジュウカラ	88.3	1	カッコウ	91.7
3	キビタキ	80.0	1	ハシブトガラス	91.7
3	ヒヨドリ	80.0	4	シジュウカラ	83.3
5	ハシブトガラス	78.3	4	モズ	83.3
6	ヤマガラ	76.7	5	アオジ	75.0
7	コゲラ	73.3	5	カワラヒワ	75.0
8	オオルリ	68.3	5	キジバト	75.0
8	キジバト	68.3	5	ハシボソガラス	75.0
10	カケス	65.0	5	ヒバリ	75.0

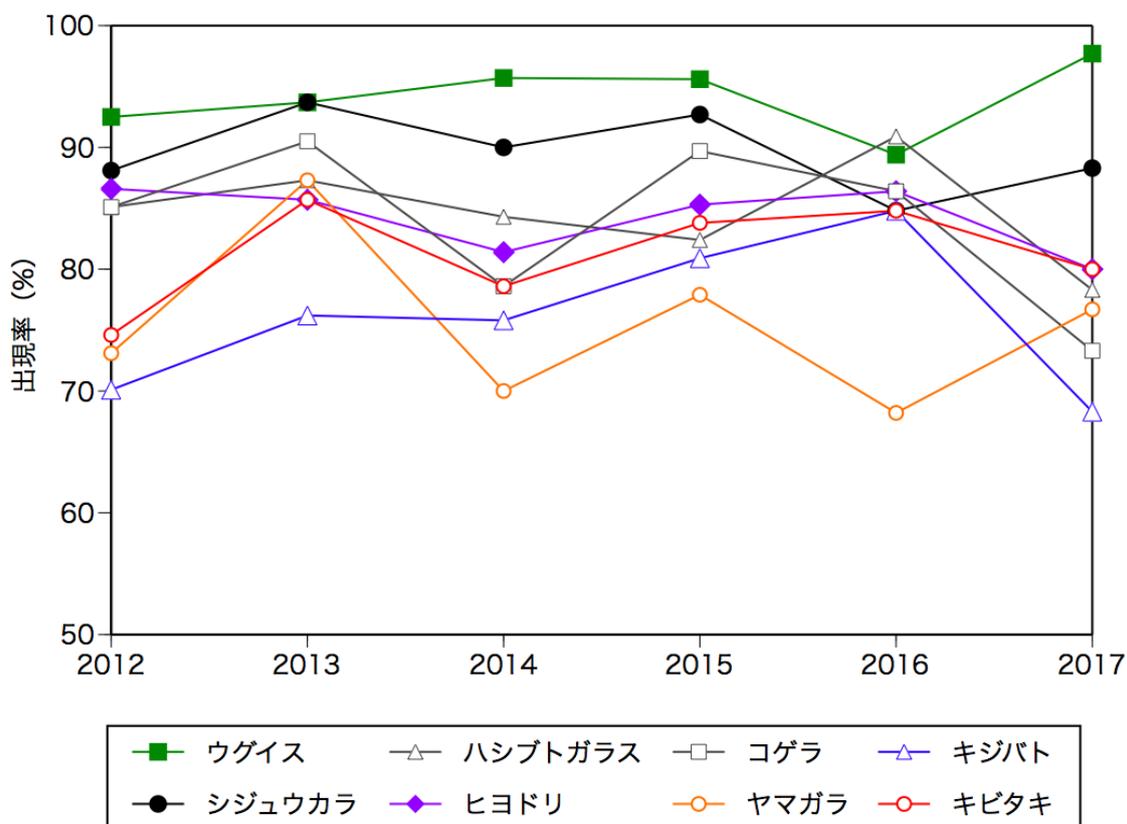
表Ⅲ-2-4. 2017年度繁殖期の優占度の上位10種

a) 森林 (n=60)

順位	種名	平均優占度
1	ヒヨドリ	9.2
2	ウグイス	7.3
3	シジュウカラ	5.2
4	ハシブトガラス	5.1
5	メジロ	4.2
6	キビタキ	3.9
7	オオルリ	3.2
8	ヤマガラ	3.2
9	ヒガラ	3.1
10	エナガ	2.6

b) 草原 (n=12)

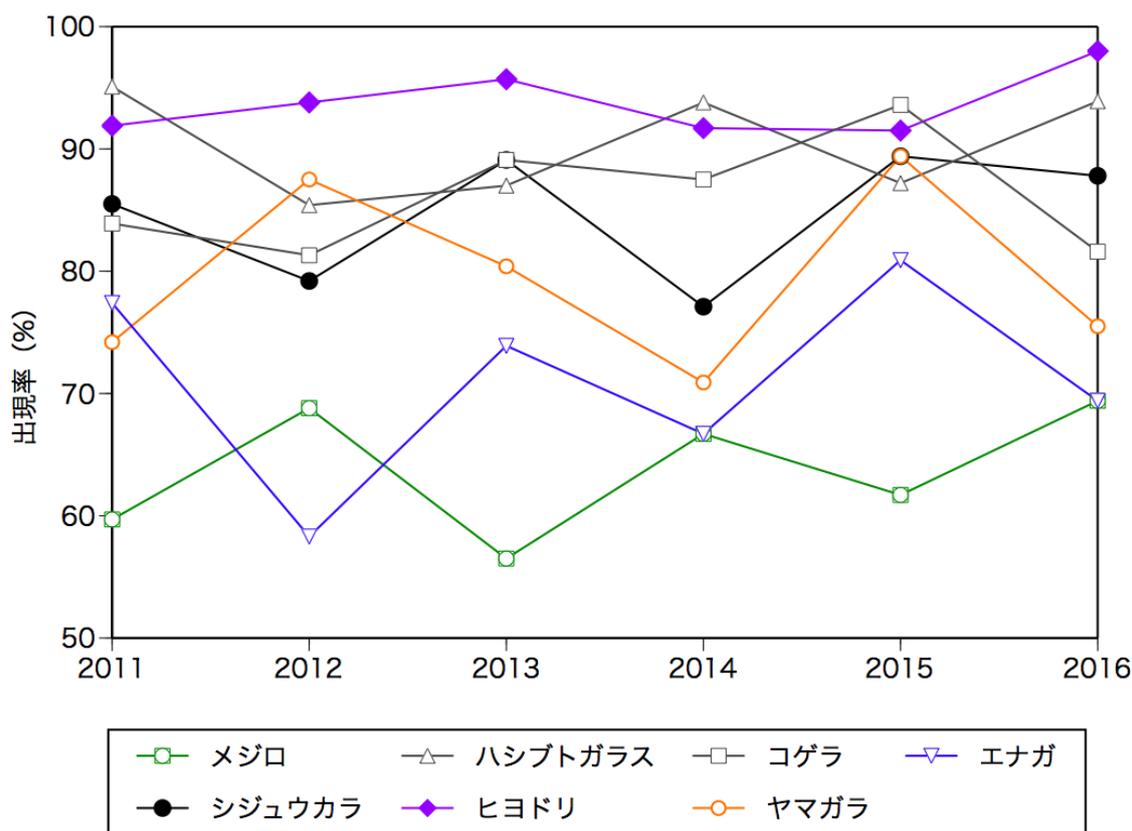
順位	種名	平均優占度
1	ウグイス	6.3
2	カッコウ	5.9
3	ムクドリ	4.2
4	ホオアカ	3.5
5	ノビタキ	3.3
6	ハシボソガラス	3.3
7	ハシブトガラス	3.3
8	アオジ	3.0
9	モズ	2.9
10	トビ	2.7



図Ⅲ-2-1. 出現率上位種における過去5年間の推移(森林・繁殖期)

表Ⅲ-2-5. 2016年度越冬期の出現率と優占度の上位10種

a) 森林 出現率 (n=49)			b) 森林 優占度 (n=49)		
順位	種名	出現率(%)	順位	種名	平均優占度
1	ヒヨドリ	98.0	1	ヒヨドリ	14.1
2	ハシブトガラス	93.9	2	ハシブトガラス	11.1
3	シジュウカラ	87.8	3	エナガ	6.1
3	コゲラ	81.6	4	メジロ	5.5
5	ヤマガラ	75.5	5	シジュウカラ	5.2
6	エナガ	69.4	6	ヤマガラ	5.1
7	メジロ	69.4	7	マヒワ	4.6
8	ウグイス	55.1	8	コゲラ	3.3
8	シロハラ	55.1	9	アトリ	3.3
10	キジバト	53.1	10	シロハラ	2.9



図Ⅲ-2-2. 出現率上位種における過去5年間の推移(森林・越冬期)

3) 植生の階層構造と鳥類の種多様度の関係

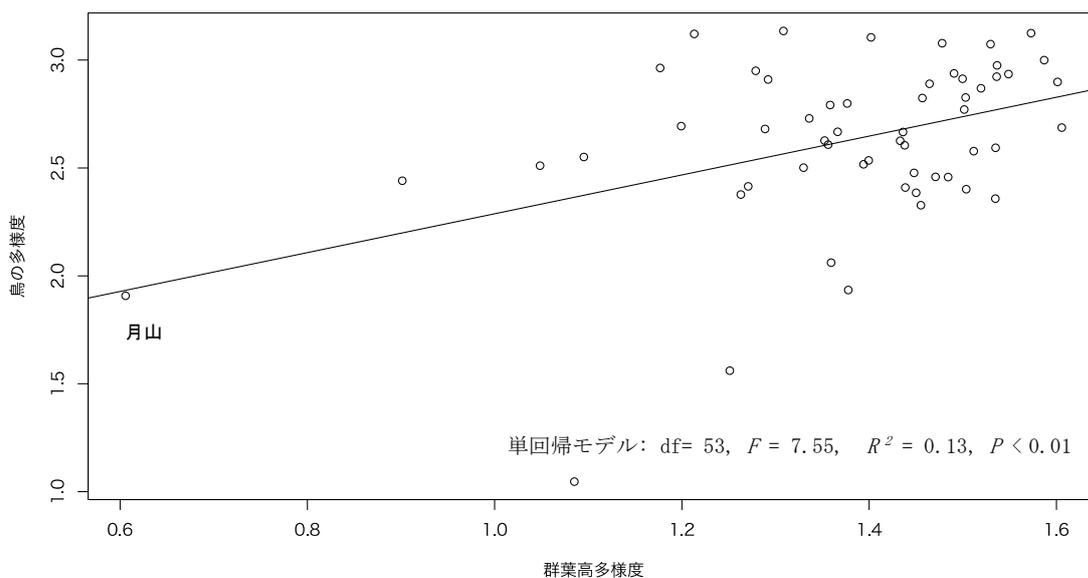
a) 森林サイトにおける植生の階層構造と鳥類の種多様度の関係（繁殖期）

森林サイト 56 か所で群葉高多様度と鳥類の種多様度の両方を算出した（群葉高多様度： 1.44 ± 0.18 SD、鳥類の種多様度： 2.67 ± 0.39 SD）。鳥類の種多様度と群葉高多様度の間に有意な関係が認められた（図Ⅲ-2-3、 $P < 0.01$ 、Spearman の順位相関係数： 0.28 ）。ただし、これは図中における群葉高多様度と鳥類の種多様度が極端に低い 1 サイト（山形県 [100532 月山]）を除いた 55 サイトを対象に解析した結果である。このサイトは標高約 1,600m の亜高山帯に位置し、高標高地に特徴的な樹高の低さを示すサイトである。高木層は無く、樹高 10m 以下の背の低い低木層の木々の通常の林の林冠に相当する。また、地点のいくつかは林床の草木が主体であり林ではない。このように高標高地については、森林限界が近いケースなどで、植生の多様性が乏しいことがよくある。生息する鳥類もメボソムシクイやカヤクグリ、ビンズイ等、亜高山～高山帯の種が出現しつつ、やや限定的な種構成となっているが、本サイトについては種多様度が特別低いということはない。種多様度が極端に低いわけではないが、群葉高多様度が突出して低かったため、念のため今年度の解析においてはこのサイトのデータを外れ値として除外して解析した。なお、昨年度に外れ値としたサイトは、種多様度と群葉高多様度の両方が極端に低かった 1 サイトだったが、本年度は同様のサイトは無かった。その結果、相関が検出された 2012 年度や 2013 年度と同様に、相関関係が検出された。

過年度の解析結果から、単年度の解析では両者の相関が検出される年度とされない年度があることが分かっている。昨年度は、第 2 期、第 3 期を通じて初めて 3 年度連続で、この相関関係が検出されなかったため、両者の関係の変化を注視していた。今回、あらためて群葉高多様度が高くなるに従って鳥類の種多様度が有意に高くなる傾向が検出された。ただし、両者の相関関係は強くない。これは、傾向が検出された過年度において、両者の相関関係が検出されても、その決定係数の値は小さく、回帰式の説明力は弱かった点と同様である。

過去の検討においては、群葉高多様度と鳥類の種多様度の関係は誤差が大きく、回帰直線の当てはまりが良いものではないと考えられている。今年度の結果もそれを踏襲する傾向となった。本調査では、群葉高多様度を 6 階級に分類した粗いデータから求めていることから、その誤差が大きくなりやすい。第 2 期では、有意な傾向が得られた年度と得られなかった年度が混在したが、5 年間をまとめて分析した第 2 期全体では、両者の有意な相関関係が検出されている（第 2 期とりまとめ解析報告書における多変量モデルを用いたモデル選択による解析において、群葉高多様度はベストモデルに含まれ、係数は統計的に有意に正であった。詳細は上記報告書を参照のこと）。第 3 期においても同様に、単年度の解析では検出が難しく、5 年間を通じて十分なサンプル数を取得すれば、全体で傾向が検出されると予想される。前述のように、本モニタリングの植生データは、データの取得精度が粗いため、植生と鳥類の関係の結びつきが弱いデータセットでは、相関関係が検出され

にくいという問題点を含む。しかし、本調査のデザインはこの問題を複数年（5年）の連続調査によるサンプル数（サイト数）の増加でカバーする調査設計がなされており、現在の結果の傾向であれば、この点は問題にならないと考えられる。今後もモニタリング体制の維持に注意し、第3期全体での傾向の分析では、第2期との比較を行なうことが重要であろう。

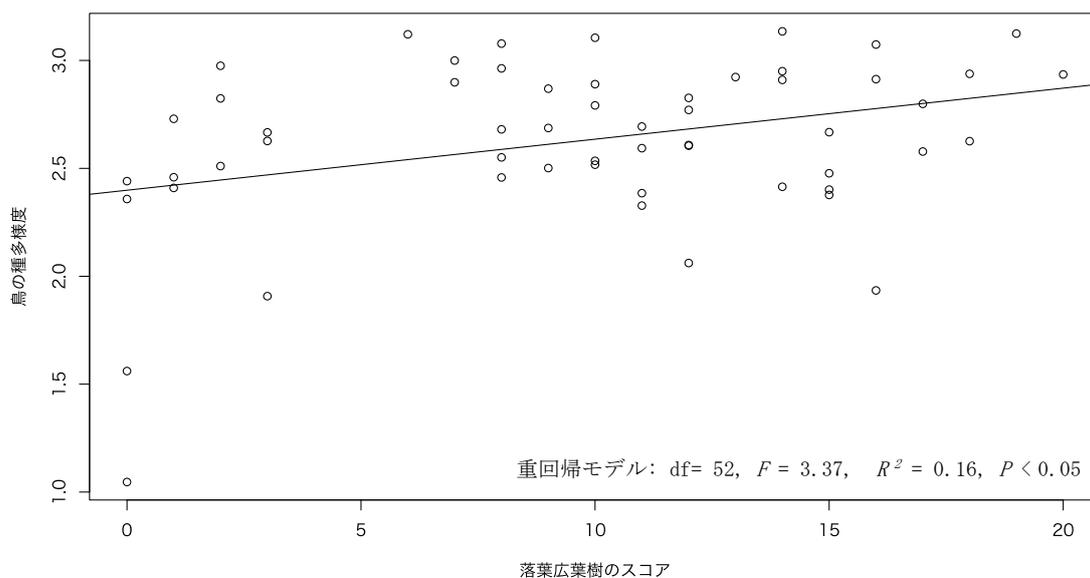


図Ⅲ-2-3. 森林サイトの群葉高多様度と鳥類の種多様度の関係(2017年度繁殖期)

b) 森林サイトにおける植生のタイプと鳥類の種多様度の関係（繁殖期）

森林サイト 56 か所で優占する森林タイプと鳥類の種多様度の関係について、検討可能なデータを得たため、落葉広葉樹と常緑広葉樹について検討した。過年度における樹種カテゴリの主成分分析の結果を受けて、落葉広葉樹と常緑広葉樹は反比例の関係にあるといえる。そこで、落葉広葉樹と常緑広葉樹の比（第1位が落葉広葉樹のプロット数 / (第1位が落葉広葉樹のプロット数 + 常緑広葉樹のプロット数)）と鳥類の多様度がどのような関係をもつかを検討した。この比はいわば、調査サイトが落葉広葉樹的か常緑広葉樹的なのかという森林タイプの傾向を示す。落葉広葉樹のスコア（プロット数）、常緑広葉樹のスコア（プロット数）及び両者の交互作用項を説明変数とし、鳥類の多様度を応答変数とした重回帰分析の結果、このモデルは有意であった（図III-2-4、重回帰モデル：df= 52, $F = 3.37$, $R^2 = 0.16$, $P < 0.05$ ）。

過年度（例えば昨年度）において、この相関関係が検出された際には、説明力が弱いながらも、落葉広葉樹のスコアのみを説明変数としたモデルで説明されており、落葉広葉樹の量（のみ）と鳥類の種多様度の正の相関関係が示唆されていた。今年度も同様に両者の関係が示されたが、単年度の分析では相関が検出されない年度もあり、一昨年度や二昨年度は検出されていない。第2期同様に、第3期（5年間）全体を通じて解析すれば、傾向が検出されると考えられるが、前述したように、今期に傾向が検出されなかった年度が複数あり、昨年度時点では結論を予測することはできなかった。今年度の結果からは、第3期全体では第2期同様に両者の関係が検出される可能性があり、どのような結果が出るか、第3期終了時における総合的な解析が必要である。



図III-2-4. 森林サイトの落葉広葉樹のスコアと鳥類の種多様度の関係(2017年度繁殖期)

c) 草原サイトにおける環境の構造と鳥類の種多様度の関係（繁殖期）

草原サイト 12 か所で環境の多様度と鳥類の種多様度の両方が算出できたが、サイト数が少なく統計解析に十分なサンプル数を確保できていないことから、両者の関係の検討を見送った。

草原サイトは例年調査サイト数が少なく、かつ、森林サイトに比べて値の分散も大きい。また、本調査では群葉高多様度を 6 階級に分類した粗いデータとなっている（詳細前述）。これらの理由により、データの誤差が非常に大きく、変数間の関係を検討することが難しい。特に単年度での解析は困難であるため、1 期（5 年間）全体を通して解析を行なうことが妥当である。1 期を通じた過年度の解析結果については、第 2 期とりまとめ解析報告書を参照のこと。

4) 外来種

外来種は、インドクジャク、カワラバト（ドバト）、ガビチョウ、コジュケイ、ソウシチョウが記録された。いずれの外来種も、過年度に既に記録のある種である。

カワラバトは東京都 [100488 多摩川高月町]、広島県 [100147 七塚原]、沖縄県 [100477 古宇利島] の3か所で記録された。この記録数は例年よりも少ない（例えば、昨年度は8か所）。本種は本来、森林を生息地としないため、記録されにくい。また、草原に生息する可能性があるが、それ以前の問題として、野鳥観察者の長年の習慣・慣例として調査者が野鳥でないと認識し意図的に記録していない場合もあり、今年度はその影響が大きい可能性がある。インドクジャクは沖縄県 [100178 於茂登岳登山道] の森林サイト1か所のみで記録された。

第1期とりまとめ解析報告書では、コジュケイ、ガビチョウ、ソウシチョウの3種のモニタリングの必要性が指摘されている。特に、ガビチョウとソウシチョウについては、在来生態系に大きな影響を及ぼすおそれがあるとして、外来生物法で特定外来生物に指定されている。本調査では、継続してその動向に注意してきた（図Ⅲ-2-5）。

2017年度繁殖期において、コジュケイは、草原サイトでの記録はなかった。森林サイトでは、群馬県、千葉県、山梨県、静岡県、山口県、大分県（2）、長崎県の8か所で記録された。これは過去5年の2016年度の18か所、2015年度の19か所、2014年度の11か所、2013年度の18か所と比較するともっとも少なかった。過年度まで本種については、この数年間は出現頻度に増減はないものと考えられてきた。例えば、2013年度までの調査結果と第6回自然環境保全基礎調査（環境省自然環境局生物多様性センター 2004）で確認された分布を比較しても、大きな変化は認められない。過去5年でもっとも少なかった2014年度は、今年度同様に草原サイトでの記録がなく森林サイトのみで記録され、その数は森林71地点中11か所（15.6%）であった。今年度の出現率（13.3%）はこれを下回っており、本種が減少傾向にある可能性があるのか、それとも今年度の結果が偶発的であるのか、次年度以後の結果から総合的に検討する必要がある。

ガビチョウは、草原サイトでは記録されず、森林サイトでは福島県、群馬県、山梨県（2）、静岡県、熊本県、大分県（2）の8か所で記録された。これは2016年度の9か所、2015年度の8か所、2014年度の11か所、2013年度の7か所とほぼ変わりなかった。本年度と過年度における調査サイト数と出現サイト数を考慮すると、本種の出現頻度は例年並みであった。

ソウシチョウは、森林性であるため草原サイトでの確認は稀だが、今年度は大分県の1か所で確認された。森林サイトでは、茨城県、静岡県（2）、大阪府、鳥取県、高知県（2）、福岡県、大分県（2）、長崎県（2）、熊本県（2）、宮崎県、鹿児島県の16か所、合計17か所で記録された。これは2016年度の合計10箇所（森林8、草原2）、2015年度の合計16箇所（森林15、草原1）、2014年度の合計19か所（森林19、草原0）、2013年度の13か所（森林12、草原1）と比較すると、草原サイトと森林サイトの両方で例年並で

あった。昨年度は森林サイトでの確認された地点数が大きく減少した結果となっており、これが偶発的な結果であるのか、減少傾向であるのか、着目した。本種は、第2期に入ってから第1期と比較して出現地点数及び優占度の増加傾向が続いた後、近年の確認頻度は横ばいであると推察されていた。今年度の結果からは、昨年度の結果が偶発的で本種は変わらず横ばいである可能性があるが、今後の動向に更なる注意を要する。

一般サイト調査における各サイトの調査頻度は、概ね5年に1回となっている。したがって、各年度の調査サイトは前年度の調査サイトとほぼ入れ替わっているが、そのいずれの年度でも複数のサイトで、これら3種の外来種が継続的に確認されてきた。この「サイトが入れ代わっても、似た頻度で常に確認されている」という事実から、これら3種が日本全国の広域に侵入・定着していると考えられる。コジュケイの分布については、二昨年度から今年度まで継続して、関東より北での記録がなかった。本種は日本への移入時期が比較的古い外来種であるが、近年は狩猟放鳥数も激減しているため、その影響が表れてきている可能性があるとして、昨年度に考察した。本年度の結果は、過年度のこの考察を支持する結果となった。一方で、関東以南の確認サイト数が減っていないことから、関東以南では個体群が安定して維持されている可能性を過年度に指摘したが、本年度の結果はこうした地域においても本種が減少する可能性も考えられるため、今後のコジュケイの全国分布動向にさらなる注意を要する。

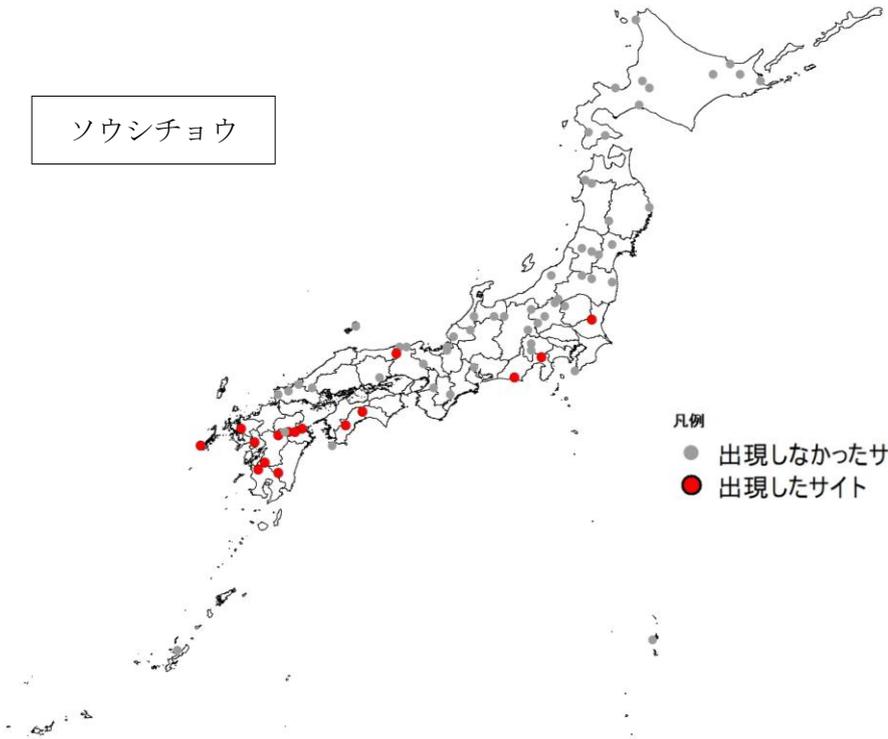
日本国内への侵入が比較的新しい外来種であるソウシチョウとガビチョウは、調査サイトの入れ替えがあっても毎年各地で確認され続けてきたことや、確認数が増加してきたことから、分布域の拡大が懸念されていた。今回の結果は、これらの新しい外来種が、既に全国規模で広域に定着し、個体数を維持している可能性をさらに強く示唆した。特にガビチョウは、本調査では過年度に記録されていない日本海沿岸部でも標識調査等による記録（出口ら 2016）が近年になって得られたことから、さらに分布の拡大が進行していると考えられる。

ソウシチョウについては、拡大の懸念と同時に、本種が好む環境をウグイスも同様に好むことから、在来種であるウグイスの生息状況に本種の存在が悪影響を及ぼす可能性（江口・天野 2008）が懸念されてきた。しかし、近年、シカの影響によって藪が減少しウグイスが確認されなくなったように、ウグイスが好む藪環境そのものが減少しソウシチョウも減少する可能性が指摘されている（詳細は、28年度本報告書「II 2. 鳥類調査（3）3」d. 繁殖期鳥類の特徴的な変化）を参照のこと。）。これらの動向を把握するためには、他の外来種や在来種の分布域や出現頻度の変化と合わせて、継続的なモニタリングの実施が重要である。

ガビチョウ



ソウシチョウ



凡例
● 出現しなかったサイト
● 出現したサイト

図Ⅲ-2-5. 2017 年度繁殖期におけるガビチョウとソウシチョウの記録地点

5) 分布域の高緯度への移動

近年、大規模気候変動などに伴う鳥類を含めた生物の分布の変化と北上が懸念されている。本調査においても、亜種リュウキュウサンショウクイで分布の変化を捉えうる可能性（三上・植田 2011）を継続的に検討してきた。本年度の繁殖期調査において、本亜種は、草原サイトでは1か所で確認された。本亜種は昨年度まで4年度連続で確認されていなかったが、これまでの結果とは異なっており、本亜種の分布の拡大である可能性がある。なお、森林サイトでは大分県、高知県（2）、熊本県、鹿児島県の5か所で記録された。過去5年の記録地点数を見ると、6→6→6→2→5（今年度）と変化していた。同程度の確認地点数が毎年度続いていたが、調査サイト数の変動の影響を考慮すると、今年度の確認サイト数は例年並であった。昨年度は減少しており、これが一時的なものなのか着目していたが、昨年度の結果は偶発的であった可能性がある。本種についても、長期的なモニタリングの継続が必要である。

本亜種の分布については、毎年度九州南部にて記録があり、これは今年度も同様であった。過去5年間に記録された地域は、沖縄県・鹿児島県・熊本県・宮崎県・佐賀県・福岡県・高知県・徳島県・愛知県であり、今年度は新たに記録された地域に大分県が入った。2013年度には愛知県で記録されており、これが本亜種の繁殖期における分布の北限となっているが、今年度はこうした北上傾向は確認されなかった。本亜種の分布域の拡大及び北上傾向についても、今後のモニタリングの継続と情報収集が必要となる。

3. 植生概況調査

(1) 調査方法

一般サイトにおける植生の調査方法は、コアサイト・準コアサイトでの調査方法に準ずる（詳細は、「Ⅱ コアサイト・準コアサイト調査実施状況及び調査結果 6. 植生概況調査 (1) 調査方法」を参照のこと）。

(2) 平成29 (2017) 年度調査結果

繁殖期は森林サイト 57 か所、草原サイト 12 か所、計 69 か所にて植物が展葉している繁殖期に植生概況調査を実施した（表Ⅲ-2-1）。

(3) 集計・解析

1) 集計・解析方法

解析可能なデータが得られた森林サイト56か所について解析した。なお、サイト中の一部地点のみ植生データが欠けているなど、調査票への誤記入と思われるサイトがあったが、調査員への聞き取りや環境写真から値を評価できた場合は補完して本解析に使用した。森林サイトは植生の階層構造について十分なサンプル数を得られているが、草原サイトは各年度の調査サイト数が10か所前後と少なく、単年度での解析は困難である。

森林において鳥類の種多様度と正の関係を持つ傾向が知られている群葉高多様度（FHD）（e. g. MacArthur & MacArthur 1961、Recher 1969）をサイトごとに被度階級に基づいて算出した。群葉高多様度は、各階層の群葉密度から求められるShannon-Weaver関数であり、ある階層における植物被度ランクをFA、全階層のFAを合計したものをFASUM とすると、以下の式で表される。

$$FHD = -\sum_{i=1}^s P_i \ln P_i \quad s: \text{階層数}, P_i: i\text{番目の階層のFAのFASUMに対する割合。}$$

各サイトのFAは、5定点のデータの平均値とした。

一方、草原サイトについては、過年度の結果より単年度での環境構造の解析は、サンプル数が不十分であると判断されたため、1期（5年間）のデータを蓄積して解析する事が妥当である。それゆえ草原サイトについては単年度での評価は見送った。

2) 植生の構造解析

a) 森林サイトにおける植生階層構造

繁殖期の森林サイト56か所において算出した群葉高多様度は、2009-2016年度とほぼ同じだった（図Ⅲ-3-1； 1.38 ± 0.18 SD）。群葉高多様度の最下位より2サイトは、統計的に外れ値であった（長野県 [100457 蓼科]、山形県 [100532 月山]）。

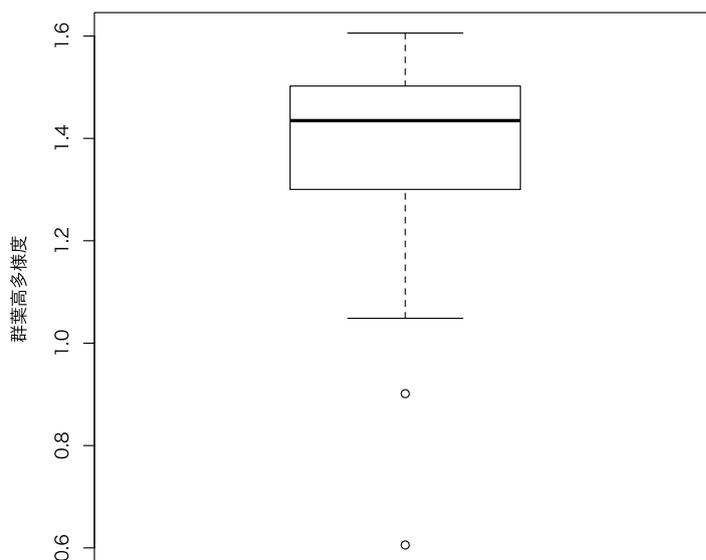
外れ値となった2サイトは甲信越と東北であり、地域的な傾向は無かった。過去5年に

ついでに地域的統一性は、昨年度は外れ値2か所が北海道のみ、2014年度の外れ値は西日本に集中と偏っていたが、2015年度、2013年度の外れ値は地域的統一性が認められていない。5年間をかけて全ての一般サイトを網羅する本調査において、生物多様性保全のための国土10区分や標高帯を考慮し、サイトをバランス良く5回に分配することが重要となる。昨年度の本報告書では、間接的に鳥類の単年度の種構成にも影響するかもしれないサイト構成を調整する必要性を指摘したが、今年度は改善していたといえよう。

最下位であった山形県 [100532 月山] は、前述の通り標高約1,600mの亜高山帯環境に位置し、植生は全体的に低被度であった。森林草原サイトでは、山地の比較的標高の高いサイトが含まれており、毎年1～数ヶ所のそうした地点を含むことが多い。こうしたサイトは樹高が極めて低く高木層等はなく、林床と低木層は、草本ではなくハイマツといった常緑針葉樹が主体となっており、一部に落葉広葉樹が混在する植生構成であることがほとんどである。今年度も同様といえる。次に値が低かった [100457 蓼科] は、標高帯が約2250mに位置し、亜高木層～高木層はシラビソ、コメツガ、ダケカンバが優占する典型的な亜高山帯であるが、一部の地点で植生が乏しかった。

このように、群葉高多様度の値が低かったサイトの植生は、低木層を中心とし上層部が開けた環境であったり、低密度に樹木が生え下層植生も薄い環境であったりした。過年度において値の低かったサイト同様、今年度についても既存の特徴に当てはまっていた。

群葉高多様度と鳥類調査結果との関係については、「Ⅲ 2. 鳥類調査 (3) 集計・解析 3」 a. 森林サイトにおける植生階層構造と鳥類の種多様度の関係 (繁殖期)」に記した。



図Ⅲ-3-1. 森林サイトにおける群葉高多様度の分布 (2017年度繁殖期)

引用文献

- 出口翔大・小川龍司・伊藤泰夫・組頭五十夫・中村勇輝・石原通裕（2016）北陸地方沿岸部におけるガビチョウ *Garrulax canorus* の記録. *Strix* 32: 179-187.
- 江口和洋・天野一葉（2008）ソウシチョウの間接効果によるウグイスの繁殖成功の低下. *日本鳥学会誌*, 57(1): 3-10.
- 環境省自然環境局生物多様性センター（2004）種の多様性調査. 鳥類繁殖分布調査報告書, 263-270.
- MacArthur, R.H. & MacArthur, J.W. (1961) On Bird Species Diversity. *Ecology* 42: 594-598.
- 三上かつら・植田睦之（2011）西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. *Bird Research*, 7: A33-A44.
- Recher, H. F. (1969) Bird species diversity and habitat diversity in Australia and North America. *American Naturalist* 103: 75-80.

IV 資料

1. 調査マニュアル（平成 29（2017）年度調査版）

※本頁以降の頁番号は、資料オリジナルの頁番号となっている。

環境省重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト 1000)

モニタリングサイト 1000 森林・草原調査

コアサイト設定・毎木調査マニュアル

Ver.2 2010年10月 改訂

Ver.1 2004年7月 作成

環境省 自然環境局
生物多様性センター

Ver. 1 作成

新山 馨(森林総合研究所)

柴田 銃江(森林総合研究所)

Ver. 2 改訂・連絡先

財団法人 自然環境研究センター

はじめに

この文章は、モニタリングサイト1000 森林・草原調査のうち、コアサイト内のプロット設定および毎木調査のためのマニュアルです。すでに調査区を設定している方は、このマニュアルを参考にし、調査区の設定や調査方法を再検討してください。ここに書かれたやり方がすべて最善ではありません。追加すべき事項もまだあります。皆さんの意見を取り入れてよりよいものにしたいと思います。しかし、長期のモニタリングのためには、個々のサイトの都合や個人の好みを超えて統一的に行う必要があることもご理解ください。皆様のご協力をお願いします。

目次

1. 調査の目的と意義
2. 基本設計
3. 測量
 - 3.1 面積と形状
 - 3.2 測量方法
 - 3.3 GPS 情報の記録
4. 毎木調査
 - 4.1 初回の毎木調査方法
 - 4.2 初回の毎木調査の入力形式の例
 - 4.3 2回目以降の再測定の毎木調査の方法
 - 4.4 調査道具
 - 4.5 ファイル形式
 - 4.6 データ入力上のお願い
5. 景観写真の撮影
6. 調査区情報の記載
7. 個人情報の取り扱いについて

1. 調査の目的と意義

毎木調査によって、その森林の**種組成**や**構造**、**バイオマス**がわかります。これらのデータは、炭素蓄積量の把握だけでなく、森林の状態と水源かん養力との関係や、森林に依存する生物との関係などを科学的に明らかにする上でとても重要です。調査を継続することによって、それらの経年変動も明らかになります。さらに、個々の樹種について、幹や株の生死や成長を追跡することで、**構成樹種の個体群動態**を推測する重要なデータが得られます。

2. 基本設計

- ・コアプロットの面積は原則的に1ヘクタール（100 m × 100 m）として下さい（図1）。
- ・コアプロット全域で測量し、水平距離で10mごとに杭を打ってください。
- ・落葉落枝・落下種子調査（リター・シードトラップ調査）を実施する場合は、この1ヘクタールの中に25個のリター・シードトラップを設置してください（落葉落枝・落下種子調査マニュアル参照）。20m方形区にトラップ1個の密度です。
- ・胸高周囲長15cm以上のすべての樹木にアルミタグをつけ、毎年、胸高周囲長を測定してください（図2）。

3. 測量

3.1 面積と形状

他のコアプロットと比較しやすくするため、面積や形状は、1ヘクタール（100 m × 100 m）として下さい。

3.2 測量方法

測量は簡易コンパス（牛方トランジットコンパス）以上の精度のもので測量し、必ず水平距離で10mごとに杭を打ってください。起点を（0,0）とし、杭には（10,30）のようにメートル単位のX,Y座標を黒マジックか黒ペンキで描いてください（図1左）。この際、起点からY軸方向を向いて右側にむかってX軸が出るようにしてください（図1右のようにならないようにする）。

また、図1のような調査区の形状および座標の取り方を示した図を作成してください。特に、形状が100 m × 100 mではない場合や、座標の取り方が特殊な場合は必ず作成してください。作成した図は、毎木調査データとともにネットワークセンターに提出してください。

3.3 GPS情報の記録

プロットの4隅の緯度・経度（世界測地系（WGS84））を同一のGPSで計測・記録してください（任意事項）。

4. 毎木調査

毎木調査は、最初の毎木調査と2回目以降の毎木調査に分けて記述しています。使う台帳の様式に一部、違いがあるのでご注意ください。毎木に使用するアルミタグ（図3）とスチールメジャー（図4）、ステンレス釘（図5）、ステンレス針金はネットワークセンターがまとめて購入し、各サイトに送付します。その他の必要な消耗品は各サイトで購入するか、既存のものをお使いください。

4.1 初回の毎木調査方法

- ・毎木調査は10m×10mの方形区を単位として行います。
- ・胸高周囲長が15cm以上のすべての幹を対象に測定を行います。胸高直径5cmを下限とすると胸高周囲長では15.7cmが下限になりますが、測定誤差と簡便さを考え**胸高周囲長15cm**を下限とします。
- ・まずステンレスの釘を打ち、アルミのタグをステンレスの針金でステンレスの釘からつり下げます。このときアルミタグの下端が、幹の山側から見て、胸高（1.3m）になることが重要です（図6）。ただし、高積雪地などではステンレス針金でアルミタグをつり下げる方法は不適です。その場所の環境条件にあった方法で樹木番号付けをすることをおすすめします。風が強く、タグの磨り減りが激しいサイトではアルミのハトメをタグの穴にかぶせて補強する方法もあります（図3右）。
- ・このアルミタグの下端（胸高1.3m）の周囲長をスチールメジャー（タジマ、エンジニアポケット10m）でmm単位まで測定し、記録します。**直径巻き尺や輪尺は決して使わないでください。**このスチールメジャーは始点の0が先端から約10cmの位置から始まるので、木に巻きつけたときに0ラインの上で胸高周囲長の値を正確に読むことができます（図7）。ただし、0ラインの下では正確に値が読めないため、メジャーを交差させたときの2本のメジャーの上下関係に注意してください（図8）。誤差の原因になるはげ落ちやすい樹皮やこけなどは簡単に手や金槌でこそげ落としてから、周囲長を測定してください。測定後、必ず測定位置に赤スプレーで半周ほど、細いラインを吹き付けてください（図7）。太い木（周囲長100cm）や変形した幹、こぶや枝分かれで1.3mよりずれて測定した場合は特に赤スプレーを忘れずに測定位置に吹き付けてください。
- ・樹種の同定をして、胸高周囲長とともに調査台帳に記入します。樹種の同定が難しいときは必ず標本を採って同定し、標本は保存してください。
- ・幹の根元位置の10m方形区内でのX、Y座標を、(3.1m, 2.6m)のように測定し（できるだけ正確に）、台帳に記入しておきます。地形が複雑な場合は、普通の50m巻き尺をX軸方向に10m分引いておくと、幹の位置の確認が容易になります。
- ・毎木調査の現地での測定単位は個体ではなく幹です。したがって、株立個体のように、同じ個体に胸高周囲長が15cm以上の幹が複数ある場合は、それらすべてにアルミタグをつけ胸高周囲長を測定します。そして、それらの幹が同一の個体由来であることを示すため、「**個体のタグ番号**」欄に、**その株を代表する番号を記入します**。例えば、下記の初回毎木用台帳（表1）のA3、A4、A5のコシアブラの場合、それぞれの幹の「個体のタグ番号」欄に、A3、A3、A3というように記入します。念のため、調査台帳の備考欄に“A3と同株”のように、必ず同株であることのコメンを記入し

て下さい。

- ・ツルが巻き付いていて、ツル込みでしか胸高周囲長が測定できないときは、備考に必ず“ツル込み”と、コメントを書いてください。
- ・斜めになった幹、倒れた幹でも生きている場合は、根元位置から 1.3m で同じように測定して（図 6）、タグを付けてください。その際は備考欄に“斜め”や“倒れ”等のコメントを忘れずに記入してください。

4.2 初回の毎木調査の入力形式の例

表 1 初回毎木用台帳

							日付	調査者	
10m 方形区 X 座標	10m 方形区 Y 座標	幹タグ番号	個体タグ番号	幹の X	幹の Y	種名	胸高周囲長 (cm)	備考	調査日
0	0	A1		3	2	ブナ	130.7	ツル込み	20040514
10	10	A2		8	7	ミズナラ	89.3		20040514
10	10	A3	A3	0	8.5	コシアブラ	19.2	A3 と同株	20040514
10	10	A4	A3	0	8.5	コシアブラ	25	A3 と同株	20040514
10	10	A5	A3	0	8.5	コシアブラ	33.6	A3 と同株	20040514
10	20	A6		3	5.5	イタヤカエデ	48.9		20040514
10	20	A7		4	4	ブナ	189	幹半枯れ	20040514
10	20	A8	A8	8	1	イヌブナ	45.3	A8 と同株	20040514
10	20	A9	A8	3	2	イヌブナ	56.2	A8 と同株	20040514

ここでいう 10m 方形区の XY 座標は、10m 方形区の左下（起点に近い角）の XY 座標で各 10m 方形区を表しています。したがって (0, 0) から (90, 90) まで 100 個の 10m 方形区を調査することになります（10m×10m の方形区の XY 座標は必ず 0 から 90 までになるようにしてください。10 から 100 までにはしないでください）。同株の場合は例にあるように A3 の幹にも”A3 と同株”と記入します。これがないと後で個体数の集計が難しくなるので注意してください。備考欄には、虫食いと、先折れとか、気がついたことは何でも記入しておいてください（4.6 データ入力上のお願いも参照）。特に測定値に影響を与えるツルに関するコメント（ツル抜きで測定したのかツル込みでしたのか等）と幹の空洞や樹皮の枯れ落ちの情報を書いておいてください。また、測定部位に限らず、**シカ等による樹皮はぎの跡が見られた場合には、必ず記録してください**（単に食害とせず、樹皮はぎと枝葉食害は区別してください）。

4.3 2回目以降の再測定の毎木調査の方法

2回目以降はすでにアルミタグが付いているはずなので、初回と同様に 10m 方形区ごとに胸高周囲長をスチールメジャーで mm 単位まで測定します。このときは前回つけた赤スプレートのラインを目印

にします。用紙は前回の測定値が入った再測定用の用紙を使います。新しく胸高周囲長が 15cm 以上になった幹には新規にアルミタグをつけます。新規加入個体（幹）は、欄外に記入するか、初回毎木と同じ用紙を用意して記入するなど、やりやすい方法で記録してください。新規加入個体の確認は必ず 10m 方形区単位で行い、確認後、次の 10m 方形区に移動してください。

新規加入個体の出現した 10m 方形区の XY 座標と新規個体の XY 座標記載がないと次回の毎木調査で個体位置がわからなくなるので、記載漏れのないように注意ください。

アルミタグが紛失したときは、新しいタグを付け、必ずタグの欄と備考欄に記入しておきます。また、アルミタグの穴が釘や針金と擦れてすり減ってきた場合などは、一斉にタグを付け替えてください。釘が埋まってきた場合は、可能であれば抜いて打ち直してください。必要な資材はネットワークセンターから送付しますので、ネットワークセンターまでご連絡ください。

台帳記入者は常に前回の周囲長測定値と新しい測定値を比較し、異常値がでないよう、その場でチェックしてください。

備考には、幹半枯れ、幹 5 m で折れ、のように測定値に影響する事象のコメントも書いてください。死亡を確認した年には死亡要因を分かる範囲で記載してください。胸高以上の高い位置での折れ（もしくは伐採）があった場合は、それより下の幹の死亡が確認されるまで測定を継続してください。胸高より低い位置での折れは死亡としてください。その後、萌芽によって生じた新たな幹が胸高周囲長 15cm になった際には、新規加入としてください。

表 2 再測定用毎木台帳

10 m 方形区座標 X	10 m 方形区座標 Y	幹タグ番号	個体タグ番号	幹の X	幹の Y	種名	前回の胸高周囲長 (cm)	胸高周囲長 (cm)	前回の備考	備考	調査日
0	0	A1		3	2	ブナ	130.7	131.0	ツル込み		
10	10	A2		8	7	ミズナラ	89.3	90.8			
10	10	A3	A3	0	8.5	コシアブラ	19.2	20.4	A3 と同株		
10	10	A4	A3	0	8.5	コシアブラ	25		A3 と同株		
10	10	A5	A3	0	8.5	コシアブラ	33.6		A3 と同株		
10	20	A6		3	5.5	イタヤカエデ	48.9				
10	20	A7		4	4	ブナ	189		幹半枯れ		
10	20	A8	A8	8	1	イヌブナ	45.3		A8 と同株		
10	20	A9	A8	3	2	イヌブナ	56.2		A8 と同株		

4.4 調査道具

台帳(A4)、台帳台、鉛筆（必ず鉛筆かシャープペンでBより濃い芯を使用。ボールペン、フェルトペン等は不可）、金槌、ステンレス釘、ステンレス針金、アルミタグ、大工袋、スチールメジャー（タジマ、エンジニアポケット 10m）、赤スプレー、巻き尺（20m～50m）

推奨する製品・仕様

- ・スチールメジャー：タジマ、エンジニアポケット 10m (EPK-10)、**図 4. 必ずこれを使ってください！**
- ・台帳台：PLUS A 用箋挟 A4 蓋付き 同等品可

- ・ステンレス釘：ステンレス スクリング 平 #12 × 50mm (図 5) 同等品可
- ・ステンレス針金：直径 0.56mm 前後 アルミタグ一枚に約 24cm の長さが必用 (図 3)
- ・アルミタグ：Racetrack Aluminum Tags, Numbered Tags 1-1000, ForestrySupplies Inc. (図 3)
同等品可 注：刻印機で数字の前にアルファベットを入れる

上記の資材は、ネットワークセンターが発注し、各サイトに送付いたします。各サイトですでに使用しているものがあれば、無理に替える必要はありません。また、上記以外の製品・仕様で、よりよいものがあればネットワークセンターまでご提案ください。

4.5 ファイル形式

Excel、ACCESS ファイルなどの、基本的にカンマ区切りの csv 形式に変換できるファイルで管理してください。できればネットワークセンター指定の Excel ファイルに入力してください。

4.6 データ入力上のお願い

モニタリングサイト 1000 のデータは、長期間・多数のサイトでデータを収集し、得られたデータを公開して分析していくことを目的にしています。そのため、50 年、100 年後に誰が見ても意味が理解でき、可能な限り同じルールでデータが入力されている必要があります。

そこで、データの入力にあたっては可能な限り以下の点をお守りください (次ページ表 3 参照)。(各サイトで長年使われているルールがある場合はこの限りではありませんが、その旨をネットワークセンターに分かるようにお示し下さい。)

- ・まず、必ず入力ミスがないかどうかを確認。入力ミスを減らすためにも過去のデータの横に当年データを入力する。
- ・測定ミスと思われるもの (Gbh が昨年よりも大きく増加もしくは減少したもの) については備考欄に「測定エラーの可能性あり」と記入 (それにより入力ミスとも区別できる)。
- ・測定もれの個体は Gbh に「nd」と入力。
- ・死亡個体は死亡時の Gbh に「d」と入力。
- ・以前ツル抜きであったがツル込みで計測した場合はデータの頭に「vi」をつけて数値を記入 (例 vi36.7)。
- ・以前ツル込みであったがツル抜きで計測した場合はデータの頭に「vn」をつけて数値を記入。
- ・完全に種が同定できていない場合は、種名欄には「未同定」と記入し、補足事項 (落葉樹 or 常緑樹)、高次分類群 (科名・属名)、候補種などは備考欄に記入。
- ・以下の事象に該当するものは、なるべく以下と同じ表現 (漢字・かな) で記載。
幹折れ、立ち枯れ、根返り、樹皮はぎ、枝葉摂食、虫食い、先折れ、ツル込み、○○と同株、斜め、倒れ、付け替え (元○○○)
- ・タグを一斉に付け替えた場合は、古いタグ番号の列は残すなど、必ず付け替える前のタグが分かるようにする。
- ・調査記録を記載 (データとは別のシート、表 4)。その他、いつ、どこで、誰が、何の目的で、どのような方法で、何を測定したかをできる限り確実に記録 (全くの他人に 50 年後に記録を残すつもりで、誰にでも分かるように)。
- ・「樹皮はぎ」の記録精度 (基準) に関しては、調査記録にどの程度の精度で記録したかを記入 (表 4)。「樹皮はぎ」が確認されなかった場合も、その旨を記録。

表3 データ入力例

10m 方形 区X座 標	10m 方形 区Y座 標	個体 タグ 番号	幹タグ 番号	種名	胸高周囲長[cm]			備考			調査日			
					2008	2009	2010	2008	2009	2010	2008	2009	2010	s_date08
0	0	A12	A12	シナノキ	38	37.8	37.9	na	na	na	na	20071106	20081201	20091016
0	0	A25	A25	アオダモ	na	15.1	15.5	na	新規	na	na	20071106	20081201	20091016
0	0	A23	A23	ハシドイ	16.2	d	na	na	幹折れ	na	na	20071106	20081201	20091016
0	10	A4	A4	アサダ	16.3	16.3	26.5	na	測定エラーの可能性あり	na	na	20071106	20081201	20091016
0	10	A20	A20	アオダモ	82.6	82.7	nd	na	測定もれ	na	na	20071106	20081201	20091016
0	10	A24	A24	シナノキ	15.5	15.7	d	na	立ち枯れ	na	na	20071106	20081201	20091016
0	20	A30	A30	ハルニレ	41.1	41.3	41.6	na	樹皮はぎ	na	na	20071106	20081201	20091016
0	20	A31	A31	サワシバ	48.7	48.8	48.5	na	傾き	na	na	20071106	20081201	20091016
0	30	A33	A33	ハルニレ	20	20.1	20.1	na	根返り	na	na	20071106	20081201	20091016
0	30	A11	A11	ハルニレ	34.1	v36.7	36.6	na	ツル込み	na	na	20071106	20081201	20091016
10	0	A14	A14	アオダモ	46.3	46.3	vn44.4	na	ツル込み	na	na	20071106	20081201	20091016
10	10	A5824	A5824	ハルニレ	24.6	25.6	25.6	na	付け替え(元A8)	na	na	20071106	20081201	20091016
10	10	A17	A18	ハシドイ	16	16	16.2	na	A18と同株	na	na	20071106	20081201	20091016
10	10	A18	A18	ハシドイ	47.2	47.5	47.4	na	A18と同株	na	na	20071106	20081201	20091016
10	20	A27	A27	未同定	12.8	13	13	na	落葉樹?	na	na	20071106	20081201	20091016
10	20	A9	A9	アサダ	25.1	25.2	25.1	na	落葉樹?	na	na	20071106	20081201	20091016
10	20	A28	A28	シナノキ	18.4	19	19.1	na	ハルニレよりアサダに樹種変更	na	na	20071106	20081201	20091016

表4 調査記録入力例

年度	調査開始日	調査終了日	調査者氏名	樹皮はぎ調査の精度・基準	特記事項	備考
2007	20071120	20071121	モニ太郎	樹皮はぎは調査していない。		
2008	20081127	20081130	モニ太郎、モニ花子	幅4cm以上の樹皮はぎの有無を確認したが、樹皮はぎは観察されず。	20081030に台風が通過	
2009	20091125	20091128	モニ太郎、モニ花子	幅4cm以上の樹皮はぎの有無を記録。	2009年夏、マイマイガが大発生	

5. 景観写真の撮影

長期的なモニタリングのために、可能な限り景観写真を撮ってください（任意事項）。撮影頻度は各サイトにお任せしますが、年1回同じ時期での撮影が推奨されます。展葉期、落葉期など年複数回撮影していただいても結構です。景観の変化が分かるように、必ず定点で、同じ向きで撮影してください。定点以外の写真を加えていただいてもかまいません。

推奨される撮影方法：

プロットの4隅それぞれから、水平にプロットの内側を撮影、真上方向に林冠を撮影。

撮影した写真はネットワークセンターにお送りください（任意）。CD, DVDなどで郵送していただくか、ウェブ上のファイルアップロードサービスなどをご利用ください。写真のファイル名および撮影者、撮影日、撮影位置（座標）、撮影方向、公開の可否（※注参照）、などのリストを作り、readme ファイル(csv形式推奨)としてお送りください。その他、著作権や公開についての留意事項、利用する際の記述方法などもそのファイルに記入してください。なお、撮影者の方がご自身の調査等で写真を利用される場合にも、できるだけ利用目的をネットワークセンターまでご連絡ください。

(※注)

環境省が撮影者の方からご提供いただいた写真を公開（使用）する時には、なるべく事前に撮影者の方へ連絡をして承諾をいただく予定であり、かつ撮影者名も明記する予定ですが、諸事情により、そのようにできない可能性もあります。ですので、「公開」については、以下の1～6のいずれであるかをReadmeファイルでご回答下さい（次ページ「7. 個人情報の取り扱いについて」も併せてご参照下さい）。

事前連絡は、	撮影者名(キャッシュ)は、	「公開」の種類番号
事前連絡なく使用しても構わない	入れずに公開しても良い	1
	必ず伏せる(明記してはいけない)	2
	必ず明記が必要	3
事前連絡は必ず必要	入れずに公開しても良い	4
	必ず伏せる(明記してはいけない)	5
	必ず明記が必要	6

Readme ファイルの例

#調査地名	ファイル名	撮影者	撮影日	撮影位置	撮影方向	公開
苫小牧・成熟林	F0001. jpg	モニ太郎	20101015	(0, 0)	水平 45°	1
	F0002. jpg	モニ太郎	20101015	(0, 100)	水平 135°	3
	F0003. jpg	モニ太郎	20101015	(100, 100)	水平 225°	4
	F0004. jpg	モニ太郎	20101015	(100, 0)	水平 315°	5
	F0005. jpg	モニ太郎	20101015	(50, 50)	真上	6

6. 調査区情報の記載

調査区設定の際には、以下のような調査区情報の記載をお願いします。

サイト名：苫小牧

調査区名：苫小牧成熟林

緯度（世界測地系 WGS84）：42.7111

経度（世界測地系 WGS84）：141.5664

3次メッシュコード（世界測地系 WGS84）：6441-0455

3次メッシュコードN（旧測地系）：6441-0455

都道府県：北海道

支庁名：胆振支庁

標高：80 m

面積：1 ha

形状：100 m x 100 m

現地調査主体：北海道大学 苫小牧研究林

サイト代表者：日浦勉

調査開始年度：2004

調査サイトタイプ：コアサイト

毎木調査：2004-

リタートラップ：2004-

ピットフォール：2004-

鳥類：2006-

環境データ：プロットから約 500m 離れた地点で、降水量、気温、湿度、日射量、日照時間、地温、
風向、風速

プロットの GPS 測位の有無：無し

その他（国立・国定公園、保護区等の指定の有無など）：

7. 個人情報の取り扱いについて

モニタリングサイト 1000 で得られたデータは原則として公開されることとなります。その際、調査者や写真撮影者などの記録も公開される可能性があります。もし個人名の公開に不都合がある場合は、その旨をデータ提出の際に必ず明記してください。

マニュアル

Y

(100,100)

X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:90									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:80									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:70									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:60									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:50									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:40									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:30									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:20									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:10									
X:0	X:10	X:20	X:30	X:40	X:50	X:60	X:70	X:80	X:90
Y:0									

X

X軸が逆の場合

(100,100)

Y

Y:90									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:80									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:70									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:60									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:50									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:40									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:30									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:20									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:10									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0
Y:0									
X:90	X:80	X:70	X:60	X:50	X:40	X:30	X:20	X:10	X:0

X

図1 調査区形状および座標の取り方



図2 アルミタグのつけ方例



図3 アルミタグ

右写真：ハトメで補強する場合の例



図4 スチールメジャー



図5 ステンレス釘

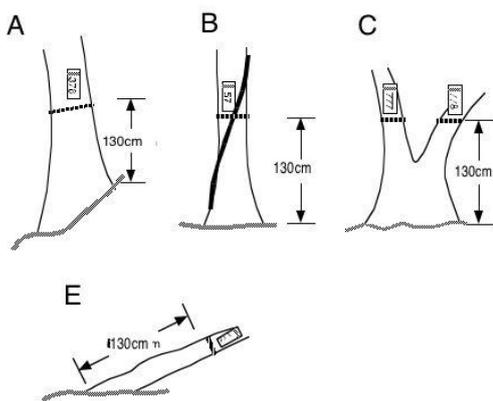


図6 測定位置の決め方

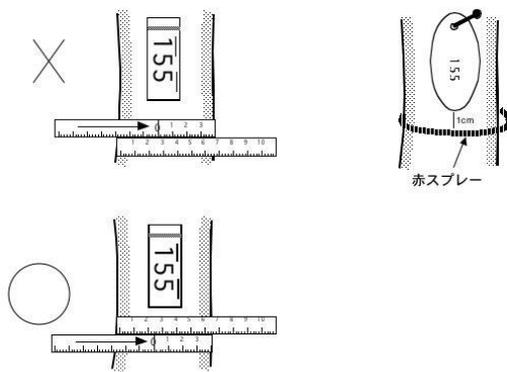


図7 胸高周囲長の測り方



図8 スチールメジャーの読み取り方.
上の写真の場合、37.8cmと読む。

モニタリングサイト1000 森林・草原調査
コアサイト設定、毎木調査マニュアル

Ver.2 更新日 2010年10月 (財)自然環境研究センター 改訂
Ver.1 更新日 2004年7月 新山 馨・柴田 鏡江(森林総合研究所) 作成

財団法人 自然環境研究センター ネットワークセンター
担当:鈴木智之 (2010年10月現在)
〒053-0035 北海道苫小牧市字高丘
北海道大学苫小牧研究林 内
電話:0144-33-2171 FAX:0144-33-2173
メール:moni1000f_networkcenter@fsc.hokudai.ac.jp

財団法人 自然環境研究センター
担当:鋤柄直純・畠瀬頼子 (2010年10月現在)
〒110-8676 東京都台東区下谷 3-10-10
Tel: 03-5824-0969 Fax: 03-5824-0970

環境省 自然環境局 生物多様性センター
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
電話:0555-72-6033 FAX:0555-72-6035

モニタリングサイト 1000 森林・草原調査
落葉落枝・落下種子調査マニュアル

Ver.1 2004年7月 作成

Ver.2 2010年10月 改訂

Ver.3 2015年9月 改訂

環境省 自然環境局
生物多様性センター

Ver. 1 作成
新山 馨(森林総合研究所)
柴田 銃江(森林総合研究所)

Ver.3 改訂・連絡先
一般財団法人 自然環境研究センター

はじめに

この文章は、モニタリングサイト 1000 森林・草原調査のうち、落葉落枝・落下種子調査(リター・シードトラップ調査)のためのマニュアルです。「モニタリングサイト 1000 森林コアサイト設定、調査マニュアル ver. 1」の中のリター・シードトラップに関するものと、「モニタリング 1000 森林部門 リター処理簡易マニュアル」を 2010 年に統合したものです。このマニュアルを参考に、リター・シードの処理を行って下さい。**努力目標として、できるだけレベル 2 (P9 の図 5 を参照) までの処理をお願いします。**

目次

1. 調査の目的
2. 調査
 - 2.1 配置
 - 2.2 設置
 - 2.3 回収方法
 - 2.4 分析方法
 - 2.4.1 内容物の 4 項目分別
 - 2.4.2 繁殖器官の分別
3. 調査記録
4. 個人情報の取り扱いについて

1. 調査の目的

リター・シードトラップ調査によって、**落葉落枝量や種子生産量**が推定できます。落葉落枝量は、森林の一次生産力の推定には必須です。また、樹種別に種子生産の量や数を測定することで、様々な樹種の豊凶特性などがわかります。これらのデータは、樹木の更新特性を明らかにする上で興味深いものとなります。さらに、種子を餌資源にしている動物の動態や生活史特性を説明するバックグラウンドデータとしても期待できます。

2. 調査

2.1 配置

図1のように1haの毎木調査区内に、20m置きに25個設置します。20m方形区に1個のトラップが基本の密度です。すでに25個以上のリター・シードトラップを設置している調査区は、その中の25個分をモニタリングサイト1000用にしてください。

2.2 設置

写真にあるように(図2)、3本の塩ビパイプを土壤に挿し、銅線を使ってトラップを固定します。トラップには表と裏があります。縫い代がめくれている方が裏ですのでこれが外側(塩ビパイプ側)に来るようにしてください。塩ビパイプには高さの違う2カ所の穴があります(図3)。斜面ではどちらかの穴を利用してトラップの受け取り面が水平になるよう調整して設置ください(図4)。

以下の止め方の指示を守ってください。まず塩ビパイプの穴に銅線を通し、塩ビパイプを中心に左右、同じ長さの銅線にします。トラップの縁の網の部分に、銅線の2つの先端を塩ビパイプの幅だけ離して、2カ所に、**必ず上から**突き刺し、網の下に出します。下から出た2本の銅線を塩ビパイプの外側で2~3回ひねって止めておきます。このとき嚴重に何度もねじると銅線が切れやすくなるのでご注意ください。壊れて交換する場合や、冬季に撤収することを考えて、手ではずしやすいように銅線を使っています。けっしてペンチの必要な太い針金などで固定しないでください。

設置したら、トラップ中にゴルフボールを入れ、風でトラップの網の部分が反転するのを防ぎます。風の強いところではゴルフボールを2個入れてもかまいません。

トラップには大型のビニール製ナンバーテープ等で1~25番の番号をつけます(図4)。ナンバーテープは、トラップの縁のポリエチレンチューブの外枠の部分の網目をつまんで、事務用品のステープラーで2回止めます。トラップの交換の際はこのナンバーテープを取り外して、もう一度使います。

資材が劣化・破損した場合は、サイトの判断で交換してください。必要な資材はネットワークセンターから送付いたしますので、ネットワークセンターまでご連絡ください。

2.3 回収方法

回収から分析の流れは図5を参照してください。

トラップの内容物は、最低でも月に1回、回収します。花や種子の落下時期を押さえるために月2回ないし2週間おきに回収してもかまいません。積雪期間はトラップが壊れますので、トラップの設置日と最終の回収日(トラップの撤収日)は各サイトの判断に任せます。トラップの設置日、回収日、最終の回収日(トラップの撤収日)は忘れずに記録してください。

内容物の回収は、紙袋(大昭和製紙サミットバッグNo.14)を使います。紙袋に調査区名、**回収西暦年月日、トラップ番号**を必ず**黒マジック**で(赤や青のマジックは耐候性がないので不可)書いて、

内容物を回収します。風よけに入れたゴルフボール以外、すべて回収します。ミズメの種子など細かな種子があるため、できるだけきれいに回収します。枝も基本的に回収します。トラップにまたがった大枝はトラップの面積にかかるぶんだけ回収します。のこぎりが必要な大枝、持ち帰れないような大枝は回収の対象としません。回収した紙袋は大きなビニール袋に入れて持ち運びます。

持ち帰った紙袋はすぐに廊下や棚に広げて風乾しておくことでサンプルの腐敗を防ぐことができます。サンプルが雨で濡れている場合は、紙袋のふたをあけるか中身を棚などに広げ、ある程度水分が蒸発した時点で、送風乾燥機（30～40℃以下、一昼夜くらい）で乾燥するとよいでしょう。

2.4 分析方法

2.4.1 内容物の4項目分別

乾燥した内容物の風乾重を、一袋分（1トラップ分）ずつ測定します（面倒ですが、作業中サンプルが紛失した場合の保険となります）。その後、白い紙の上に広げ、手で分別します。必ず葉を一枚一枚チェックしながら分別します。

分別項目は最低でも①葉、②枝、③繁殖器官（花や種子とその付随器官）、④その他（芽鱗、樹皮やこけ、昆虫の糞など）の4項目に分けます。まずこの4項目の乾燥重量を測定します。分別した4分画は、**調査区名、日付、トラップ番号、分別項目**を必ず鉛筆か黒マジックで書いた茶封筒や回収用紙袋に入れ、個別に風乾重を量ります（0.01g単位）。重さが0.01g未満の場合は0を、測定対象がない場合は-（半角ハイフン）を、欠測値（トラップ破損など）の場合はNA（全項目に）を記入してください（以下同様）。

絶乾重への換算式を作るため、トラップ全てのサンプルを混ぜたのち、一部をサンプリングして送風乾燥機（70℃、72時間）で乾燥させて絶乾重を測ります（0.01g単位）。換算式への努力は各サイトで負担にならない程度で行ってください。季節によって植物の持っている水分含量が違うため、換算式の作成はリター・シードの回収日ごとに行なってください。ただし、繁殖器官はすぐには絶乾せず次項（2.4.2. 繁殖器官の分別）を先に行ってください（絶乾だと花や未熟種子が著しく変色・変形したり、くっついたりして、ソーティング作業が大変になるため）。

全体風乾重と換算式で計算した（もしくは実測した）各項目別の絶乾重を表1のように記入してください。

2.4.2 繁殖器官の分別

繁殖器官のうち種子は、さらに樹種別に分けます。できるだけ主要樹種または毎木出現樹種（図5のレベル2）については分けてください（努力目標）。花や種子をさらに細かな項目（充実、虫害の状態など）に分けるかどうかは各サイトにお任せします。できるだけ、健全種子とそれ以外には分けてください。各樹種の種指数をカウント、送風乾燥機（70℃、72時間）で乾燥し、絶乾重を測ってください。表2はデータシートの記入例です。その他とは、虫食い、しいな、未熟など、健全種子以外を指しています。

分別・測定が終わった繁殖器官のサンプルの一部を、2.4.1の換算式作成のために用います（絶乾重を測定し、表1に記入）。

表1 トラップ別・内容物の4項目分別 (黄色で示したセルは必ず入力)

プロット名	トラップ番号	トラップ面積	開始日	回収日	葉絶乾重 (g)	枝絶乾重 (g)	種子乾重 (g)	繁殖器官乾重 (種子+花など) (g)	その他絶乾重 (g)	風乾全量 (g)	葉風乾重 (g)	枝風乾重 (g)	種子風乾重 (g)	繁殖器官風乾重 (g)	その他風乾重 (g)	備考
plot	trap_id	trap_area	s_date1	s_date2	wdry_leaf	wdry_bri	wdry_seed	wdry_rep	wdry_ot	wdry_total	w_leaf	w_branch	w_seed	w_rep	w_other	note
苫小牧	1	0.5	20041105	20041112	14.7	0.4	0.03	0.05	0.8							
苫小牧	2	0.5	20041105	20041112	18.2	0.01	0	0.12	-							
苫小牧	3	0.5	20041105	20041112	50.1	0.5	-	0.9	0.9							
...
苫小牧	25	0.5	20041105	20041112	NA	NA	NA	NA	NA							トラップ破損
苫小牧	1	0.5	20041112	20041215	20.2	1	0.5	1.1	0							ゴルフボールが外に落ちており、回収物は風で飛ばされた可能性あり
苫小牧	2	0.5	20041112	20041215	11.1	0.7	-	0.2	0.1							
...

表2 トラップ別樹種別の健全種子数と乾燥重量

plot	trap_id	trap_area	s_date1	s_date2	spc	number	wdry	status	form	note
プロット名	トラップ番号	トラップ面積	設置日	回収日	種名	数	絶乾重 (g)	状態	形	備考
苫小牧	1	0.5	20050629	20050728	ダケカンバ	1	0	健全	種子	
苫小牧	1	0.5	20050629	20050728	イタヤカエデ	1	0.02	虫	種子	
苫小牧	1	0.5	20050629	20050728	ミズナラ	1	0.03	健全	種子	
苫小牧	2	0.5	20051029	20051130	ブナ	1	0.03	未熟	種子	
苫小牧	2	0.5	20051029	20051130	ブナ	1	0.03	しいな	種子	
苫小牧	2	0.5	20051029	20051130	ブナ	NA	0.01	かけら	種子	
苫小牧	2	0.5	20051029	20051130	カツラ	2	0.4	未熟	果実	
苫小牧	2	0.5	20050629	20050728	トドマツ	3	1.5	健全	球果	
苫小牧	2	0.5	20050629	20050728	トドマツ	1	0	不健全	種子	

健全、虫(穴)、未熟、しいな、かけら、不健全、区別なし、のいずれかを
入力

3. 調査記録

表3のような調査記録を記載してください。その他、いつ、どこで、誰が、何の目的で、どのような方法で、何を測定したか（回収したか）を出来る限り確実に記録してください（全くの他人に50年後に記録を残すつもりで、誰にでもわかるように）。

表3 調査記録入力例

年度	調査開始日	調査終了日	調査者氏名	特記事項	備考
2007	20070530	20081130	モニ太郎、モニ花子		
2008	20080501	20081130	モニ太郎、モニ花子	20081030 に台風が通過したためトラップ内容物が飛んだ	

4. 個人情報の取り扱いについて

モニタリングサイト 1000 で得られたデータは原則として公開されることとなります。その際、調査者や写真撮影者などの記録も公開される可能性があります。もし個人名の公開に不都合がある場合は、その旨をデータ提出の際に必ず明記してください。

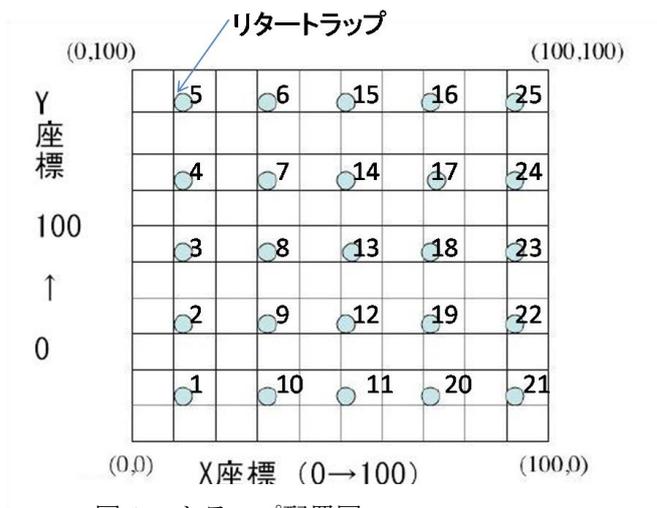


図1 トラップ配置図



図2 トラップ設置例1

塩ビ支柱の截断と穴開け

- ・長さ1.5m VP16(内径16mm 外径22mm)
- ・片端を地面に差し込みやすいように先端は斜めにカット
- ・もう一方の片端から5cmと25cmのところの、2カ所に直径約0.5cmの穴を開け、鋼線を通せるようにする。
- ・2箇所の穴は直交させるようにする。

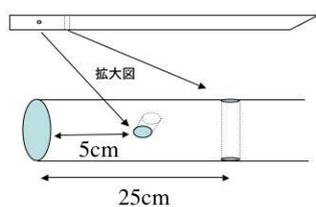


図3 支柱用塩ビパイプ



図4 トラップ設置例2

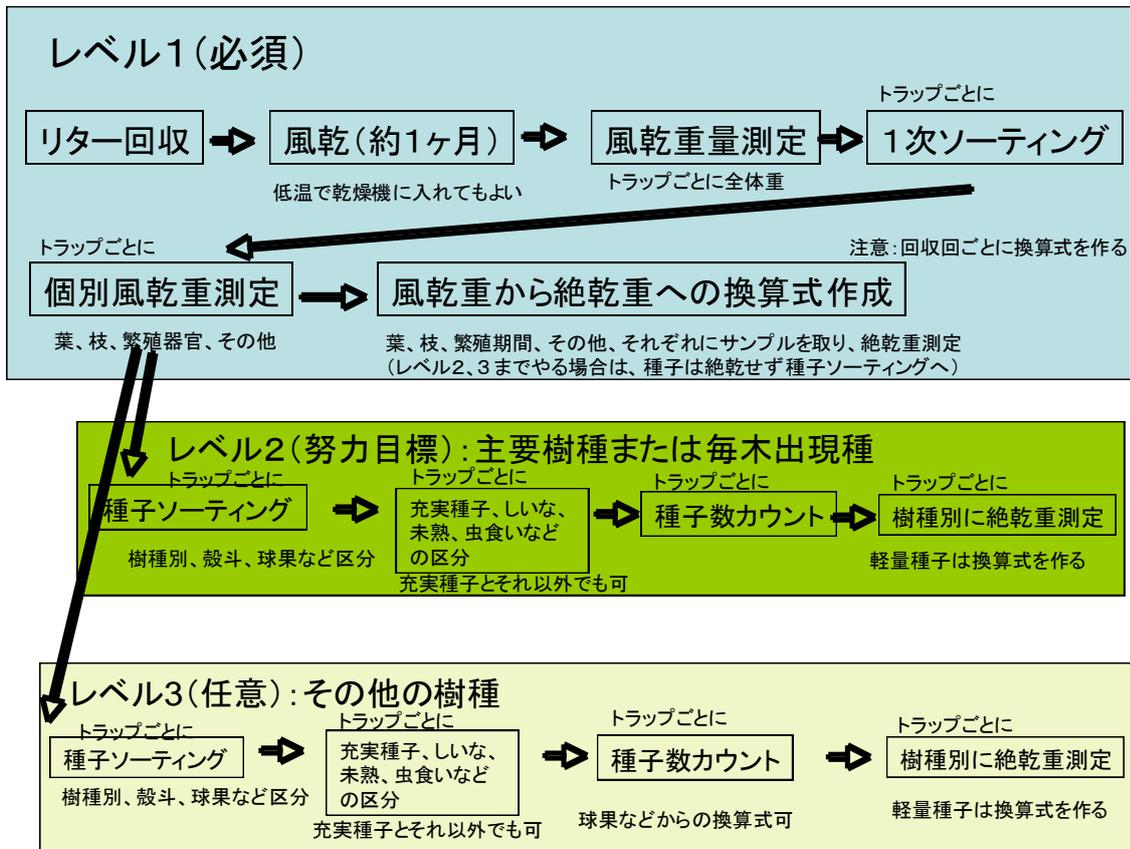


図5 リター・シードの処理(回収から分析)の流れ

レベル2, 3において、未同定および同定が不確かな種子については、その旨をデータシートの備考に記録し、種子サンプルを保管してください。

参考資料

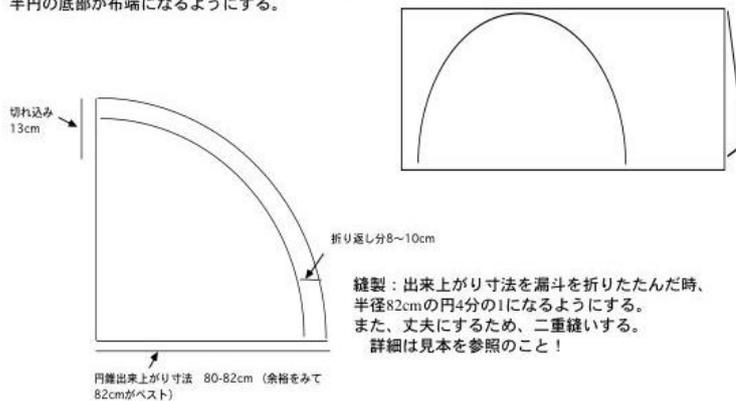
参考資料1 リター・シードトラップネットの材料

品名	規格	トラップ1個に必要な量
寒冷紗	幅1.8m、1mmメッシュ、白色	1m
ミシン糸	ビニロン製ミシン糸	適量
ポリエチレンパイプ(太)(枠用)	長さ2.5m、内径12mm、外径18mm	1本
ポリエチレンパイプ(細)(枠接続用)	長さ0.15m、内径8mm、外径12mm	1本
塩ビパイプ(支柱用)	長さ1.5m、内径16mm、外径22mm	3本
銅線(トラップ固定用)	太さ1mm	0.4m×3本

参考資料2 リター・シードトラップネットの裁断

受け口0.5平方メートルの種子トラップの完成寸法
 円直径=79.8cm
 円周=250cm

裁断：幅180cmの寒冷紗を縦半分におり、直径180cmの半円型に裁断。
 半円の底部が布端になるようにする。



モニタリングサイト 1000 森林・草原調査
落葉落枝・落下種子調査マニュアル

Ver.3 更新日 2015 年 9 月 (一財)自然環境研究センター 改訂
Ver.2 更新日 2010 年 10 月 (財)自然環境研究センター 改訂
Ver.1 更新日 2004 年 7 月 新山 馨・柴田 銃江(森林総合研究所) 作成

一般財団法人 自然環境研究センター ネットワークセンター
担当:日高周 (2015 年 9 月現在)
〒053-0035 北海道苫小牧市字高丘
北海道大学苫小牧研究林 内
電話:0144-33-2171 FAX:0144-33-2173
メール:moni1000f_networkcenter@fsc.hokudai.ac.jp

一般財団法人 自然環境研究センター
担当:鋤柄直純・畠瀬頼子 (2015 年 9 月現在)
〒130-8606 東京都墨田区江東橋 3-3-7 江東橋ビル
電話:03-6659-6310 FAX:03-6659-6320

環境省 自然環境局 生物多様性センター
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
電話:0555-72-6033 FAX:0555-72-6035

環境省重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト 1000)

モニタリングサイト 1000 森林・草原調査

地表徘徊性甲虫調査 マニュアル

2015 年 9 月改訂版

環境省 自然環境局
生物多様性センター

一般財団法人
自然環境研究センター

1. はじめに

昆虫類は地球上の生物多様性の主要な構成要素であり、生態系において重要な機能を担っている。しかしながら、種数が膨大であり、また個体サイズが小さいため、種レベルでの調査には困難が伴う。昆虫類の調査はモニタリングサイト 1000 プロジェクトにおいて不可欠であるが、調査実施には分類群レベルでの検討が可能であると同時に重要な生態系機能を有するグループを対象とする必要がある。そこで、本プロジェクトでは、このようなグループとして地表徘徊性甲虫類を対象とし、ピットフォールトラップによる調査を実施する。ピットフォールトラップは多様な地上徘徊性の無脊椎動物が採集され、そのうち甲虫類では、オサムシ科、シデムシ科、およびハネカクシ科が多い。これらのピットフォールトラップで採取される甲虫類の多くは、飛翔性を失っているため移動範囲が狭く、その地域の林床環境を示す生物として注目されている。したがって、日本全国の甲虫類の多様性をモニタリングする意義は大きい。さらに対象とした甲虫類は温度に対する感受性が高く、寿命が短いため、地球温暖化影響が早期に検出できる生物として位置づけられる。

ピットフォールトラップで採取される地表徘徊性甲虫類は落葉が堆積した森林の林床を生息場所としている。森林生態系では植物の地上部生産量の約 9 割が土壤に供給される分解系の卓越した系である。森林の分解系は、栄養塩のリサイクルシステムとして森林生態系を駆動する、非常に重要な系であり、そのなかで甲虫類は上位の捕食者である。そこで、本調査では、地表徘徊性甲虫類が分解系の一員として、その林床の環境および分解機能に関与すると考え、その相互関係を明らかにするために甲虫の群集調査と同時に非生物的な環境要因および林床の分解機能を測定する。森林の林床に堆積する落葉量は、生物の分解活性と密接な関わりをもっていることから、栄養塩類の蓄積量や循環量を把握するための重要な指標となる。また表層の土壤は生物活性が高く、その有機物量が地表徘徊性甲虫類の餌である土壤動物の餌資源として評価されている。甲虫類は季節によって出現種が異なるため、調査地の地域群集および多様性を評価するために調査は 1 年を通して 4 回行う。環境要因は、落葉堆積量、土壤と落葉の質などを測定する。

補足) このマニュアルは、モニタリングサイト 1000 森林・草原調査の地表徘徊性甲虫調査のためのマニュアルです。ただし、ここにある方法が最善ではなく、この数年で皆様のご意見を取り入れ、簡便かつ長期的に実施できるものにする予定です。さらに意義のあるデータの蓄積のために、甲虫群集動態ならびに環境要因との相互関係の解明の統合によって、将来の長期動態予測を目指しています。

2. 調査方法

2. 1. ピットフォールトラップの設置

ピットフォールトラップ法とは、林床に落とし穴状のトラップを設置し、そこに落ちた動物を採取する方法である。捕獲個体数は動物の生息密度と活動性に依存する。

トラップにはポリプロピレン容器（口径 90mm、深さ 120mm）を用いる。トラップ容器の底面には、あらかじめ直径 1 mm 程度の水抜き穴を、6ヶ所程度開けておく。1プロットにつき 20 個のトラップ容器を、モニタリングサイト 1000 ネットワークセンター（モニタリングサイト 1000 森林調査（鳥類を除く）のサンプルやデータを扱う部署。北海道大学苫小牧研究林内に設置されている。以下ネットワークセンターという）より送付する。

以下にトラップの設置手順を示す。

1. 各サイトで定めた森林プロット（毎木調査区）内に、5 m 四方のサブプロットを 15m~20m の間隔をあけて無作為に 5 地点設定する。各サブプロットの中心の X、Y 座標（1m 単位）を、毎木調査における樹木の位置測定と同じ座標系にて測定（目測）する（「モニタリングサイト 1000 森林コアサイト設定、調査マニュアル（Ver.2）」4.1 初回の毎木調査方法 参照）。
2. この 5 地点に、それぞれ 4 個のトラップを設置する（図 1。1プロット内のトラップ総数は 20 個となる）。

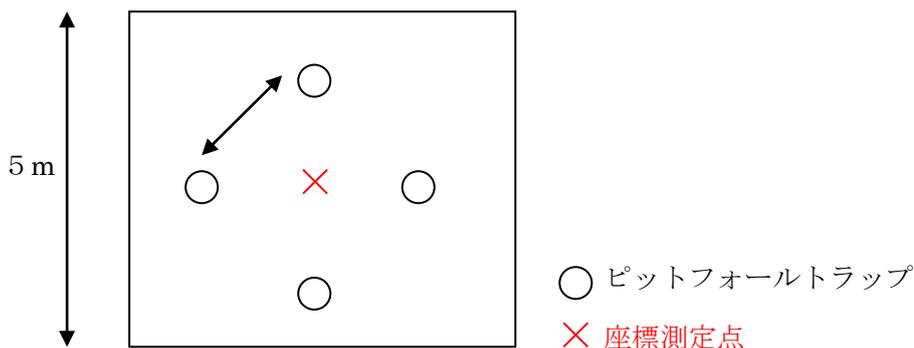


図 1. 各サブプロットにおけるピットフォールトラップの配置図

3. トラップの埋設は、まず地表の落葉層を 100cm² ほどの範囲で除き、小型スコップを用いて地面に深さ 15cm ほどの穴を掘る（図 2a）。
4. トラップ開口部付近に凹凸があると小型の地表徘徊性甲虫が障害物によって落下しにくく

なるので、トラップの上端が地面から突き出ないように、周囲の土壌を埋め戻して固定する。

5. トラップ開口部付近の地表の状態が周辺環境と異ならないように、落葉落枝層で覆う（図 2b）。



図 2. トラップ容器の埋設方法. a) トラップ容器を埋設するための穴. b) トラップ容器を埋設した林床の状態.

※大型動物にトラップを抜き取られる被害が出やすい場合は、ペグ等を用いてトラップを固定する（図 3a）。

※雨水がトラップに溜まり作業に支障を来たす場合は、以下のような加工を行ってよい。

- (1) トラップの真上に屋根状の雨よけを設ける（図 3b）

雨よけの大きさは 20cm 四方以内とし、地面との間に 5 cm 以上の間隔をあけ、地表徘徊性甲虫の移動を大きく妨げない構造とする。

- (2) トラップの底面に大きい水抜き穴を開ける（図 3c）

小型の甲虫が出入りできないよう、水抜き穴を覆うように目開き 1 mm 以下の網を貼り付ける。サイトでの加工が困難な場合は、ネットワークセンターに相談する。



図 3. トラップの設置・加工例. a) ペグを用いたトラップの固定. b) 雨よけの設置例. c) 底面の加工例. 大きい水抜き穴を 6ヶ所開け、穴を覆うように目開き 1mm の網を接着している.

各サブプロットはロープ等で囲い、調査時以外は内側に立ち入らないようにする。調査で立ち入る際も歩く場所を毎回同じにするなどして、土壌の踏み固め、堆積落葉層や下層植生の攪乱などの影響の及ぶ範囲を最小限に抑えるよう努める。

2. 2. サンプルの採取

【1】甲虫類の採取

調査は、甲虫の活動性の高い5月～11月に年4回行う。年4回のそれぞれの調査は、最低1ヶ月の間隔をおいて実施する。降雨時には甲虫類の活動性が低下するので、なるべく雨天日の調査を避ける。1プロットにつき5個のサンプル回収容器を、毎調査前にネットワークセンターより送付する。

ピットフォールトラップ調査の作業手順を以下に示す。

1. ピットフォールトラップの蓋を開けて72時間、放置する（ピットフォールトラップには蓋がついている。調査を行わない期間中は蓋をしておき、その後の調査で使用する）。

2. 72時間後にトラップ内に落下している無脊椎動物のみを回収する。

※以下の(1)～(4)のいずれかに該当する場合、トラップ開放期間中に甲虫の捕獲効率が変わったり、捕獲された甲虫がトラップから逃げ出したり、捕獲された甲虫が捕食された可能性が考えられるため、調査票（Excelファイル）の「ピットフォール調査」のシートの備考欄に[]内の文を記入する（p.9 2.3.を参照）。「x」には該当するトラップ数を、「～」には具体的理由を記入する。

(1) [埋没：x トラップ] 例：土砂や落葉落枝の混入によりトラップが埋没またはトラップの深さが著しく浅くなっていた。

(2) [水没：x トラップ] 例：降雨や増水によりトラップが水没またはトラップの深さが著しく浅くなっていた。

(3) [脊椎動物による攪乱：x トラップ] 例：動物によりトラップが動かされていた。トラップにトカゲなどの脊椎動物が入っていた。

(4) [～：x トラップ] その他の理由によりトラップが攪乱を受けたと考えられた。

3. 回収は、1地点に設置した4個のトラップの中身をまとめて一つの回収容器に入れる（1プロットにつき5地点あるので、回収には5つの回収容器が必要となる）。

※回収容器には、殺虫および防腐効果のある酢酸エチルを浸み込ませた紙が数枚入れている。酢酸エチルは、揮発や加水分解によって効果が失われやすいので、蓋は回収した動物を入れるとき以外は開けず、回収後にはしっかりと閉めるよう注意する。またトラップ内に雨水が溜まっている場合には、極力、回収容器に水を入れないよう注意する。

4. トラップ内容物のうち、落葉や石、土壌などの異物は取り除く。

5. 回収容器に貼ってあるラベルに、回収した日付と調査者1名のローマ字氏名（ネットワークセンターで作成する甲虫標本のラベルに採集者名として印字する）を記入する。

6. 調査票（Excelファイル）の「ピットフォール調査」のシートに調査開始および終了時間、天候、サブプロットごとの植被率を入力し、「すべての調査記録」のシートに調査記録を記入する（p.9 2.3.を参照）。

7. 調査終了後、速やかに回収した動物をネットワークセンターに送付する（夏季はクール便を利用する）。
8. 郵送時に、必要事項を入力した調査票（Excel ファイル）を作業報告（サンプルの発送日、到着予定日、備考など）と併せてメールにてネットワークセンターの担当者に送付する。
9. 気温などの気象データの抽出に時間がかかる場合は、調査票の気象データ部分は空欄とし、12 月末までに、すべての項目が入力されたファイルをプロットごとに送付する。事情によって 12 月に間に合わない場合は、その旨をネットワークセンターの担当者に連絡する。

【2】甲虫以外のサンプルの採取

堆積落葉層（A₀層）の動態を把握するために、トラップを埋設した5地点において、トラップの周囲の落葉層を採取する。落葉層の採取は、年1回（6～8月）とする。落葉層下の土壌の採取は、3年に1度、落葉層採取と同時に行う。

以下に堆積落葉層（A₀層）採取の手順を示す。

1. トラップから3mほど離れた地点で落葉層の採取場所を選定する。落葉層の採取場所は、できるだけピットフォールトラップ調査時の踏み荒らしや以前の落葉層採取による攪乱の影響が残っていない場所とする。
2. 林床の **25cm×25cm** の範囲の落葉や落枝を剪定バサミを用いて切り取り、その範囲内の落葉層を土壌粒子が見える深さまで採取する。
3. 落葉層の採取の際、**直径5mm以上の枝、礫、石は取り除く**。また落葉層下部の土壌粒子が混入しないように、土壌粒子が見えてきた部分までの採取とし、付着した土壌はなるべく取り除く。
4. 1～3の手順で、1プロットにつき5地点のサンプルを採取する。
5. 採取した落葉層は封筒に入れ、封筒に(1) 調査プロット名、(2) 地点番号（1～5）、(3) **採取日を明記する**。
6. 落葉落枝を入れた封筒を60℃の送風乾燥機に入れて、48時間以上、乾燥させる。乾燥後に土壌粒子が封筒の底へ分離している場合、**土壌粒子は送付前に捨てる**。乾燥済みの落葉層をネットワークセンターに郵送する。
7. 調査票（Excel ファイル）の「すべての調査記録」のシートに**採取日などの調査記録を記入**し、メールにてネットワークセンターに送付する（p.9 2.3.を参照）。

以下に土壌採取の手順を示す。

1. 採取した堆積落葉層の直下の土壌を、**100cc 採土円筒**を用いて採取する（落葉層のサンプルと同じく1プロットにつき5地点）。
2. 採土円筒で採取した土壌は、ビニール袋に入れて持ち帰った後、封筒に移す。
3. 封筒には、(1) 調査プロット名、(2) 地点番号（1～5）、(3) **採取日を明記する**。
4. 土壌を入れた封筒を60℃の送風乾燥機に入れ、48時間以上乾燥させる。乾燥した土壌をネットワークセンターに郵送する。
7. 調査票（Excel ファイル）の「すべての調査記録」のシートに**採取日などの調査記録を記入**し、メールにてネットワークセンターに送付する（p.9 2.3.を参照）。

2. 3. 調査票ファイルの記入方法

調査票の Excel ファイルは、プロットごとに1つのファイルとし、調査を行う度に入力して、ネットワークセンター担当者に送付する。まず、「プロット情報」のシートを入力する。ピットフォールトラップ調査を行った際は、「ピットフォール調査」のシートを入力する。さらに、ピットフォールトラップ調査およびその他の調査を行った際は、いつ、どこで、誰が、何の目的で、どのような方法で、何を測定したかを長期にわたり明らかにするために、「すべての調査記録」のシートを入力する。

「ピットフォール調査」のシートには、以下の項目を記入する。

- (1) 調査プロット名
- (2) 調査を行った期間
- (3) 実施期間中の天候
- (4) 積算降水量（ピットフォールトラップ開放時間（72 時間）内の積算値を記す）
- (5) 最高・最低気温（ピットフォールトラップ開放時間（72 時間）内の最高および最低気温を記す）
- (6) 各サブプロットの草本層の植被率（地上高 60cm 以下のものを草本層とする。低木類や高木性木本類の実生・稚樹およびササ類を含む。植被率は、トラップ埋設場所の 5m 四方の範囲で、概観によって調査者が判断する（図 4））
- (7) 採集代表者名（この欄に書かれた名前を、甲虫標本のラベルに印字する）
- (8) 備考（上記(1)～(7)の記入内容や甲虫の捕獲データについて通常と異なる点や解釈に注意を要する点、上記(1)～(7)以外のトラップやトラップ周囲の状況について調査時に気がついたこと等を記入する。トラップが攪乱を受けた場合の記入方法は、p.6 を参照）

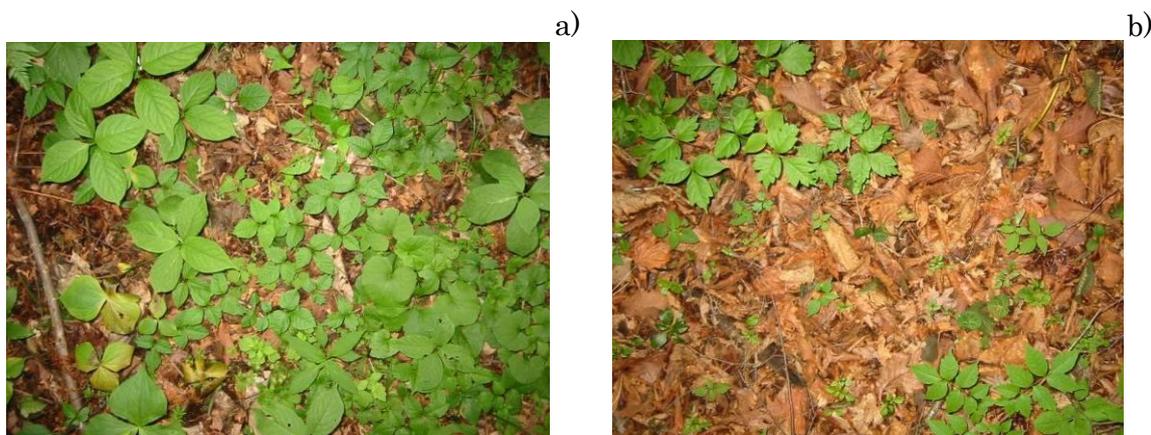


図 4. 林床の草本層の植被率. a) 65%、b) 10%.

「すべての調査記録」のシートには、以下の情報を入力する。

- (1) 調査年月日
- (2) 調査プロット名
- (3) 調査者の氏名
- (4) 調査内容
- (5) 備考（調査中に気がついたこと、調査期間の前後やプロット周辺における環境や生物相の大きな変動・特筆すべき事象など）

調査記録は次の作業を行うたびに、必ず記入する。

- (1) ピットフォールトラップ調査の開始日（年4回）
- (2) ピットフォールトラップ調査の回収日（年4回）
- (3) 落葉層の採取（年1回）
- (4) セルロースフィルターの埋設（年2回）※
- (5) セルロースフィルターの回収（年6回）※
- (6) 土壌の採取（3年に1回）

※セルロースフィルターの埋設および回収については、『セルロースフィルター埋設および回収マニュアル』を参照。

3. サンプルの収蔵

各サイトで採取した甲虫、落葉層、土壌等はネットワークセンターに送付する。ネットワークセンターでは、甲虫を科（可能な限り種）まで同定し、乾燥重量を測定する。また、必要に応じて展足の後、標本箱に収納する。落葉層については、乾燥重量および炭素、窒素濃度の測定を行う。土壌については、炭素、窒素濃度の測定を行う。環境省生物多様性センターに収蔵する標本以外については、希望に応じて各サイトやその他の機関等が収蔵することも可能である。

モニタリングサイト 1000 森林・草原調査
地表徘徊性甲虫調査マニュアル
2015 年 9 月改訂

環境省自然環境局 生物多様性センター
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
電話：0555-72-6033 FAX：0555-72-6035

一般財団法人 自然環境研究センター
モニタリングサイト 1000 森林・草原調査 ネットワークセンター
担当：丹羽 慈（2015 年 9 月現在）
〒053-0035 北海道苫小牧市字高丘 北海道大学苫小牧研究林 内
電話：0144-33-2171 FAX：0144-33-2173
e-mail：moni1000f_pitfall@fsc.hokudai.ac.jp

一般財団法人自然環境研究センター
担当：鋤柄直純・畠瀬頼子（2015 年 9 月現在）
〒130-8606 東京都墨田区江東橋 3-3-7 江東橋ビル
電話：03-6659-6310 FAX：03-6659-6320

環境省重要生態系監視地域モニタリング推進事業

モニタリングサイト 1000 森林・草原調査

セルロースフィルター分解試験マニュアル

2011 年 7 月改訂版

環境省 自然環境局
生物多様性センター

財団法人
自然環境研究センター

はじめに

森林生態系は、1997年に採択された京都議定書において二酸化炭素の主要な吸収源として地球温暖化抑制への貢献が高く評価されている。森林の樹木は二酸化炭素（CO₂）を吸収し、ここから得られる炭素を使って、葉を作り出す。虫などに食べられてしまう葉もあるが、多くの葉は枯れて、林床へ供給される。この落ち葉は、微生物、ミミズやダンゴムシなどの土壤に生息する動物が様々な形で消費することで、分解されていく。この分解が進む過程で、二酸化炭素が大気中に放出される。このように森林生態系では、二酸化炭素が吸収される一方で、放出も行われている。

つまり、いったいどれくらいの量の葉が生産され、落葉として林床に落ちて分解されているのか、また、どれくらいのスピードで分解が進んでいくのか、を捉えることで、二酸化炭素が森林生態系の中に保持される量を認識することが可能となる。

このような森林の分解という働きは、地域によって分解される量やスピードが大きく異なる。これは、気温や土壤の状態、分解を促す生物の種類が異なるためであると考えられる。そのため、分解されていく過程を各地域で調査し、長期的なデータを集めることで、温暖化などの環境変化によって、どのような変化が生じているのかを把握することができる。さらに、各地域から集められたデータは、将来の環境予測にも役に立つ。

そこで、林床の有機物の分解過程を全国のコアサイトで一律に測定するために分解試験を行う。樹種の違いは、落葉の堅さや含まれる成分の変化をもたらすため、分解の進行具合にも影響を及ぼす。そこで、全国での試験の条件を統一するために、葉の主成分であるセルロースのフィルターを用いる。調査は、活発な分解が行われる落ち葉が堆積している落葉層とそのすぐ下の土壤層で、それぞれ行う。

調査方法

ラベルをつけて重量を測定したセルロースフィルターを、モニタリングサイト 1000 森林・草原調査ネットワークセンター（モニタリングサイト 1000 森林・草原調査（鳥類を除く）のサンプルやデータを扱う部署。北海道大学苫小牧研究林内に設置されている。以下ネットワークセンターという）から各サイトに送付する。各サイトでは、このフィルターを土壌に埋め、決められた時間が経過したら、埋設したフィルターを取り出し、ネットワークセンター担当者へ送付する。担当者は送られてきたフィルターの重量を測定し、土壌中に埋設されていた期間中の重量減少量を算出する。埋設前のフィルターの重量と埋設中の重量減少量から、有機物の分解率を算出する。

調査は3年に1度実施し、セルロースフィルターの埋設を2回、回収を4回行う。以下に、それぞれの作業の手順を示す。

1. フィルターの埋設

1. 1. 実施時期

- ・埋設1回目（回収日 A～C のフィルター）：1 回目のピットフォールトラップ調査実施時
- ・埋設2回目（回収日 D のフィルター）：4 回目のピットフォールトラップ調査実施時

1. 2. 必要な道具

【ネットワークセンターから送付するもの】

- ・セルロースフィルター（ベンチコート 2300-916（ワットマン社製）、5×5 cm、80 枚／調査区）
- ・針金
- ・金網（15 枚／調査区）

【各サイトで準備していただくもの】

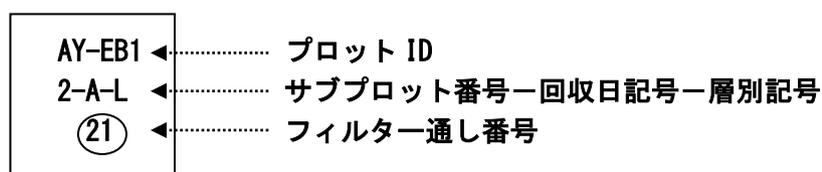
- ・根掘り（シャベルなどでも可）
- ・標識テープ
- ・油性ペン

1. 3. 事前準備

(1) フィルターにはセルロース面（紙の面）と樹脂面（ビニールの面）がある。

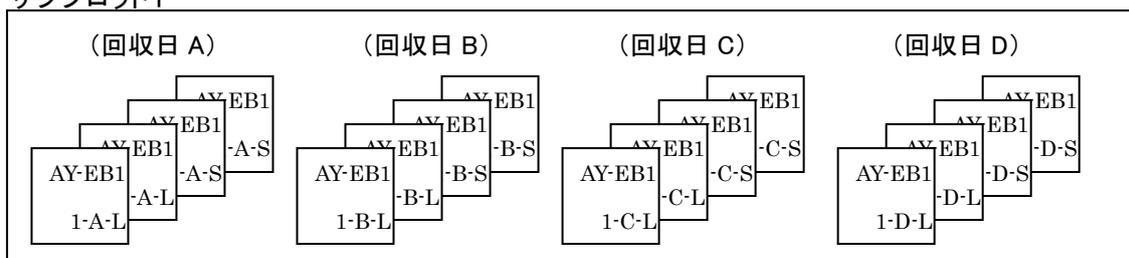
樹脂面にプロット（調査区）ID、サブプロット番号（1～5）、回収日記号（A～D）、層別記号（L：落葉層、S：土壌層）、およびフィルター通し番号（1～80）が、あらかじめ油性ペンで書いてある。

例)

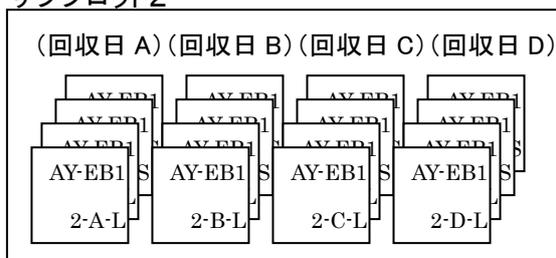


(2) サブプロット番号（1～5）と回収日記号（A～D）が同じ4枚のフィルター（層別記号 L：2枚、S：2枚）を1組として、20組に分ける（図1）。回収日 A～C は1回目の埋設時に、回収日 D は2回目の埋設時に埋設する。

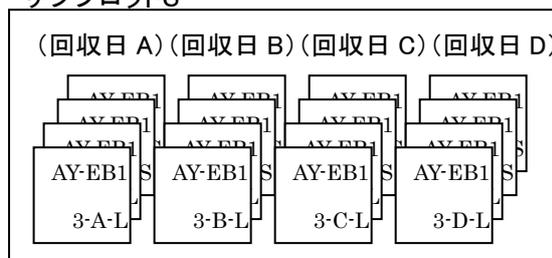
サブプロット1



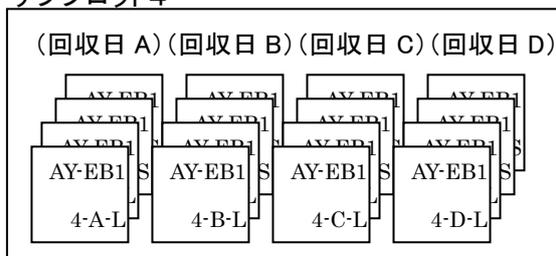
サブプロット2



サブプロット3



サブプロット4



サブプロット5

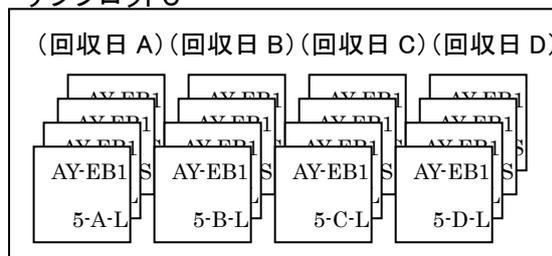


図1. フィルターの分け方. サブプロットと回収日が同じ4枚を組にし、20組に分ける。

1. 4. 野外での作業

年2回の埋設時に、調査区内の5ヶ所のサブプロット（4つのピットフォールトラップを含む5m四方の範囲）において以下の作業を行う（図2）。

- (1) 土壌の安定している平坦な地形で攪乱や人為的な踏み荒らしの少ない林床を埋設地点として選定する。
- (2) **回収日が同じ4枚のフィルター**（1回目の埋設時はA、B、Cの3組。2回目の埋設時にはDの1組のみ。図1）は**15cm四方の範囲内に設置し、設置した4枚のフィルターの上に落葉層をのせ、さらにその上に金網をのせる**。フィルターの設置は、層別記号に応じて以下の要領で行う。
 - (3) 層別記号がS (Soil) と書いてあるフィルターは、土壌層での分解速度を測定するために用いる。特に、土壌における微生物による分解量の測定を目的とする。埋設時に林床表面の落葉を取り除き、土が露出した状態にする。根掘り等を用いて、**垂直に深さ5cm程度の切り込みを作成**する。作成した**切り込みの隙間にフィルターを差し込む**。この時、フィルターが土壌表面から突出しないように、フィルターの上端が土壌表面と同じ高さになるように差し込む。差し込んだ後に土壌とフィルターの間隙がなくなるように、両手で**土壌を切り込みの両側から押し付ける**。こうすることで、土壌とフィルターの間隙がなくなる。できるだけ切り込みの幅を狭くする（フィルターが入る程度）ことで、隙間を埋めるのが簡単になる。
 - (4) 層別記号がL (Litter) と書いてあるフィルターは、落葉層での分解速度を測定するために用いる。特に、落葉層を利用する生物による分解量の測定が目的である。土壌層用のフィルター (S) を差し込んだ切り込みの近くで、林床表面の落葉を取り除き、土を露出させる。**記号が書いてある樹脂面（ビニール面：分解されない面）を下にして、露出した土壌の上に水平に置く**。ただし、土壌層用のフィルターを差し込んだ切り込みを塞いでしまわないように注意する。上面がセルロース面（紙の面：分解される部分）になっていることを確認したら、**最初に取り除いた落葉をフィルターの上に被せる**。
 - (5) **4本の針金をU字型に曲げ、金網の4隅に垂直に突き挿す**。ここで、金網が固定されるように土壌の安定した部分に針金を挿すようにする。金網と針金を用いて林床から落葉およびフィルターが流亡しないようにすることが目的であるが、サイトによっては、この方法では不十分な場合もあるので、哺乳類による攪乱への対策などを担当者に相談する。
- (6) 回収時に区別できるように、**金網の上に標識テープ等で回収日A、B、Cを示しておく**。
- (7) 調査票 (Excel ファイル) の「すべての調査記録」のシートに調査記録を記入する。

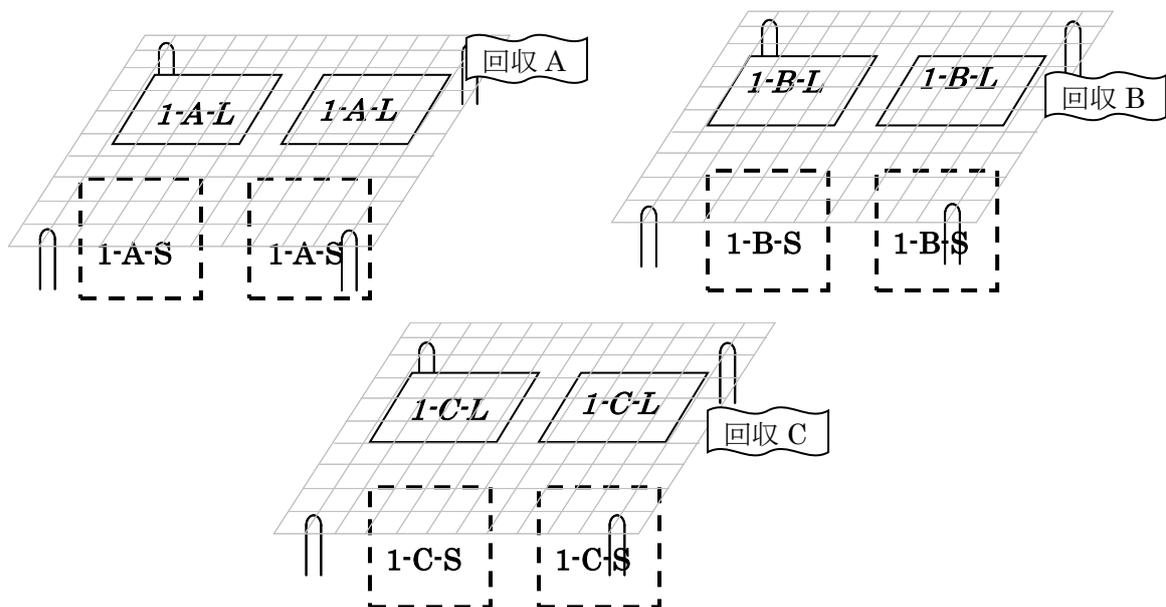


図2. サブプロット1の林床にフィルターを埋設した状態の模式図(埋設1回目). 実際には、落葉層用のフィルター(L)は、樹脂面(記号の書かれている面)を下にして設置する。

2. フィルターの回収

2. 1. 実施時期

- ・埋設1回目のフィルターの回収(回収日A~C): 当年度の2、3、4回目のピットフォールトラップ調査実施時
- ・埋設2回目のフィルターの回収(回収日D): 翌年度の1回目のピットフォールトラップ調査実施時

2. 2. 必要な道具

【各サイトで準備していただくもの】

- ・回収、送付用のビニール袋
- ・乾燥用のバット

2. 3. 野外作業

- (1) 2回目のピットフォールトラップ調査時に、回収日Aのフィルター(金網Aの下にある4枚)を回収する。 5サブプロットから回収するので1回に計20枚を回収することになる。金網と針金は、回収してサイトで保管する。
同様に、
- ・3回目のピットフォールトラップ調査時には、回収日Bのフィルター
 - ・4回目のピットフォールトラップ調査時には、回収日Cのフィルター
 - ・翌年度の1回目のピットフォールトラップ調査時には、回収日Dのフィルターを回収する。

- (2) 調査票 (Excel ファイル) の「すべての調査記録」のシートに調査記録を記入する。
- (3) 回収したフィルターは、水中で軽くこするなどして、フィルターを損傷させないように、表面に付着した土壌や落葉等を落とす。
- (4) 洗浄したフィルターは、直ちに送風乾燥機を用いて 60℃で 24 時間程度、乾燥させる。 乾燥時にセルロース面がバットや他のフィルターに付着しないように、樹脂面を下にして、バットに重ならないように広げて乾燥させる。 湿ったままで長時間放置しないように留意する。
- (5) 乾燥させたフィルターは 20 枚をあわせて 1 つのチャックつきビニール袋に入れ、袋に調査区名、埋設日、回収日を必ず記入する。
- (6) 乾燥後ビニール袋に入れたフィルターを、ネットワークセンターに郵送する。乾燥を行ってれば、すぐに郵送しなくても構わないので、複数回の回収分をまとめて郵送してもよい。

※ 送風乾燥機を所持していないサイトで、乾燥作業が困難な場合はネットワークセンター担当者まで相談の上、回収後、すぐにクール便にて送付し、送付の旨をメール等で連絡する。

3. 調査時期と作業内容のスケジュール

フィルターの埋設と回収の時期を以下に示す。

	当年度				翌年度
	4月下旬～ 6月中旬	6月中旬～ 7月上旬	9月上旬～ 10月上旬	10月上旬～ 11月上旬	4月下旬～ 6月中旬
ピットフォールトラップ調査	1回目	2回目	3回目	4回目	1回目
フィルター埋設	1回目 (A-C)			2回目 (D)	
フィルター回収		A	B	C	D

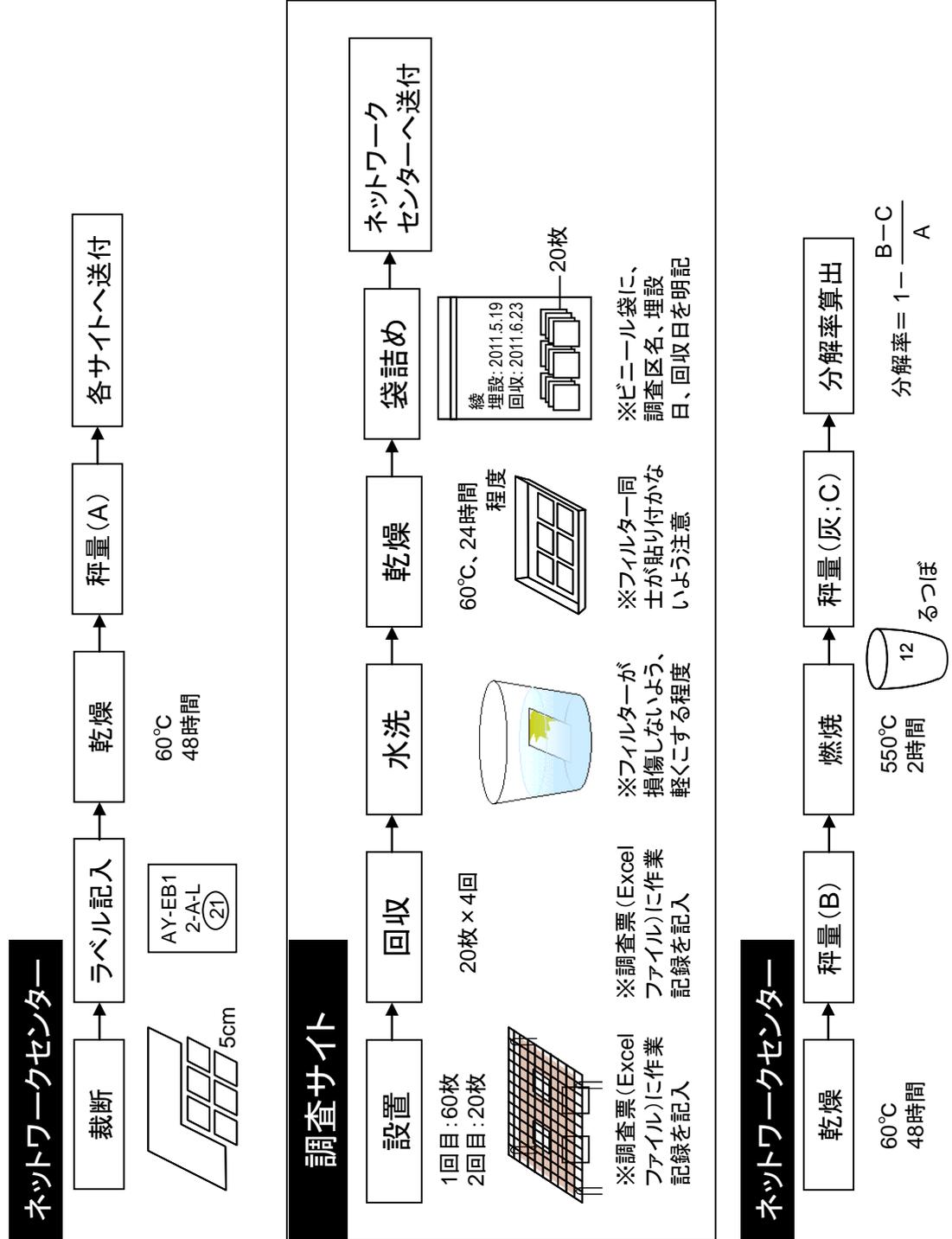


図 3. 作業の流れ

モニタリングサイト 1000 森林・草原調査
セルロースフィルター分解試験マニュアル
2011年7月改訂

環境省自然環境局 生物多様性センター
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
電話：0555-72-6033 FAX：0555-72-6035

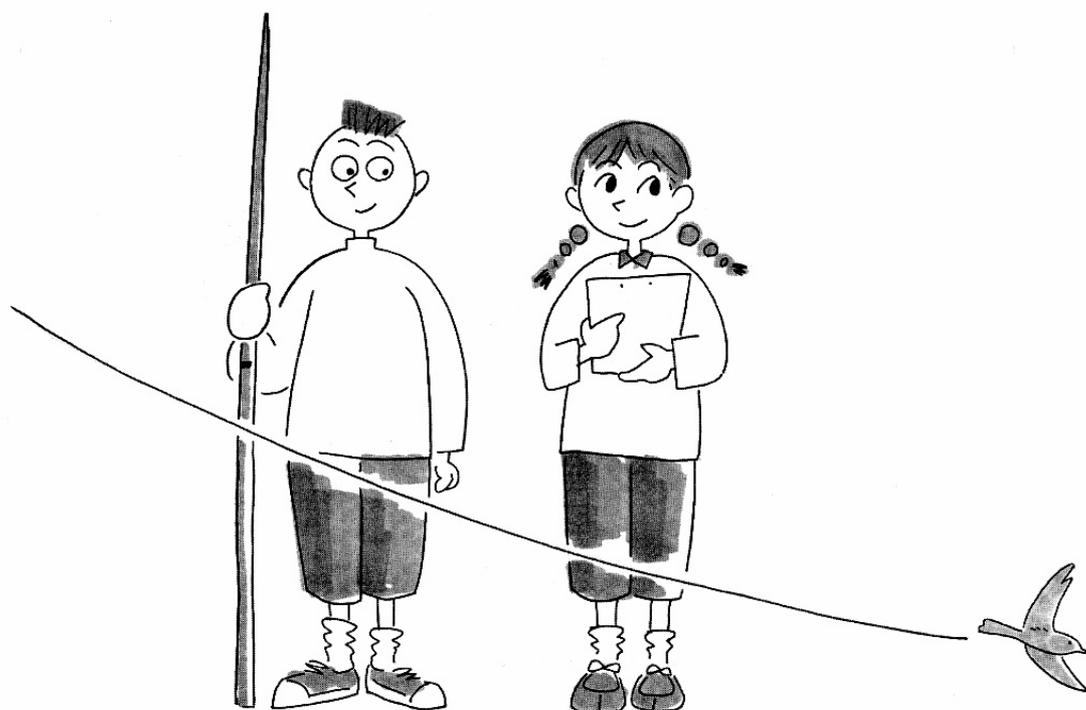
財団法人 自然環境研究センター
モニタリングサイト 1000 森林・草原調査 ネットワークセンター
担当：丹羽 慈（2011年7月現在）
〒053-0035 北海道苫小牧市字高丘
北海道大学苫小牧研究林 内
電話：0144-33-2171 FAX：0144-33-2173
メール：moni1000f_pitfall@fsc.hokudai.ac.jp

財団法人自然環境研究センター
担当：鋤柄直純・畠瀬頼子（2011年7月現在）
〒110-8676 東京都台東区下谷 3-10-10
Tel：03-5824-0969 Fax：03-5824-0970

モニタリングサイト1000

森林・草原の 鳥類調査ガイドブック

(2009年4月改訂版)



環境省自然環境局生物多様性センター
(財)日本野鳥の会 NPO法人バードリサーチ

もくじ

1

調査をはじめる前に

調査の流れ・・・2

鳥の調査手法の変更について・・・3

調査のための準備・・・4

調査がおわったら・・・6

2

調査のおこないかた

環境全体のしらべかた・・・8

鳥の種と数のしらべかた・・・10

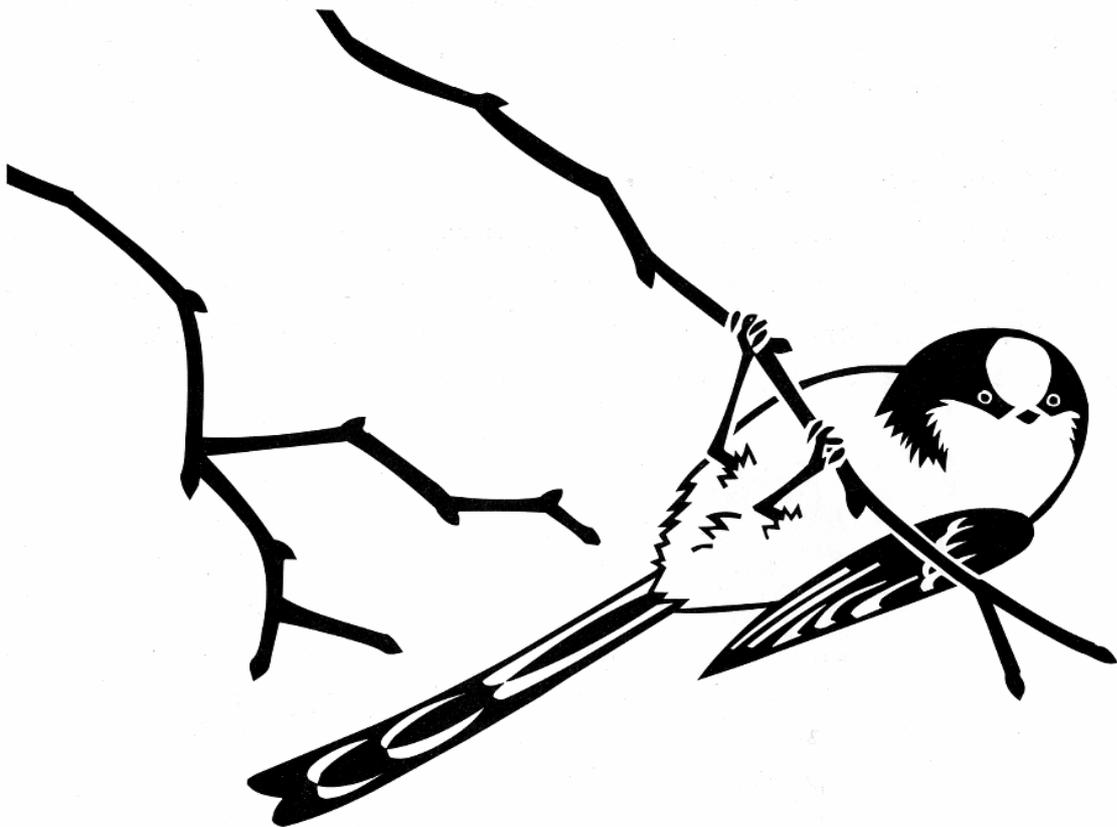
調査方法をよくお読み下さい

前回の調査では「ラインセンサス法」で調査を実施していただきましたが、今回から調査方法が「スポットセンサス法（定点センサス法）」に変わっていますので、ご注意ください。



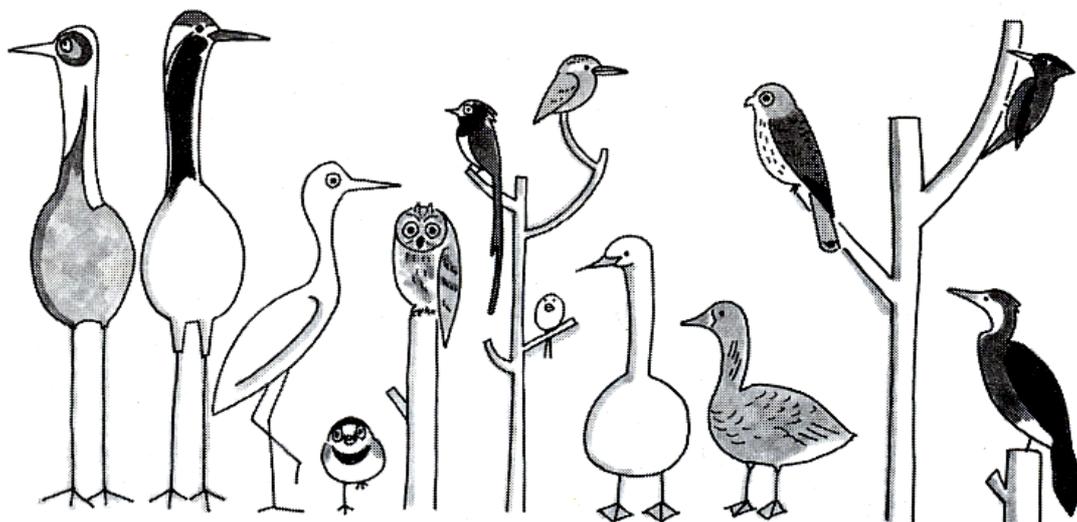
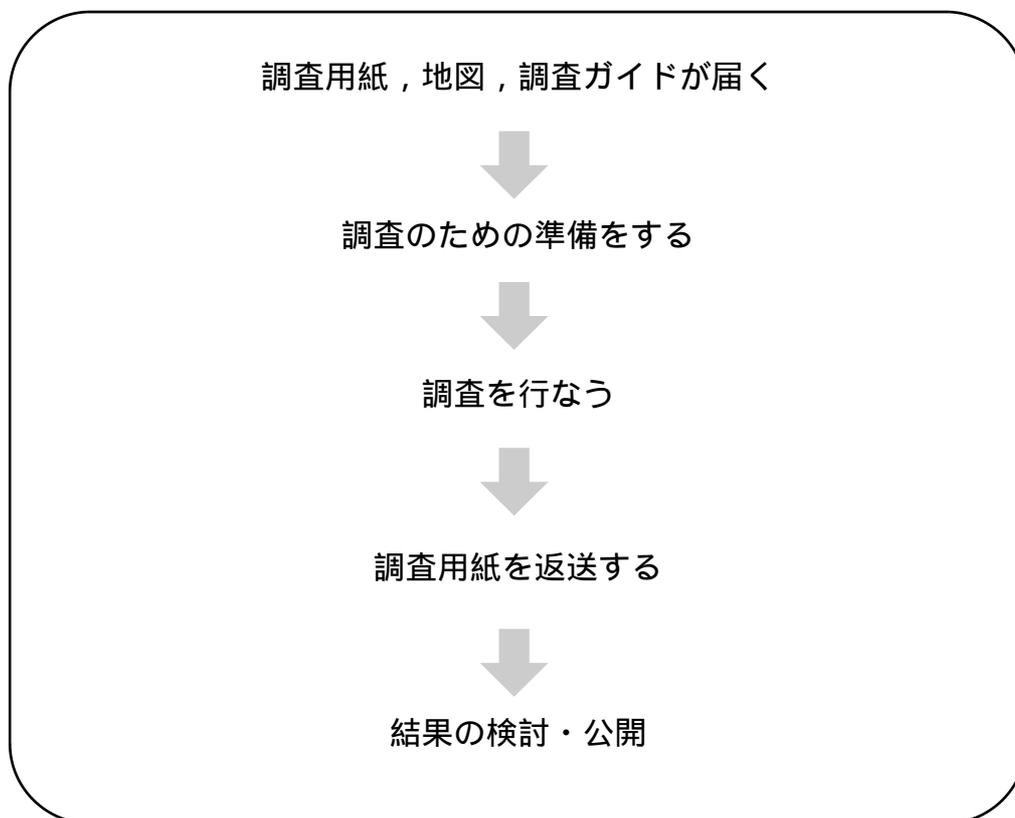
調査をはじめる前に

調査用紙等が届いてからのモニタリングサイト
1000・森林と草原の鳥類調査の流れを説明します。
調査を行なうためにはいくつかの準備が必要です。
調査が終わった後には、調査用紙の返送をお願いします。



調査の流れ

森林・草原の鳥類調査は以下のような流れで行ないます。



鳥の調査手法の変更について

モニタリングサイト1000の森林と草原の調査は、今までのラインセンサスからスポットセンサスに変更することになりました。その理由についてご説明いたします。

なぜスポットセンサスにかえたのか？

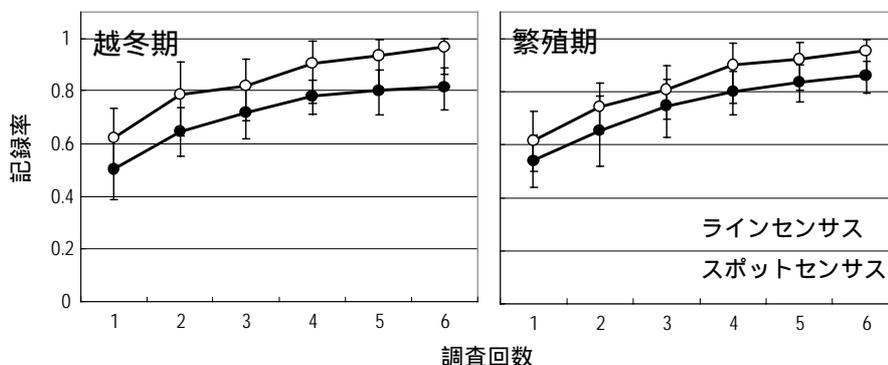
今まで、日本での鳥類の生息状況の調査は、おもにラインセンサス法で行なわれてきました。この方法は歩きながら広い範囲を調査することができる効率的な調査方法です。イギリスでの鳥類の生息状況の調査の多くもこのラインセンサス法で行なわれています。

しかし、モニタリングサイト1000のような多くの方が参加する調査の場合、欠点もあります。1つは調査コースの設定です。森林と草原の調査では1kmの調査コースを設定して調査することになっているのですが、この設定がどうしても調査員により違ってしまいます。モニタリングサイト1000の第1期の調査では、1kmに満たないコースから3kmを超えるコースまでいろいろなコースができてしまいました。このように調査距離が違ってしまうと調査結果の比較が困難になってしまいます。2つ目は調査時間の問題です。本調査では、1kmのコースを30分で歩くことになっていますが、これも調査員により、長いものでは数時間かけて調査してしまっているものもありました。

そこで、このような問題をなくし、より調査地間の比較のしやすい手法、スポットセンサスを調査手法として採用することになりました。この手法はアメリカでよく使われている調査手法です。

スポットセンサスの効率化は？

スポットセンサスは、調査地内に定点を設け、その周辺にいる鳥を記録する手法です。ラインセンサスよりも調査範囲が狭くなるので、記録される鳥が減ると心配される方もいらっしゃるかもしれませんが、予備調査の結果からは逆にスポットセンサスの方が多くの鳥を記録できることがわかりました。人が動かなくても、鳥が移動してくること、歩きながらの調査だと足音などで鳥の声が聞き取りにくいのに対して、その場に留まっているスポットセンサスでは小さな声が聞き取りやすいことなどがその理由だと思いますが、いずれにせよ、スポットセンサスの採用により鳥の記録漏れが増えてしまうということはありません。



ラインセンサスとスポットセンサスによる森林の鳥類の記録状況の違い。越冬期も繁殖期もスポットセンサスの方が多くの鳥を記録できていることがわかります

調査のための準備

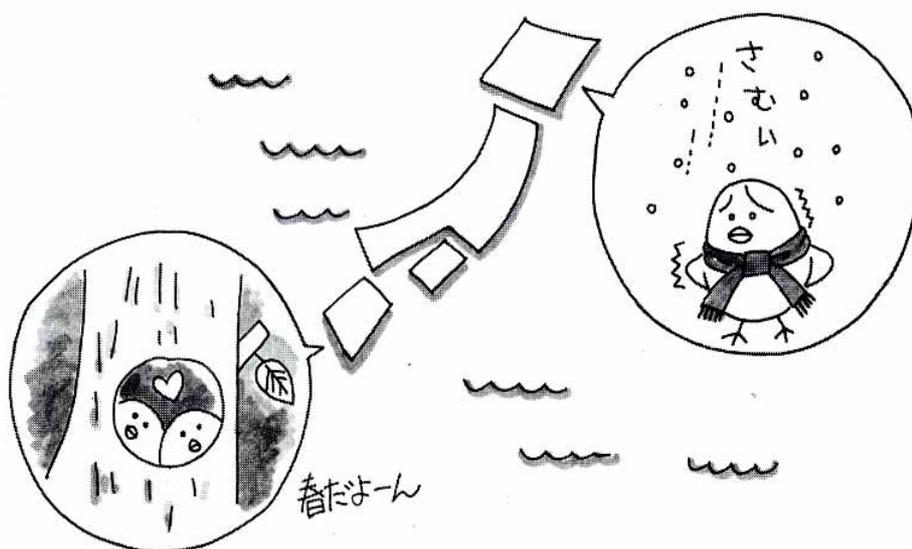
調査日時の設定

調査は、さえずりがさかんな繁殖の前期と最盛期に1日ずつ計2日、越冬期には冬鳥が揃ってから2週間以上の間隔を開けて2日行ないます。日本は南北にも東西にも細長いので、地域によって調査に適した日時が違ってきます。特に繁殖期はさえずりの盛んな時間帯が限られますので、下記の日時設定を参考にしながら各地の実情にあわせた調査日時を設定してください。越冬期は、全国で12月中旬から2月中旬までの午前11時までに実施すればよいでしょう。なお、この調査は調査地で繁殖している鳥の個体数密度を調べることを目的にしていますので、留鳥が繁殖している時期であっても、渡り鳥の通過個体が多い時期は避けて調査を行って下さい。

各地の調査時期の目安

あくまで目安ですので、調査地の事情に合わせて時期や時刻を変更していただいて構いません。（例：エゾハルゼミが鳴く地域は調査時刻を早めるなど）

地域	繁殖期		越冬期	
	時期	時刻	時期	時刻
南西	4～5月	6:00～9:00	12月中旬～2月中旬	8:00～11:00
近畿以西	5月下旬～6月	5:00～8:30	12月中旬～2月中旬	8:00～11:00
本州中部～東北	5月下旬～6月	4:00～8:00	12月中旬～2月中旬	8:00～11:00
北海道	6～7月上旬	4:00～8:00	12月中旬～2月中旬	8:00～11:00



調査用紙とガイド，地図の準備

調査用紙

専用の調査用紙と地図を用意しています。調査コースの情報，調査地の地図，鳥の種と数の調査の記録用紙，調査地の写真，調査に関する備考と連絡事項の5種類の用紙をお送りします。調査に必要な枚数は下の表を目安にしてください。また，調査員1人につき調査ガイドを（この冊子）を1冊ずつ用意しています。

1コースの調査に必要な調査用紙の枚数（下表は繁殖期の調査の目安）

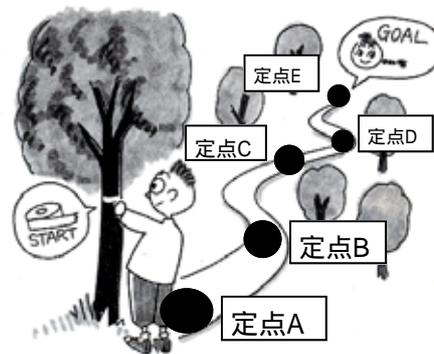
調査用紙	枚数
調査地の情報	1枚
調査地の地図	1枚
鳥の種と数の調査 記録用紙	20枚
調査地の写真 貼付用紙	5枚
調査に関する備考と連絡事項	1枚

調査地での準備

1. 調査するコースの下見をする（道をまちがえないように）



2. 調査定点5地点を決める



1 kmの調査コース上に5つの定点（A～E）を設定してください。森林のサイトでは森林環境に5定点、草原のサイトでは草原の環境に5定点を設定してください。スタート地点から250mおきに5定点を設定しますが，定点はその後も継続して調査する場所になりますので，厳密に250mおきでなくても良いので，わかりやすい場所に設定してください。また，植林の中に落葉広葉樹が一部混じっているような場合で，250m間隔で設定すると植林ばかりで調査することになってしまう場合や，水場など鳥の集まる場所がわかっている場合は，調査コースにあるそのような環境をうまく含むことができるように，定点を設定してください。ただし，定点間の距離が100mより近くなることは避けてください。

調査がおわったら

調査が終わったら，調査用紙を日本野鳥の会自然保護室に返送してください。

返送する調査用紙

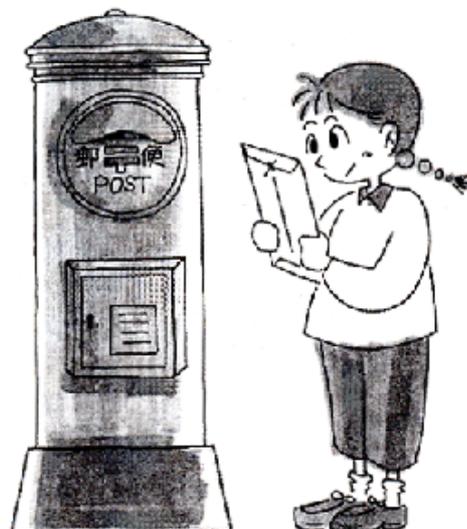
調査用紙	返送の必要
調査コースの情報	有
調査地の地図	1
鳥の種と数の調査 記録用紙	有
調査地の写真 貼付用紙	有
調査に関する備考と連絡事項	2

1 「調査地の地図」は，コースを決めるときに一度お送りいただければそれ以降は返送する必要はありません。ただし，コースの修正があった際にはお送り下さい。

2 「調査に関する備考と連絡事項」は，特に記載事項がなければ返送の必要はありません。

返送先

〒141-0031 東京都品川区西五反田3-9-23 丸和ビル
日本野鳥の会自然保護室 モニタリング担当



2

調査のおこないかた

モニタリングサイト1000・森林と草原の鳥類調査では、環境の調査と鳥の種と数の調査をおこないます。それぞれの調査方法や調査用紙への記入例などについて説明します。



環境全体のしらべかた

調査地の地形や植生など、環境全体の特徴を記録します。

調査に必要な物

地図、調査用紙の「1.調査コースの情報」と「3.調査地の写真貼付用紙」、カメラ、筆記用具

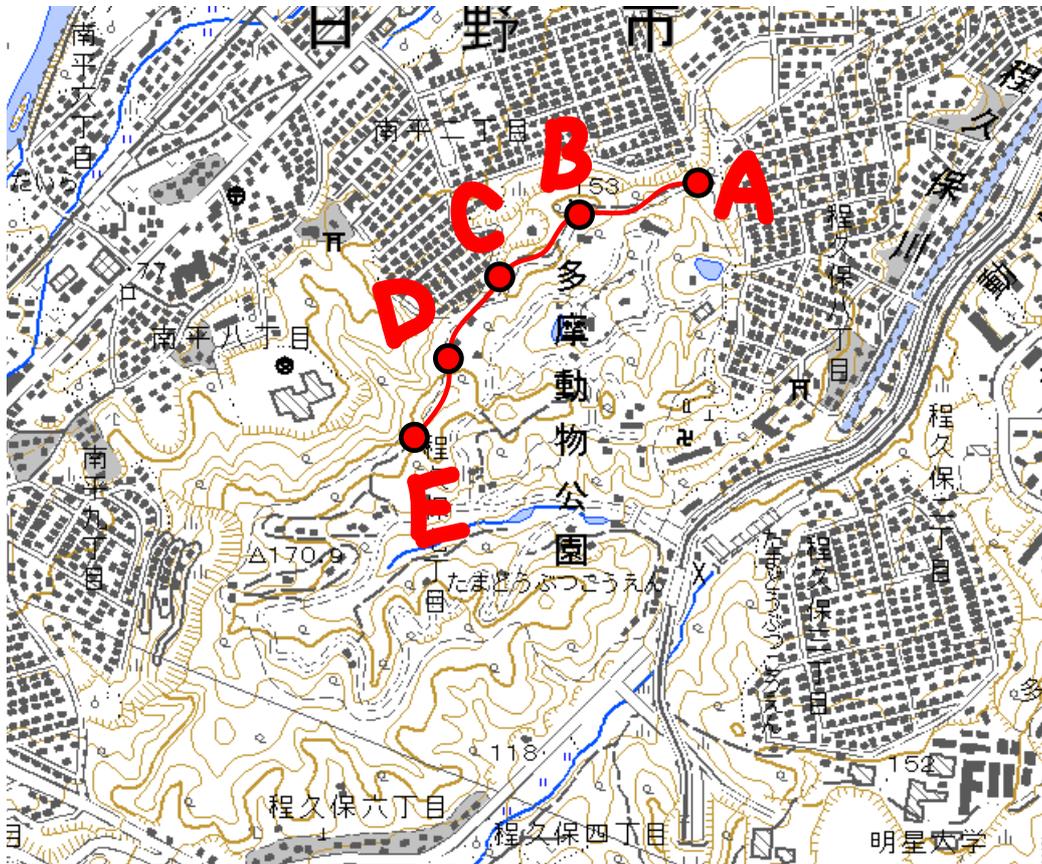
調査の要領

1. 調査用紙「1.調査コースの情報」への記入

毎回記録する項目と、繁殖期・越冬期のいずれかに1回記録する項目があり、詳細は調査用紙「1.調査コースの情報」に書かれています（次ページの記入例を参照）。

2. 調査コースの写真撮影

- ・繁殖期と越冬期の両方に、調査定点の5地点（A、B、C、D、E）で写真を撮影する。
5年後以降の調査で定点の位置を確認するための参考になるように、ルートを含めた定点の写真を撮影ください。
- ・毎回同じ地点で撮影する。
- ・初回調査時とコース修正時は、調査定点（撮影地点）5地点を地図に記入する。（下図を参照）



調査用紙の記入例

1. 調査コースの情報

は繁殖期，越冬期ともに記入して下さい。

調査コース名 多摩動物公園裏手 調査コース番号 100999
 (送付した地図に書いていない場合は名前をつけて下さい。) (送付した地図にある番号を記入。)

調査代表者 野原つぐみ

調査参加者 森野かけす、畑野スズメ

調査コースの住所 東京 都道府県 日野 市町村郡 南平

コース情報 (繁殖期または越冬期のいずれかに1回記入。変更があった際にも記入。)

環境 (一方を選択)	<u>森林</u> , 草原
地勢 (1つ選択)	山岳 , 盆地 , <u>丘陵</u> , 平野
地形 (複数選択可)	尾根 , <u>斜面</u> , 谷 , 河川 , 湖沼 , 海岸
面積 (孤立した森林または草原の場合のみ記入)	ヘクタール
保護区の指定	国立公園 , 鳥獣保護区 , 休猟区 , 銃猟禁止区 , 指定なし , <u>不明</u> , その他 ()

コース概要 (コースの環境によって森林コースあるいは草原コースのいずれかに記入。)

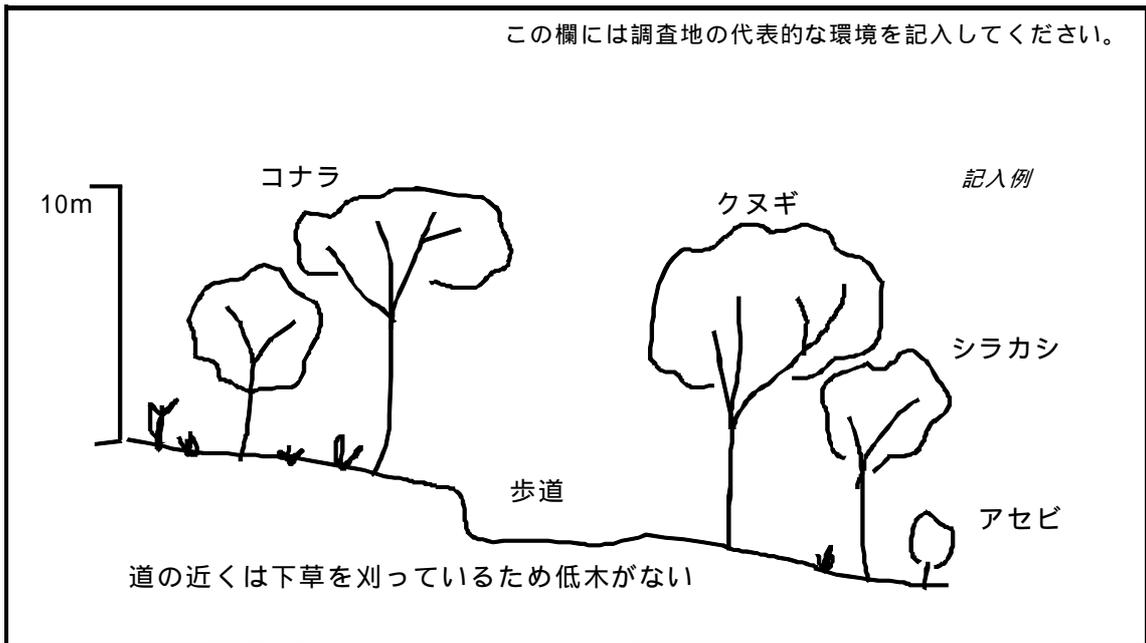
森林コース (繁殖期または越冬期のいずれかに1回記入。ただし積雪は越冬期に記入。)

植物	1 <u>コナラ</u>	2 <u>クヌギ</u>	3 <u>シラカシ</u>
樹冠高	0.5m以下 , 0.5-2m , 2-5m , <u>5-10m</u> , 10-15m , 15m以上		
積雪	全面積雪 (10cm , 10-30cm , 30cm以上) , 部分積雪 , 積雪なし		

草原コース (繁殖期 , 越冬期ともに記入。ただし積雪は越冬期に記入。)

植物	1	2	3
草丈	0.5m以下 , 0.5-2m , 2-5m , 不明		
積雪	全面積雪 (10cm , 10-30cm , 30cm以上) , 部分積雪 , 積雪なし		

環境断面の模式図 (繁殖期または越冬期のいずれかに1回記入。)



植生調査は別紙「植生調査の方法」をご覧ください、植生用の調査用紙にご記入ください。

鳥の種と数のしらべかた

調査に必要な物

調査用紙「2.鳥の種と数の調査記録用紙」, 画板, 筆記用具, 双眼鏡

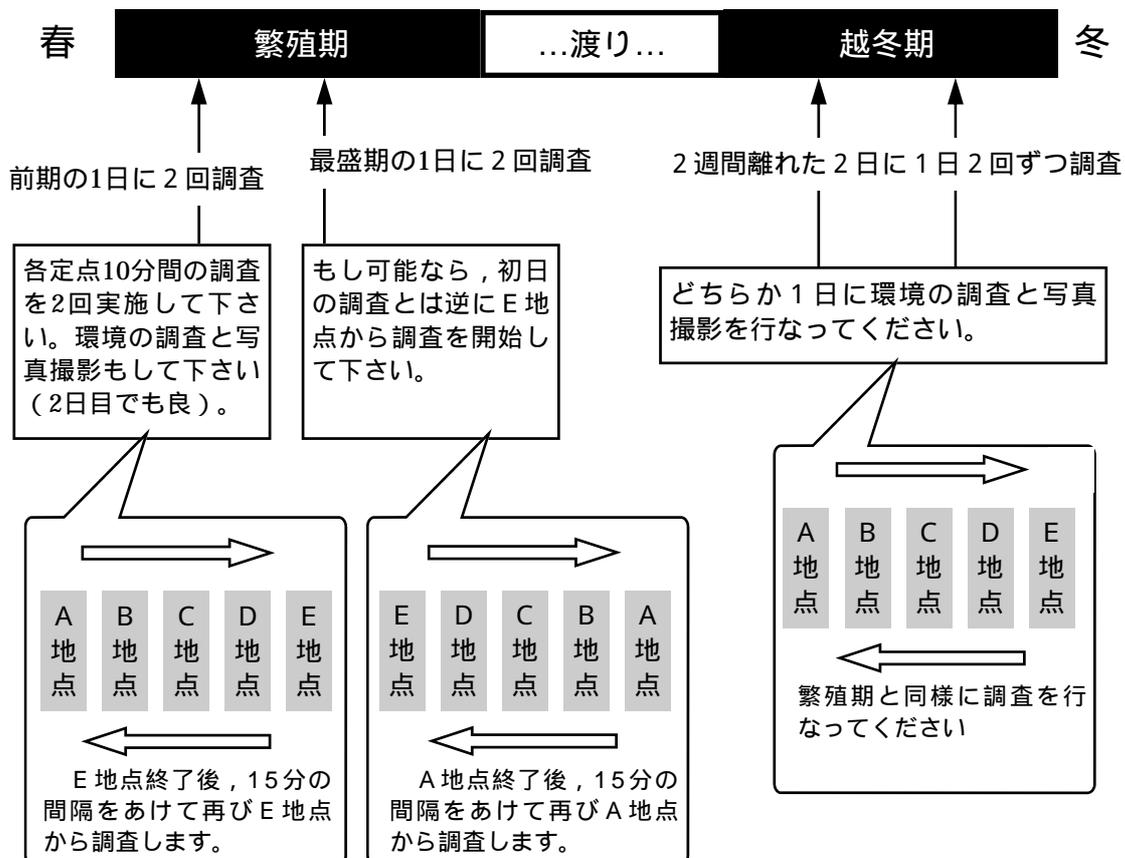
調査の要領

1日だけの調査では, 渡りの時期の違いによって記録できない種が出てくるため, 下記のように調査を2日に分けて行ないます。なお, 雨天と強風の日は調査しないでください。

繁殖期... さえずりがさかんな繁殖の前期に1日と最盛期に1日の計2日
越冬期... 冬鳥が揃ってから1日, 2週間以上経ってからもう1日の計2日

- ・ 1日あたり各定点2回調査する。(下図参照)
- ・ 遠方などで2日に分けて行くのが困難な場合には1日で行なってもよい。(その場合は1日で各定点4回調査する)
- ・ 調査は鳥が活発に活動している時間帯に行なう。(4ページの表を参照)

調査のスケジュール



調査の方法

- ・各定点で10分間の調査します。
- ・草原の調査で堤防上から調査する場合は、草原側（川側）のみを調査範囲とします。
- ・2分ごとに、確認した種、記録方法、個体数を記録します。定点から半径50mの範囲とそれ以遠にわけて記録しますが、草原の調査のA地点とE地点では、さらに50～200mとそれ以遠に分けて記録して下さい。これは河川の国勢調査では200m以内の鳥を記録しているので、それとの比較を可能にするためです。
- ・草原では鳥の鳴声が森林などに比べ遠くから良く聞こえますので、目視できるときに、鳴声の大きさと鳥との距離を確認するように心がけてください。
- ・各定点を1回調査し終えたら、2回目をスタートさせる前に15分程度休んでください。

調査用紙の記入例

2. 鳥の種類と数の調査 記録用紙

調査コード: _____

調査日時: 2018年 6月 6日 5時

2分ごとに新たにカウントしなおしてください

草原のA地点とE地点のみ50～200m, 200m以上を分けて記録してください。
(河川の国勢調査との比較のため)

種名	0-2分					
	50m以内			50m以上	200m以上	50m以上
	S	成	幼			S
シジウカラ	3			2		3
オオルリ				1		2
エビ		2	5			
ヒヨ		1		4		
キ						
メ						

「0-2分」で記録した鳥と同じ鳥が「2-4分」にいた場合も再度「3」と記録してください

さえずりを確認したら「S」の欄に個体数を記入します

さえずり以外の記録は、巣立ちピナを見た場合は「幼」に、それ以外の記録は「成」に記入します

間違いの修正はわかりやすく示してください

- ・2分ごとに、改めて調査するイメージで、最初の2分で記録した鳥と同一個体でも、次の2分では再度数を記入ください。
- ・どの調査地点の何回目の調査用紙なのかがわかるように記入してください。
- ・1日目に2回調査した後の2日目の1回目の調査は「3回目」に○をつけてください
- ・高空を通過していった鳥は「50m以上」の部分に記録してください。
- ・成鳥の個体数を調べたいので、巣立ちピナを確認した場合は必ず「幼」の部分に記入してください
- ・モニタリング調査は、その地域の鳥類の相対的な多さの変化を比較するのが目的です。珍しい鳥を探したり、必要以上に多くの個体数を記録しようとする必要はありません。



モニタリング・サイト1000
森林・草原の鳥類調査ガイドブック
平成21年(2009年)4月 改訂版発行

財団法人 日本野鳥の会 自然保護室
〒141-0031 東京都品川区西五反田3-9-23 丸和ビル
電話：03-5436-2633 FAX：03-5436-2635

特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 府中市住吉町1-29-9

イラスト 重原美智子

©財団法人 日本野鳥の会

サンショウクイの亜種の記録について

日本野鳥の会
自然保護室

日本のサンショウクイは2亜種に分かれており、従来、亜種サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus* は夏鳥として主に本州から九州で繁殖し、亜種リュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* は留鳥として主に南西諸島で繁殖し、九州南部等でもまれに繁殖、越冬する、とされてきました（日本鳥類目録改訂第6版、日本鳥学会、2000年）。

ところが近年、亜種リュウキュウサンショウクイの繁殖地域が九州北部まで北上しているという観察記録があり、四国でも記録されはじめているようです。

そこで、スポットセンサスの際に、もし可能であれば、視認により亜種の識別を行い、亜種名で記録してください。視認における識別点は下記の通りです。

- ー前頭部は白い **亜種サンショウクイ**
 - 目の下は白い
 - 上面は灰黒色
 - 胸から脇は汚白色
- ー前頭部はくちばしの近くまで後頭部からの黒が広がっている
 - 目の下は線状に黒い部分がある
 - 上面は黒色
 - 胸から脇は灰黒色 **亜種リュウキュウサンショウクイ**

種名欄には、

亜種が識別できた場合には

亜種サンショウクイ（または**亜サンショウクイ**）

または **リュウキュウサンショウクイ**

亜種が識別できない場合には

サンショウクイ（**亜種不明**）

と書き分けてくださるようお願いいたします。

識別点参考文献：『フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版』（高野伸二、1982/2007年）228～229 ページ

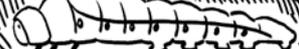
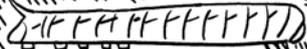
『増補改訂版日本鳥類大図鑑 I』（清棲幸保、1978年）283 ページ



環境省
モニタリングサイト1000
森林・草原の鳥類調査ガイドブック



植生調査の方法





モニタリングサイト1000 は、
日本の自然環境の変化を
モニタリングしていくための調査です。

森林・草原の鳥類調査では、
鳥の生息状況の変化を明らかにするとともに
鳥の生息環境の変化もモニタリングするために
簡単な植生の調査を行ないます。

調査地の植生の平面的な広がりについては、
最近では精密な航空写真や衛星写真なども
手に入れることができるようになり、
それで解析することが可能です。


P. 2

しかし、森林内の
構造や樹高、草原の草丈など
高さ方向についての情報は
航空写真からはわかりません。

そこで、
モニタリングサイト1000の植生調査では
そのような部分を中心に
植生をしらべます。



植生調査の方法

▼ 調査に必要な物

1. 事務局から届いた過去の調査ルートが記入された地形図（1/25000を拡大した物）
2. 調査用紙、筆記具
3. カメラ（デジタルカメラまたはフィルムカメラ）

▼ 植生調査の種類

森林の植生調査と、草原の植生調査の2種類あります。調査の仕方に違いがありますので次項以降で別々に説明致します。

▼ 調査時期

植生調査は植物の高さ、被度（葉が被っている割合）を調べます。そのため、葉がついている繁殖期の調査の時に植生調査を行なってください。

▼ 植生調査を行なう場所

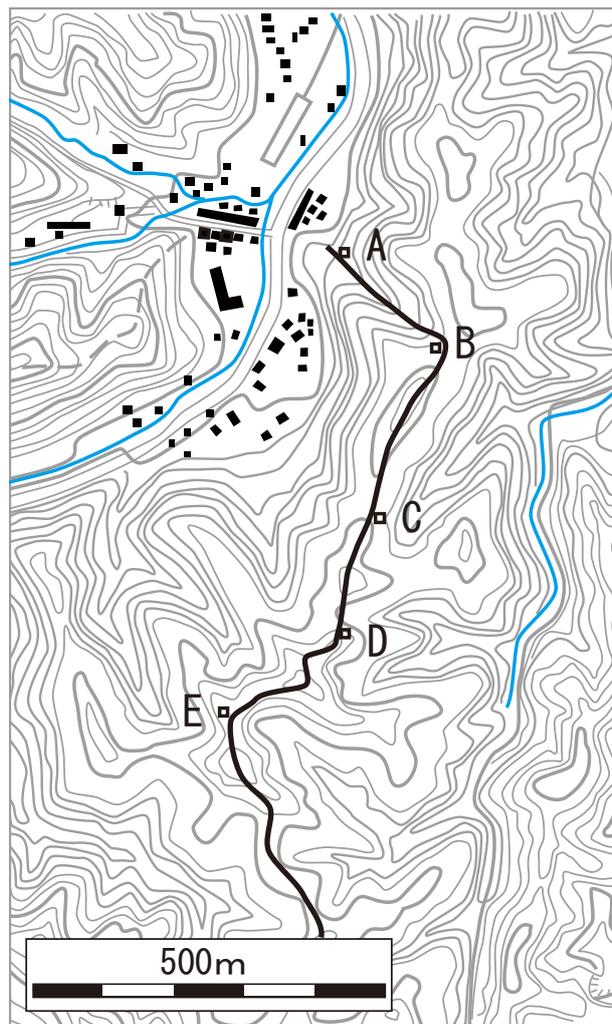
植生調査はスポットセンサスを行なった定点で実施してください。

定点5か所それぞれで調査を行ないます。

▼ 定点撮影

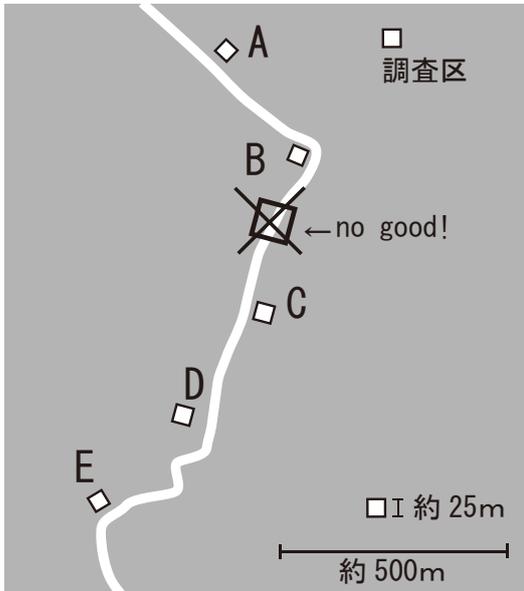
森林や草原の環境の変化をとらえるため、定点を設けて毎回同じ方向・同じ範囲を撮影します。撮影方向と対象については、次頁以降を参照ください。デジタルカメラで撮影した場合は、ファイル名に撮影情報（撮影した調査コースと調査区、撮影年月日と時間）を記入ください。フィルムカメラで撮影した場合は、撮影情報を写真の裏に記入ください。また、撮影方向を記録するため、地形図上に撮影地点を起点とした矢印を書き込んでください。

調査場所の地形図



森林の調査の方法

▼ 調査区の決め方



スポットセンサスを行なった定点と同じ場所に、約25m四方の調査区を設けその位置を地図に記入します。ただし道の上は調査に適していないので、道の近くの森林の中に設置してください。被度は割合で示すため、多少面積が変わっても結果に大きな影響は出ませんので、調査区の大きさは厳密でなくてもかまいません。また、定点が斜面に位置する場合は、見下しやすい場所に調査区を設定した方が調査しやすいと思います。

▲▲
P.4

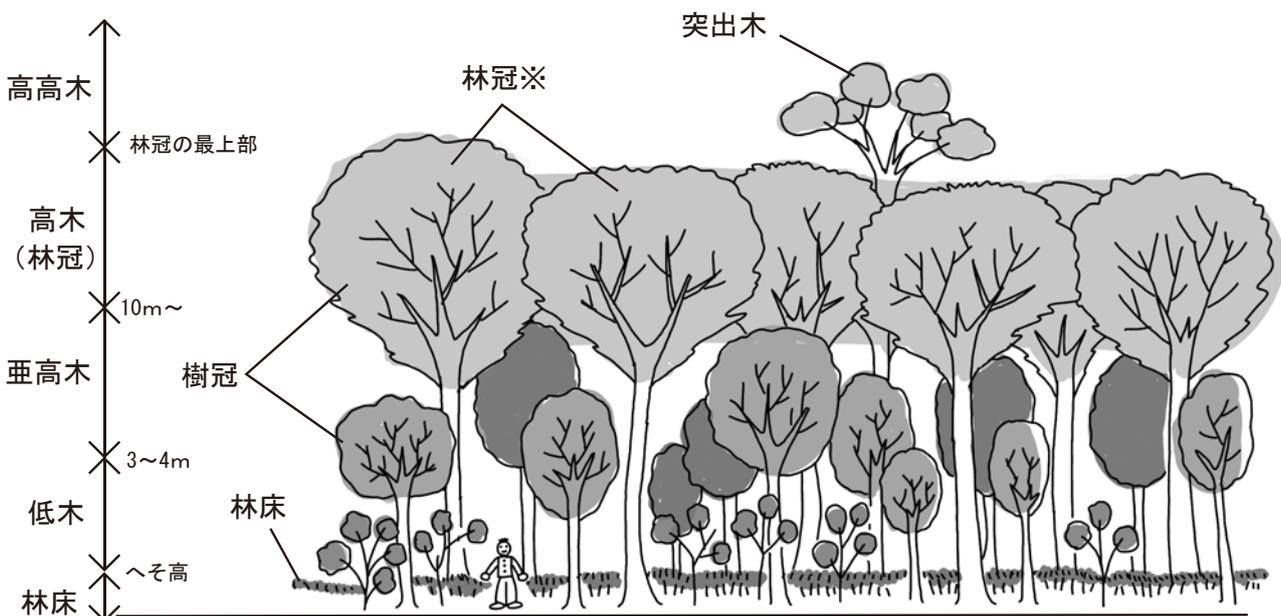
▼ 植生のしらべ方

まず、調査用紙に、調査コース名、調査年月日、調査員名を記入します。

・被度の調査

調査区内の植物の被度を高さ別に調べます。(図を参考に)

林床、低木層、亜高木層、高木層、高高木層の被度(葉がどれくらいおおっているか)を記録します。



※林冠とは林の一番上をおおっている樹冠の層のことです。

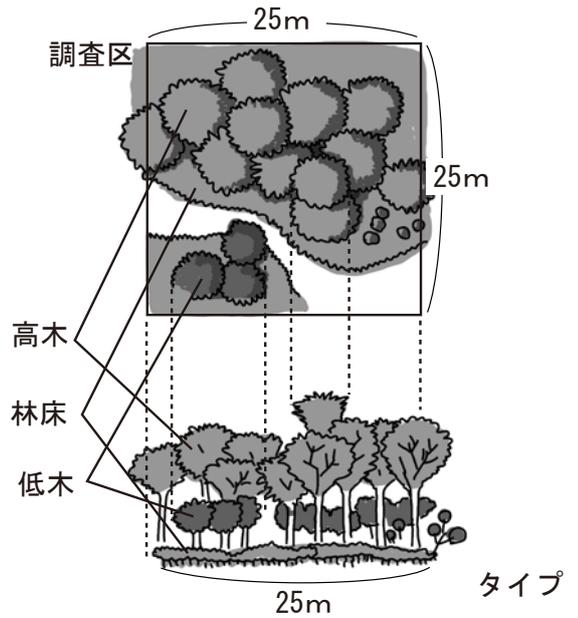
被度の合計は100%以上になりますが、それは林床と低木、林床と高木などのように異なる階層が重なっているためです

1. 植物の占める面積比率を被度のランクとして記録してください。あてはまるランクを0から5の数字で記入してください。

- ランク0=植生なし
- ランク1=1~10%
- ランク2=10~25%
- ランク3=25~50%
- ランク4=50~75%
- ランク5=75%以上

2. 次に、該当する植生タイプについて多い順に1から数字を振ってください。

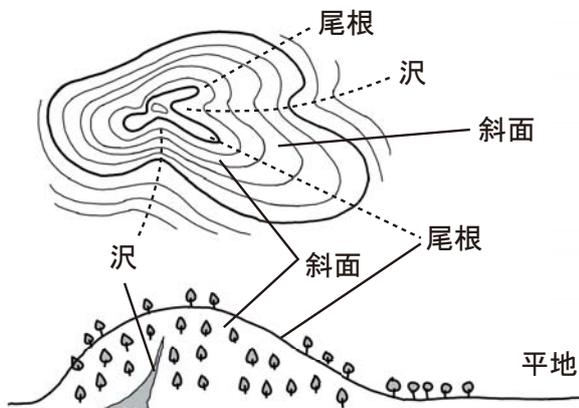
植生タイプが同じくらいの面積の場合は無理に順位付けせずに、同一順位でよいです。
樹高の低い林では、亜高木層がない場合もあります。
また、林冠より突出している木がない場合は高高木を記入する必要はありません。



調査区 A

階層	被度のランク	植生タイプ (カッコ内に広さ順に数字を記入)	樹種(わかる場合)
林床(おへその高さ)	4	(1)ササ、(2)草、(4)落広、(3)常広、()常針	
低木層(身長の倍)	4	(1)ササ、(3)落広、(2)常広、()常針、()落針	
亜高木層(~10m)	3	(1)落広、(3)常広、(2)常針、()落針、()竹	
高木層(~林冠)	3	(1)落広、(2)常広、()常針、()落針、(2)竹	
高高木層(突出木)	1	()落広、()常広、(1)常針、()落針、()竹	
林冠の高さ	~10m、10~15m、15~20m、20~30m、それ以上		
突出木の高さ	~10m、10~15m、15~20m、20~30m、それ以上		
地形	斜面、尾根、平地	沢の有無	有・なし

- 落広：落葉広葉樹
- 常広：常緑広葉樹
- 常針：常緑針葉樹
- 落針：落葉針葉樹



・樹高の調査

林冠の高さと、突出木の高さについて該当するものに丸をつけてください。

・地形の調査

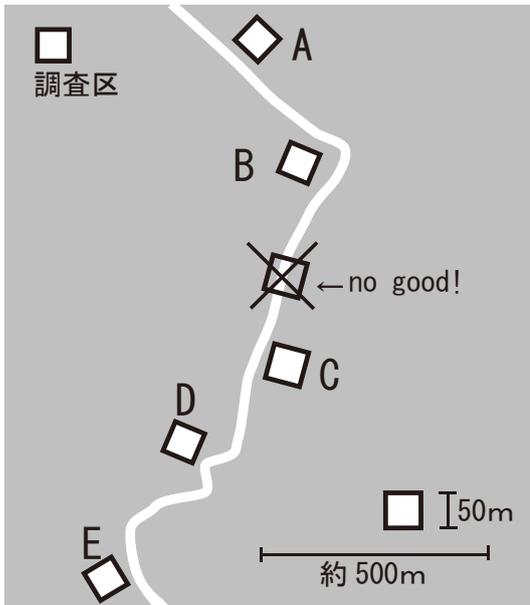
地形(斜面、尾根、平地)と、沢の有無についてご記入ください。

・写真撮影

デジタルカメラで、それぞれの調査区ごとに真上(林冠)、斜面の下方(平地の場合は北方向)、森林の階層の特徴がわかるような写真を、それぞれなるべく広角(望遠の反対)で撮影してください。写真の提出方法については、「P.3」を参照してください。

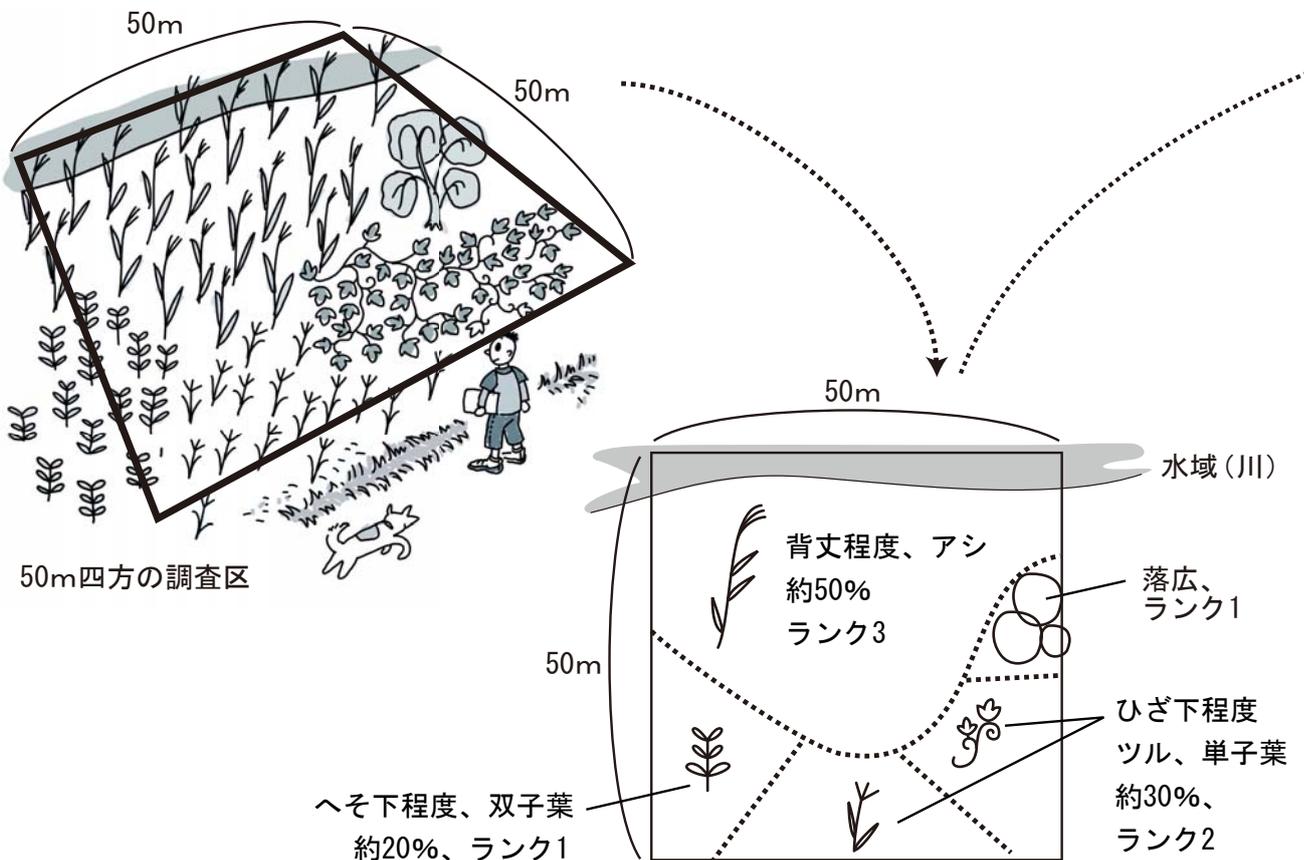
草原の調査の方法

▼ 調査区の決め方



スポットセンサスを行なった定点と同じ場所に、約50m四方の調査区を設け、その位置を地図に記入します。ただし、道の上は調査に適していないので、道を避けた場所に設置してください。

被度は割合で示すため、多少面積が変わっても結果に大きな影響は出ませんので、調査区の大きさは厳密でなくてもかまいません。また、草原では低いところからの見通しがきかないので、できれば堤防の上など高いところからの調査が行えるような場所に調査区を設定してください。



▼ 植生のしらべ方

まず、調査用紙に、調査コース名、調査年月日、調査員名を記入します

・被度の調査

1. 調査地全体を見渡して考えて、該当する草原タイプに丸をつけてください。
また水域の有無についても記入ください。

2. 植物や土地利用の区分が占める面積比率を被度のランク（0～5）として記録してください。あてはまるランクを0～5の数字で記入してください。

ランク0=植生なし
 ランク1=1～10%
 ランク2=10～25%
 ランク3=25～50%
 ランク4=50～75%
 ランク5=75%以上

3. 次に、該当する植生タイプについて面積が広い順に1から数字を振ってください。植生タイプが同じくらいの面積の場合は無理に順位付けせずに、同一順位でよいです。

草原の植生 調査用紙

草原のタイプ	<input checked="" type="checkbox"/> 湿性草原 ・ <input type="checkbox"/> 乾燥草原 ・ <input type="checkbox"/> 牧草地 ・ <input type="checkbox"/> その他
水域の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 河川 ・ <input type="checkbox"/> 湖沼 ・ <input type="checkbox"/> 海 ・ <input type="checkbox"/> 水域なし

調査区 A

区分	被度のランク	植生タイプ（カッコ内に広さ順に数字を記入）
ひざ下の草	2	()アシ、(/)単子葉：細い葉、()双子葉：広い葉、(/)ツル
へそ下の草	1	()アシ、()単子葉：細い葉、(/)双子葉：広い葉、()ツル
背丈程度	3	(/)アシ、()単子葉：細い葉、()双子葉：広い葉、()ツル
背丈以上		()アシ、()単子葉：細い葉、()双子葉：広い葉、()ツル
耕作地		()水田、()畑地、()その他
樹木と高さ	1	<input checked="" type="checkbox"/> 落広 ・ <input type="checkbox"/> 常広 ・ <input type="checkbox"/> 落針 ・ <input type="checkbox"/> 常針 ・ <input type="checkbox"/> 竹 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 10m ・ <input type="checkbox"/> ~15m ・ <input type="checkbox"/> ~20m ・ <input type="checkbox"/> 20m以上
裸地		
水域	1	地表面の水 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ <input type="checkbox"/> なし ・ <input type="checkbox"/> 不明

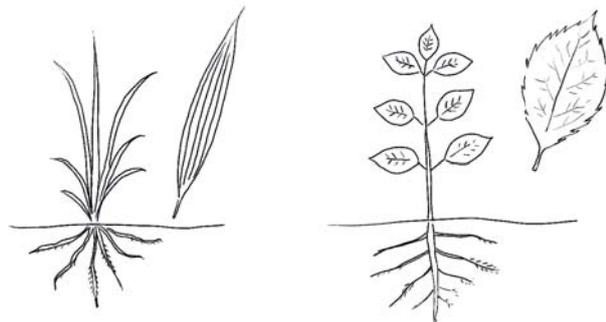
落広：落葉広葉樹
 常広：常緑広葉樹
 落針：落葉針葉樹
 常針：常緑針葉樹

単子葉植物：葉のすじが途中で別れずに並んでいる

双子葉植物：葉のすじが途中で別れ、網の目のようになっている。

・写真撮影

デジタルカメラで、それぞれの調査区ごとに斜面の下方向（平地の場合は北方向）、草原の断面の特徴がわかるような写真を、それぞれなるべく広角（望遠の反対）で撮影してください。写真の提出方法については、「P. 3」を参照してください。





環境省モニタリングサイト1000 森林・草原の鳥類調査ガイドブック
植生調査の方法

2008年3月21日 発行

発行 環境省自然環境局生物多様性センター 財団法人日本野鳥の会

編集 特定非営利活動法人バードリサーチ

イラスト／レイアウト 重原美智子

平成 29 年度
モニタリングサイト 1000 森林・草原調査報告書

平成 30 (2018) 年 3 月

環境省自然環境局 生物多様性センター
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
電話 : 0555-72-6033 FAX : 0555-72-6035

業務名 平成 29 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業
(森林・草原調査)
請負者 一般財団法人 自然環境研究センター
〒130-8606 東京都墨田区江東橋 3 丁目 3 番 7 号

本報告書は、古紙パルプ配合率 100%、白色度 70%の再生紙を使用しています。

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます

本報告書は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [Aランク] のみを用いて作製しています。